

奇譚クラブ

1956年 7月号

告白小説『被縛症』高村民子
幻想小説「潰滅の前夜」土路草一



7月号

昭和三十一年六月三十日印刷 (第十卷 七月号)
昭和三十一年七月一日発行 (第四号 通刊第八十六号)
(毎月一回一日発行)
昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可

奇譚クラブ

昭和三十一年七月号

7

奇譚クラブ

昭和三十一年六月三十日印刷
昭和三十一年七月一日発行
昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可
七月号 (第十卷第四号)
(毎月一回一日発行)

定価二百円

(送料八円)

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



IBM. 2805

売切近し！ 残部僅少 お申込はすぐ

縛られた裸女十六態

定価 一部 五百円 (送料五十円)

美術コロタイプ印刷 各葉解説入

16態

内容
猿ぐつわ 紅と口 蠟燭 貴
雁字搦目 観 念 芋 虫
犠牲台 床の置物 鞭 打
目の綾 滑車吊 高小手
荒 縄 くさり エビ 貴

美しき縛しめ

第一集 十六態
第二集 三十二態

九人の緊縛モデルを駆使して完成した
緊縛フォトの巨著、未発表の秘作集
代表的な縛りポーズ三十二態

32態
〇責め写真は美しいが、印刷紙に焼付けたものは高くて困るとおっしゃる方は極く鮮明なコロタイプ印刷のアルバムをお求め下さい。
〇三十二枚の変ったフォトがぎっしりと並んできつと皆さまの胸をわくわくさせることでしょう。全く素晴らしいです。

第二集 売切れました。

未製本の説明付き写真三十二葉若干在庫しています。一揃い三百円 (二十八円) にてお送りします。

晴雨「美人乱舞」

伊藤晴雨先生著並画菊版和装
美本 定価 四〇〇円 二四

図版目次

△人体時計 △天国の女 △美人燈
△島田雷のこわれる迄 △丸雷のこわれる迄
△美女のなやみ △崩れたる女 △鉄砲責にされる女 △火葬場異聞 △群々に抱かれた美女 △死神につかれた女 △特別附録、娘風俗年中行事十二月、外特別読物として先人未発の貴重な春画文庫五章十九項に亘って詳説す。晴雨ファンに薦む。

貴重な文献としてその真価を極めて高く評価される文庫誌

奇譚クラブのバックナンバー

今後この種文庫は、この値段では絶対に入手不可能です。発行部数が比較的多かった為、極めて安価な値段段でお譲り出来るわけです。未入手の方々はどうぞこの際品切にならぬうちに早くお申込み下さい。

奇譚クラブ 旧号の在庫手持は、極めて僅少です。品切の恐れがあります。品切の際の代品を必ずお書き添え願います。品切になりました分は補充がつかぬままです。悪しからずお許し下さい。旧号在庫品目録は品切となりました。

華麗な装めの色刷画帖

横トジ豪華美本、各葉説明文句入
三条春彦画一部三百円 (送料三十円)

時代物責絵巻

内容
一、山法師と静御前 二、女スリと闇引
き 三、淀君と千姫 四、犬公方と侍女
五、八百屋お七の最後 六、新撰組と芸妓 七、十郎左エ門と腰元 八、小紫と悪旗本

〇御申込みは迅速と確実を誇る天
星社代理部へ
〇御申込次第早速厳重荷造の上急
送申上げます
〇代金引替は送料が高くなります
ので、必ず前金でお願いいたします
大阪市阿倍野区
晴明通一ノ八五
天星社代理部

奇譚クラブ臨時増刊号

アリスの人生学校

(売切) 一冊 百円 (送料共)
美少女に対する折檻と凌辱の世界を描く
堂々五百枚に垂んとする傑作、口絵、挿
絵力ツト多数挿入

読者原稿募集

(皆さまの共同広場建設のために)

【研究発表】 アブノーマルに関する研究や発案、小論文等、平易にして本誌の読者に興味を持たすようなもの、十枚迄、採用分には本誌三分分を贈呈いたします。

【創作】 異色ある題材を現れて立つ野心ある新人の出現を期待します。枚数は三十枚迄、未発表の作品に限る。採用分には掲載後相当稿料支払います。

【体験告白手記】 皆さまの傍らに真実の叫びを募ります。枚数は三十枚程度掲載分には一稿につき千円乃至三千円の賞金を呈します。誰でも人々は一稿位は書くものです。生々しい体験や告白を是非お寄せ下さい。

【ポケット告白】 文や用紙など一切問いません。十枚以内の短い告白物を気軽に書き下さい。採用分には本誌三分分を贈呈いたします。

【映画、雑誌通信】 映画や雑誌の中で特に興味をお持ちになった事項についての通信をお待ちします。出処は必ず明記して下さい。掲載分には本誌二分分乃至三分分贈呈いたします。

【口絵並に挿絵】 画材はサド、マゾ淫蕩、切腹等御自由です。優秀なる作者には継続的に御依頼いたします。

【編集者或は執筆者への公開状】 編集者執筆者或はモデル嬢等に対しての読者の皆様からの公開状を募ります。適当なものは本誌上に掲載の上、回答を求めることになります。本誌三分分贈呈。

(開放した誌面を御利用下さい)

私のイメージ

ジをどしどし放して下さい。どんな荒唐無稽なものでも奇抜なものでも結構です。採用分には本誌半年分贈呈します。

【実写写真】 御自身写真されたものに限りなく。採用分には相当謝礼。

【アイデア】 将来本誌にて企画すべきものを全般につき出来るだけ詳細に、掲載の如何に拘らず優秀なものには千円迄の謝礼を呈上いたします。

【私は訴える】 皆さまの胸に持つておられる誰にも云えない諸々の悩みや御意見主張等を発表して下さい。本誌ならでは取り上げないような内容のもの。採用のものには本誌半年分贈呈。

【レポート】 新聞記事の切り抜き或は見聞等、皆様の興味をお持ちになった事件等につきお知らせ下さい。掲載分には本誌二分分贈呈。

【読者通信】 編集者、執筆者、投稿者等への便り、前号の批評、希望、或は編集者や雑誌のあり方等に関して忌憚なきお便りをお寄せ下さい。ハガキにて結構です。つとめて誌上に紹介します。

【読者交歓室】 読者相互間の交通呼び掛け、応答等の頁を新設いたしますから御遠慮なく御活用下さい。文章はなるべく簡単に明瞭にお願いします。到着順に最近号に掲載します。原稿の第一頁には応募の種目を明記して下さい。

奇譚クラブ編集部

本誌月極購読料

一月分一冊 (送料八円) 二百円
三月分三冊 (送料共) 六百円
半年分六冊 (送料共) 二千二百円
一年分十二冊 (送料共) 二千四百円

本誌は一切書店売りは致しませんので、購読御希望の方は、直接発行所へお申込み下さい。一月分一冊お申込みの方は必ず送料十六円の御加算を願います。半年分御申込みの方は景品として手札型写真三枚、一年分お申込みの方は景品としてキャビネ型写真三枚を贈呈いたします。

奇譚クラブ

第七月号 第十巻第四号
毎月一回一日発行
定価二百円 (送料八円)

昭和三十一年七月一日発行
昭和三十一年七月一日発行

編集者 人 箕田 京二
印刷兼発行人 吉田 稔
大阪市阿倍野区晴明通一丁目八五番地
発行所 天星社

振替口座大阪五〇〇四二番
電話天下茶屋三六〇七番

本社に対する御送金は振込みの振替用紙を御利用の上、受領証をお送り下さい。確実で早く大変便利です。振替用紙御入用の方はお申込次第お送りいたします。

〔奇譚クラブ最近号総目次〕

奇譚クラブ最近号総目次

昭和三十年

○十月号 (復刊第一号)

【定価二百円 (千16円)】

口絵

美しいドアー……四馬 孝画
頭立二馬車……都築 数久画
水中の女……峰子画

緊縛フォト・オンパレード

黒のシユミーズ……川辺 砂登子
帯……伊吹 真佐子

どういふポーズを……萩 千恵子

ボリウム……加賀 利江子

朝日を浴びて……須川 令子

うつつ……加賀 利江子

旅の縛られ女優……藤田 仙治

きものシリース……白 紅次

悪軍日記……榎本 利子

ボクの責め方……榎本 利子

女性の下着について……水上 流太郎

鼻の下の写真……北谷 英二

奈落の欲望……沢井 和雄

洗腸器と共に……久利 須照雄

お膳の型と種類……土屋 淑人

自殺娘の死体損壊……近藤 美子

二個のイチシク洗腸……花村 恵美子

女性緊縛寸考……宝塚 三三夫

完全なる隷屬……坂田 信治

少年刑務所体験記……三根 耕二
男性自虐の方法……岡村 文雄
玉稿落穂集……山田 正実
アブ追求三〇年の回顧……香田 一郎
幽囚十ヶ月……伊藤 和彦
女性切腹画に憑かれた男……高原 正夫
素足礼讃……一柳 真砂子
新しいコルセット……沼 正三
あるマゾヒストの手帳から……数 正男
私の洗腸論……吾妻 俊野
映画に見た淡いマゾ……九木 俊雄
アクロバット通信……森本 愛造
明治年間の新聞覚え書……吾妻 俊野
残虐なる女性達……森本 愛造
一七化け小僧出現……緑 猛比古
奇譚クラブ旧号主要目次読者通信……編 集 部
復刊に当りて……編 集 部
最新版アブフォト分譲 課題原稿募集

○十一月号 (復刊第二号)

【定価二百円 (千16円)】

口絵

みものむし……四馬 孝
小さな運動會……都築 数久
漂う女二題……滝 純子
賭場の獲物……北原 虹児
小人島の捕われ人……杉原 精二
女教師……依田 義賢
上げてくる潮……宮崎 昭平
掃除日の出来事……古川 裕子
告白……佐東 増夫
変態小説論……香田 一郎
幽囚十ヶ月……宝塚 三三夫
ボクの責め方……沼 正三
切腹通信……藤村 京助
レスボスと洗腸……藤山 秀緒
命がけの遊び……二 侯志津子
あるマゾヒストの手帳から……沼 正三

拷問に笑う女……辻村 隆
敵前上陸……三根 耕二
賭けられた娘……宮崎 昭平
お灸と腰巻……水 長市
錯乱……山下 真一
私にも貴女の下穿きを……芳野 眉美
輝美礼賛……伊勢 進
伊豆談話……伊志田 治
接客……加治 信一
大和撫子の散華……宮崎 昭平
残虐なる女性達……森本 愛造
被虐より嗜虐へ……沖野 恵美子
明治年間の新聞覚え書(四)……吾妻 俊野
泉都の夜明け……豊後 忠新
完全なる隷屬……坂田 信治
洗腸器と共に……久利 須照雄
或るソドミアの告白……朝路のぼる
洗腸のお仕置……宮崎 昭平
サディズムへの憧れ……京通 柳一郎
掲載候補作品寸評……編 集 部
玉稿落穂集(二)……編 集 部
女優の素足……高原 正夫
百合子の記録……渡辺 陽一
長瀬昭子さんへ……畑 晃一
映画雑誌芝居の緊縛場面……波羅田 護一
吹き溜り……近東 規矩也
アクロバット曲馳団……鍛冶 真三
続・岩瀬祥一のお灸院……岩瀬 祥一
続・映画に観た淡いマゾ……香田 一郎
アルバム第三集のアイデア……鳴海 文雄
セーラー服姿の切腹写真……編 集 部
女子フロレスリング雑感……鬼山 紉策
密淫……青葉 模一
同愛の土に告ぐ……天泥 盛英
読者通信(並に読者交歓室)

最新版アブフォト(前号と今月の分譲告)
蜂の胸四十五センチ……川上 信明
先祖の女腹切……吉住 信吉

昭和三十一年

○四月号 (復刊第三号)

【定価二百円 (千16円)】

口絵

苦痛の夢……四馬 孝
第二次会の披露宴……宮崎 昭平
戦国夜盗……都築 数久
ナイロスのレインコート……萩 千恵子
「こんなポーズで？」……佐賀 美智子
「手が痛いわから早く解いてエ！」……加賀 利江子
明治年間の新聞覚え書……吾妻 俊野
おしめ放浪記……野 当磨
フアンタジック・ストーリー……黒岩 巖
黒人少女の飼育……笠原 孫之介
或る切腹マニア恋文……笠原 孫之介
楽しい正月映画の縛られ……嵯峨 美也子
女優……春田 一郎
幽囚十ヶ月……山口 幸一
山口式ボディビルの御紹介……山口 幸一
キヤルマタの美……櫻村 幸彦
魔の味……高木 伸三
ドストエフスキイの嗜虐性……野中 喬次
女性乗馬考……馬場 喬次
サシスチンの独白……原 美智子
ボクの責め方……宝塚 三三夫
女剣士の切腹について……青山 芳樹
ラブレター……青山 芳樹
春日ルミ様へ……守口 栄吉
少年矯正院体験記(みせしめ)……獄 正二
仇討アレイ……高杉 正二
私は訴えるアブ・放譚……水 上 流
腰巻佩用許可願……小暮 道太郎
完全なる隷屬……坂田 信治



奇譚クラブ

復刊第六号
七月号

目次

四馬 孝・画

拘束服の装着
道化者の集まり

絵 女 士 官

二丁拳銃の姐御
木製の兵士

新人モデル嬢紹介

(花坂道子嬢)
(アメリカ雑誌BIZARRより)

パイプの馬

飛田良二アイデア
北原純子・画

凝 視
馬を御す令嬢

(佐賀美智子嬢)
北原純子・画

現代大衆文学に現れた責めの描写

藤見 郁 18

若衆歌舞伎復興
奈子の自己愛について(二)

小竹紀夫 28

幽 囚 十ヶ月
告白お灸を据えた女の魅力

門田奈子 30

赤い花は泣いている(第四回)

岩瀬祥一 43

ボディビルマシンに依る少年姿体美増進法

松井頼子 46

文獻紹介 私のコレクションより

熊谷俊一 56

「責め」の芝居難考

角間莊吉 60

梶井君の恋

本田由郎 68

少年 禪 記

真木不二夫 70

新聞雑誌通信 奇妙な倒錯の恋

雪 俊 遙 84

創作「女 掏 摸」

青 葉 榎 一 92

告白「活 火 山」

編 集 部 95

玉 稿 落 穂 集

高 村 民 子 100

被 縛 症

鳴 竹 成 太 郎 107

「女性の切腹幻想」
或る下着マニアの告白

古 井 真 哉 108

幻想小説「潰滅の前夜」

土 路 草 一 110

女性自害突見談或る従軍婦人の死

佐 茂 半 治 122

マゾヒズム断想

天 泥 盛 英 124

H氏の奇妙な告白

北 谷 英 二 128

サティズム小説

泉 義 明 139

い で 湯

多 磨 宏 146

小説 スーダン

川 野 京 輔 148

乙女の腹切抄

鳴 竹 成 太 郎 158

限定版各種特集、発行予告経過報告

164

最新版女性緊縛フォト

166

奇譚クラブ旧号主要目次

168

天星社代理部特選写真集

170

読者通信

172

告知 版

176

拾万円懸賞原稿募集

176

編集 後 記

177

編集だより

178

今月の新版

182

〔奇譚クラブ最近号総目次〕

私のイメージ

鼻のアレリユード……………北谷 英二

映画の緊縛断片……………緑 猛比古

マニア誕生……………坂野上信彦

体験告白記 お臍の研究……………須藤 律夫

残虐なる女性達……………森本愛造

切腹願望と臍窩……………沢 清克

その後の緊縛女優列伝……………升岡 金吉

縛られた女優達……………十字 好介

映画(近松物語)より……………小村 二郎

悲恋栗田口……………永井昇次郎

あゝこの恍惚境……………狩井 麗作

責めのアイデア……………佐巻 跋策

シーソー責め……………加治 信一

洗腸雑記……………空置 俊郎

洋画に於ける緊縛場面……………川瀬 一美

懸賞入選作品佳作第一席……………緒台あふみ

接客婦……………加治 信一

蜂の胸四十五センチに……………藤間 洋子

こたえて……………川瀬 一美

倒錯の英雄織田信長……………緒台あふみ

Xの尻……………緒台あふみ

「女」の隠筆……………辻村 隆

「女のお腹談義」……………辻村 隆

アブノーマル雑談……………辻村 隆

「話の屠龍」……………辻村 隆

王穂落穂集……………編 集 部

赤い花は泣いている……………松井 頼子

失恋の告白……………城 秀人

読者通信(並に読者交歓室)……………城 秀人

代理部特選写真集……………城 秀人

(前月と今月の分譲品)

〇五月号(復刊第四号)

定価二百円(〒8円)

口 絵

素晴らしいショー……………四馬 孝・画

モデル嬢の表情(緊縛写真集)

佐賀美智子……………須川 令子

加賀利江子……………萩 千恵子

アメリカ雑誌「ビザ」より……………萩 千恵子

淑やかな令嬢、メイドの拘束服……………萩 千恵子

スチユアードスの晒し……………宮崎昭平・画

赤い花は泣いている……………松井 頼子

幽囚十ヶ月……………春田 一郎

魔の味……………高木 伸夫

完全なる隷属……………坂田 信治

戦慄怪談屋敷……………岸本 青柳

体臭日記……………狩井 麗作

架土やしき(異常体験記)……………相沢 松柏

おそい目覚め……………足立 夏夫

(ある洗腸マニアの日記から)……………足立 夏夫

灰色のノート……………矢崎 竜一

箱 礫……………多山 皓

女サディストより奴隷に……………森山 美歌

与える手紙……………森山 美歌

撫子の花散りぬ……………北川 操

奇妙な輝……………森 太一

責めとフェチシズム……………畔野 当磨

魔の白鳥……………加宮 敏一

お臍の研究(二)……………須藤 律夫

生理め願望……………長岡愛一郎

紅 魔……………佐次 浩介

姉とその弟……………春木 俊野

陰花への憧憬……………青山 伸夫

去日の美女……………吉井 環

女人散華……………吉井 環

悲風磨上原……………瀬川 泰子

王穂落穂集……………編 集 部

アブノーマル・モノローグ……………竹谷 十三

(あるアクロバット・ダンサーの記録)

拷問に笑う女……………辻村 隆

読者通信、読者交歓室……………辻村 隆

代理部特選写真分譲広告……………辻村 隆

今月の新版特選写真集、編集後記……………辻村 隆

〇六月号(復刊第五号)

定価二百円(〒8円)

口 絵

美貌の屈辱……………四馬 孝・画

孤島の捕われ人……………アメリカ雑誌

佐賀美智子ポーズ集……………より

曼陀羅華の萌芽……………須川 令子嬢

私室でのプレイ……………須川 令子嬢

深夜のホール……………四馬 孝・画

修道院の神室……………宮崎昭平・画

大衆文学に現れ……………藤見 郁

た責めの描写……………藤見 郁

赤い花は泣いて……………松井 頼子

いる(第三回)……………松井 頼子

明治と昭和の絵くらべ談義……………緒台あふみ

幽囚十ヶ月……………春田 一郎

世相断片、ローカル・レポート……………春田 一郎

奈子の自己愛について……………門田 奈子

洗腸問答……………青山三枝吉

鞍馬の孕み女……………緑 猛比古

私のイメージ……………緑 猛比古

「代理部便り」の夢……………並原 新一

女人散華……………並原 新一

悲風磨上原……………瀬川 泰子

女サディストより……………森山 美歌

奴隷に与える手紙……………森山 美歌

私のアイデアと回想……………菅原 春夫

サディズム小説

いで湯……………泉 義明

コルセツトの魔力……………林 靖彦

変った切腹の掟……………山中 同人

私のマゾ・スクラ……………春木 俊野

ツア帳より……………春木 俊野

甘美なる被虐の幻想……………沢 清克

脱腸に対する私見……………伊藤 薫

小説 虐妻日記……………竹谷 十三

現代マゾヒズム芸術時評……………原 忠正

お仕置遊戯……………桜井美智子

フェチシズムの文学ノート……………S・T生

マゾヒズム体験談……………S・T生

猪 狩……………黒井 邦

緊縛女体雑考……………浮家 鷹三

「種」先生……………青葉 模一

最近の縛り時代劇映画から……………嵯峨美也子

お臍の研究……………須藤 律夫

結髪の種類……………伊藤 晴雨

王穂落穂集……………編 集 部

映画に現れたムツキ……………赤井 茂

虐げられる娘……………嵯峨 紀世

ナチスの暴虐……………藤木 仙治

私の空想天国……………藤木 仙治

娘子島探検……………東 坊 丸

或る告白 春と女の素足……………田木 稔

サディズムツクな漫画……………藤木 仙治

十万円懸賞原稿募集……………藤木 仙治

限定版各種特集号発行予告……………藤木 仙治

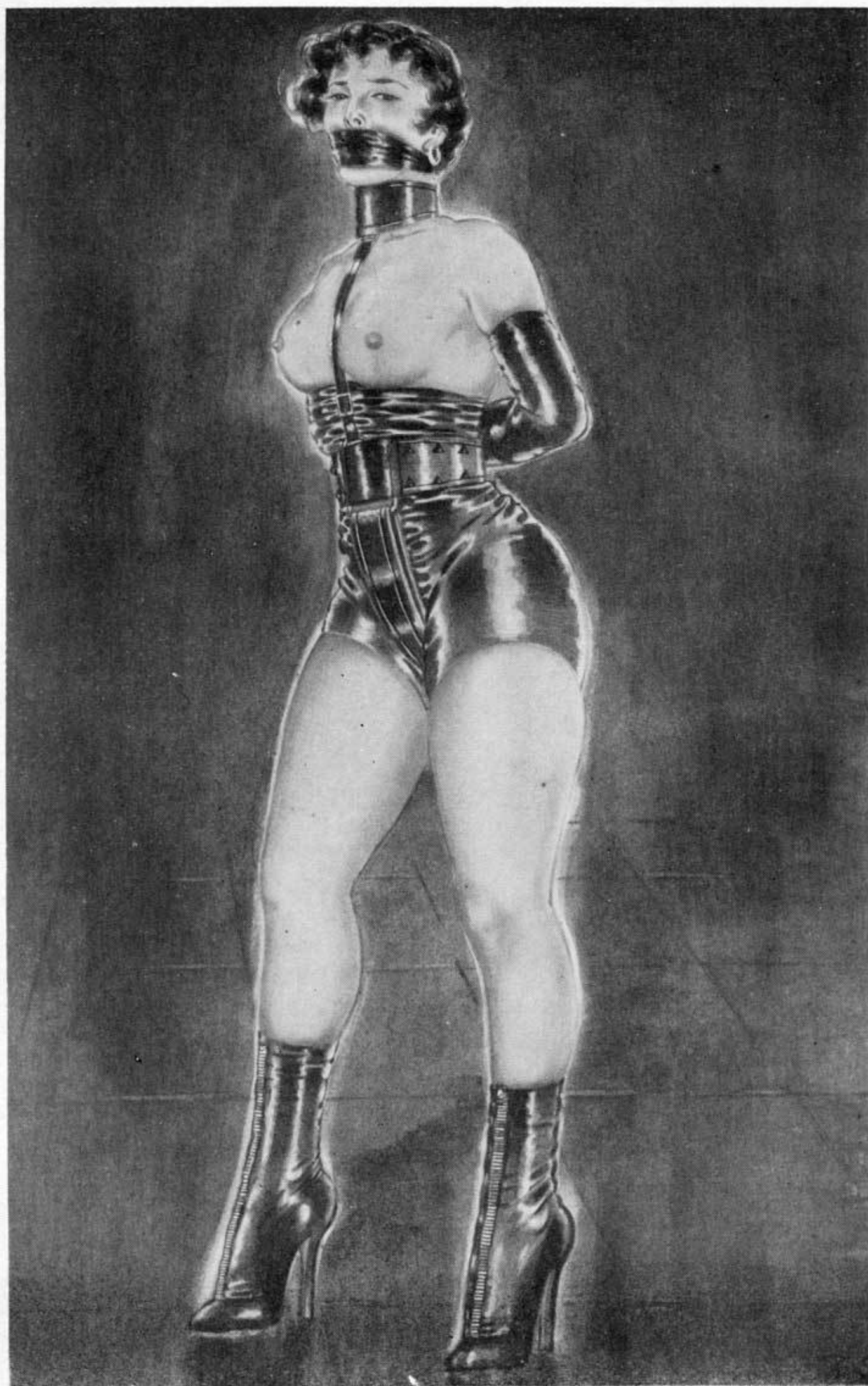
読者通信……………藤木 仙治

「切腹画帖」発行中止について……………藤木 仙治

黒光りのする革、尾錠とフアスナーによって構成された革製の拘束服は首、胸、手足、胴と、要所要所をびつたりと膠着して間然するところがない。後手は勿論、革ベルトと尾錠によって完全に固定されている。

拘束服の装着

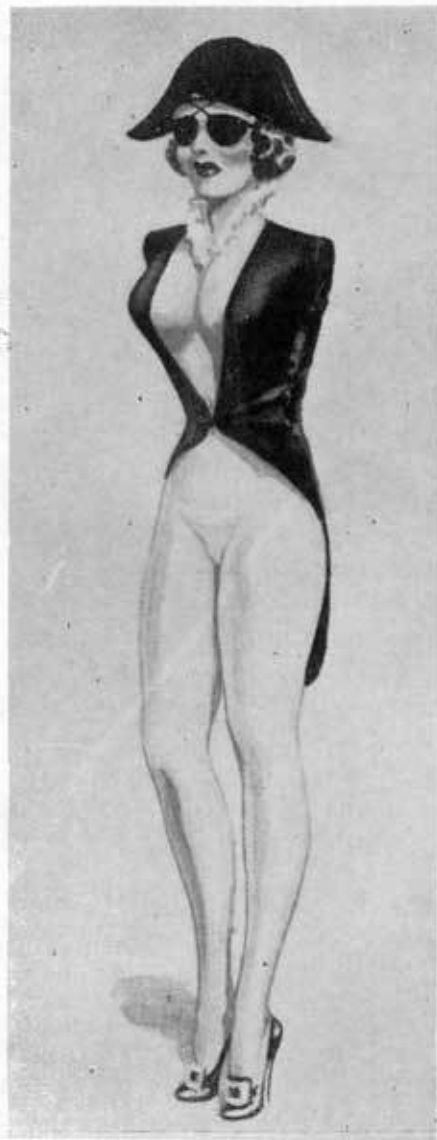
四馬孝・画



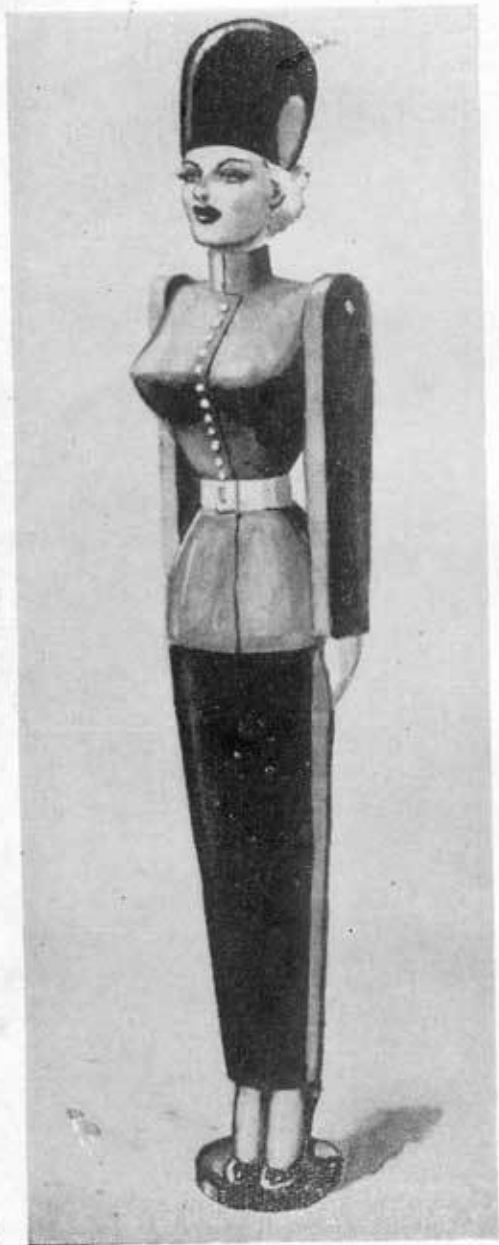
道化者の集り



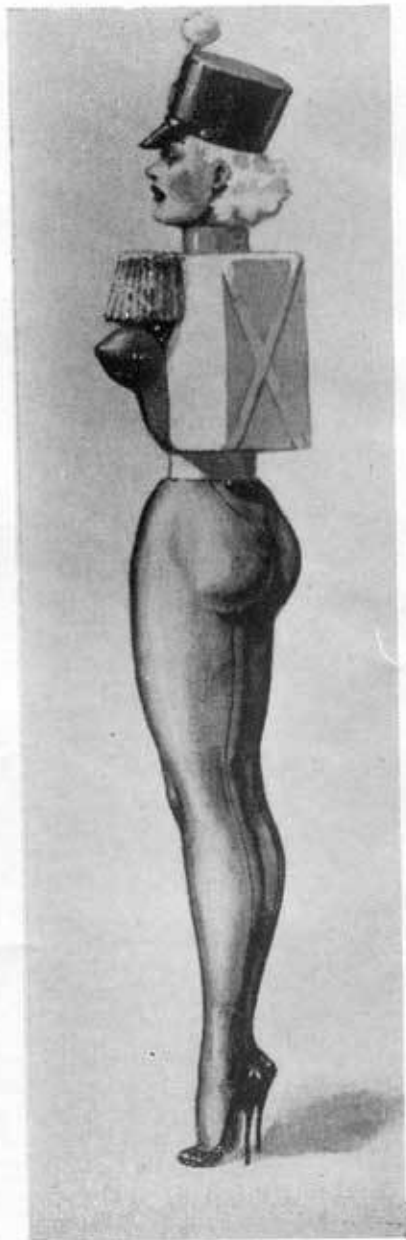
御姐の銃拳二丁



督提ンソンネル



木製の兵士



女士官

新人モデル嬢紹介

今流行のロングヘヤーを房々となびかせて美貌の道子嬢が九州の遠方からわざわざ編集部を訪問してポーズをとってくれた時のスナップである。



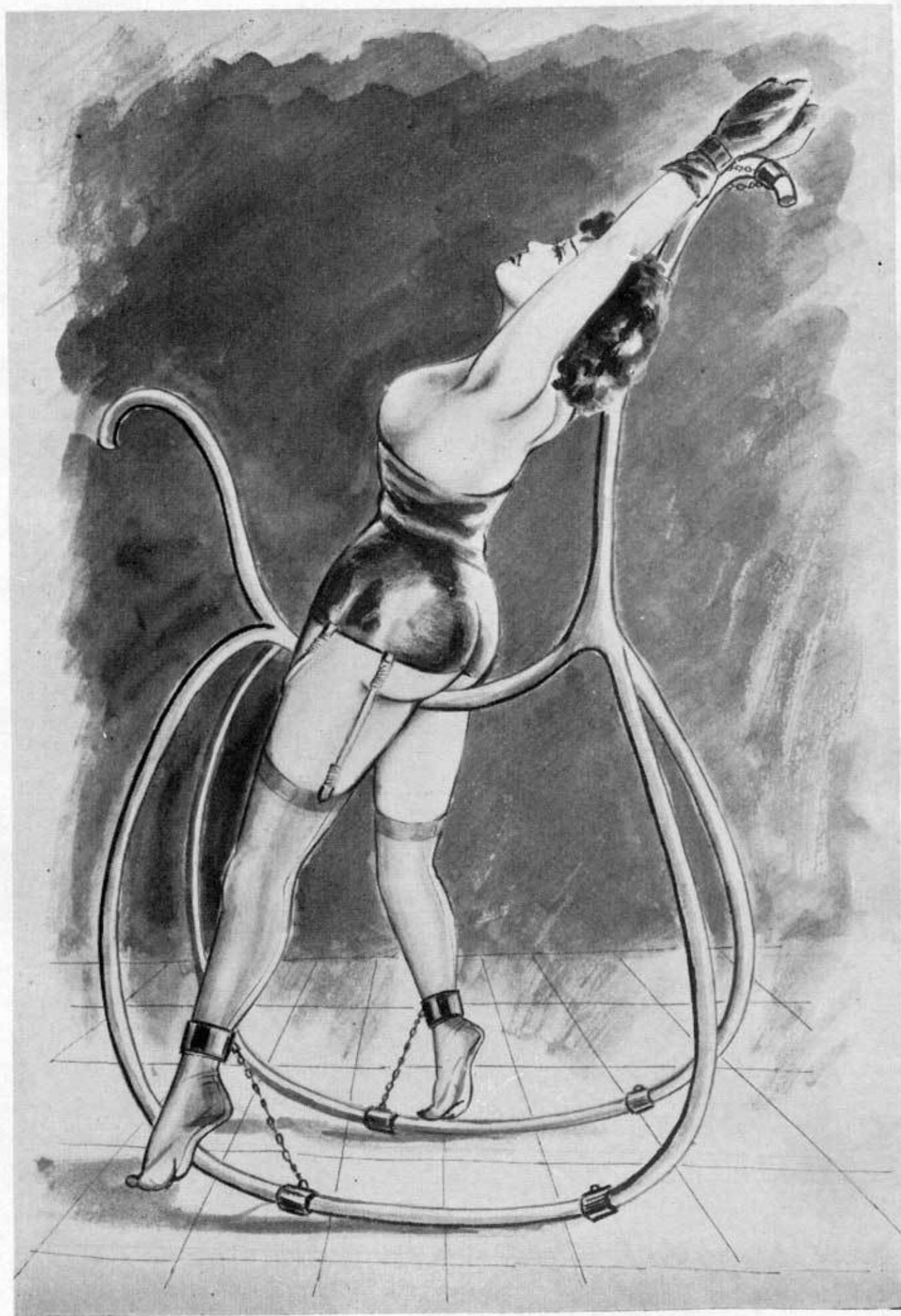


花坂道子嬢

〔パイプの馬〕

飛田良二氏考案のパイプの馬に水着一枚で跨らせられた若い女。手を足とを固定されているので、このパイプの馬を躍動させたら、一体どうなるでしょうか、御想像下さい。

△飛田良二・アイデア▽
△北原純子・画▽





凝 視
ぎよう し

じっと読者の皆さまを見つめた佐賀嬢のつぶらな瞳。
このフォトから受ける感じは見る人各々によって異なる
ことでしょう。

佐賀美智子嬢

馬を御す令嬢



北原純子・画

誰です？馬なりたいたなぞ言うのは



アメリカ雑誌
BIZARRのカットより

新しい文献研究誌

奇 譚 ク ラ ブ

1956年 7月号

(第十卷 第四号 通刊第八十六号)

現代大衆文学に現れた責めの描写

その二

藤 見 郁

画・藤 木 仙 治

大衆文学に於て責めの描写に力を入れる作家は、多いようで案外すくない。本稿に於ても前号と同じ作家の名が登場するが、責めの描写に於て、新鮮なものをのみ採録するようにして変化をもたせたい。

先ずはじめに、雑誌「宝石」の別冊（岩谷書店発行）から、島久平氏作「水情女車」（みずのなさけおんなぐるま）より書きぬいてみる。この宝石という雑誌は読者御承知のように推理探偵雑誌で、この別冊号（昭和二十九年九月）は捕物帳特集になっている。したがってこの「水情女車」も短篇捕物小説である。

発端は御用聞きのみぬけな子分たちが女の水死体発見の報告のシーンからである。

「……権八が眼を丸くする。

「今朝、どないしたんや」

「今さっき、肥後橋の下に、女の裸か死体が浮きよりましたで」

「裸かの……」

竹が首をのぼして、

「裸か……ほんまの裸かでッか、兄貴」

「ど助平、黙っとれ」

権八が竹を叱りつけておいて、

「水死人か」

「真ッ裸かで、身体中、傷だらけでッせ」

「傷だらけ……」

「あら、責められた傷でんな。おまけに、止めに、下から竹槍を突っ込んでますわ」

「えッ」

権八も、金太も、松も竹も梅もたまげる

「股の間へか」

金太が唸った。

「畜生、ひでえ事を……」

権八が、

「色きちがいの仕業やな、裸かでは、身もとを調べるのに……」

銀平の、まのぬけた声があった。……」

と、直接の描写はないが、事件は相当惨虐である。女の下から止めの槍が突っ込んであるなどという描写を、みぬけな子分に間接的にユーモラスに語らせているところに、リアルな淫虐さを避けた作者の筆がみえる。

この事件も大詰へきて、御用聞き親分

子分が、犯人の住家である土蔵に押し入る。

『……二階へ上ると、片すみに女が一人、縛られており、妙な車が一つ部屋の真中におかれてある。女は、今日さらわれたばかりの新しい犠牲者。銀平が縄をといてやる。』

「ところで……この車は、なんや」

それは、昔の御所車にちよつと似ている。周囲を布でかこっている。その布をめくって、行燈をつきつけた銀平、呑気者の銀平だが、みるや否や、

「うあッ、兄貴……」

と、たまげた声を出した。

中に、一糸まとわぬ裸かの女が、手足を縛りつけられていた。これが南木幡町のお初。

妙なカラクリがしてあって、車を動かすと、縛りつけた女の身体が動く。それも上になり、下になり、横になり、さかさまになり、裏返しになる。つまり、女のあらゆる姿態、あらゆる部位から、女の身体を自由自在にして犯す仕掛なのだ。

もろこしの黄帝は指南車を作ったという



が、この女車は隋の煬帝の発明したものだという。

お初は、氣息えんえん、息を引きとる一歩前だった。金太と銀平の助けが、もう少しおくれたら、また竹槍で止めを刺されて水底に沈められたらどう……」

『……女車をこしらえた変態爺は長崎屋の隠居吉右衛門。新之助にかどわかさせた女を、女車にしぼりつけて、夜ひる責めさいなむ、女が死ぬと竹槍で止めを刺し、舟で運び出して、川の底に沈めていた……』

こんなカラクリ仕掛の責め具の出でくる捕物帖も珍らしい。このカラクリの描写『車を動かすと、縛りつけた女の身体が動く

それも、上になり下になり、横になり、さかさまになり、裏返しになる……』というのは、なかなかケツサクで、稚氣があつて愉快である。過去の奇クに於ても、このような機具のでてくる小説が幾つかあった。このカラクリなど、ちよつとした男性の「夢」みたいなものかも知れない。

然し、殺してしまうのは、どうもよくない。しかも、止めを刺すのに場所もあるうに竹槍で女の下から、というのはどうも陰惨である。作者がいたずらにリョウ奇性をねらった感がある。それとも作者島久平氏の意識の底にこのような趣味があつて、計らずも筆の滑りのまゝにここに現われてきたのであろうか。尚、この小説の挿絵は倉藤秀弥氏が描いている。

次に吉川英治氏の長篇小説「万花地獄」から、一、二拾ってみる。この作品は過去に幾度か映画化され、吉川氏のものとしては近作ではないが、最近時代小説流行の波に乗って各出版社から新しく単行本になっている。

蘭八節の師匠お妻が襲れる場面である。

『……ひとりがトンと胸を突く。あ——と驚く隙に、もう左右から二、三人、腕を捻じ取って雑草の上へ組み俯せようとか、つてきた。』

「何をするのさッ、お前方は」

いきなり一人の侍を男勝りに突き放した。お妻、元より尋常の女師匠ではない。銀脚のかんざしは、逆手に持たれて、寄らば！と裂ける紅のまなじり。

「人違いをおしでない！ わたしは、八幡前のお妻だよ」

りんと云って怯まなかったが、相手は無頼の侍だった。それに、船の内からもドカ／＼と手を貸しに上ってきて、見る間に利き腕へ扱帯を廻し、口に手拭をかけるが早いか、寄せてあった屋根船のすだれのうちへ、無理無態に運び込んでしまった。『……うすべりを敷いた船板の上へ、どうにでも跪けとばかり、お妻は抛り出されていた。』

「美しい女だ……路考張りな目元をしている」

「これなら、一枚絵にしても、立派なものだ」

「ウム……惜しい」

「なにが？」と、その周りに膝を抱えている浪人共が、いやらしい囁きや猥らな目づかいでお妻の腕きを眺め合っている……」

時代小説には、女がかどわかされて船の中に連れ込まれる場面が多い。誰にも知られず運べる便利があるから船をよく使うのだろうが、それと、小説として「絵」になるからだと思う。江戸の夜景、大川端、屋根船、縛られた美女、それを囲む浪人者……と、いささか常套的ではあるが、まさに「絵」になる情緒である。

この船へ次にお兼という女が現れてくるこの女がなかなかのサディストである。

『……お妻の姿がボツと照らしだされて泛く。口惜しように、何か叫ぼうとしているが、口もきけなければ、後ろ手に縛られているので、仆れた自分の体さえ自分で起すことができない。』

「陰気だネ、どうせ行くなら、景気よく帰ろうじゃないか、折角、上々首尾にいったんだもの」

そこにあつた三味線を抱えると、女は爪で蘭八の一節を弾き初めた。艫の方から冷やかに、お妻の顛倒する態を、面白そうに見る



目つきで——

「ネエ、お師匠さん」

と、そうして、馬鹿にした口調で、お妻に話しかけるのである……」

『……「げッ！」』

お妻は悶絶しそうになった。
五体をふるわせて起きようと跳き廻った。肩の皮が剥けるほど！

だが起きられない！ 口もきけない！

「ホ、ホ、ホ。お止しよ。見ッともない！

船がゆたぶれてしようがありやしない」

と、三味線のでんじんで、その横顔をグ

イと突いた。もう涙も出ないお妻であつた。自由のきくのは目だけである。

（おのれ、ようも！）と、お兼の顔に怨みをこめて、ジッと睨めつめるばかりだった。

血走ってくる！ 血走ってくる！ その目から涙が流れてきたなら、おそらく血であるかも知れない……」

と、簡潔な文章の中に、勝気な女の口惜しさが、よく表現されている。片方は縛られて船板にもがく美女、片方はそれを冷たく眺めながら、三味線を弾く美女、これも一幅の絵であろう。起きようとお妻がもがく様を、肩の皮が剥けるほど、と描写したのは、簡にして要を得た表現だと思ふ。

この小説の後半に入って、再びお妻が悪侍の一味に捕われる場面がある。

『……月の明るさが痛々しい。河原の上へ捻じ伏せられると、折重った大の男二人が扱帯を取って滅茶々に縛め、無念そうに唇を噛んだその口まで、酷い猿轡をギリギリと締めた。

「立てッお妻」

「駄目だ！ 抱き起せ！」

「えい、世話のやけるやつ奴が」

と、荒々しく、手のきかないその体を棒立ちに抱いて立たすや否、司馬大学が当身をくれて、

「誰か一名残って、この女を、山雨荘の部屋へ運んでおけ」

云い残して、ばらばらと上流へ向って馳け出した……」

月の明るさが痛々しい、というのはちよつと感覚的でうまい。縛った女を棒立ちに抱き起して立たし、当身（あてみ）をくれて気絶させて運ぶ、という描写は、きわめて映画的なアクションである。大衆小説の読者は、文字から受ける印象を映画的なイメージで楽しむというコツをよくのみこんでいる吉川氏の技巧が、こんな細かい点にもみられる。

このあと、いったん逃げ出したお妻がまたつかまって責められる描写がある。

『……この一瞬である。虎口を逃れる道は

この機会を措いてはほかにはない。彼女は夢中だった、必死だった。

だが、自分の体が窓の塀に乗って、外へ

のめり落ちようとした刹那に、

「これ、何処へ行く！」

広い胸幅と太い腕が、お妻の体を抱き止めてしまった。

「典六、明りをつける、明りを」

お妻は、自分の耳元でこう怒鳴った司馬大学の力を、何うしようもなかった。

「ちいッ……」と、唇を噛みしめて、捻じあげられる腕の苦痛を憶えて居るばかり。

「こやつ奴！」

お妻の姿を見ると、典六は忌々しげにその肩先を蹴飛ばして、

「よくも気を失った風を装って、吾々の密談を偷み聞き致したな。さ、逃げるなら逃げてみる」

足のはずみが止まらぬように顔を蹴る、腰を蹴る、背なかを蹴る。そして、なおまだ飽足らぬように、

「大学様、何うしてくれましょうか」

「もっと存分に痛めつけてやれ。体が利かなくなるように」

「ウム、こうしてやる」

「あ、待て……。声を立てると宿の者が聞

きつけるかも知れぬ、静かに、静かに」

むごい猿轡がお妻の顔を半分かくした。

黒髪は乱れ、櫛は折れ、彼女の全身は見

るまに大勢の刀の鐙で小突かれた。美しい

頬、白いこの腕、あらわな腕に、黒牡丹のような悲がいくつも作られた……」

かなり残酷になぐられ、小突かれたらしいが、黒牡丹のような悲がいくつもできた、というのは大分大袈裟である。幾ら強く打ったからとはいえ、速座にそんな悲は生れないだろう。こんな所に大衆小説らしく、見た眼に派手な言葉が観念的に使われている。然し、リアルに描いて残酷になるのを避けた、と云われればそれまで、それもうなずける事である。

次に現代小説から一つ取りあげてみる。三好一光氏の作品で「雪あかり」（小説の泉所載）これには清水三重三氏の艶麗な挿絵がある。現代小説でこういう責め場は非常に珍らしい。責め場といってもこれは相手に憎悪の感情があつて苦痛を強いるのではなく、相方共愛慾的遊戯的なのが奇クフアン向きである。いわば現代的である。

非常に綿密に巧みな文章なので、少し長く写してみる。

芝紅というのは歌舞伎俳優で、女はその愛人である。

『……それから一時間後……。ま冬の、波音の聞える森ヶ崎の温泉旅館の、奥まった一室で。——

暗闇の部屋の一隅には、電気ストーブの火が悪魔の舌のようにまっ赤に燃えていた。その炎の明りに照し出されて、湯上りのボツと桜色に染まった裸身をしどけなく長襦袢一枚にくるんだ女が、扱帯で傍らの床柱にむごたしく括りつけられていた。日本人にはめづらしい、豊かな肢態から発散する肉の匂いが噓せ返るようで……

その前に格子縞の旅館の浴衣の膝をどっかりと崩して坐った芝紅が、チラチラと女の様子をうかがいながら、高足の膳の盃をとり上げると、ちびくんと甜めていた。



女は顔を伏せたまま、一ト言も口をきかない。横坐りに投げ出した脛から太り肉の腿にかけて、曲線が悩ましく仄暗い柿色べりの畳の上を這っていた。

間もなく、不思議な恍惚感が男にきた。

そつと芝紅がにじり寄ると、女の肩がピクと動いた。

それから芝紅は立上ると鮎屋の権太のように片足を揚げて（権太というのは義経千本桜という芝居の中に出てくる役名）女の顎を爪先で下からぐいと持ち上げた。瞼を閉じ、うっすらと眉に八の字を描いている美しい顔が無抵抗にのけ反ると、

——ゆるして……！

苦しそうに叫んだのは、むしろ芝紅だった。女は切なげに開いた唇の間から美しい歯を見せると、ほっと温かそうな溜息を洩らした。

すると、悪魔に身を売った芝紅はもうたまらないように、ある特種な方法で、餅よりも白く、柔らかな弾力に富んだ女の肉体

の各部分を、女よりもほそいよく撓う五本の指で、滑らかな舌で、つぎ／＼と隈なく羞かしめていった。

やがて、女はそのたびに身悶えして、

——ひーい、ひーい……。

と、声を殺して泣きじやくった。乳も、腿も露き出して……。

後ろ手に自由を奪われた女の身体がのたうてばうつほど、奇怪な拷問に似た芝紅の指と舌は、それ自身一つ／＼の生き物のように、鋭敏に、執拗に、女の肉体の祕所を探り当てた。

拷問と云うよりは、愛撫だったろう。この二人の男女の表情には、どんな苦痛のかげも浮んではいなかった。時間も、空間もない。あるものは、狂ったような地獄の愛慾だけ。

……長い時間の後に、ぐったりと死んだようになっている女の身体を艶めかしく長襦袢の色をちらつかせながら丹前にくると、芝紅は優しく抱くようにすると、泳ぐように、廊下の仄暗い明りの中を人気がない湯殿に出て行った……。

この描写は見事に美しい。陰惨さが少しもなく、妖しい浮世絵をみるような美が読者を酔わせる。ここには暴力もなければ憎しみもない。かなりのエロチシズムを感じ

させるが、それが淫猥にならないところに作者の態度がみられる。このようなサディスティックな遊戯を、ここまで細かく描き出せるのは、やはり作者にその心得があるからであろう。

次に又、時代小説に戻って、角田喜久雄氏の作品から。

前稿にも述べたように角田氏の責め場は可憐な小町娘が荒くれ男達に非常に手荒く残酷に扱われる。処女と醜惡な無頼漢の対照よろしく、娘はいつもめちやくちやに苛まれもてあそばれてしまう。だが、角田氏の責め場の特徴として、縛りあげた娘を鞭でうつようなことはあまり無く、その肉体をいじり廻して辱しめるところが多い。

はじめに、桃園書房発行小説倶楽部連載「振袖地獄」から。

『……だみ声でそういったかと思うと、突然すうっと寄ってきて、ノミをもっている、おみやの手首をむずとつかんだ。同時に、もう一人が、飛びかかるように、おみやのもう片方の腕をわしづかみにしてしまつた。』

「甘く見やあがつて、じたばたしやアがると、引くくくって、天井から逆吊しにしてしまふぞッ」

と、また小突く。

「この女の、着物を引っぱいでみる。入墨してるかどうか、調べてみるんだ」

はッとして、おみやは必死に身悶えしたが、両腕を左右から男の力でおさえつけられていては、どう逃れるすべもなかった。

「静にしるッ。騒ぎやアがると、腕をへし折ってしまうぞッ」

本気になって、おみやの腕をぐいぐいねじあげている間に、ほかから伸びてきた指先が、おみやの着物の襟元にかかった。ぴりっと布の裂ける音がした。見る見る、肌着ぐるみ、おみやの、肩先からずりおちてゆく。

片肌ぬぎのかたち、燃え上るような肌着の紅いの間から、おみやの雪白の肌が見え、わにむき出された。がんだう提灯の灯が、はげしく波打っているその胸から背中へと、まるで舐めるようにじわじわと這ってゆく。

「兄貴、素ッ裸にむいてみましょうか？」と、気の早いのが、もう、おみやの帯に手をかけようとする……。

次に、同じく角田喜久雄作「生首小町」(双葉社発行読切傑作集)から。

『……吸いよせられるようににりよったお浪が手を伸して、それに触れようとした、途端、ぐっと伸びた男の身体がお浪の上に

折り重なった。

「あれッ！」と喉をついた叫び声を押しもどすように、唇へ喰い入った古手拭の猿轡。何時手にとったか、藁縄が蛇のようにお浪の身体へからみついて、きりきり縛り上げて了った。

男は両膝の間に挟みおさえつけた女の、胸の、腰の、厚い肉の弾力を味わうように、荒々しく縄の喰い入った二つの腕から露わにはだけた裾の、白や赤や青の色彩に怪しく眼を光らせ乍



ら、暫らくそのまゝじっとしていた……」
「……男は、自分で自分の言葉に情慾を煽られたように、生首を隅へ押しやると、のっそり、お浪の側へにじり寄った。

お浪は頬へ酒臭い、熱い息を感じると、必死に顔を避けようとした。然し、女の、

まして自由のきかぬ手足である。胸の、腰の、膚へ、無遠慮に触れるものを感じて真暗な絶望に気が遠くなりかけた……」

なかなかサディスティックなシーンである。一般読者もこの辺の文章は手に汗を握り緊張して読むことだろう。男性の読者はヒロインの危機の不安よりも、自分がこの加虐者になったような気で読むだろうし、女性の読者ならば、夢中になって読んでいるうちに、自分が縛られ抵抗のできない肌、男の手が伸びてくるような錯覚に落ち入るのではないだろうか。そんな読者の興奮の中に、加

虐被虐の軽い快感がひそんでいるものである。それも小説の娯しさというものであると思う。

次に「切支丹もの」の小説から、大原六郎氏作「裸身の聖母」（オール読切所載、共栄社発行）から取り上げてみる。

この小説はキリスト教受難史と副題がついていて、ヨハネ外記の妻、モニカ多枝の受難の様相が、わりにエロ味や残酷性が少なく、記録的に描かれている。

モニカ多枝は若く美しい人妻で、

「……上手に抓みあげたような鼻、二重瞼の大きい眼、青蛾の触鬚に似て半円に描かれた淡青い剃眉の形、こんな美しい顔をしていながら、奉行たる者を軽くあしらうようなこのはげしい反抗——」

そこで奉行職の多賀主水が怒って、モニカを裸吟味にかけるといのである。

「……モニカの、思い詰めた眸のかゞやき、はも早や神のものであった。

「宗門のためでございますれば、着物はもとよりのこと、この身の生き皮を逆剥ぎされ、生き爪をむしりとられましようとも、決して苦しいございませぬ」

主水は眼を釣り上げて、箒尻、伊豆石、算盤板、釣責道具などの拷問用具を、厚い唇を舐め回しながら眺めていたが、

「よく申した、剥げ！」

とわめいて、打役に眼を移した。三人の打役は、

「はッ」

と答えてモニカに取りついた。縄目を解き、

「立て」

と左右から腕をとってモニカを引立て、きちんと結んだ唐織浅黄地の御殿帯に手をかけた。主水はめじりをなごめて、モニカをみつめている。

モニカは、たしなみ深く引き締った小さな唇をふるわして、口の中で何か祈りのことばをささげている。眼をつむって、放心したように、何の抵抗をも試みない。

帯は荒々しく解かれ、ためにモニカの軀はよじれる。紫地本座鹿の子の、山路に萩の模様の小袖が剥ぎとられると、白綸子のじゆぼんの腰に結んでいる紅いくけ紐が、細腰のくびれをきわだてゝいる。白縮緬のゆもじが、いやに清潔であった。

打役の、ひねしようながのような手は、容赦なく動く。モニカは、宙空からでも湧くような妙なる声音で、

「ハレルヤ、ハレルヤ、ハレルヤ、アンメイ、アンメイ、セント、マリア、セント、マリア……」

とくり返している。コッポリと白の腕を

伏せたような二つの乳、その間の狭い深い凹み、上向きかげんの、ぐみの実のような乳首、なだらかな肩から、白磁のような光沢が放たれる。玉むすびにしたゆたかな髪が、肌理のこまかな背中に通って、黒白の反対色を一段とはっきりさせている。

主水の無理に力んだ顔が、卑猥な感覚に負けて、ゆがみ、眼が細まり煙たいものに変ってくる。あまりにもすぐれた裸形であった。それ故に主水は、まじまじとみつめる勇気が失せた。……」

と、描写はなかなか執拗である。大衆小説特有の安易で通俗な形容もないではないが、克明に描いて、或る程度感じがでている。反抗する女ではなく、全く無抵抗の女

の責めも哀しく美しいものだ。この描写はこと更に加虐の形容はないが、男のなすがまゝになぶられる女の姿が痛々しい。

裸にしても転宗しないモニカに、次にはその貞操にかけて志をひるがえさせようとする。

「……穿索場の中には、不倫、魔顔、醜惡の妖氣が立ちこめた。右の端から順に云うと、竹筒のようにずんどうで、胸の張りも腰のくびれもまるきりない女、乳房が頭陀袋のように下った女、灰色の鮫肌をした女



その次がモニカの立派な身体
その隣に縛られているのは、
今年十三になったアグネスき
よ、色は白く、眼はクリクリ
として清浄であった。

それにしても、ムンムンむ
せるふんいきである。白昼の
悪夢にうなされているような
情景である。それというのが
この裸女たちを、片眼、かつ
たい、鼻かけ、ボーボー髪、
口曲り、よだれくりなど一つ
として満足にはみられぬ、汚
れた醜惡な顔をした廃残の男
たちが、ひしめくようにして廊下に立ち、
窓からのぞいているのである。

その数は十五人、半裸の男もあり、ごぎ
を着た男もある。乞食野臥りのたぐいを集
めてきたのだ。

「もうこれが最後だ、これ以上は二度と勧
めぬ、転宗するものはないか。なければあ
の者らをこの場へ追いこんで、彼奴の自由
にさせる。これも拷問の一つだ、どうだ、
これでも転ばぬか——」

主水は狂気のような昂り方でがなり立て
た。ガクガク歯を鳴らして身ぶるいする女
もある。肌は皆恐怖に鳥肌だってしまった

……
この責めをみて、モニカの夫、ヨハネ外
記が耐えかねて転宗する。

然し、モニカの志操は依然として堅固で
奉行は次に、又新手の責めを加える。
『……大火鉢には木炭の火がゴンゴンおき
ている。』

「モニカ、その火を手でつかめ——」

主水はこんな苛烈な命令を下した。この
華奢な手にこの火がつかめようか。真赤に
おこった火は、かたわらに顔をよせただけ
でも、カッと熱いのだ。けれどもモニカは
衆人の中で肉体をさらすよりも気が楽であ



った。
「ハイ」

とこたえて、一つかみの
火を握った。無惨や、ジュ
ッと肉の焼ける匂いが立つ
た。

外記も下役人も思わず眼
を外らした。毫も屈伏を示
さないモニカの態度が、主
水には腹立たしかった。

手はじりじりと焼けたど
れていく。異様な臭気がみ
なぎり、脂肪の燃える色で
あろうか、紫の煙はたゞよ
う。モニカはさすがに、額
に汗の玉を浮べ、顔面は蒼
白である。それでも手をあ
けないのだ。どこまで気の

きつい女であることか——主水は又もカッ
となった。

「くそッそんな無用な手ならば斬ってつか
わす」

太刀を引抜いて振りかぶった。だがモニ
カは平然としている。多勢の中で裸で居る
よりも、このほうが楽なのだ。斬殺される
ことも殉教だと覚悟している。……
かくして、最後まで拷問に屈しなかった

教徒たちは、次に十字架にかけられ、主のみもとにゆかすのである。

このキリスト教徒受難の物語は厳然たる歴史で、作家の創作の筆の遊びはあっても事実がむごたらしいので、後味はどうもよくない。

純然たる創作ならば、いくらむごたしくとも架空の出来事だと思っっているから気はラクである。然し、遊びの心のないサデイズムは、どうも陰惨になり勝ちで、楽しむ余裕がない。

この小説はあくまでも受難教徒の立派さを描き、残酷な刺激本位にしなかったので幾分か救われた。然し文学的にみたら別段どうこういう作品ではない。

次に、典型的、かつもっとも通俗的な責め場面を一つあげてみよう。

志摩達夫氏の「恋の川霧さん笠」(読切読物誌所載、日本文華社発行)である。題名を読めばわかる通り、やくざ小説である。

「……こう考えながら、板塀にそって人家の方へ歩いていった竜太郎は、ふっと足をとめた。木枯の間をぬってヒィ、ヒィと聞えてくるのは女のしのび泣きであった。

「おや、不思議なこともあるもんだ。この夜更けに女の悲鳴……」

勝手知った家ではあり、あたりに人影もなかったもので、一つこの家の秘密をさぐってやろうと、広々とした庭の小門を押すと戸じまりがして無かったと見えてスルスルと開いた。庭に入って、息を殺して様子うかがってみると、世にも悲痛な女の悲鳴は、片隅にある物置小屋の中から洩れてくる。そっと近寄って、板戸に手をかけてぐい！ と押すと、スルスルとあいた。

「や、やっ！ 女が……」

中をのぞくと、正面の柱に一人の女がしばりつけられている。友禪縮緬の長襦袢をたった一枚きいたつきり。立て膝の上に顔を押しつけて、ヒィヒィと泣いているのだ。緋鹿の子が闇の中にコラ／＼とゆれ島田の髷の根が抜けてガックリとくずれ、頬から耳のあたりは雪を敷くばかりの白さ。美しい横顔がちらりとみえる。

「もしや……」

竜太郎が、つか／＼と中に入ると、人が這入ってきた気配を知ってか、女はスツと頭を上げて、こちらを向いたが、ゾツとするほどの美しい女、年の頃は十八、九、くつきりと色が白く、眼鼻だちの整った、何ともいえない器量よし、縄目がきゅつと柔肌に食い入って、その痛々しいこと！ 女が美しいだけに、えも云われぬ凄絶さだ。……」

えも言われぬ凄絶さだ、と作者はかいているが、通りいっぺんの浅い描写では読者にはたいしたイメージも湧かない。作者が観念だけで凄んでいる、こういう結果になる。然しこの小説も、縛られた女を発見するまでの筆の運びが多分に映画なので、作者の力足らずとも、読者が勝手に映画的イメージを豊富にして楽しむ効果が期せずして現れている。その意味で面白い。

こうして種々の小説の責め場面を調べてみると、どうも作品の質と、責めシーンの質とは正比例するようである。作品がすぐれている時は責め場もそれ相応の工夫と力がこめられている。

各作家諸先生方も、御自分の作品が、奇譚クラブに於て、こういう角度から批評されているとは夢にも思ふまい。然し、この批評もそれ程、的を外れていない積りである。知らぬ顔で、奇クを一冊、諸先生方に贈呈したら、今度は先生方も、うっかりいかげんに責め場をかけなくなるだろう。



私のイメージ

若衆歌舞伎復興

小竹紀夫

乱歩のパノラマ島綺譚の主人公のように千萬金を意の儘に蕩尽して地上にアブのエルドラドを実現する豪華さには及びもつかぬにしても、私は私なりに愛着絶ち難い一つの幻のプランを持っている。もしアブ的な感情を抜くとこのプランはイメージの域を脱して大いに実現性を帯びて来る。一つの企業としても大いに有望ではないかと思えるのである。或いはひよっとすると、既に誰かがその実現を企図しているかも知れないような気がする。

それとは即ち劇団「少年歌舞伎」創設！例の市川少女歌舞伎が近頃大した評判で遂に本場の檜舞台にまで進出してヤンヤの喝采を受

けているのを見るにつけ、私は内心大いに不満を感じずには居られないのである。思うにこれよりずっと由緒もあり歌舞伎本来の姿にも適った魅力百パーセントの若衆歌舞伎が何故忘れられているのであろうかと思うと甚だ心外に堪えぬ次第である。

世は、ティーンエイジャー時代を謳っている一方、クラシックへの郷愁は深まりつつある、梅桜艶を競う美少年達が目も緩に舞い演じる妖しきまでのエロチシズムは必ずや世の人々の心を惹きつけずには置かないだろう。

少女歌舞伎なるものは、結局レビウウの分野であって少女の容姿や声音からは決して彫りのある艶めかしい陰影は出ない。食い入る

ような悩ましさを感じられない。且って我々の祖先はこの世にも優艶な若衆歌舞伎に心魂を奪われ現つを抜かした。その美に溺れて世界史上にも稀な衆道の黄金時代を現出した。私はその時代に生を享けなかったことを最大の恨事とせざるを得ない。

もとより私が億万金を費して独裁する劇団「少年歌舞伎」は世に頹廢の花を咲かせようと企むものではない。「若衆歌舞伎」が滅びたのも彼等が舞台から降りて酒色の席に侍ったことが原因であるからこの弊を除く為には万全の策を樹てねばならない。

「我が劇団「少年歌舞伎」は演技員養成所を創設し、志願に依り十三才以上の少年を選抜入所せしめる。基本訓練期間は二ケ年であるが、深奥なる芸能を修むるには些か短かしの感がするけれども、少年美の盛りは余りにも果敢く短いので、その美を一日も早く舞台に開花させるためには、徒らに本格を指向して貴重な時日を犠牲にするよりも習うより慣れよ式の俊厳な徒弟制度を採用し思い切った手段をとることは止むを得ない。演技は至らずとも若衆歌舞伎の本領はその哀艶優美にあるのであるから、努めてそのムードを育成する如く方針をとる。

従って数ヶ月の適性把握期間の後、男役と女形が決定すると、直ちに両者を別々の寄宿

舎に收容し個性に従った訓練を始める。

話が前後するが入所試験に当っては容姿を第一とし、特に身体検査は私自ら医師と共に凡ゆる細部に亘って恰も徴兵検査の如く綿密に実施する。そして得たるデータは何人にも渡すことなく手許に保管し独裁者たる私の或る特権行為の参考に資するのであるが、その詳細は言明を憚らねばならぬ。

さて組分けの後であるが、特に女形組は徹底した育成方針をとる。

所内に於ける服装は入念にデザインさせた柔和な中性的和服とし、下着も純日本趣味の色物を用いパンティを禁じホーズを着用せしむる他、入浴便所等も女性用にしたらえ、夜具等にも派手やかな色彩を用いる。呼名は全部女性名に改め、特に所内に於ける日常会話に男らしさの出る毎に懲戒を加える。基本科目の外、茶の湯、生花、裁縫、炊事等一通り花嫁修業を施す。

丸坊主の少年達が見る見るなやかな乙女に変貌してゆく造化過程の楽しさは、得も言えぬ満足を私にもたらさう。又女性ホルモンの効用も興味ある結果を示すものと思われ。

一方男役と雖も育成期間中はなるべく外部との接触を避け、独自の歌舞伎的雰囲気の中で訓練する。和服、角帯、勿論シャツ猿又等

の着用を禁じ襦袢、六尺褌を用いさせる。舞踊の稽古に際しては寒中と雖も湯文字下帯のみの姿で激しい精進を強制する。体罰も或る程度は黙認するが少年の事故、冷水浴、緊縛臀部折檻、股ぐり位の所に止める。基本科二年を修了すると更に一年の研究科に進み舞台出演に依って演技の仕上げをする。この期間に入ると共に男役組と女形組の別居を解き新しく研究生寄宿舎に同居せしめる。その事によって必然的に起る恋愛関係は努めて之を好意的に黙認し、むしろこれによって演技上のエロチシズムに肉付けをさせる。但し局外者との関係は厳に戒め、もし犯す者あれば如何に重要なスターと雖も即時追放する。其他如何なるヒイキ筋の招待も之を固辞するは勿論、特に花柳界との腐れ縁を作らぬよう清節を保つ。要するにスキヤンタルの種となる懼れのある因子はすべて之を退け、如何なる方面からも指弾されることなき「神聖童貞王国」のプライドを堅持する。その為には誘惑に対する抵抗力を強化する必要があるから、先ず団員の物質的安定のため経営上の利益は挙げて悉く公平に配分する。私は劇団より一銭の利潤も期待せずともよい身分であるから、私の報酬は金銭に計り難い無形の悦楽に依って完全に充たされる。更に内部的結合を一層強固にするため、フリーメーソンの徹

底秘密盟約下に研究科を卒業したものの間に結婚を認める。これは勿論同性結婚即ち男役と女形のそれである。結婚式は私が主宰し全団員列席の面前で厳肅に古式に取り行われる。新郎新婦？は一週間のハネムーンを私からプレゼントされる。

更に一步を進めてジイド・コクトオ・ジュネ等々その道に理解ある有名人を招聘して協賛を獲得し、全世界に紹介宣伝の網を張り巡らして後、愈々海外公演に乗り出し世界に比なき我が「若衆」と「女形」の神秘的な美しさをカブキを通じて凡ゆる国々の人々の胸裡に灼きつける。

私の権威は至高のものとなり劇団員の敬愛は愈々深まり花の如き少年達は私を取り囲み競って寵を争うだろう。

私は彼等の打ち戯れる楽屋風呂へでも何の遠慮もなく入って行く。忽ち彼等は争って私の手を取り足を取り全身をシャボンの泡に包んで喜々とかしづくだろう。又ある時は青眉お歯黒紅だすきの若女房に飯の給仕をさせよう。大振袖の前髪色小姓に足腰を揉ませよう、きらびやかな打ちかけ姿のろうたけたる姫御前に点前を所望しよう。更に興至れば白無垢の寵童に双肌脱がせて切腹を命じよう。わがイメージはとめどなく。

四、奈子の刺青

自己愛というものには、別にお相手がいら
ないだけに、一度この世界に溺れますと、ま
るで、底なしの沼にでもおちこんだ様に、ず



奈子の自己愛について

(二)

門 田 奈 子

るずると果しなく、深みにはまってしまうの
です。

奈子も、幼いころは、ただ、何となく自分
を美しいと思い、その肉体——、日ましにい
るづいて丸味をおびてゆく自分の肉体に、夢

の様な憧れを抱いていただけだったのです。
けれど、女学校三年生の夏、ほんの一寸した
機会に、その内部に深く秘められていた女の
感覚を知ってからというもの、まるで餓え
た小羊の様に、何の節操もないアブの遍歴者
となってしまうました。

恋も、愛も、女としての幸福のすべてに背
を向けて、たった一人、自分のお部屋にとじ
こもり鏡に向ってうづくまっている奈子の姿
を、皆様はどうお思いになるでしょうか。き
っと、それは馬鹿馬鹿しい位、滑稽な、人生
の道化者であるにちがいありません。

そして、鏡にうつる自分の身体が、美しい
ものであればあるほど、身をやく様な嫉妬の
炎と、狂おしいばかりの愛着の情のために、
奈子はわれとわが身を、責め虐まずにはいら
れなかったのです。

自分自身の身体ですから、奈子は、何の遠
慮も気兼ねもなく責めて、その極限まで、恐
ろしい自虐の快感に酔うことが出来ます。し
かも、日をおってその限界は次第に先へ先へ
と進んでいくらしい。奈子は、その事にはつ
きりと気がついた時、まるで悪寒の様な、恐
怖とも快感ともつかない気持が、全身を駆け
まわるのを、どうすることも出来ませんでした。

奈子が、いつも用いている方法は、決して
瞬間的な苦痛といえる種類のものではありません。

せん。もつと、じめじめとしたしびれる様な長く激しい痛さに、限らない魅力を感じるのです。

クリップを、乳首に噛みつかせたままやすもうとして、一晩中、お床の中で転転と悶え苦しんだり、冷たいアイロンを腹部の素肌におしあてて、その部分が真赤になるまで熱してみたり、それは、何という孤独で陰惨な責め苦だったことでしょう。

もうこれでもうにも我慢出来ない悲鳴をあげて、苦痛からのがれ出そうという気持と、なにくそ、もうすこし、もうすこし……とそれを続けようとする気持とが、高く張りわたされた一本の細い綱の上で、ギリギリの争いを続けているのです。そして、もしその微妙なバランスが、一寸でも狂ったとしたなら、考えるだけでも恐ろしいことでもが、奈子はまっさかさまに谷底まで転落してしまうことでしょう。その結果、死んでしまうのか、気が狂ってしまうのかなどということは、自分にもよくわからないのですけれども。

もし、自分の意志の力だけで、呼吸をとめてそのまま自殺してしまうという方法が可能であるとしたなら、奈子にはきつと、それが実現出来るのではないかと思ひます。

奈子が時時（毎日ではとても耐えきれませんので、一月に二回くらい——）自分のお部屋で実行している刺青の責めにしても、決して

てこの例外ではありません。

奇譚クラブの誌上には、あまり数多く掲載されませんでしたけれど、刺青に憧れる心理というものは、多かれ少かれきつと誰方にもあるのではないのでしょうか。刺青は、自分自身の肉体を対象とするものであるだけに、そして他のことと違って何回でも出来るというものではないだけに、一部の方々の間では深く愛されながらも、自然孤立して、独自の世界に閉じこめられているのではないかと思ひます。

でも、東京には彫友会という立派な同好会もある様ですし、陣出達朗先生の小説には、必らずと言っても良い程、刺青が出てまいります。そして、高木彬光先生の「刺青殺人事件」は、これを専門に取扱った変態的な探偵小説です。

奈子は、大きく言って、刺青には二つの感覚が含まれていると思ひます。ひとつは、自分を飾り、誇示したいという端的な自己愛の原始的表現、もうひとつは、それに伴っておこる激しい苦痛への憧れです。特に男性の場合には前者、女性の場合には後者が、それぞれ大きな意味をもっているのではないでしようか。

奈子のお化粧も、考え方によっては、刺青願望の変型であると言えないことはありませんが、これには又別の目的も意味もあります

ので、そうとばかり断定するわけにはまいりません。

勿論、実際に自分の身体に刺青するなどということは、奈子には思いもよりませんが、ただ何となく、そうしたものに漠然とした期待を持っていることだけは確かです。

幸い、奈子は割と想像力が発達しておりまして、肉体的にそれに近い苦痛を与えながら、心の中では、刺青をされている自分の姿をありありと想ひ浮かべる事が出来ます。つまり、第一の奈子が、幻想の世界ではもう一人の奈子のまっ白い背一杯に、豪華な八重桜の咲き乱れる平安朝の絵巻物を彫りあげてくれるのです。

その時、奈子は自分のお部屋の電灯を、まっくらに消してしまひます。窓には厚いカーテンをおろし、文字通りほんのわずかな光もしのびこんで来ないようにして、衣類をとり横になります。この場合、冬でも電気ストーブは、微かな光の源となりますので利用することは出来ません。奈子はいつも洋装ですが、この時だけは和服に赤いお腰をつける様にしております。

闇の中で、うつすらと眼を開きますと、もう一人の奈子が背中を向けて座っている姿がぼんやりと見えるのです。その、理想化された奈子は、本当に淡く、美しく、悲しく、現実の奈子の胸に迫ってまいります。

そして、奈子は手さぐりで細い絹針を、軽く自分の肌にさしこむのですけれど、その部分は、ある時は二の腕であったり、ある時は腹部、大腿部、乳房などであったりして、一定してはおりませんでした。でもやはり肉が柔かく、皮膚のうすい部分に限られている様です。流石に顔や乳首、そして奈子の女である個所には、あまりにも自分が可哀想で、まだ一度も、針をさしこんだ経験はありません。

さしこむといっても、手品ではありませんから、ほんのすこし、チクッと身体に鋭い痛みがつきぬける程度に突くのです。

チク、チク、チク、と一秒くらいの間を置いて、一センチ四方程の場所に、何回も何回も針をつきたてておきますと、次第に足の方から神経がマヒして来ます。不思議なことですけれど、どの部分を突いても、足の爪先から感覚が失われてゆくのです。

針を持った手は、ほとんど無意識に動きつづけ、顔が火照って、奈子は唇を噛みしめて耐えようとするのですけれど、自然に声ももれてしまいます。もうそうになると、もう一人の奈子の幻は、完全に消えてしまつて、頭の



中には、ただ強烈な麻薬にあった時の様な陶酔が、激しく渦巻いているだけのようです。

そして、しばらくして膝頭がガタガタとふるえはじめ、針をさす指先が思う様に動かなくなつてまいりますと、もうそろそろやめないと危険なのです。そのまま我慢して続けたために、われ知らず針を深く肉の中に突きたてて、えぐる様にしてしまった事も何回かありました。

それは、苦痛というよりも、背筋がムズムズと動き出す様な息苦しさです。はじめの数分間は、痛さの方が先にたつて、馴れない間

はここであきらめてしまうことが多かったのですけれど、その峠をこえてしまうと、恐ろしいばかりの悦虐の花園に到達することが出来ます。

終つてから後、しばらくは身動きも出来ない様な疲労を感じますが、傷そのものはそうひどいものではありません。朝、起きてから見ますと、その部分がさくら色に熱をもって、丁度強いキス・マークの跡の様に、ひどく突きすぎた部分が小さな赤い斑点になっています。そして、そのあとも、一週間位するとうすい皮膚が自然にはげて、

とれてしまいます。

でも、こうした方法は、奈子の様に自分で自分を責める場合にのみ、可能なのかもしれません。相対的な、すくなくともある程度の暴力や、それに応じたポーズを必要とする遊戯には耐えきれぬ刺戟であるかどうか、その上、すこしでも明るいと、本能的にその部分に視線がいつてしまいますので、とても続けられるものではないのです。

こうして、奈子は自分の美しい肉体を限りなく讚美しながら、現実には美的な感覚とはほど遠い陰惨でやけただれる様な悦虐の世界

に自分を追いやってしまうのです。

そして、もう一人の奈子が、丁度荒れ狂う台風を中心にある眼の様に、この奈子の姿態を観察し、快哉を叫んでいるのです。何という矛盾に満ちた感情の対立でしょう。或はこれが、自己愛という性格に負わされている本質的な宿命なのかもしれません。

奈子が、自分の性格に、極端な嫌汚を感じるのは、こんなことのあった翌朝です。自分というものをこの世界から完全に消してしまいたくなる様な、まるで救いのない気持ですけれど、こんなことばかりでは、精神的に本当に参ってしまいます。奈子には、やはり奈子だけが知る秘密の楽しみもあるのだということも知っていたかなければなりません。

加害者としての奈子は、ふしだらで、何の反省も自律心も持ち合わせのない女ですけれど、もうひとりの、いつも犠牲になっている方の奈子は、本当はとても内気で貞淑な娘です。

どうしても、前者の方がより強烈で刺戟的になりがちですけれど、奈子の自己愛の本当のすがたは、やはり後者の方により強くあらわれているのだということを、どうぞお忘れにならないで下さいませ。

五、奈子の下ばき

奈子が、自分のつける下着類について、と

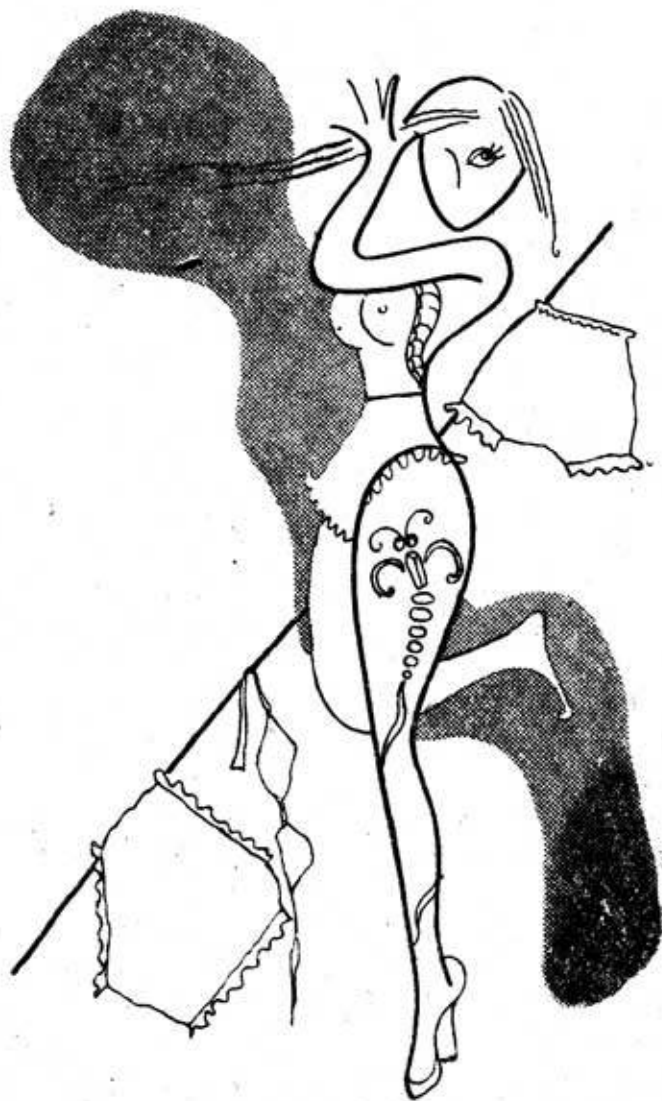
ても気をつかっているということは、前にもお話いたしました。

それは、ほとんど毎日、おそくとも二日目の朝には、はきかえる様に気をつけておりますが、何かの拍子で、それに一寸した汚点でもついていたりすると、奈子は本当に一人で顔が真赤になるくらい、はずかしい思いをしなければなりません。

それほど、もう一人の奈子は純情で初心なのです。まるで、自分の恋人にそれを覗き見られてもしたかの様に、奈子は消え入りたい程の気持で、オロオロと洗濯物の一番下の下に、それをかくしてしまいます。

丁度、女として成熟したばかりの、あどけない少女の心理に似ているのかもしれませんが、それよりも、もっと大きな理由は、嫌な言い方ですけれど、やはり、自分自身に首ったけに惚れているからではないかと思うのです。

でも、女の身体ですから、どうしても多少の汚れはありがちなことですから、そんな



時、奈子はそれに気がつく、すぐに新らしいものとかえてしまわなければ、どうしても気持が落着きません。愛する自分の身体が汚れているということは、それだけでも耐えきれない程の嫌汚を感じるからです。そのために、奈子は身体不相応に三十枚以上のパンツや、そのほか、数多くの下着類を持っております。

芳野眉美様をはじめ、フェチシストの皆様方は、何となく複雑な、奇妙なお気持ちになれることでしょうけれど、こればかりはどうすることも出来ません。

一番困るのは、こうしたものを干す場所についてです。あまり無精をして、たくさんたまったのを、ブラリと陳列するわけにもゆき

ませんし、そうかといって、毎日毎日、同じ様なものばかりをかけておくことも、何となくはずかしいのです。それ故、近頃では、一回おきくらいに、一寸つまみ洗いだけして、アイロンをあてて乾かしてしまう様にしておきます。

それとは別のお話ですけど、奈子は、時には自分の汚れものに対して、衝動的に激しい愛着を感じることもあります。

丁度、母親が、赤ちやんのおむつの世話を、何とも思わずにしてあげるのと同じ様な気持で、自分で自分に「まあまあしようがないのね。チャンときれいにしてあげるから、こちらを向いてごらんさい」などといぶやきながら、一寸その下着に頬ずりして見る様なことがあります。それは決して不純、と云うことは失礼ですけど、性欲的な気持からではないのです。赤ちやんのホッペタに、キッスしてあげる様なものなのです。

奈子には、一度も経験はありませんけれど、良人の脱ぎすてたYシャツを、そっと抱きしめて頬ずりする新妻の心理を、奈子は自己愛の世界を通して理解することが出来る様な気がいたします。

奈子が、自分の下ばきにときも神経質なのは、決してそれが汚いからというわけではないのです。汚いどころか、ある種の魅力さえ感ずることが出来ます。それはきつと、自分

の良人のYシャツや下ばきを、いつもまっしるで清潔なものにしておいてやりたいと思う新妻のやさしいところ使いと、すこしも違わないのだと、奈子は自分で信じているのです。

それから奈子は、三十枚のパンツやズロース、そのほかの下着類とは別に、何枚かのお部屋着、つまり二人の奈子のための衣裳を持つております。奇譚クラブのモデルさんたちがつけている衣裳は、ほとんど萩千恵子さんがお作りになったものだと思えますけれど、奈子は洋裁師という職業がら（といつてはあまり大袈裟ですが——）毎号とても興味をもつて拝見しておりました。いつもよく出来ていて、一度千恵子さんとうとうした衣裳についてのデザインの交歓をして見たいなどという夢を描いて見たこともあったのです。

勿論、あれは公開のものですから、そう極端なものとは出来ないと云いますけれど、奈子は、別にそうした制約をうける必要はありませんでしたので、思う存分、自分の好きな衣裳を作り出すことが出来ました。例えば、黒の別珍を便つて、乳房と腰部だけを露出させたストラックスとブラウスのコンビだとか、同じスタイルで、身体の左半分だけを覆い、あとは細いベルトでしめただけの奇妙な道化服だとか、詳しい説明はさしひかえますが人が見たら一体これは何かしらと思われる様な、

変ったかたちの責め衣の様なものに至るまで、奈子はいろいろとこしらえては、そっと一人で楽しんでいたのです。

それらの下着や、お部屋着などのすべてには、いつもやわらかな感じの香水が含ませてあります。奈子の、ロマンチックなその時時に応じた体臭は、ほとんどが皆、こうした下着類の間から、そこはかとなく発散されてくるものなのです。

三日に一度か二日に一度くらい、奈子が自分で気に入っているお部屋着をつけて鏡の前に立つと、そこには、すこしばかりの夢と、小悪魔的な魅惑とを持った別の奈子が出現します。すると、忽ちもう一人の奈子が身体の中で暴れ出し、内気で純情な第一の奈子は、恐ろしい蜘蛛の毒氣にあてられた胡蝶のように、泥沼の様な自己愛の情欲の世界にひきづりこまれてしまうのです。

どんなに嫌だともがいても、助けてくれと叫んでも、身体が言うことを聞いてはくれません。

いいえ、もしかしたら、こんなものを一生懸命になってこしらえている第一の奈子の心にも、それを待ち望んでいる気持が、絶対にはいと言いきることは、出来ないのかもしれない。

六、奈子の同性愛

奈子が、自分自身を愛することだけしか出来ない女であるということは、今迄に何回もお話いたしました通りですので、最後に、奈子のお友達のことについて、お話しておきたいと思います。

その方は、奈子よりひとつ年が上なのですけれど、男性にはどうしても愛情を抱くことの出来ない性格を持っていらっしやいます。奈子も、お写真以外には、一度もその方にお逢いしたことはありません。文通だけの交際が、もう一年半も続いているのです。

その方は、奈子を心の底から愛していて下さいます。はじめは、本当に偶然の機会でおたよりをいただいたのですけれど、その時、奈子は全身がしびれる様な不思議な快感に、思わずうしろをふりかえって見た程でした。変なたとえかたですけれど、同性愛のおたよりが、どの様なものであるかを御存知の方には、きっとその時の奈子の気持を理解していただくことが出来ると思います。

それからというものは、まるで熱病の様なおたよりが、何回、何十回となく、二人の間を往復いたしました。そのたびに、奈子に対するその方の愛情は、おそろしい勢いで広まってゆき、おたよりの中に封じこめられたひしひしと胸をしめつけられる様な激しい情熱に、奈子は幾度も圧倒されそうになりながら、夜おそくまでかかって、便箋に十枚、十

五枚と愛の言葉を書きつらねては、お返事を送りつけてきたのです。

それは、ある時には、夢見る様な愛の讃歌であり、またある時には、怒濤の様な情熱の奔流でもありました。今迄に、その方からいただいたおたよりは、すでに便箋を一枚一枚平にして、およそ

十五センチ程の厚みに達しております。

そして、奈子がお送りしたお返事の量も、決してそれより少くはない筈です。

でも、奈子は、真夜中にふと眼を醒した時など、わずかな理性をとり戻して、そのおたよりを読み返して見る必要があります。そして、便箋の一枚一枚にこめられているその方の愛の真実にふれるとき、奈子は本当に身をきられる様な自責の念と、うつろな心の孤独に虐まれて、思わず夢中で夜具の端にしがみつき、身もだえしながらひそかにおえつしなければなりません。

奈子は、自分自身を愛することだけしか出



来ない女なのです。

奈子は、その方に対しても、やはりこの性格をひたかくしにかくしてまいりました。そして、表面では、立派に一人前のレスピアンになりすましているのです。

奈子が今日まで書きつづけてまた百数十通に及ぶ愛のおたよりは、すべて自分自身に向けて送られていたものにすぎません。その方は、本当はもう一人の奈子のまぼろしにすぎなかったのですから――

これ以上恐ろしい背信行為がまたとありませんか。

奈子は、その方のお名前を借りて、もう一

人の奈子に、切切とした恋情を書き送りま
す。すると、遠い彼方から、まるでこだまの
様に、前にもまして激しく甘い愛のささやき
がかえってくる。その中世紀的な、優美な文
章は、現実の奈子を有頂天にさせ、やがて美
しい自己愛の花園に誘惑してくれるのです。

こうして、二人の奈子は、すばらしい秘密
の楽園をきずきあげてまいりました。自己愛
をもつものにとって、最も焦らだたしいこと
は、その恋愛、つまり二人の奈子の交遊が、
あまりにも具体的で、必然性に富みすぎてい
るということです。自分自身が相手なのです
から、その肉体も感情も、自分の意志の通り
にたやすく動いてはくれますが、それがかえ
って美しい夢を失わせ、かさかさの現実をし
どけなく露出してしまふ結果になるのです。

奈子のこの方法は、こうしたやるせない不
満を、一挙に解決してくれました。もう一人
の奈子が示す精神的な反能は、現実の奈子に
はその瞬間まで全くわからないのです。

まっ白な、分厚い封筒をきる奈子の右手
は、そのたびにわくわくとこみあげてくる不
倫な期待に、何度ふるえたことだったでしよ
う。高雅な貴婦人の様な、そして執念の蛇の
様なそのおたよりを読んでみると、奈子の心
の中には、もう一人の奈子の妖精の様な微笑
が、ありありとよみがえってくるではありま
せんか。

奈子は、今日までその方の生き血をすすつ
て生きて来た悪魔の様な女なのかもしれませ
ん。でも、いつわりのない人のまごころを踏
みにじることは恐ろしい。奈子は、とうとう
耐えきれなくなってしまうたのです。

このころの片隅に、ほんのすこしばかり残っ
ている小さな良心の絶え間ない叫び声と、真
ごころからの瀆罪の念に責められながら、奈
子は今ペンを握っております。

どんなに苦しくても、はずかしくても、そ
して又、皆様方からどの様にさげすまれまし
ようとも、奈子はこの手記を書き了えてしま
う決心です。

この機会をのがしたら、奈子はもう永久
に、二度と真実を告白することは出来ないで
しょうから――。

門田奈子は本名です。その方は奇譚クラブ
の読者ではありませんけれど、でもその資格
は十分に持っている方なのですから、何かの
機会にこの奈子の手記をお読みになることが
あったとしたら、それは恐ろしいことではあ
りませんけれど、それでもその方はきっと奈子
を許して下さることと信じております。

はじめの間は、ただまぼろしの身代りにす
ぎなかつたその方の影が、近頃では、次第次
第に奈子の胸の中ではつきりと大きくなって
来た様です。そして、時時は、第二の奈子は
本当にその方の心にのりうつってしまったとい

るのではないかとさえ思われることがあるの
です。

もし、自己愛という泥沼の底から、奈子を
救い出して下さる方があるとするなら、やは
りその方以外には考えることが出来ません。
たとえそれがレスボスという歪められた形の
愛情であつたとしても、その時こそ奈子は、
その方の胸の中に一直線にとびこんでゆける
のではないのでしょうか。

実を言うと、奈子は今までに何回となく、
その方の前に奈子の秘密を打ち明けてしまお
うと考えたことがあります。でも、それは恐
ろしくて、どうしても勇気を出すことが出来
ませんでした。それで、奈子は、その方がい
つかはきつと、奇譚クラブを読んで下さるこ
とがあるかもしれないという、儚い祈りをこ
めて、この手記を書いていくのです。

でも、奈子には、ここに真実があるという
ことを、自分の方からその方にお知らせする
決心は、とても出来そうにありません。

あとはただ、あくまで偶然の……、神さま
の思し召しを待つより他にはとるすべもない
……。それが悲しい人のさだめというものな
のでしよう。

― 次号 ―

「奈子のA感覚について」

幽 囚 十 ケ 月

春 田 一 郎

戦後の刑務所内の囚人の生活を、これほどまでリアルに描き出した文章をまだ他に知らない。誇張も作為も、いささかも含まないこの一文は、文献としても、極めて高い価値を持つていることを信じて疑わない。

一 舎

十月の半ばには今迄病舎担当であった鈴川看守は耕運に転属し、その後任として耕運の担当であった紀中看守が病舎担当となった。

現在の病舎を改造して、二階建のものにすることは以前から準備が進められていたが、愈々十一月から着工の運びとなり、先ず平病舎から工事が始められることになった。隔離病舎は第二期工事となったため、平病舎の患者と看病夫の大部分は一舎に引越すこととなったのであるが、隔離病舎と工事中の平病舎との間に板仕切を作り、隔離病舎専属の看病夫として、下田君と久美さんとが残ることとなった。二人は隔離病舎の一房に起居して患者

の世話をするのである。十月の末、私達は患者を連れて、一舎へ引移った。患者は一舎の十四房から二十五房までに夫々配置して、在来から一舎休養となつてゐる患者に仲間入りをさせ、看病夫は二十六、七房に分れて移った。

この移転は一舎の中に病舎と云う独立したものを作るのはなくして、一舎と云う舎房に病舎の改築が出来上る迄、看病夫と患者とが暫時、居候をする訳であつた。だから一舎に在る限りは一舎担当の坂川看守の監督を受け、一舎の用務者である和内さんや衛生夫の川辺さんの世話になる訳であつた。従つて、病舎に於て看病夫がやっていた患者への配食は一舎の用務者達の仕事で、看病夫は新しく

入つたものが、配食と朝の掃除に二、三名手伝うだけであるから、看病夫としては非常に楽になつた。併し、よいことばかりでなく、病舎と違つて、毎日清掃検査があるので、今迄の様にふとんをいい加減な積み様をして置く訳に行かず、実に久し振で布団のはしを揃えて床にあん巻でこすらねばならぬ仕儀となつたのであつた。看病夫は清掃が下手であつたから、私達の房で一ヶ月に「優」を貰う日は数える程しかなく、大抵の日は「良」であつた。食事も久し振に配食して貰つて食べるので、今迄の様に勝手な食べ方は出来なかつたが、据膳で食べることが出来ておいしかった。

一舎での生活は朝食、掃除、出役、帰房、

夕食と工場への出役と大差ないものであったが、工場では三食とも工場で食べるに對し、私達は三食とも房で摂った。工場への出役は朝早い、私達は佐藤部長の迎え迄、房に居るので毎朝八時頃であった。更に私達看病夫が公に検身を免ぜられていた訳ではないが、事実上検身は行われなかった。工場の生活に於ては房に机を持っていることなど、特に許された一級以外は反則なのであるが看病夫は仕事上机を持たないわけには行かなかった。確かに看病夫は優遇されていたのである。この様に取扱を寛大にされていても、早野君が去ったあとは非常に看病夫の質がよく、問題になる様な原則は全然起らなかった。尤も看病夫なるが故に反則していても分らなかった点もあった。例えば塩を房へ持ち込めば勿論反則であるが、之を小瓶に入れて「ナトリウム・クロラツーム」とレツテルを貼って置けば全然問題にならなかったが如きである。

一舎の用務者和内さんは年は左程でもないのに頭の禿げた温厚な一級受刑者であった。衛生夫の川辺さんは前科七、八犯の遊び人で、半身見事な刺青をした、一寸見ると凄いやうだが、根は頗るの好人物であった。使役として働いている玉さんは朝鮮の生れで背が高く身体は大きい、丸顔のあどけなさの残っている可愛らしい少年であった。この玉さんは二、三ヶ月前、十二指腸虫で暫らく病舎に入

っていたので、私達とも顔馴染であった。彼は十九才であったが、刑名は強盜殺人で十二年の懲役であったから、仮釈放に浴するとしても、出所する頃は最早三十才近くになり、青春を刑務所の中で過してしまふ訳で、第三者から見るとあわれな気がするのであるが、本人の玉さんは一向平気で、無邪気に朗らかに騒ぎ廻っていた。受刑者が日の早く経つのを希う気持は切実なもので、自分の刑期に合せたカレンダーを作つて壁に貼り付け、刑期の三分の一は何月何日、従つて仮釈放になる見当はいつ頃と曆に印を付け、毎日々々経過して行く日付に斜線を引いて消して行き、あと何百日だと数えて楽しむのが普通であるが玉さんは、こんなことには一向無頓着であった。房には官から支給せられた一ヶ年分を一杯に印刷したカレンダーが貼つてあるが、私達が玉さんをからかつて

「玉さん。いつまで刑務所にいるのだ」と云うと、玉さんは一年分のカレンダーを指さして、

「あれもう十枚済んだら出られる。今から出ること考えたか仕方がない」

と答えて笑うのだった。月めくりのカレンダー十枚でも、普通は長く／＼思われる受刑生活なのに、玉さんは年めくりの。カレンダーが十枚分も刑務所生活が続くのである。従つて彼の犯罪も、やった事実は強盜殺人と云う

兇悪犯中の最たるものであるが、その犯行の経過は玉さんの口から聞けば吹き出さずにはいられない間の抜けたユーモラスなものであった。彼はこの犯罪を犯す迄に窃盜も折々やつて居り、自分が盗んで置き乍ら、被害者の家で騒ぎ出すと、のっそりとそこへ入つて行つて、

「どうしたんです。何？泥棒だつて？それは大變だ。私が交番へ届けて上げましょう」

と云う工合に、図々しいと云うか、のんきと云うか、けた外れのやり方をやるので却つて怪しまれることがなく、無事に過して来たのだそうである。

玉さんは自宅の近所に一人暮らしをしている老婆が小金を貯めていることを知つて、之を盗もうとねらつていたのであるが、自分が日頃可愛がつて貰つて居る老婆のこととて、却つて盗む機会は仲々見付からなかった。そこで、彼は遂にその老婆を殺して金を奪う決心をした。彼は何かよい方法を考えていたのであるが、彼が思い付いた方法と云うのは、何とその老婆の上に石を落して殺そうと云うのであった。老婆の家の入口にはひさしがあつた。玉さんの計画に依ると、玉さんが漬物石を抱いてこのひさしの上に登り、

「今晚は、今晚は」と家の中へ声をかける。するとこの声に老婆は入口の戸を開ける。誰もいないので不思議に思つて一歩外に出る。

その瞬間、玉さんはひさしの端に置いた石を落す。石はきよ／＼と姿のない訪問者に氣を取られてゐる老婆の頭上に真向から落下し、老婆は声も立てず、クタ／＼とへたばつてしまう。石を落した瞬間、玉さんはひさしにかくれるから誰が石を落したか分らない。そこで、玉さんはひさしを降り、家に入って悠々と金を取って引上げる、と云うまるでねずみを殺す様な計画を立てたのであった。玉さんにとっては誠に残念乍ら、この「緻密な」計画はその第一歩に於て挫折してしまつたのであった。玉さんは或晩、重い漬物石を抱えてやつとのことでひさしに登つた。計画通りである。そして玉さんは家の中へ向つて「今晚は、今晚は」と声を掛けた。正に計画通りである。ここ迄は万事計画通りだったのであるが、そのあとがいけなかった。玉さんの失敗の原因は体重十八貫の玉さんが十貫に余る石を抱えて、弱いひさしの上に登つた時、「ミシ／＼」と音を立てるものと云うことを計算に入れなかつたのが第一である。第二に、「今晚は、今晚は」と声を掛けた時、老婆が入口を開けて誰もいないのを訝つて、一步外へ出て、丁度漬物石の真下に立つてきよ／＼してくれなければ石を落しても何にもならないと云うことを計算に入れなかつたことであつた。玉さんの「今晚は、今晚は」と云う声に老婆が戸をあけて確に外へ出て来

たのだが、それは漬物石の待つてゐる玄関の戸ではなく、二間程向うの勝手口の切戸であつた。その老婆は訪れる声と共に玄関のひさがみし／＼と大きな音を立てたので、驚いて勝手口から顔を出したのだつた。勝手口から玄関のひさしの上は丸見えであつた。玉さんは老婆が勝手口から出て来たとは氣が付かず、ひさしから首だけ出して玄関の戸を逆さまにのぞき込み乍ら、相変らず「今晚は、今晚は」を繰返してゐたのである。

「玉さんじゃないか、そんな所に上つて何をしているのだい」

と云う老婆の一言は玉さんの全計画に止めを刺すに充分であつた。そこで玉さんは計画を変更して、数日後老婆の家へ強引に押し入り、老婆を両手で絞殺し、六万円の現金を奪い取つたのであつた。誠にアプレ少年が僅かな金のために人命を犠牲にするのを茶飯事と心得てゐるのは恐るべきことであるが、流石に良心の苛責はあるのか、入所早々には玉さんは「ばゞが来る。ばゞが来る」と云つて毎夜、苦しんだとのことである。

玉さんの様に常任の使役ではなかつたが、折々掃除や配食を手伝つてゐた徳川と云う青年があつた。正規の学問としては小学校を出ただけであつたが、読書、それもむづかしい哲学書を読むのが好きであつた。彼に読んで分る筈はないのであるが、難解な文章と取組

んで、哲学を研究していると云う自己陶醉にひたるのが好きなのであつた。勿論、哲学と云つても無茶苦茶で、カント、ヘーゲル、西田と名前をならべてゐる間は無事なのであるが、

「アインシュタインの万物流転の法則」「ゲーテの純粹理性批判」「メンデルの人口論」「カールライルの進化論」が論ぜられるようになるとういけないのである。

徳川君は何かの機みに、M副看守長を非常に恨み、ナイフを持ってM副看守長を追いかけて三舎に放り込まれたことがあり、所長に面接願を出して、面接を許されるや、開口一番

「所長さん。あなたの御寿命はもうあと四年です。と申しますのは、四年たちますと私は満期になります。満期で刑務所を出て、先ず何よりも先にやらなければならぬのは、ズブリと所長さん、あなたを殺すことです。殺し手である私自身が所長さんの御寿命はあと四年だと申上げるのですから、之程確実な予言はございますまい」

とやつたそうである。之で再び三舎に入つた。三舎で或る朝、彼が「担当さん」と呼ぶので、看守が行つてみると

「ゆうべはしと／＼と雨が降つていたので、いゝお月様でしたね」

といきなり言うので、看守の方でびっくり

してしまった。早速大学病院の専門家が来て、精神鑑定を行ったが、彼は別に精神病と云うのではなく、性格異常と云うことであった。そこで何かやると三舎に入れ、三舎を出ると一舎に預けられるのであった。口ではずいぶん物騒なことを云う割に、彼はさして狂暴性があるとは見えなかった。

歳 の 瀬

十一月上旬、川崎君に司法保護委員の面接があり、同君にも待望の仮釈放が近付いた。仮釈放が近付くと間違があつてはいけないので、本人も自重するし、周囲の者も気をつける。川崎君は最上級の模範囚で、この点心配はないのであるが、それでも一度、川崎君も私もひやりとしたことがあつた。それは十月中のこと、川崎君としては司法保護委員の面接を今日か明日かと待っている大事な時であつた。或日私は外科の医官である岡本先生から「チャタレー夫人の恋人」の日本語訳を拝借した。之を夜読むために房に帰って帰ったのだが、何しろ之はローレンスの問題の本であるから、同じ房の川崎君も読みたがり、私から教えられたメラスとの個所を同君は一心に読みふけていた。まだ一舎へ引移らない病舎の時代のことであり、看病夫が読書をしていても夜勤の看守は普通無関心な態度をとっているのだが、その夜は生憎、病

舎へ初めて夜勤に来たM看守であつた。M看守は川崎君が一心に本を読んでいるのを暫くのぞいていたが、急に声をかけて「その本を一寸見せてごらん」と云つて川崎君から本を取上げた。私も川崎君も真実どきつとした。私達は謝つて本を返して貰おうと努めたが、M看守はその本を取り上げたまま持つて行つてしまつた。さあ事だ、どうなることかと心配したが、看守は其の本を部長に渡し、部長は戒護課長に渡し、戒護課長は翌日本を岡本先生に返し、私達には結局、何の音沙汰もなかった。ほつと胸をなで下したのであつた。

十一月中旬には池上君と平野君に対して、司法保護委員の面接があつた。看病夫の中、三人も仮釈放を目前に控えて、看病夫の空気は何となく慌しかった。池上君に対しては去る八月にも司法保護委員の面接があつたのだが、池上君が反則を全くしない人なのに、一応其の時仮釈放から除外されたのは家庭の環境が悪く、地元の村では余程毛ぎらいされてゐるからしかなかった。インテリ揃いである看病夫の仲間、於て池上君だけ唯一人の例外であつた。電気の技術者と云うのを買われて看病夫になつたのだが、他の看病夫達と何かしっくりしないものがあつた。酒乱癖があり、酒の上の失敗から刑務所へ入れられる破目になつたのであるが、それでも酒に対する未練

は断ち得ないらしく、仮釈放が近付くと、猪口で酒を飲む真似をしては皆を笑わせた。

「刑務所を出たらパリッとした帽子やオーバーを着て、長靴をはき、ジープで、でんと刑務所へ乗り付けるのや。その時はこつてりと甘い羊羹を沢山持つて来て、部長さんに頼んで現像室を借りて、皆にたべさせてやるで」と云うのが池上君の口癖であり、夢であつた。勿論、ジープがでーんと刑務所の正門に横仕けになつたこともなければ、現像室でこつてりした羊かんを御馳走になつたこともなく、出所後の池上君の消息は分らない。

十一月中旬が私の刑期の三分の一に当る。之が過ぎると、何時でも司法保護委員の面接を受ける可能性が生じるのだと思うと、期待と喜びで肩の荷が降りた様な軽い気持ちになると同時に、誰は三分の一から一週間目に面接があつた、誰は三分の一早々に仮釈放になつたと云う様な噂にのみ気を取られて、絶えず何かしら不安な、そわ／＼した気分になるのであつた。三分の一から一ヶ月余で仮釈放になるのが普通であつた。この計算で行くと、私は年の暮には仮釈放になる勘定であつた。それにクリスマス前後には大量の仮釈放が行われるしきたりだと云うことであつたから、年末にはどうしても出所出来ることは確実と思えるのであつた。私は叱責一つ受けたこともなければ、保護関係も先ず申分はないから

或は十一月末にでも、と云う期待に胸が躍るのであった。去る八月、森田、吉田及び金王君達が仮釈放になる前に示した焦燥と不安と期待の入れまざった苦しみは他人事として冷静に傍観することが出来たが、自分自身にその立場が廻って来ると、斯く迄に落付きを失い焦燥に駆られるものかとしみじみ思うのであった。十一月末には川崎君と池上君が喜び勇んで仮釈放になって行った。

十二月になる少し前、隔離病舎付の下田君が私の所へやって来て、今度私が二級になることに申請が通ったから担当さんに礼を云う様耳打ちをしてくれた。当時、看病夫には一級者はなく、青野、下田の両君と久美さんが二級であった。この進級は私にとって全く意外であった。三級から二級になるには早くても一年近くかゝると聞いていたので、九月に三級になったばかりの私が僅か三ヶ月で二級になるなどは夢想もしていなかったのである。併し之は真実で十一月末、私は他の進級者と共に二級への進級を申渡されたのであった。青いジャンパーやガラ紡の派手なズボンを脱ぎ、紺の詰襟の上下を支給せられた。二級以上はズボンにポケットが付くのだった。履物もわら草履からゴム草履に代った。発信と面会は月二回から週一回に増えた。

毎日毎日一舎と病舎とを往復する日が続いた。その間、あの元気な末さんが意外にも肺

が悪いことが分って、今迄患者の世話をしていた立場から、白衣を着て世話を受ける立場になった。末さんの後人には船橋と云う老人が来た。青野君が十二月中旬仮釈放になって、看病夫で二級は久美さん、下田君それに私の三名となり、その中、下田君と久美さんとは隔離病舎付と云う特殊な職場にあって、缶くのものにも食事するのにも寝るのにも一般の看病夫とは全然別であったので、一般の看病夫中では私が首席となった。二舎の新入時代、医務課へ来た頃の新人看病夫時代に較べると、まるで夢の様であった。公には許されぬことであるが、小村先生の不在中は簡単な処方なら調剤も出来、ガーゼ、脱脂綿などの衛生材料や結核患者に支給する砂糖なども単独で保管し払出しをやるようになっていた。今から思えばよく反則の誘惑に乘らなかつたものだと思う。私がやる積りがあれば衛生材料、薬品、砂糖を流すことなどは一挙手一投足のわざであったのである。事務所の掃除も既に私は関係がなく、房に於ては檻房の首席として他の人々への気兼ねもなく、朝起きれば真先に顔を洗い、掃除している時には私は担当台の横のストローヴに当っていればよい楽さであった。

その頃、入って来た看病夫に武林と云うのがいた。既に妻子もある三十台の人で、元は新聞記者だと云うことであつたが、その性格

には頗る変つた所があつた。医務課へ新しく来た時に

「私は軍隊で衛生兵の兵長をやつて居りました」と云うので、十二月中旬、仮釈放で出所した青野君の後任として、外科へ廻されたのであつたが、医療に付いては何一つ智識がなく、ガーゼの切り方すら分らないので、医官もとうとうもて余し、一舎専属に病人の世話や内山君の手伝をやらすことになった。刑務所では「ハタタリ」と云つて、自分の経歴を偽り、又は誇張して、なるべくよい職場に行こうとすることが多いのである。武林君はこそくとした反則行為が多く、しかもいくら叱られても改めようとしない頑固さがあつた。不食患者の余つた飯をたべてしまつたり、牛乳を誤間化したりすることは再三であつた。刑務所には片喰(カタグイ)と云うことがある。之はお菜を御飯と共に食べず、先ずお菜を食つてしまつてから、御飯をたべることで、片喰は一層満腹感が大きく、余計なべた様な感じがすると云うのである。片喰は刑務所に於ても無作法とされて居り、看病夫には片喰いする者などは曾て無かつたのであるが、武林君がこの片喰をするのだつた。武林君はいくら食べても腹がへるらしく、患者の食事の盗み食いもその故らしかつた。彼の片喰は同房の人達のひんしゆくを買つていたが、彼は平気でその習慣を続けていた。この

武林君で更に驚いたことは食塩を盗んで食べることであった。調剤室の食塩を手に入れて、御飯にかけて食べることは往々あることで、別に驚くに当たらないことなのであるが、彼のは病理実験の塩を盗むのであった。寄生虫の検出には飽和食塩水を用いる必用上、試験室には多量のあら塩が置いてあるのであるが、大便をかき廻した箸を突込んだりするものであるから、単に反則と云うだけでなく、この塩は汚くて且つ危険なのだから、私や二、三の者が、それだけは止める様に口を酸っぱくして注意するのであるが、彼には全く馬耳東風であった。彼は看病夫には全く不適任であつたが、そのことを担当看守や佐藤部長に報告するのも可哀想で放任されていたが、段々患者からはあきらまれ、看病夫から相手にされなくなつて行つた。

十二月初には司法保護委員が来ると云う噂であつた。委員は委員会の設置されている都市に常勤し、管下の刑務所を廻っているもので、一つの刑務所に来るのは成人と少年と各々一ヶ月に二、三回であつた。だから一回面接から外れると、半ヶ月位は面接が遅れ、従つて、それだけ仮釈放が遅れる訳であつた。十二月初めその日は流石に朝から落付かなかつた。期待と不安でわく／＼し、調剤室の仕事をしたがら、教育課の呼び出し看守が今に来るか、今に来るかとの空な気持ちでその方

ばかりに気が取られるのであつた。午前中は遂に駄目であつた。午前十時過ぎに午後こそはと期待した。午後の面接の分は一時前に呼出しがあるのが普通なので、ひる休みを身を刻む様な気持ちで過したが、時計が一時を過ぎても面接の呼出しの気配はなく、二時、三時と過ぎて行つて、私の身体はかゝと熱くなり、頭はじーんと鳴つた。この日は遂に私の面接はなかつたのである。夕方、部屋へ帰ると、気がすつかり抜けてしまつた様で、もう何をするのもいやであつた。この日から二日程経つて、先月池上君と同じ日に面接のあつた平野君が仮釈放になつた。

十二月中旬の或夜、一舎に科学分類課長が部厚な書類を抱えてやつて来た。所々の房を開けては、受刑者と何か話している。その翌日行われる面接の下準備と云うことはすぐ分つた。今度こそは私もその中に含まれていると自分でも信じ、房の者もそれを予期していた。「看病夫の房は何処だ」と云う科学分類課長のかん高い声がした。愈々と思うと訳もなく私の胸はドキ／＼し、顔が紅潮した。併しいくら待つても私の房は開かれず、その中用事を済ませた課長がさつさと私の房の前を通り過ぎて帰つて行くのが見えた。

「課長さん、私を忘れてはいませんか」と叫び度い衝動に私は駆られるのだった。今度の面接が今年中に仮釈放になる者の最後の面

接かも知れない。之に入らないとすると、私は或は今年中には出られないのかも知れない。そう考えると居ても立ってもいられない焦燥感にかられ、その夜、布団に横になると、私の帰るのを一日千秋の思いで待っている妻の顔が目の前にちらついて、涙が思はず頬を伝うのであつた。

翌日の面接に看病夫で呼び出されたのは、この間末さんの代りとして医務課へ入つて来た船橋さん一人であつた。私に対する面接の遅いことは小村先生も非常に心配し、小村先生は教育課へ新聞を見に行く振をして、私のことを聞いてくれたことが屢々あつたが、先生のもたらす情報はいつも否定的であつた。年末には多数の仮釈放を行う関係上、も一度面接があるかも知れないとのことであつた。私は之を一縷の希望とした。二級になつてから妻は毎週面会に来てくれ、その都度、保護司や観察所の知人が私の仮釈放について努力をしていてくれることを聞かせてくれた。私は妻のこの言葉に非常に力を得た。仮釈放については所長が申請した以後は刑務所の手をばなれ、刑務所としてはどうにもならないことなので、刑務所としても私の面接が遅いのを非常に心配していると云うことを聞いて私は何とも云えない温い手に抱かれている感じがしたのであつた。

若し年内にも一度面接があれば、凡そその



(告白)

お灸を据えた 女の魅力

絵と文

岩瀬 祥一

頃だろうと思われる二十日前後も何の音沙汰もなく過ぎ去り、やがてクリスマスがやって来た。噂の通り、クリスマスには沢山の受刑者が仮釈放になった。朝の十一時頃、小村先生に連れられて、用度課へ薬を取りに行く、と、正門のほとりには大勢の出迎えの家族が三々伍々屯ろしていた。不図、用度課の窓を通して見ると、前庭を横切つて科学分類課の方へ歩いて行くりゆつとした大島の対を着た

人の顔に見覚えがあった。余りにも身なりが変っているのとつさには思出せなかったが、見覚えのある筈、つい昨日まで、青い囚衣を着て、手足や顔を媒で真黒にして、医務課のストーヴの煙突掃除に来ていた男であった。この男だけでなく、その朝、仮釈放になった人々が或は和服に或は洋服に、つい先刻までの囚衣の俤もなく、さっそうと嬉しそうに歩いているのだった。私はその光景を窓越

にパノラマの様にながめていると、私の心が段々諦めに落付いて来るのが感じられた。どの道、暮に出ることは最早不可能なのだ。時期が来れば出られるのだ、あくせくして苦しむことは愚かなことと気が付くと、今迄のどう仕様もないやるせなさ、身体全体がかいつとはてるような焦燥は朝日を受けた霜の様に音もなくすつと消えて行くのだった。私の気持は成行に委せると云う心境に達することが出来て非常に楽になったのであった。

異性の体に疼痛を与えて喜ぶ「サジズム」というのがある。私はいつも思うことだが、確かに私の性格の中に、この傾向を多分に持っている。先ずサジズムだと云って間違いない様だ。だが、どうもそうでない節もある。というのは、女を虐めて悦ぶ加虐的行為の欲望を持っていると云つても、それは飽くまでも、お灸責めにのみ限られており、他の虐待方法は、それ程の興奮も覚えず関心も少いからである。

では何故、私は女の背中にお灸をすえ、女を熱い目に合わす方法にのみ、悦虐快感に耽溺できるのであろうか。私の病的な程の憑かれる心を、卒直ありのまゝに告白し、お灸を据えられた女の魅力の、私自身としての価値に就いて述べてみたいと思う。

奇ク愛読者の人達からはもとより、一般の人達からも私自身を理解して頂くために。

(第一論換)

女を虐める雰囲気のこと。

お灸を据えられている女の姿態は、私を最上の歓喜に導いてくれる。その無条件で堪能させてくれる原因を、三つの箇条書きにして順次記してゆくことにする。

先ず折檻で代表的なものと云えば、鞭打であるが、それは西洋のこと、日本でのお仕置は、すぐお灸が連想され、手近かで無難な方法であるお灸すえが、日本では代表的なお仕置方法の一つとなっている。

それ故か、私は他の責めのどの方法よりも女の背中やお尻に、お灸をすえることに、女をお仕置の目に合わせているという気分と雰囲気が一番徹し得られるのである。

女性の滑らかな背中の上で、ポツポツと煙を上げて燃えてゆく艾、次第／＼に燃え上った艾火が、女性の豊満なお尻をシリシリと火傷してゆく様、それらが私にとっては、加虐的な倒錯した悦びであることは勿論である。

伴し、お灸責めで女を虐めると云う魅力はそれほどばかりでなく、艾火がシリシリと背肌にあぶりつく、その瞬間ごとに、女の全身は熱さにピリッとふるえ、腰を妖しくくねらせ乍ら、脇息等に片脇を押しあて、必死に堪える姿も大きな魅力への要素になっている。

つまり、私がお灸に対して異常な執着を覚えるというのも、女体に原始的な嗜虐を加え

るということに基因しているが、それと同時に、女の熱さに堪える姿態は、女性特有の哀憐の美を強く感ぜしめ、他の責めの方法では得られない。女のえもいわれぬ魅力を誇示し

てくれるからでもある。むっちりとした肉のついたお尻がぷり／＼とうごめき、熱さに辛抱しようとするその女の様は、私にとっては、こよなき眺めの情景である。これはお仕置とし

お灸責め・悦虐の幻想図



ての女の風情、総体的な雰囲気にも起因して
いよう。

(第二論換)

女の熱がる表情と悲鳴のこと。

灸のすえられてゐる女の、情緒の一つとして、熱がる顔や、熱がる悲鳴にも、私は他の責めとは違った、はるかに優る魅力が感受できる。堪え難き熱さを、我慢している女の表情、それは灸責めでなくては見られぬ女の異常なる妖美の顔である。

それは辛さに歪む顔、恨めしそうな顔、観念して辛棒している顔、はては小娘のように泣き出す顔、等々その女の顔々は妖艶美溢れ名状しがたい程の好ましいものである。

更に、女が熱さに堪えかねて「あっちちちち」とあげる呻き声、これもお灸ならでは聞けぬ独特の悲鳴であり、私は又、この女の悲鳴こそ、何ものにも例えようのない程、魅力を感じるのである。

「アッチチッチッ、あゝたまらない、許して!、堪忍して、あッ、熱ッ、アッチッ」

という女性の熱がる声を聞いてこそ、私は益々女の背中に灸をすえることの意欲がたかまり、悲鳴が美声となつて聞えてくるのである。

(第三論換)

女の背肌にできた灸痕のこと。

お灸において、他の責めと大きく異なるところは、灸の痕の出来ることである。今更説明するまでもない事ではあるが、お灸とは、どう云うものであるかを一応記してみれば、皮膚の上に、野草のよもぎから製せられた艾なるものをのせ、こののせた艾に火を点じて皮膚の上で艾を燃やしてゆくのである。燃えてゆく艾は、シリシリと皮膚面に焼きついてゆき、皮膚に一種の軽度の火傷を与えることなのである。したがって、お灸は肌を灼き焦す火傷であるから、当然灸の焼痕ができる。こゝに私にとって、他の責めでは得られない秘めた一つの大きな要素があるわけである。有名な話であるが、マゾ的傾向の強い女性が背中に焼火箸で、「貴方の名を焼きつけて下さい」と申しでたそうだが、こんな苦痛をも、その女は手拭を噛みしめて我慢をしたということである。お灸にも、これと関連した話は随分と多いようだ。

女性は概してマゾ傾向が強く、顔の綺麗な婦人でも、背中を見ると物凄く大きな灸痕をもっている人も非常に多く見かける。実際は灸痕を持っている女性の中で、案外右のような経緯から据えたのが可成りいる様である。

私の知人で、大きく焦げ爛れた灸痕を背中にもっている奥様がいる。中々美しい夫人で灸痕のあることが、何にか親しみを覚えさせ

して、尊敬しているが、或る機会から、その灸痕の話を聞いた。

「大きなお灸の痕でしょう。宅にすえて頂きましたのよ。随分と熱かったですけど、愛しているっていう証拠をこしらえたい為にね。愛の灸痕とでも云うんでしょうか」

と、その夫人はむしろそれを自慢にしている位であつた。

滑らかで、白く肉附きの好い女の背中に、施された灸は、情熱の度合とか、気持とかを相手に知らせるものであろう。私にとって、背中に灸痕のある女性は、益々女性的な哀艶味が漂い、その灸痕の残酷味が、不思議にもエロチックな感じをさえ与え、そして、更に、熱がり耐えたという発露が見いだされて、尽きざる魅力となつて迫ってくるのである。

私は、今は完全に、灸をすえた女の肌の幻影の虜となつて、お灸をすえられている女性の幻想的な構図を描いてみました。絵の方の題名は「お灸責め、悦虐の幻想図」とでもいうところでしょうか。

(おわり)

×

×

×

連載小説

赤い花は泣いている

(第四回)

松井 籟子

北原 純子・画

赤い花は泣いている

(一)

「君に聞きたいことがあるんだが……」

正樹はわざと美沙子の方を見ないで云い出した。

「さっき花瓶をおとされた時、窓からのぞいていた女の人、知っている人なんだろう？」

正樹は暖炉へ太い薪をくべた。

「何故、僕にかくすの？ 君は僕に秘密を持っている。それを云って欲しいんだ」

「私……。本当に知らないんですもの」

美沙子は云いながら、顔に汗が浮いてくるのを手でふこうとした。しかし、上から羽織をかけられているので、その羽織をたぐるようにして、手を持って行った。

「君はどうしてそうさからうの？」

「私、べつに、さからってなんか……」

「だって、羽織がかわくように、僕がちゃんとしてあげているのを、皺くちやにする」

「だって……」

「暑いのかい？ 秘密にふれられたから汗が出るんだろう？」

「そんな……。この陽気に、薪を燃やせば誰だって汗が出ますわ」

美沙子は微笑しながら、妻が夫に甘えるように云ったのだが、正樹はいきなり彼女の頬に手をあげた。

「あっ！」

と美沙子が打たれた頬を押さえようとすると、後でむすんだ羽織の紐が無理に引かれて、ビリッとほころびた。

「僕のことをそんなに気に入らないのか、あゝいえば、こういう、こういうえば、あゝいう、おまけに、つらあてみたいに羽織の紐をひきちぎって……。」

声をふるわせて怒る正樹に、美沙子は当惑したが、だまって床へすべり落ちた羽織を拾いあげた。

それを正樹は邪慳に奪い取るようにとりあげると、

「僕に、さからうのでなければ、僕を通りにしていればいゝんだ。ほら、まだ濡れているじゃないか、かわくまで、じっとしていなさい」

正樹は美沙子の椅子を、暖炉に近づけると、最初にしたように羽織で美沙子の体を前から蔽った。

美沙子の頬はカッカッとほてった。

それを知らん顔で正樹は更に薪をくべる。

夕闇がしのびこんでいる部屋に、赤々と薪が燃えているのは地獄の業火のようだった。

美沙子の額からも、脇の下からも汗が玉になって流れた。

「暑いのかい？」

正樹はそんな美沙子を面白そうに見ている。

「のどがかわいたら。冷たいものを持ってきてあげるから、動くんじゃないよ」

正樹は部屋の隅の吊り戸棚をあけた。

彼の好みで、洋酒の瓶が並んでいる。小さな魔法瓶に、いつでも間に合うように氷も入っている。

正樹がどんな飲み物を作っているのか、美沙子には解らない。暖炉に向いたまゝ動けないからだ。

縄で縛られているわけではないから、動こうと思えば、動けないことはない。

しかし、正樹のいうように、秘密を持っている彼女には、今動くことが出来ないのだ。

正樹にさからって、彼の感情をたかぶらせ、秘密をさぐられるよりは、何にも云わず、我慢していようと思っている。

「暑い！」

と、言葉に出していることさえためらった。

「さあ、のましてあげよう」

正樹はコップを美沙子の唇へ近付けた。

美沙子はだまっていたのんだ。氷の冷たさが心よかった。

お坊っちゃん育ちの我がまゝから、本当にそんな風にして羽織をかわかそうと思っていたにすぎないのかと、一瞬、美沙子はその飲み物の冷たさを正樹の好意とうけとった。

しかし、そう思ったのは僅かな間だった。

おなかの中がキューッと熱くなって、その熱さが体中へ走った。体が燃えるようになってきた。

外からは薪で暖められ、体の中は何のお酒か、火がかけ廻る。

美沙子は真赤な顔をして、それでもじっと動かなかった。

すると正樹は又一杯コップの飲み物を持ってきた。

「今度はいやにおとなしいね。おいしいかい？ さあ、もっとお飲み」

美沙子は死んだ気になって、目をつむって飲んだ。

体が火の玉になる。

胸が苦しい。

心臓が割れそうに動悸をうち出した。

それでも美沙子は動かなかった。けれど、椅子の背にもたれていても、体が崩れて行きそうな気がした。耳がガン／＼と鳴った。

(二)

ドアが申訳のようにノックされて、開けられた。同じ家にいる正樹の伯母が立っていた。

「何をしているの？ この陽気に暖炉でもないでしょう？」

伯母は皮肉そうに云いながら、二人に近付いた。

美沙子は伯母に椅子をゆずろうと立ち上ったが、足がいうことをきかなかった。椅子のわきへ、へな／＼と崩れるように横座りになつてしまった。

美沙子の裾が乱れるのを、伯母はにが／＼しい顔で見たが

「どうしたの？」

わざと何でもないように聞く。

美沙子は這うように、手さぐりで体をさ／＼えるものをさがした。

羽織は床へ落ちて、そのはしが暖炉の火にふれた。きなくさい匂いが漂った。

正樹は急いで羽織を拾いあげたが、裾に火がついていた。それをもみ消しながら、

「僕のこしらえた羽織だと、随分そまつにあつかわれるんだね」

とわざとあてつけたように云うのを伯母は聞きとがめて、

「その羽織、この間、あんたが作ってやったばかりでしょう。表地だけで一万円の上も出しているのに……。」

と、正樹の手から羽織をとって、焦げたあとをしらべたが

「まあまあ、火事にならなくて幸いだったよ。美沙子さんなんか、お家がい／＼から、又、いくらでも作ってもらえますものね」というのに

「い／＼え、そんな……。済みませんでした」

と、美沙子はあわて／＼あやまった。その言葉がもつれていた。

「あら、あんた酔っているの？」

「い／＼え」

「まあ、厭！ お酒くさい！ 今日大切なお客様があるというのに、酔っぱらって御相手をするの？」

「お客様？」

美沙子は驚いて問い返した。立っていられない程の体でどうしたらいいだろう。

「あんたが甘やかすからいけないんですよ」

伯母は正樹に云った。

「自分の女房がこんなにべろ／＼になるまで、だまってお酒をのませる亭主がどこにあります。お湯殿へつれて行って、水をあびせなさい」

「はい」

正樹はさも従順そうに、伯母に一礼すると美沙子の手をとった。

そして、歩くことさえ自由にならない美沙子を、ひきずるように風呂場へつれて行った。

伯母があとからついて行く。

「さあ、着物をおとり」

美沙子はたとえ夫の前でも、裸になることはためらわれて、

「私、自分で水をあびます。あちらへいらして」

と云った。

それを耳にも入れず、正樹と伯母と二人がかりで美沙子の帯をとき、腰ひもといた。肌締結まではとらせまいとする美沙子を、そのまゝ正樹は流しへつきとばし、自分の体がぬれないように、水道の蛇口へホースをさしこむと、美沙子に向ってシャワーと水をかけた。

濡れた肌締結がびったりと体について、裸体以上に体の線をはっきりみせた。

美沙子は両手で胸をかゝえるようにして、流しへうずくまった。

よく酔って水泳した人が心臓麻痺をおこして死ぬという。

この急激の水の冷たさに、自分の心臓が止ってくれたら、その方がらくだと、美沙子は念じたが、心臓は苦しいだけで、止ってはいなかった。

頭から、顔から、体から、正樹の持つホースの水は容赦なくふりそぐ。それでも水がかゝっている方がまだいと知ったのは、体中したゝる水をそのまゝに、ぬれ雑布のように流しにうずくまっている方が、どんなに寒いかということに気がついてからだだった。

「しばらくそうしていたら、酔いがさめるだろう」

そう云って、伯母と正樹は脱衣場の方から鍵をかけて行ってしまった。

泥棒よけの用心に、風呂場は鍵がかゝるようになっていたのだ。美沙子はガタ／＼とふるえながらどうすることも出来なかった。

「夏雄さん！」

思わず恋しい人の名を呼んでみる。

又アルバイトに、縛られた女の写真をとっているのだろうか。

この苦しさから比べたら、まだ縄でしばりあげられる方がらくかもしれない。

いゝえ、もし、彼がそれを望むなら、この濡れそぼれた姿のまゝ縄にかゝってあげてもいい。もし、夏雄の傍にいられるなら、自分がモデルになって、どんなつらいポーズでもとってあげるものを……

「夏雄さん」

美沙子は言葉に出さずに心の中で絶叫する。そして、夫にやさしくされるよりは、今日の様にいじめられる方が、少しでも、夏雄を思うことを、夫にすまなく思わないですむという気やすさを感じていた。

(三)

唇の色まで変った美沙子は萎れた草の様に、正樹が湯殿の扉をあけてくれるまで動かなかった。

「さあ、早く仕度しなさい」

正樹に云われ、立ち上ったが、頭が割れそうに痛んだ。

「伯母の友達が来ているんだ。結婚祝をもらっているから、君も挨拶するようにと伯母が云っている」

正樹は云って、わざと軽く笑って、

「どうだい、酔いがさめたらう」

と、まるで人ごとの様な調子だった。

「さあ、こゝに湯上げタオルがある。濡れた締結をとりなさい。これで摩擦してやろう」

それでもやさしくタオルをひろげてくれるのに、

「自分でします」

美沙子は云った。

「あちらへいらして下さい。私、あとからすぐ参りますから……」

正樹の顔に黒い影がさっと走った。

「僕がしてあげる」

はき出すようにいうと、美沙子の肌繻絆をめぐりとるようになってしまった。

そして、タオルですっぽりくるむと、美沙子の体を手の中でもむようにこすった。

「あっ！」

息もつけない程、美沙子は正樹の両手の中で身悶えた。立っていられた。思わずへな／＼と坐ってしまうのを、正樹は無理に立たせる。木の葉が波にもまれるように、美沙子は彼の手の中でもまれた。

濡れた髪もタオルでかきまわすように拭かれた。

凍え切っていた美沙子の体に、再び暖い血が通い出したが、頭がピン／＼と鳴るように痛んで、目をあけていられない程だった。

「さあ、着物を着なさい」

正樹はやっと手を休めた。

「はい」

とは云ったものの、体は萎えて、客の前へ出る気力もない。

「寝かせて頂けませんか、頭が痛くて……」

美沙子は云った。

「それだから伯母が怒るんだ。僕はかまわないよ。しかし、君だつて伯母の機嫌をそこねることが、どんなに不利か知っているんだろ

う？」

「はい」

美沙子はうなずいた。

正樹が勤めに出て行ってしまったあと、とり残されたように伯母と二人でいなければならぬ。伯母は女中の前で、美沙子を叱るの、女中にまで馬鹿にされた。

それでなくても、婚家先に前からいる雇人は、あとから入ってきた嫁に対して、い／＼顔はしないものなのだ。

正樹から、義兄の借りている金を返えしてしまうまでは、美沙子は人質のようにこの家から去れないのだ。

それでもはじめはやさしい夫だと思った。それが、だん／＼に疑惑の色を濃くしていくのか、人が変わったように陰気になって、此の頃では外で飲んで帰えってくる日も増えてきた。

しかし今日の様な乱暴をしたのは初めてだった。

正樹が美沙子を苛めれば伯母は喜んで手を貸すだろう。

（いっそ逃げようか）

そうも思う。

しかし、何処へ行けるだろう。

夏雄はもう美沙子にとっては遠い人なのだ。彼女のいちずの思いを「邪恋」というひどい言葉でむくいたのだ。

（いっそ夫に何もかもしゃべってしまったら）

そうも思う。

しかし、どんなに苛められても、その秘密さえ話さなかったら、夫は「出て行け」とは云わないだろう。

それを、もし、結婚前に、自分が同じ女の身で、照子にいたずら

されて処女を失ったと告げたら……。
美沙子はその恥しさを考えると、どんなに打たれても、蹴られても、じっと我慢しようと唇をかむのだった。

(四)



——照子さん

いっそやはいろ／＼無理なポーズをとって頂いてごめんなさい。
でも、おかげさまで「雪姫幻想」の振付が出来ました。一度稽古場へ遊びかた／＼見にいらいしやいませんか。あなたには本当に御迷

惑かけたから、第一番に見て頂きたいのです。来週の水曜日の夕方、稽古場でお待ちしています。——

艶子からそんな手紙をもらって、照子はどうしようかと迷った。

谷野正樹を知っているらしい艶子に又、彼と一緒に歩いていった美沙子のことを聞かれると困るという躊躇があった。

しかし、後手に縛られたまゝ舞うという、艶子の「雪姫幻想」は見たかった。

首に縄をかけて、無理やり体をそらせられなければ、その様に上体をそるなんて出来ない照子だったが、舞踊家の艶子はそれを美しくやってみせることだろう。

衣裳も新しく作ると云っていた。お姫様の振袖なんて、どんなに立派なものか。

美沙子の花嫁姿に縄をかけた時にも

増して豪華な囚われ人の姿だろう。

美沙子のことは、知らないの一てんばりでごまかしてしまえばいい。

そう思うと、照子は、指定された水曜日に艶子の稽古場のあるビルディングへ足が向くのをどうしようもなかった。

「あら、よく来て下さったわね、この間でこりて、もう来て下さらないかと思ったわ」

艶子はドアをあけるなりとんで来て、照子に云った。

「御手紙有難うございました」

照子があらたまっていうのに、

「さあ、こっちへ来て、私の手を後で縛ってね、早速踊ってみたいの」

艶子は云った、

「いつもはたゞ手を後に廻すだけで踊っているんだけど、感じが出ないで困っていたの。でも、若いお弟子さんにしてもらうの厭だったし、発表会までは誰にも見せたくないかったのよ」

「先生、衣裳は？」

照子が云うと、

「それが、まだもう二三日かゝるの。すごく豪華版なのよ、それで手間どっているんだけど……。でも、袖の長い短いだけでも違ってくるんでね、今日は新しいんじゃないけど、舞台衣裳を用意してあるの。着てみるわね、照子さん、私のいうように帯をしめて頂だいね、ひとりじや着付けられないの」

そう云って艶子は舞台のように作った板の間の前の、畳敷の所へ風呂敷包みをどしんと置くと、結び目をほどいた。

赤地にしだれ桜がえがいてある振袖は、目のさめるように美しく殺風景なビルディングの部屋にはふさわしくなかった。

帯は黒地に金と銀で香の図をちらしてあった。

「こういう衣裳を着るには、やっぱり顔や衿を真白にぬらないと、変なものね」

艶子は云ったが、くせない髪を一つにたばねて、大きく髷にまとめている艶子の髪がお姫様の衣裳に不思議に似合っていた。

照子は云われた通りに一緒に手伝って艶子に衣裳を着せかけた。

帯も、胴へまわす処と、だらりに結んである処と別々に紐できちんとしめつけるので、素人の照子にも形がついた。

「さあ、この紐を前からまわして後手に縛ってもらうんだけど、人にのそかれると厭だから、鍵をかけておくわね」

そう云って艶子はドアの鍵をしめ、

「曲はレコードにとっておいたから、かけて頂だいね」

てきばきと照子に指図すると、

「さあ」

といって、手を後に廻した。

照子は艶子にいわれた通り、太い縄のようにあんだ黄色い絹の紐を艶子の胸からまわした。赤い着物に黄色い縄は、美しすぎて、虐げられる者のみじめさに遠かった。

けれど、照子は自分が縛られる時いつも感じる、妙な情感が、ふと体を走るのを感じた。それは肌を筆の穂先でさかさに撫でるような感じだった。

艶子は紐のさを長く後へたらしたまゝ舞台へあがると、

「さあ、レコード」

と、照子を促した。

歌詞も曲も、新しいものだった。

手のない人間の体は奇妙に美しかった。赤いたもとに黒い帯をひら／＼させて、悶えるように舞う艶子は人魚の様にも見えた。水槽を泳ぎまわる金魚や熱帯魚のような夢幻的な美しさというのだろうか。

後手に固定されて、両の手が使えないということは、舞踊の上に随分無理が出そうなものなのに、反ってそれが美しく思われるのは何故なのだろう。

艶子が体を反らすと、髪が床につきそうになる。白いのがのび切って、その咽喉の真中へ、グサと短剣をつきさしたら赤い血が花が咲くようにふき出すかしらと、照子はふと残忍な思いにさえかられた。

雪姫が足でねずみを画くと、そのねずみが雪姫の縄を噛み切ってくれるのだが、

「こゝで、縄をといて」

と、艶子に声をかけられてもすぐにはかけられない程、照子は茫然と、縛られた艶子の姿に酔っていた。

縄をとくのが惜しいと思える程だった。

(五)

衣裳をぬぐと、艶子は浴衣に着かえた。

「暑くなったわね、汗びっしより……」

そう云って、部屋の隅の洗面所で顔を洗い、体をふいている。

その間照子は、まだ陶酔の残っている中で艶子のぬぎすてた衣裳

をたゝんでいた。

「お稽古が終えて、一杯グーッとのおビールくらいおいしいものないわ」

艶子はお盆にコップとチーズをのせて、片手にビール瓶をぶらさげてきた。

「どう、雪姫幻想は？」

「いゝわ、とても」

照子はうっとりするように答えた。

「私も踊りがならいたいわ。先生のように体がやわらかく動くなら……」

照子は云いながら、夏雄の写真のモデルにもっとすばらしいポーズをとってみせられるものと思ったのだ。

「先生の発表会に、舞台の写真をうつしてもかまいませんか？」

照子は夏雄に知らしてやりたいと思った。

好事家に売る写真ではなく、本当に美しい芸術写真がとれそうな気がしたからだ。

「えゝ、いゝわよ、あんたのおかげですもの、この振付が出来たのは……」

「あら、おかげだなんて……」

「本当よ。私、つい夢中になって、随分あんたにはひどいことしたから、怒って、来て下さらないのじやないかと思ったのよ。それが来て下さったでしょう、嬉しいわ。ねえ、照子さん、私に協力して下さいね」

「えゝ」

「本当？」

「ええ、本当に……。こんな美しい舞踊の役に立つなら……」

「そう、嬉しいわ。じゃ、お願いするわね。この次には浦里を踊ってみるつもりなの。雪姫は桜の木につながるんだけど、それをはなして振付けしたのよ。浦里は松の木に縄のさきをむすびつけて、もっと制約された中で舞踊にしてみたいの。ねえ、一寸見せて下さない？」

「何を？」

「縛られたポーズを見せてよ、ね、いゝでしょう。遊びに来てもらったのにわるいけど、御礼はするわ」

「御礼なんて……」

「じゃあ、一寸だけ……」

こうたゝみこまれると、照子にはもう「厭です」というすきがなかった。

「でも、洋服じゃ……」

わずかに反対するつもりで云ったが、「このお姫様の衣裳の長縹絆を着てよ。帯は伊達巻をまいておくだけにしましう。さあ、着かえて頂だいね」

ピンク色の地に赤い雪の輪のしほりをちらした長縹絆は、女なら、手を通してみたくなるあでやかさだった。

照子はスリップの上にそれを着た。裾は長く引いて、赤い伊達巻を巾びるにま



「かつらがほしいわね」

艶子は笑ったが、パーマをかけた照子の短い毛は、艶子ほどには古典の美しさに近いものがなかった。

「雪姫はお姫様だから同じ縛るにしても、そう邪慳にもされなかつ

たかもしれないけど、浦里はお女郎さんだし、あゝいう社会のリンチというのは随分ひどいんでしょう。だから、本当の荒縄を使うつもりなのよ」

艶子は照子の手を後手に腰紐で結んでからそう云った。

「少し痛いかもしれないけど、我慢してね」

手にふれるのさえ手がさくくれそうな荒縄を、いつの間に用意しておいたのか、艶子は出してくると、照子の胸へまわしてぐっとしめた。

二の腕へきり／＼とまわれると、やわらかい絹の長繻絆を通して薬が肌につきささるように感じた。

「痛い！」

思わず照子は云ったが、艶子は聞えたのか聞えないのか、後手の手首にも縄をかけ直して高くもちあげると、肩の少し下のあたりから、ぐる／＼と、乳房の上だけさけて、胸へまきつけた。

あてやかな長繻絆に、さくくれ立った荒縄は反って効果的に痛々しくみえた。

艶子は縄尻を舞台の横の柱へ結びつけたが、何を思ったのか、レコードをかけ出した。それは、日本の音楽とは似もつかない騒々しい曲だった。

「照子さん、何故私がこんなレコードをかけるかわかる？ 悲鳴が聞えないようによ」

艶子は口元に薄ら笑いを浮かべながら云った。

「何しろ、私、芸熱心でしょう、多少痛かったり、苦しかったりするかもしれないわ」

照子は不安そうに艶子の顔を見た。

「まず、そのポーズで、片方の乳を少しのぞかせた方がいゝかしら？」

艶子は縄から無理やり照子の乳をつかみ出した。

「いゝおっぱいしている」

そう云いながら、乳首を指ではさむと

「この間、あんた知らないって云ったけど、谷野の奥さんね、どこで、どうして知っているのか教えてよ」

艶子は何でもないように問いかけた。

「私……」

照子が言葉をにぎすと

「知らないの？」

艶子は指先に力をいれて、乳首をひねった。

「痛い！」

「仰言いよ。何でもないことじゃないの。私はあの男に復讐してやりたいのよ。あの女をどうしようというわけではないのよ」

「先生、かんにんして。そんなんだったら縛られるんじゃないか」先生は卑怯よ。」

「卑怯ですって」

艶子は爪をたてゝ乳首をひねった。

「あ、あっ！」

「あんたこそ卑怯よ。こんなこと、私、したくはないわ。でも、かくしだてするんですもの。あんな男の為に……」

艶子は抵抗の出来ない照子の髪を握るとふりまわした。

「浦里が折檻されるのは、芝居では庭ぼうきということになっているんだけど、こゝには庭ぼうきはないから、鞭でいゝでしょう。」

ほら、猿まわしが使う鞭よ」

艶子はそう云って細い鞭をとると、照子の肩へピシッと打ちおろした。

「あっ！」

照子の悲鳴も鞭の音も、騒々しいレコードの狂躁に消されてしまふ。

「私にすっかり話してくれるならやめるわ。どう？ 二云う？ 二云わなければ浦里折檻よ」

艶子はピシッくと、照子の肩といわず、背といわず、鞭をふりおろした。

鞭のあとは火傷のように熱く、縛られた手首はシーンとしびれている。

しかし、照子は不思議に艶子を憎む気持になれなかった。

苛められることは、雪姫幻想の陶酔に通じて快かった。

艶子が本当に美沙子のことを、自分を折檻してまで知りたがっているのか、それとも、それは単なる口実なのか、艶子の気持がはかりかねた。艶子の自分を見る目の中に、燃えるものがあるのは、芸術家の目なのか、女の目なのか、照子には解らない。

たゞ、艶子の鞭を快く思う自分に戸惑って、照子はもっと苛められたいと思いながら、

「痛い！ かにんして！」

と叫びつづけていた。

(以下次号)

「ボディビルマシンに」依る 少年姿体美増進法

〔山口式ボディビル〕に関する

小改良試案)

熊谷俊一

世は正にボディビル時代！ パーベル、エキスパンダー等に依って鍛えられた筋骨たくましく男性的肉体美、健康そのものの体格！これぞ大いに賞揚せらる可きものです。

然し「過ぎたるは及ばざるが如し」得意気な、そして大真面目な、例の「倒立三角形」のポーズも、度を超えては、唯、グロテスク？で、最近では、筋肉の異常発達に依る内臓活動阻害の弊すら唱えられています。

然し、「山公式ボディビル」こそは、正に此の弊を完全にのぞき、「腹筋強化」という特殊な方法を用いて、内臓の働きと血液の循環を促進し、真に均勢のとれた健康体を創るに最適の訓練法であります。

而して、「山公式ボディビル」は、特に第二成長期頃の年令にあって、運動不足、又は学校体育など全く不得手な少年でも容易に実行出来、その効果は予想以上であると云われます。

御存知の様に、少年の「からだ」の美しさは、大人の「男性」のそれとは全く異質のものであります。健康である事は勿論大事でも、レスラーの様な体格は、少年時代には無用の長物です。山口氏も、私の此の意見に御賛成下さる事と思います。従って、「山公式ボディビル」の特質は「露骨な筋肉過剰を排し、少年らしい美しい肉体を創るに最適の訓練法」であると云えましょう。

前おきが長くなりましたが、次に潜越乍ら「山公式ボディビル」に付き感した事、又は改良？試案、及び訓練法などについて述べさせていただきます。

先ず考えます事は、新規入会して訓練を受ける少年に対しては、厳格な身体検査を行う可きです。中学校の定例身体検査は皆様御記憶の通り、胸部検査以外は、単なる測定に過ぎないので、その少年の体が、此の訓練に適するか否かを定めるには極めて不十分であるからです。（理由は後述によりお判り願える事と思います）

その方法としましては、少年を定められた検査室へ入れ、脱衣を命じ、完全な裸体にさせます。最初に胸部及心臓に変調なきかを診る事は云う迄ありません。次に起立させて姿勢の良否を見、種々屈伸又は捻転運動を行わせ、更に室内を歩かせて見て、各部運動機能に異常なきやを検べます。体育競技の嫌いな少年は、その殆んどが、自分の体の運動機能に、何か欠陥のある如く思い込んでいるものです。

此の「体操検査」は、その様な無用の心配を除き、又欠陥が判明すれば、少年に最適の運動法が指導出来ると言う二重の重要な目的があるのであります。

最後に、ヘルニア及び肛門の検査をせねばならぬ事も、烈しい訓練で、それらの器管が

絶えず禪との摩擦、又は圧迫を受ける事を思えば当然の事と云えましょう。しかし之等は単なる測定ではありませんから、検査者には確実な医学的智識と技能が要求されます。

身体検査が終つてから其の儘、全裸体で、起立全身像を前、側、及び背面より、距離採光等を同一条件として撮影致します。此の撮影は訓練開始後約一週間毎に、やはり同じ条件で必ず行い、少年の体格の発達、即ちボディビルの効果を示す一連の資料と致します。その他随時「部分接写」を行つて、訓練の詳細なる成果を確認せねばなりません。以上の手続を終えて始めて、禪を着けさせます。

さて次に、「山公式ボディビル」を基とした、私の試案に依る「ボディビル・マシン」とその訓練法を御説明申し上げ、御批判を仰ぎたいと存じます。

抑々フープ（回転機）にしても「山公式」にしても、地面の上を、くるくる廻すのですから、それだけの広い土地がなければなりません。又、馴れぬ中は、廻転の都度、補助を要するので、先生は疲れてたまりません。更に雨天又は寒冷期は、実施不可能となります。よう。そこで、余り広くない室内でも、温度と採光にさえ注意すれば、天候如何を問わず常時使用し得る「室内常置式」を考えて見ました。

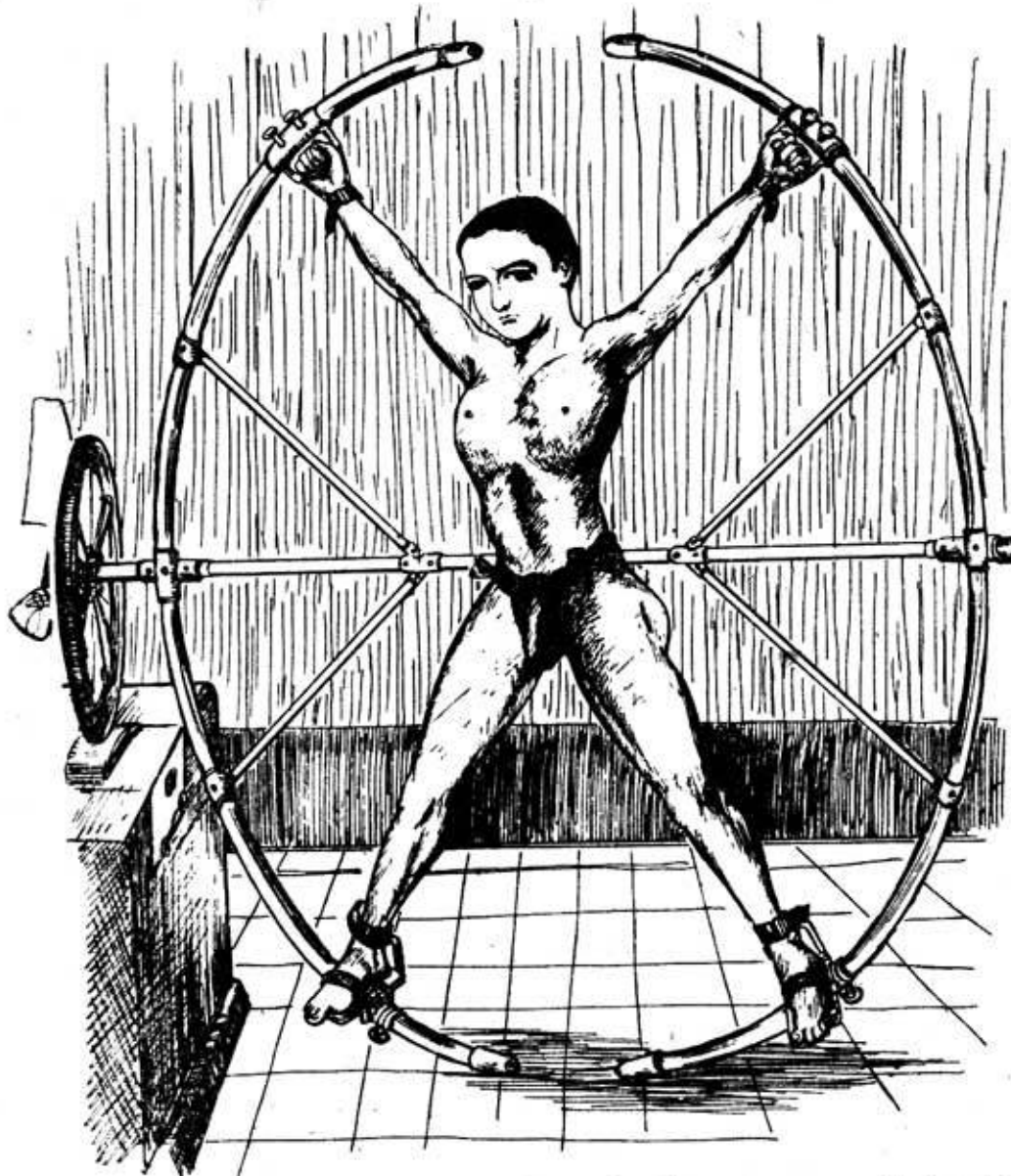
配置としましては、先ず「ボディビルマシン

「ン」は、室内中央辺に裾え付けられます。その他一隅に、水道及びシャワーを取り付け、その附近に、巾の広い鉄製エナメル塗りの「マッサージ用ベッド」を備えます。

さて、機械に就いて御説明申し上げますと、図を見て頂けば大体お判りの事と思いますが頭の上方と足の下に当る部分を截り取った、いわば円弧を二ツ近付けた形状の一ツの鉄輪の中に少年を入らせ四肢及禪の後の交叉部を革バンドで其の鉄輪に固定し、禪の所を固定した「バー」(鉄棒)を軸として、鉄輪と共に少年の体を廻転させるものです。

四肢を固定する器具は、止めねじをゆるめれば、鉄輪の周囲に沿ってスライド致しますから、少年の体軀に依って、又は必要に応じて、両腕の角度を変えたり、股を大きく開かせる事も出来ますので腕、胸部、或いは下半身の筋肉の訓練を一段と強化する事も可能であります。此の場合には相当烈しい運動となりますので、後述のマッサージなども、疲労回復の為に是非必要となるわけです。

機械の動力としては、それに必



要な程度に強力なモーターを用い、「変速装置」に依り速度を調節して、ゆっくりと廻すのです。回転方向を切り換える事が出来るのは云う迄ありません。又試験的に小刻みに廻転させる場合は、「手動」に切り換える事も仰向け、うつ伏せ、倒立、逆落し等の姿勢の儘で停止させる事の出来る制動機の着いている事も此の「ボディビルマシン」の特長の

一つと言えましょう。更に将来は、廻転装置の一部に「カム」機構を取り入れて、前記の様な、うつ伏せ、逆落しなどの姿勢で、単振動往復運動を行える様にすれば、訓練は更に効果的なものになるでしょう。

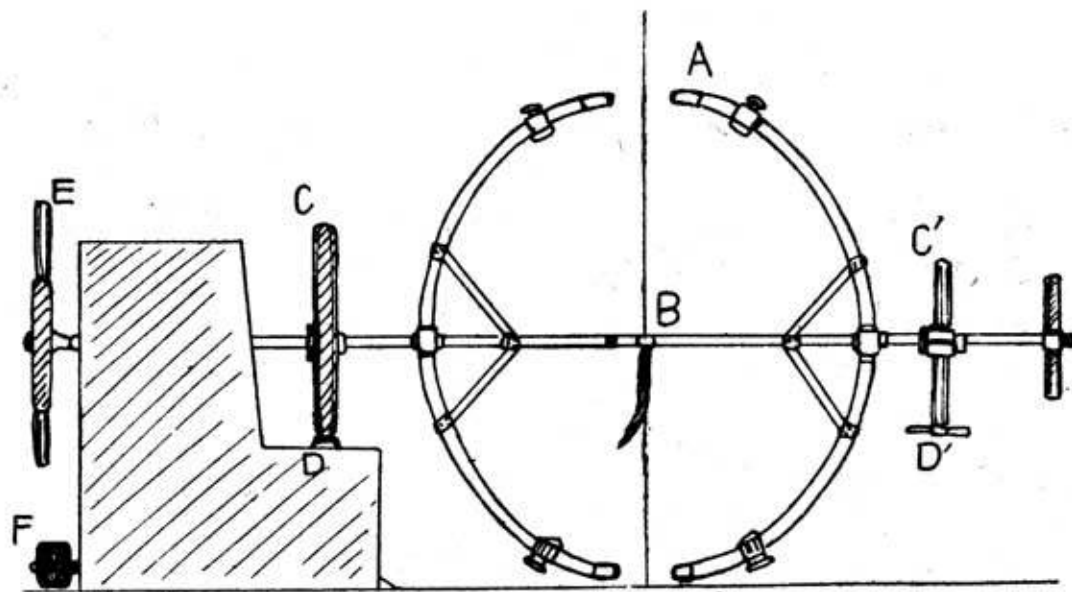
申しおくれましたが、室内はシャワー室を除き、普通の雨天体操場の如く床は板敷きで差支えありませんが、少年の入る鉄輪の下の部分一帯は、白いタイル張りとする可きです。(この理由については詳細記載されておりましたが省略いたします。―編集部―)

訓練の途中で禪の締め具合がゆるむ事もありますが、その時は、適当な位置で停止して、四肢は固定した儘で、禪をほどいて、又強く締め直してやる様に致します。更に此の「ボディビルマシン」は、前に申し上げました通り、鉄輪の上下を截断し、且つ鉄輪内の構造も極めてシンプルにしてありますので、少年の姿勢の良否、各筋肉の活動状況、或いは、禪の締め具合などを、種々の角度から、殆んど遮蔽物無しに観察又は矯正する事が出来、又、随時、各方向より、少年の表情姿態、又は

廻転の状況などを、シネフィルムに収めて記録する事も、訓練を適確に行う上には是非必要であり、此の「マシン」に依って始めて容易に行える事です。此の記録をトレーナーばかりでなく、その少年自身にも映写して見せ、改む可き点を発見させ、又指導する様に致します。少年の疲労が烈しくなつて来た頃に、廻転を停止して、四肢及び褌の固定を解き、シャワーを浴びせて汗や汚れを落させます。シャワーの代りに、冷水で正面又は背面より全身に「圧力注水」を行えば、「水治療法」などに知られる如く、血行を更に旺盛にする事が出来ましょう。シャワー又は「注水」を終つてから、少年をベッドに寝かせ、褌を取り除いて、全身マッサージを施して、筋肉の緊張をよくほぐします。殊に、廻転訓練を受けた後は、四肢の筋や神経が非常に無理な働きをしている事は明白ですからその部分一帯及び臀部等には特に充分なマッサージが要求されます。

此の様な場合、いろいろな体位をとらせる必要がありますので、ベッドの中は、十二分に広く作る事が大切です。(ベッドをエナメル塗りの手術台のようなものにした事も、前記の鉄輪の下をタイヤ張りにした事と同じくその理由を省略します。―編集部―) 全身マッサージが終り、疲労が完全に去つてから、新しい又は汚れていない褌を、きつく締め込

ボデイビルマシンの横断面



(正面) 片側

A=鉄輪 C C'=補助車輪 E=手動ハンドル
B=バー D D'=ローラー F=モーター

せんから。「山口式」のпатентを盗用侵害する気は更にありません。

―閑話休題、

此の訓練に適した少年達は、年令から言つて、極度に羞恥心の強い時期にある事は周知の事実であります。

況して運動も不得意で内気な少年の場合ともなれば、褌一つだけの姿や、撮影の為に全裸体にされたりする事は、大きな苦痛でさえあります。それ故、特に注意して、当事者以外妄りに入室を許す可きではありません。

然し、トレーナーが、如何なる少年に対しても手心を加えず、根気と忍耐を持ち続け、真に愛情の全てを傾注して訓練を施すならば、羞恥と不安で尻込みしていた少年でも、次第に進んで訓練を受ける様になるでしょう。

少年が入会当初に、イヤイヤ乍ら撮られた裸体の全身写真又は部分接写と、数ヶ月の訓練後、はにかみ乍らも嬉々とした表情で、カメラに向つた時の「それ等」とを、「スライド」などで拡大比較すれば、全身又は、各器官の著しい発達の歴然たる事に一驚を喫するに相違ありません。

多くの愛す可き少年達が、此の訓練を進んで受けて、健康で少年らしい美しい体軀を創る事を切望して已みません。(以上)

ませ、ゆるみがないかを確認してから着衣を許し、その日の訓練は終るのです。
―いろいろな珍案愚計を並べましたが、山口氏の独創的考案には、もとより比す可きものではありません。又単なる「試案」に過ぎま

< 文 献 紹 介 >

私のコレクションより



きち 庄 間 角
 吉 間 角

私の只今持っているコレクションの中で、本誌の読者に興味のあるようなものを選び、その中で出典の明らかなもののみ、適宜本文を引用して、御紹介したいと思います。

妻の実家の田舎の土蔵に疎開してあった分を、最近持って帰りましたので、その中から漸次抜書式に拾ってゆきますから、系統的に分類されておりませし、又、まだ持って帰っていない分も多数ありますから、同様の性

質のものが、後程になって再び現れるといったこともあるかもしれませんが、その点は御諒承願いたく思います。

尚、私自身の好みから一方的に選んだためこんなつまらないもの、といった非難を受けるものもあるかもしれませんが、それも併せて御諒承願いたく、出来れば編集部に於て取捨下されば幸甚に存じます。

穢感に就いて 本田生

〔変態心理、第五十四号(第九卷第四号)〕
 〔大正十一年四月一日日本精神医学会発行〕

クラフト・エビングの「変態心理」を読んでコプロラグニーの条下に、「ツインメルマンの報告によると、宗数的惑溺者で食物に糞を混じて食わせるものがある。或は患者が大便を喰い潰瘍のある足跡を吸うものもある」とあるのを見た。之によって直ちに私は、奇僧桃水の奇行を連想した。丁度桃水が天津から堅田に向う際である。一人の弟子が尋ねて追掛けて来てお伴を願うた。桃水は直ちに、「私とお前とは身分が違うから一緒には行けぬ。国に帰って寺を留守せよ」と命じた。けれども無理を推してお伴をした。道を進み行くと路傍に泥酔者の嘔吐物が沢山あった。之を見て、桃水は掌に掬いあげ、珍味でもあるかのように味うのである。弟子は唯一瞥しただけで最早嘔吐を催しそうだ。桃水は「一人で頂くのは勿体ないからお前も頂くがよい」といって、弟子の前にそれを掬い出したのである。「私は先刻昼食した計りだから最う沢山」と弟子は辞退した。で桃水は「それでは自分一人で……」と云って亦食べ始めた。弟子はたまらなくなつて遂に嘔吐した。それを見て桃水曰く、境涯が違うから嘔吐するのも

無理はない。然しこれでは一緒に行けぬから寺へ帰れと諭したという事である。この話から私は穢感に対し種種の事が思出された。

シベリア帰来者の談として、近頃の新聞に報ぜられた記事に、飢餓に類している露人達は、屠殺場に押しかけて遺棄された臓物を奪い合っているとか、嬰兒を殺して喰うとか書かれている。嘗て本誌にも餓饉の為め人肉を喰った例が出ていた。今之を人道上から論ずる事は止める。只人間は飢餓に類する事によりて穢物に対する感じが鈍くなる事を見ればよいのである。貧民窟の記事を見ても穢物に対して、余程鈍感になっているのを知るのである。

次に彼の糞便取りのお百姓である。彼等も日日の仕事となり、馴れる事によりて幾分鈍くされている様である。吾吾としても日に一度か二度は大便に行く、従って幾分鈍くされているかもしれない。兎に角糞便に対する時吾等は、第一に嗅覚に、そして形や色や触感等が伴って排泄物である点から厭う様である。で吾等が便所へ行き、お百姓が糞取りに行く際は、穢物に対する一種の禁止作用が暗示的に働いて、幾分穢感を鈍くさすのではなからうか。恰度湯屋で湯に入る時、衣を脱いでもそんなに寒さを感じない様に。

次に学校の寄宿舎の便所の落書を検べてみよう。嘗て某新聞に出ていたものに、「放屁

百遍胃自通」とか「心して散らすな」とへ菜の花」とか「長糞や蠅の手踊り興じつつ」とかあった。之等によって見れば、糞便を觀賞？し美化している。更に旅館などの便所には多く猥褻の記事などが書いてある。いずれにしても臭穢の感は余程禁止されている様に思われる。それだけ心が外に向いているから。最初入る際はどんなに穢いかという予想を懷いているが、愈々籠中の人となれば、案外平気である。そして美的觀賞の対象にさえせんとする気分になる。

次に禁厭と云う様な意味に於けるものである。加藤衣智氏は「宗教学」に、「三河地方にては真宗本願寺の信徒が法主の燥浴せし湯水を請い来りて之を飲用し、其中に疾病を癒す所の呪力ありと信ぜりと伝う。若し仮りに其中に法主の陰毛等あれば、之を呪物として保存するという。又相模三浦半崎の杉輪村にては、女の陰毛を以て虎魚にさされるときそを癒すの呪物に供す」と云って居られる。尚甚しいと思われるのは、嘗て河口慧海氏が修養世界に、「西藏の紅帽派仏教」と題して書いて居られたものである。其の中に「牧師は其の曼陀羅會上の主となつて、衆人稠坐の中で交合し、剩え其他の者は、それによって得た精液を少しずつ飲んで、知識の種子を獲得するのだと云う」とある。今日斯の如き事があるや否やは別問題であるが、かかる場合

に一種の苦樂に対するが如き嫌厭の情はあるであろう。然しそれに対する信仰の程度が強くなれば強くなる程嫌厭の情は薄らいで行くであろう。従って穢感などは毛頭なからう。

次に癲狂院の或患者や幼児に見るものである。糞尿の中にあつて泰然自若としている。そればかりでなく自ら之を弄するのである。けれども他物より一層好んで之を弄すると云う訳でもない。けれども穢物に対しては無感覺無感情である。

更に一歩進むと真のコプロラグニーに至るのである。茲に於て穢物が崇拜の対象となり憧憬の対象となる。今、谷崎潤一郎氏の小説「悪魔」の一節を借りる。「考えて見れば彼の所謂樂園はなかなか豊富だ。足袋でも、下駄でも、手袋でも、まだ其他に鼻紙や洗濯物や密柑の皮の吐き出したのや、苟くも照子の体に触れた物は悉く之を樂園に移し植えて舌の爛れる限り。唇の腐る限り、其の香氣を貪る事が出来る。だんだん彼は壺中の天国を開拓して、芳烈な甘味をすすり始め、肝心の照子に対しては、一向直接の圧迫を感じたり誘惑に襲われたりしなくなった。」この樂園を有する者は病的であり変態者である。

以上雑然と、主に排泄物に対する穢感を述べて来た。之は私一個の感であり、之で尽きている訳ではない。もっと正確には、それぞれを対象に対する統計を取って、実験的に

は検べなければならぬであろう。尚此等が穢物に対する鈍感というよりも、比較的好感を持つてゐるのに対し、敏感をもつ潔癖症の存することを忘れてはならない。

出歯亀女学生

△長河龍夫著、獵奇風俗百貨店▽

〔昭和五年十月十日、赤爐閣書房発行〕

最初にこの「獵奇風俗百貨店」という単行本について述べますと、この本は、闇に咲く姥桜、淫猥なレビユー、怪奇なフィルム、桃色のエピソード、妖艶な年増美人、黴の生えたお惚気、エロ漫談会、痴体百面相、情花戯画、乱婚走馬燈、辣腕の高級美娼、シミのある貞操、等々の目次が示すように、アブ的な興味の内容はなく、むしろエロティックな内容が中心になっている。然し、次に紹介する「出歯亀女学生」という一文だけが、まあ価値のあるものといえましょう。

出歯亀女学生

牛込の若竹町の××湯の隣りの二階に貸間の礼が張られた。六畳、四畳半、賄付と書かれてあった。独身者のサラリーマンや、早稲田の学生が部屋を見に来たが、気に入らないと見えて其儘になっていた。或る日二人の専門学校らしい女学生が来て、部屋を検分したが、六畳と四畳半を二人別別に借りる事にし

て手金を置いて行つた。翌日の午後になると手車に二人分の夜具、行李、トランク、机、本箱、電気スタンド等等、山の様に積んで引越して来た。眼鏡をかけた賢そうな落着いた年上の女学生が六畳を取り、スポーツマンらしい丸顔の快活な女学生が四畳半に陣取つた。西南に窓のある六畳の女学生の方へ、隣室から毎晩遊びに来た。六畳の方からは滅多に遊びに行かないのだ。お互い机に向つて、独乙語の術語のちよいちよい目につく部厚な書籍を拵げて勉強しているが、やがて倦怠を感じると、六畳から声をかけた。

「来ない？」

「行こうとしていた処」

そして四畳半嬢は笑い乍ら這入って来るのだ。二人は小さなアルミの薬罐に湯を沸かして紅茶を入れて、通りの菓子屋から買つて来たスイートポテトを頬張り乍ら、睦し気に話合っている。四畳半嬢は机の置時計を覗くと笑い乍ら

「シネマを見ようか」

と、言うのだ。六畳嬢は、ふふふと笑うと四畳半嬢が手を伸してスタンドのスイッチを捻って電燈を消してしまった。暗黒な部屋を二人の女学生は忍び足で西窓の処へ行き、静かに戸を開けた。出張りの目隠しで遮られてゐるその向うにある×の燈が、ぼうと部屋へ流れ込んで来た。二人は目隠しに顔を付けて

(この間一行半空欄)

若い未婚の彼女等の鬱積する青春の血潮を徒らに高鳴らしているだけであつたが、彼女等は学校で聞く生理学や解剖学の講義より幾倍かの知識と興味を同時に得られて満足したので。四畳半嬢は学校で体操の時間に

「ねえ、下宿のシネマに誰か誘うか？」

「いけないわ、そんな事したら皆に騒がれるじゃないの」

六畳嬢は断乎として否決した。二人は到到学校を卒業する迄、その二階から動かなくなつた。彼女等は卒業して愈々下宿を引払つて故郷へ帰る時、下宿のおばさんはお別れだといつて御馳走した。その食卓で何も知らないおばさんは

「ほんとにお二人とも、碌にお世話も届かない処に、長く居て下すつたわね。妾の家から芽出度く卒業してお国へお帰りになるんですから、妾もこんな嬉しい事はありませんよ」二人はそう云われると少しくすぐつたそうに笑つた。

変態作家列伝 井東憲

△好色風俗史講座 第三巻▽

〔昭和七年五月十五日、風俗資料刊行会発行〕

最初に、「好色風俗史講座、第三巻」につ

いて簡単に述べましょう。口絵には、「姦婦の笞打刑」という泰西画、「男化女性と女化男性の標本」と題する十数葉の写真、「前方は性的崇物狂患者の蒐めた長靴、壁にかかっているのは性的に異常な芸術家達の描いた作品、右上から二番目の額は、毛髪崇物狂患者が蒐めた捲髪」と説明書きされた写真、「鞭打刑(性的児童虐待)」と題した四葉の写真「責めの蒐集(その一)伊藤静雨氏」「責め蒐集(その二)伊藤静雨氏」「責めの蒐集(その三)雪中の責めの場面」計五葉の写真が載っています。(関係の少きもの省略)

さて、「変態作家列伝」ですが、これはアラン・ポー、ドストエフスキー、モウパッサン、ボオドレール、ストリンドベルヒ、ワイルド、阮籍、李白、都の錦(穴戸鉄舟)、平賀源内、上田秋成の十一名について、相当詳しく述べています。余り長くなるところは適当に省略しながら左記に摘記してみましよう。

アラン・ポー

一、ポーの異常人格

近代のアメリカは二人の世界的詩人を生んだ。その一人は、純真で本能的な詩人ワルト・ホイットマンであり、今一人は偏異詩人エドガ・アラン・ポーである。アラン・ポーは、自国に認められず、却って仏蘭西のボオドレールに認められた。彼こそ「美の要素の

中に交哨の分子を混ぜんがために創られた」悪魔主義派の詩人である。悪魔主義派の御本尊のボオドレールの自画像は、一寸常人ばなれのした天才か、気狂いかと云うような顔付をしているが、ポーの御面相もどこかに凄味があつて、不健康的であつた。あの額の広い具合と云い、深い凝としてゐる視野の狭そうな眼つきといい、それに上から下り落ちた眉毛と云い、乱酒者らしい赤い鼻といい、無気味なだが厭に力強く引結ばれた唇といい、万事が病的である。

彼の精神的異常がボツボツ頭を拾げ初めたのは、彼が十二才の頃からだと云われているが、彼は既に其の頃から妙に高慢ちきで、手前勝手、利己的で、ひねくれた理窟屋だつた。従つて親身な友人は出来ず、只一人で思ふままな夢の世界に沈潜してゐた。そして勝手な妄想を描いていた。彼が初恋したのは彼が十三四の頃で、相手は彼の同窓者の母で自分よりも二十年も上の夫人だつた。其の夫人が突然死んだ時などは、大変に失望して夜な夜な恋人の墓へ訪ねて行つたという。それが彼の十五の時の出来事だから、ポーは性的には早熟だつた。それから、彼の数多くの色色な恋愛事件が始まるのだ。彼があのような飲酒家になり初めたのは、十六七才頃からであつた。もうその頃の彼は、一人前の不良少年で、酒は飲む、博奕は打つ、女は追い廻す立

派な意志薄弱者であつた。而も彼は親類の者共が相手にしない程傲慢で独りよがりであつた。彼が後半生を酒屋の卓子の上に酔いどれで暮し、所飲酒と女で一生を終つたのも、彼の情性としては当然としなければならぬ。ポーは十六七才頃から酒を飲み出し、乱酒の結果頭バルチモアの選挙場に倒れる迄、ずっと飲み続けたのである。そして其不断の酩酊と、熱烈な恋愛事件と、蒼勁い頽廢生活との間に生れたものが、彼の悪魔的な詩人なのである。又彼の詩の病的であるのは当然としなければならぬ。

二、その生涯

彼の家系——は十八世紀の中葉頃に、アイランドからペンシルバニア州へ移住して来た相当な車輪製造家であつた。彼の祖父ダイット・ポーは独立戦争に於てバルチモアの陣営総督をした。ポーの父は、祖父と同名でダイットと云い、若い時、英国の一女優に溺れて、自分も俳優となつた。ポーは彼らの第三子(末子)として生れたのだ。一八〇九年一月だつた。ポーの父母は、父に続いて母という順で、彼が四五才の時死んで了つた。で彼は六才の時、リチモンドの富裕な煙草屋ジョン・アランの所へ養子にやられた。其頃から彼は読書し、画に興味を持った。一八一五年には、英国に連れて行かれ、ラテン語、仏語、詩、運動、遊戲等を教えられた。十二才の時

リチモンドに帰り、ある古典学校へ入れられた。が彼は甘ったれっ子で仕様がなかった。彼の精神異常は、最早此頃から芽が吹いて来た。ポーは、一八二六年から、養父の別荘で家庭教師に就て勉強し、ヴァジニア大学に入学し、古代近代の各国語を研究した。此学校在学中から、彼の飲酒と遊蕩の癖がつき初めた。因って養父は立腹して、退学を命じ、自分の店で番頭代りに使った。が、自由奔放なポーはそんな帳場生活などには我慢が出来なくなつて、到頭生地ボストンへ出奔してしまつた。(一八二七年春) 其処で、其頃ボツポツ創り初めた詩を集め、第一詩集「タメルラ・その他の詩」として、一ボストン人という匿名で発表した。バイロンの影響を受けたものと云われる。同年五月、エドガ・アラン・ペリイと云う変名で、年も二十二と偽称し職業は書記だと云つて合衆国の軍隊に志願した。軍吏部の書記になつたポーは、二九年一月に軍曹になつた程忠実に勤務した。その二月養母が死んだので、一時リチモンドに帰つたが、養父の家にいるより、軍隊生活の方が面白いので、一年目の一八三〇年に、又ウエストポイントの陸軍の学校に入った。彼はここで第二詩集「アルアラフ、タメルラン及短篇詩」と云う前の詩集を改作したようなものを出した。六カ月余の軍隊生活のうち、又この練兵、夜番などの生活が厭になり、勤務を

怠つてわざと免職になつた。一八三一年四月ポーは同窓生の寄附によつて、ニューヨークに出掛けて行つた。目的は詩人になるつもりだつたらしい。ポーはこの恩を返すために、同窓の友にデジケイトした詩集を出したが、その才分を認めて呉れるものはなかった。そのうちに、養父は新たな妻を持つて彼を疎外し、ポー自身も金持になりたくないと言言していたので、自然と養家とは縁が切れてしまつた。其の後「パルチモア日報」に入つたが思わしくなく直き止めてしまつた。次には其の学校の助教師となつたが、これも面白くない非常な貧乏に苦しめられていた。一八三三年に「パルチモア土曜週報」が、百弗を懸けて散文物語を、五十弗を懸けて詩を募集するや、ポーは両方共当選する事に自らきめて二種投書した。ところが一篇しか採られない事情があつたので、物語「徳利から出た原稿」の方だけ当選した。これが彼の文人生活の門出となつたのである。一八四三年には養父が死んだ。彼は一寸出掛けたが、まるで犬のよう取扱われてしまつた。彼は生活のためボツボツ書め初めた。又、短話を集めてフラデルファイヤの出版屋に送り「ポリチヤン」「ハンスプフアル」等を書いた。又「ペレニス」を書いて南部文学儒者の編集者に知られ、毎週十弗の報酬で同誌の補助記者となつた。其当時の収入は全部で年千弗位あつた。それに

世評も可成りよかつた。翌一八三六年には十四才の少女ヴァーシニア(従妹)と結婚してニューヨークに出て来た。が、泥酔のために突然、「南部文学」を御払箱になつたので、新婦は下宿人などを置いて生活の足しにした。其頃彼は、ハパ社から「ナンチュケトのアサゴルトンビムの話」を出版した。三八年フラデルファイヤに移り、介穀学の解説の様なものを書いたりした。翌年ボストン紳士雑誌に入り、此処であの有名な物語集「グロテスクな又はアラビヤ風の話」二巻を出したが、未だ認められるに至らなかつた。四一年「ボストン誌」と喧嘩をして止め「グラハム誌」の編集局に入り「モルグ街の殺人」を連載して素晴らしい売高を示した。が、やがて又「自分は主人の御機嫌を伺う銀貨ではないぞ」と云うような事を云つて雑誌社を退社してしまつた。それから友人に頼んで官途に就こうとしたがダメ。彼は益々貧困した。其時、物語「こがね虫」で百弗の懸賞金を得たが、他の寄稿は大して金にはならなかつた。で、彼は詩の講義などをして歩いた。「米国の諸詩人及び詩」は其折の講義である。四四年ニューヨークに行き「太陽」に「バルンホリス」を出し、その後、「イヴニング・ミドル」に關係して、彼の一代の名作である「大鴉」を発表した。その時はポーをして一躍アメリカ文壇の最も著名な一人として、すばらしい好

評で迎えられた。其の詩は各所の雑誌に転載され、「グラハム誌」は彼の略伝を書いた。彼は今度は詩の講演者となり、アメリカの詩などを論じて歩いた。時の流行児ロングフェローを、「自分の詩の剽窃である」と罵倒したのも其の頃のことである。彼の詩集「大鴉その他の詩」は、イリプトナム会社から出版された。その時分の彼は、妻は病床にあるし、いろいろ不如意の事が出来たりしたので、少し頭の調子を狂わせて、情婦を拵えて歩いたり、酒を飲んで歩いたりした。又、彼は「ゴジイ婦人雑誌」に「ニューヨークの文士」と云う猛烈な批評を載せたが、その一文のために「ミロー」の記者が彼の人身攻撃をやったので、名誉毀損の訴訟を起して、二百二十五弗の損害賠償金を取った。一八四六年彼がフオルダムに移ってから、ポーの身体、精神は不断の貧困と過度の労務と失望との裡に段々衰弱して来た。ところへ、大きな不幸がポーの一家を見舞った。それは、一八四七年に彼の愛妻が六カ年間の肺病で死んでしまったことである。彼はその憂悶と絶望のために、盛んなデカタンとなった。朝から酒を飲み、鴉片を喫し、肉体的墮落の底に落ちて行った。この精神的肉体的懊悩の底で、彼はすっかり頭を悪くしてしまった。頭が幾らかよくなると、「ユラリム」「ユウレカ」などと云う詩を作った。又、子供の頃から興味を感じていた「宇宙創造説」と云う議論を発表した。これが講演会を開催して金を集め、「スタイロス」と云う雑誌をやるうとしたが、その計画は美事に失敗してしまった。一八四六年に、情婦シヨー夫人との関係が絶え、前の情人シエルトン夫人と握手しようとしたが、ホイットマン夫人からあたたかい短詩を貰って、すっかり気が変わり彼女と結婚することにきめた。ポーの方ではなかなか熱心であったが、彼女はその結婚を肯かなかった。その原因は彼女が大酔を止めなかったからだと言ふ。彼女はポーに心実な真を捧げて、ついに毒を飲んで自殺してしまった。ホイットマン夫人の最後の言葉は、「あなたを心から愛します」と云うのであった。彼は相変らず酒は飲み続けていたが、詩作も又熱心につづけていた。この頃の彼は、アメリカ全土で歓迎されたばかりでなく、フランスの詩壇にまで受入れられ騒がれていた。四九年には、有名な音律詩「鐘」を書き又二、三の作を書いた。が、出版屋の裡、金を支払わない不都合な奴があつて、彼を不快と貧困に苦しめた。それでも彼は、前から計画していた雑誌「スタロイス」を発刊しようと四方奔走して歩いた。その時分のポーは、亡妻の母クレム夫人の親愛なるお世話の中に生活していたのである。彼は自分の雑誌「スタイロス」の用件でリチモンドに出掛けた時ずっと昔の恋人シエルトン夫人と逢い、彼女

と結婚する事にきめた。ポーはそのために一家を挙げてフオルダムに向つて出発した。彼はその途中、あるバーに入り込んで例の乱飲をやり出した。丁度十月三日で、このバルチモアは選挙運動でゴタゴタしていた。彼はその運動者らに引張られて、いい気持で彼地此地飲み廻って歩いた。其の酩酊のために、彼は遂に意識を失つてしまい、ドクトル・スノグドラスに見えられた時には、もう人事不省の有様であつた。彼は到頭意識を回復しないで十月七日に死んでしまった。ポーの最後の言葉は「自分に本当の親友らしい事をしてくれるなら、ピストルを以つて、自分の脳髓を打つてくれ」という悲惨な言葉であつた。

三、芸術観について

ポーの芸術観の特異なる点は、彼の生活が病的に不健全であつたように、矢張り病的に不健全なところにある。彼の「大鴉」「アナベル・リー」「鐘」などを讀んでもそうであるが、ポーの詩の一特徴は、其の「個人的」「神秘的」なる所にある。そして又、彼の「個人的」はホイットマンの如く、「大我」を透しての「個性的」ではなくて、真の「小我」の意味に於ける「個人的」である。ポーは如何にも真正な悪魔詩人らしく、我々人間の心理の表面に浮んでいる憂悶や恐怖悲哀やを徹底した努力で、汲みつくし飲み尽くそうとした。そして、其の底に流れている唯美の世

界、なぐさめの境地を掘り当ろうとした。其処に彼の唯美的な芸術的境地があり、彼一流の「個人性」がある。

ポーは頗る勇敢なる精進を以って、彼の「個人性」心理の深奥の中から、此の不断に恐怖し、憂苦している現実的な魂の中から、本当の唯美、本当の安住境を見付け出そうと腐心した。彼の考え方によると、この不断に煩悶し恐怖し、苛立ち願えてゐる個人の魂の底にこそ、一道の光明あり、安住境があり、真美の世界が開けてゐると信じた。そして、ポーは熱烈な努力を以って、飽くまでも此の個人の現実生活を掘り下げていった。が、然しこの個人の魂の深奥を極めても、ポーの信ずる安住境、唯美境はいつかな見付からなかった。寧ろ益々憂苦は加わり、暗黒は深くなつて行つた。が、ポーはどうしても一縷の望みを捨てないで、身を以って現実の底、魂のなやみのケーオスに突進して行つた。其処に彼の近代的な苦悶があり、彼の「神秘主義」がある。従つて、彼の一特色とする「神秘的傾向」なるものも、単なる暗黒の神秘ではなくして、現実生活の深奥、——彼はこれに心身を以って當つて行つた——個人の魂のどん底を突きつめようとした。その蒼白い境界に於て発見した神秘である。この点が、彼の神秘が個人的、近代的と云われる所以であり、又生活其のものが既に芸術である所以でもある。

で、彼の芸術が幻想的、怪光的なるは、此の現実探究の過程に於て、ポーの心の底に燃える唯美と恐怖との不安なる吐息なのである。

彼の詩文が、病的、変態的、神秘的なるは、此の物凄い幻想、恐怖を、悩ましき悪魔主義調で歌つたからである。彼の傑作「赤き死の仮面」(一八四二年作)「陥穴と振子」(一八四三年作)等を読んで見ても、以上述べたように、ポーが如何に苦悶に懊悩に身心を浸らせ乍ら、唯美の詩境と、魂の平和境とを求めたか、且又、それはどれ程失望に終り、より悲惨な暗苦の底に落ちたかと云う事を、彼一流の幻想で表している。

ポーの一生は、正に病的な感激の爆發であつた。そして、彼の芸術は不安と憂苦との物凄い幻想の華で、唯美と安住を求めての、不断の焦燥であつた。が、これは彼の一面である。他の一面に於ける彼は、知的、反省的であり、科学的である。この点に、ポーの近代性を認めなければならぬ。

ポーの詩の特質は、音楽的、韻律的な所にある。それは彼の知的、反省的、唯美的な芸術観がそうさせたのであるが、又一面に於ては、彼の身体的要素も忘れる事が出来ない。彼は旋律の天才と讃えられただけに、彼の耳は異状に敏感だった。しかも音楽的な習練がよく積まれていた。又、彼の臭覚と共に過敏だった。なればこそポーは、臭覚、聴覚、味

覚、触覚等を以って、彼の幻覚幻想をほしい儘に表現し、音楽化している。

ドストイェフスキー

肉体の勞働、財産の放棄、民衆の融合、これはトルストイが一生捧げてひざまづいた祈願であるが、トルストイにあつては、これらの熱心なる心身を以ってしての祈願も、単なる理想と終つてしまつた。然し乍ら、これらの諸条を敢て望まずして、寧ろ思いを得ざる運命で実行した人に、ドストイェフスキーがある。此の点に於ては不幸なドストイェフスキーも、トルストイよりはずっと幸福であること、メレジコフスキーが云っている。このドストイェフスキー(落ちぶれた貴族の子、一八二一年十月三十日モスクワに生る。父は退職軍医、少年時代に母と、つづいて父を失う。)は、種々な点でトルストイと比べられるんだ。

トルストイは、肉と靈の矛盾に悩み通した人だ。しかし、彼は心の人、靈の人である。絶對的に愛と神秘と直覺と現実の苦惱に生きる人である。又、この靈肉合致の真実の境に彼の第三帝国の理想がある。ここから、彼の世界的愛、人類宗教、未来の地上が存在するのだ。ドストイェフスキーの歩いて来た路こそ、まったく、真愛と熱情と歎歎の世界でなければならぬ。靈的革命家の苦しい棘の路

である。そして彼の第三帝国の理想の、この地上に実現された時こそ、この闇黒な呪われた地上は、正しく人間的な光栄の地上となるのである。が、人類は俱に、もっと悩むだろう。「自己浄化の人」「愛の人」ドストイェフスキーは、数多くのいろいろな病症を持っていた。——曰く、二重人格、貧窮、——正に不合理な社会と不幸な個人との病氣だ——神聖なる病氣——癲癇、変態性欲、幻想、肺氣腫、ノスタルジャ、狂信、強迫、観念、意志薄弱、その他、彼の創作「悪霊」「白痴」「カラマゾフの兄弟」「死人の家」「一作家の日記」等を通じて見たならば、それら諸作の主人公なる「作者自身」はどれほどの病症に悩んでいるのか知らない。又、ドストイェフスキーほど、社会の暗黒と異常心理と、病的人間性とと、現実的に明確に描き得た作家はない。犯罪心理、変態心理の描写などは、メレジュコフスキーなどをして「彼は全く不思議な直覺を持っている。あれだけ皆体験したのであるか？」と驚嘆させた程、的確で真実そのものである。「死人の家」のアレキサンダー・ゴリアンチコフ「罪と罰」のラスコルニコフ、「白痴」のムイシユキン公爵「賭博者」の主人公「悪露」のスタヴロオギン「カラマゾフの兄弟」の父、兄弟達等を見れば、彼が如何に、偉大な「人間の魂の直覺者、現実社会の深刻細緻な体験者」であるかと云

う事がよく窺われる。以上の諸作だけでも分る通り、彼は一種の好奇心と深刻な洞察力とを以って、犯罪人、白痴、恥漢、売春婦、破廉恥漢、等を描いた。これらが、彼の作品の重要な主人公であった。

彼の所謂「神聖なる病氣」とは有名な癲癇性発作の謂である。全く彼にあつては、この発作病は「神聖なる病」であつたのである。精神医学者の癲癇についての説は「この疾病は臨床的実験者の觀察を綜合して考えてみると、大脳皮質の局部的刺激に起因している。そして発作の時間の短い時もある、長い時もある。が要するに大抵間歇的であつて、變質的基礎の上に発している。遺伝的なものあれば、酒精に因るものあれば、また頭蓋の障壁によつて起るものもある。斯如くして天才の創造力は、癲癇性に属する變質的心象の一つの現象と見る事が出来る——」と云うのである。又この癲癇なるものは、かの靈感的モメントと頗る類似していると云われている。

ところで、ドストイェフスキーの癲癇は、遺伝であろうか、或は、後天的な現れであるうか。

貴族出身の医員を父として生れた彼は、生れたその瞬間から「兄弟は多く生活は極く困難」であつた。が、別に父にも母にも癲癇の発作はない。ある彼の研究家に云わせると、彼の発作の原因は「幼年時の家庭の悲惨」か

ら得たものとしているが、彼自身は、一八四九年十二月——二十九才の時、——時の政府に向つて革命的反逆を企てた為、シベリヤはオムスクに流され、四年の地獄の底のような生活を送つたためだと云つてゐる。そして其の病氣は六一年に赦され本国に歸つて来てからも、また過勞と貧困と病魔の責め苦の裡に八一年二月九日に最後の息を引取るまでもたゆまず續いて彼を苦しめた。

ドストイェフスキーが、初めて癲癇性発作を見たのは、彼がシベリアに悲惨な暗黒生活を送つてゐた時であつたことは忘れてはならない。彼が二十七才の青年期の真只中に於てであつた。

シベリアの空は、いつも狂人の眼玉のように、ぼんやり灰色にぼやけていた。そして、彼らの放り込まれた牢獄は、実に悪虐と圧迫と獸性とのどん底であつた。冬の中は、思うだに恐ろしい程の酷寒と絶望と、凍傷と不斷に斗わねばならなかつた。春が来た。薄雪を突いて青い芽を吹き出す小草のような希望は牢閉された彼らに取つては、実是一種の呪うべきしもとでなければならなかつた。ついに夏が来た。と、牢獄の中は宛らの癲狂院と化してしまつた。秋が来た。と、ひとしお本国を愛するドストイェフスキーは、血のような涙を搾つての、ノスタルジャに攻め立てられた。

彼はシベリアの悪虐な「生きながらの棺」のような生活を「死人の家」の中に恐ろしい程現実に描いている。その小説の中に癲癇の発作の刹那が描かれている。

「このような刹那がある。それは僅か五、六秒の間に過ぎない。其の時君は忽ちのうちに永遠の調和の實在を感じるのである。此の現象は地上に起るものでもなければ、天上に起るものでもない。それは一種名状す可らざるもので、人間が肉体を有している間は、到底其れに耐えられそうもない。この肉体の変化するか、或はまた死ななければ充分に経験することは覚束ない。それははつきりした。何と云う事も出来ない感じである。忽然として君が大自然の本体とタツチしたような感じであらう。——神が世界を創造した時、彼は創造日毎の終りに『然り、こはまことである。こは善き事なり』と云った。それは傷しい心持でも喜びでもない。彼は此の世に恕す可きものがないから、何物を恕すと云うような事をしない。ああ此の感じは愛よりも更に高い。これが明確に現れて来る時は恐ろしい位だ。そしてやがて云い知れぬ大喜悦が心の底に湧き立って来る。もしそれが、五秒以上も続くなら、靈魂はともそれに堪え得ないで消失してしまふだろう」と。

これがドストイェフスキーの初めて感じた癲癇性発作だ。

又、彼が最も愛し、希望をつないでいた作「白痴」の中にも出てくる、之に依ると、其の発作が激しく起ってくる前に、「精神が全く銷沈して力が失われ、狂人のみ経験する事が出来る様な不安の中に、突然脳の底が熱くなる。活力が俄かに急力で現れて来る。生の感覚と實在の意識とが、此の突走る刹那に十倍も強烈になる。」

そして、其の瞬間「不思議な光が彼の心を照した。」それは「あらゆる疑惑と煩悩とを調和させて」泌静な喜悦に化さしめる力であった。しかもその力は、理性的なものであ

る。

加えて、この光の過ぎ行く瞬間に、彼は人間の最高の意識を感じ、最高の生命に到達した。この瞬間こそ、たとえ不健全な病的昂奮にしろ、美と調和との熱烈な祈禱のモメントなのだ。（「白痴」より）

斯くの如く、彼の癲癇の発作は、多くの天才達に見るように、「靈的感動」と不即不離の關係で現れて来る。而かもまた、以上の引例の如く、彼の発作は「美の祈禱」であり、「生命の飛躍」なのだ。そして此の五秒間程の瞬間は、彼の頭の中を「無数の思想と美しい幻想」とが、爆発するように飛び廻る。此の刹那に於てドストイェフスキーは「最高の人間」となり「最高精純なる生命力」を得るのだ。

実に、神聖なる病氣ではないか。彼はこの神聖なる病感を以ってロシアの民衆の靈魂を悩み、全人類の愛と平和とを悩んだのだ。

（以下次号）

『責め』の芝居雑考

本田 由 郎

浅草は、東京の代表的な下町の盛り場である。この浅草の劇場で上演された芝居の中の責場を書いて見ようと思う。先ず初め

に百万弗劇場。こゝは今、美人サロンに変わっているが、責めの研究の第一人者である伊藤晴雨氏の演出指導で、極めて迫力のあ

る責場を上演したことがある。

本誌昨年二月号に「お芝居の責場」という題で発表した一文も、この劇場のことで

ある。あの芝居の外に、『火責め水責めの女』という芝居が上演された。ストーリーは、悪旗本が美しい娘を自分の妾にしようと思うのだが、娘には二世を契った男がある。可愛さ余って憎さ百倍、というわけでお誂えの責場となるわけである。あわや娘が落花狼藉という折檻の最中、男が助けにきて悪旗本を斬り娘を助け出しパッピエンドとなるという、すこぶる定石的な筋だが、責場は中々迫力があり、或る程度満足させられた。

「お前がどうしても色よい返事をしないなら、庭を見るがいい」

と云って庭を見れば湯文字一枚にむかえた若い女が、今までどの様にひどく責められていたのか、長く垂れ下った黒髪は乱れに乱れて顔が半ばかくれている。戸板の上に大の字に縛られた湯文字の裾の乱れから白い足が苦しみに悶えている。

景が変わり、『火責め』の場面となる。十字に交叉した磔台が立てられ、腰に赤い湯文字をまとっただけの女が、数人の武士にかつぎ出され、十字になった柱に、足、手、胴と縛り上げられ、首をうなだれたまゝ客席の方へ真正面向いているので、女の全身はいやでも観客の目に晒される。

次いで娘が又数人の武士に手どり足どり

されて磔柱のとなりの立木に帯とり裸で縛られる。勿論後手縛りである。

「お前も強情をはると、こうなるのだ」

と武士の一人が磔柱の下に積んだ薪に火をうつす。この時、薪の中の赤電球がつき磔柱に縛られた女の身体を下から赤々と照らし出す。と同時に左右の赤ライトの照明が磔台に集中する。女は「うーう」と声を挙げて自由にならない身体を身もたえず。立木に縛られた娘にも青竹が振り下される。柔肌を青竹のムチで責められ、悲鳴を挙げる。磔の女と立木の娘の悲鳴と青竹の音が三重奏となって客席に流れてくる。

この責場が数分続くが、責めが最高潮に達したとき、救いの男が現れ、悪人たちを斬り倒して娘達を助け、幕となる。

次に極く最近、K座で上演された責場を簡単に書いてみよう。K座はアジャパーで有名な伴淳や松竹映画に在る桜むつ子等が一時いたことのある劇場で、今はストリップを上演している。ストリップとストリップの間に責場が入るのだ。「女の責め所」という景で、長襦袢一枚の女が三人、役人に扮した男の役者に棒で追われながら出てくる。初めの女は前手に、次の女は背に六尺棒を背負い、六尺棒の両端の手首を縛られている。三番目の女は後手に縛られ、そ

してこの三人の女が、三人共違った責め方をされる。

前手縛りの女は、白い羽で責められる。

この時、左右正面のライトが彼女に集まりその他の照明は薄暗くなるので、彼女だけが舞台上に浮き上る。役人の手にある羽を逃れようと悶える。二番目の女は背負った六尺棒を役人の棒で打たれる。その音が一種の責場の雰囲気をつくる。最後の女は後手縛りの縄を解かれ、仰向けに寝かされる。そして両足に縄をかけ、前に責められた二人の女の腰に一本ずつ縛り、左右に引かすのである。一種の「股裂き」の趣向である。中央の女の足は、次第に左右に開き始める。中央の女が助けを呼ぶ、すると左右の女が縄をゆるめる。役人は縄をゆるめた左右の女に、手を持った棒で責め叩く。二人の女は、その度に悲鳴を挙げながら仕方なしに縄を引く。中央の女は、縄を左右に引かれるので、両足が開かれて泣き叫ぶというところで暗転となる。

私達縛りマニアとしては、映画演劇に今より更に多くの責め場面が出ることを期待しているが、中々満足させられるようなものには出喰わさないのが実情である。同封のフィルムはK座で上演したときに私が撮影したものである。

梶井君の恋

真木不二夫

病院をとりまく木が、殆ど背の高い松なので、少し風が吹くと、いわゆる松風というやつが鳴る。聞き馴れるとそうでもないが、はじめのうちは、ゴウゴウザアザアという音に、どんなひどい風になったのかと驚いた。ことに夜など病舎の屋根を不気味にふるわせて吹いた。

その松林の中に、二三本の桜の木があった、今年の四月、ひどく寒かったり妙にあた taku なかったり、雨ばかり降って不順な春であつたが、それでも十日頃になると、八分程咲いた。

その花の下に一人の娘が立って、両手を胸に抱いて歌をうたっている。

「さくら、さくら、やよいの空に……」
という、あの極く古めかしい歌である。口ずさむ、というより、真剣な面持で、舞台に

立っているようなポーズで歌っているのが、ひどく不思議に見えた。私の姿が彼女に見える筈なのに、それでもその大仰なポーズをくずさない所が異様に思えた。

病室に戻って、同室の梶井君にそのことをいうと、

「ああ、そのひとですよ、タマコさん……」

「へえ、あれがタマコさんか、なる程ちよつと交つてる」

「でも、きれいな人だったでしょ」

「さあ、顔はよく見なかったな」

「今度いっしょに彼女の部屋へ遊びに行きませんか。女一人の部屋というものはいいもんですよ」

「タマコさんは個室かい」

「女性ホルモンが部屋中に溢れています。是非一度訪問すべきだな」

「まあ、ごめんこうむるとしよう」
「もったいないことを云う人だな」

梶井君は軽い肺浸潤でもう全快に近い。私はつい最近入院してきたばかりの、肺門リンパ腺炎という病名の患者である。病気では先輩の梶井君だが、話し合ってみると、大学では私の後輩ということがわかった。

「偶然ですねえ、大学の先輩後輩が、同じ病室で暮すなんて」

と、梶井君は無邪気に喜んで、それから私のことを先輩、先輩と呼ぶ。

「病院へ来て、先輩も後輩もないよ」と、私は苦笑したが、近頃珍らしい育ちのいい明るい青年である。

梶井君の父は大きな建築会社の社長さんで、その三男坊である梶井君は、いわば世間知らずのお人好しのお坊ちゃんである。家か

ら届けられる豪華なハムだのソーセイジその他ぜいたくな食物を惜し気もなく呉れるので、おかげで私は体重が増えたくらいである。小遣も豊富で、私など時折羨ましい気持ちで、彼の金の使いぶりを眺めたりした。

「タマコさんのことを皆がなんて呼ぶか知っていますか？」

「知らないよ、そんなこと」

「一病棟のクインと呼ぶんです」

「クインねえ、ふーん……」

この病院は一、二、三病棟と分けてあって三病棟は重症患者、一病棟は軽症患者、二病棟はその中程となつて居り、看護婦もその割合に、重症本位に配置されてある。私の居る一病棟は若い患者が多く、あまり看護婦が廻つてこないのいいことに、病院というよりアパートといった生活で、のんびりと自由なものである。

私は入院してから、終日読書にふけた。時折外へ散歩に出る他、他の病室に遊びに行くなどという気もなく、病棟内の噂は梶井君がもつぱら運んできてくれた。

○
その梶井君の噂話によく登場するタマコさんに、次に逢ったのは、体重測定の時であった。測定室へ行くと、私の前にやっているのがタマコ嬢であった。秤の上に載った彼女の後姿を、私はそれがタマコ嬢とは知らずに眺

めていた。(ずい分体格のいい女性だな)うすい寝巻一枚の女性の身体が、ねたきりの私にまぶしかった。

彼女がふいと振り返った時、私は正面から近々とその顔に向き合った。会釈して今度は私が秤の上に載ると、私の体重は彼女と全く同じだった。

私は病室に戻ると梶井君に、

「今、測定室で逢つたよ。しかも近々と御尊顔を拝しちやうた。」

「誰に逢つたんです？」

「一病棟のクインにさ」

「綺麗だったでしょう？」

「たいしたことないじゃないか。顔のまん中にソバカスがあつて、口は大きいし、眼も少し皺にらみじやないかな」

「かなわなないア、真木さんにあつちやア」

「色はちよつと白いね、それが七難かくしているかな」

「やつと一つ賞めたな」

「それに体格がなかなかいいね。あれで病人とは思へんな」

「彼女も病状は極く良いんですよ。もうそろそろ退院じやないかな」

「あのポリウムには、ほくも一瞬クラクラときたね」

「五尺三寸五十四キロ、あれでハタチですかね。恵まれた美しさですよ」

「ハタチかあ、なる程ねえ、日本の女性の体格もよくなつてきたもんだなア」

と、私は感嘆した。

○
私の隣の病室には、二十三才の横山という画学生が入っていた。気さくな性質でよく私の部屋へも遊びにくるが、梶井君はこの横山君をどうもあまり好かないらしい。芸術家らしく何事もあけすけで、無作法なところもある横山君に、育ちのいい梶井君はいつも煙に巻かれていた。油絵具、カンバス等部屋に持ち込み、ベッドの上で布団を絵具だらけにしながら毎日抽象画を描いている。

「全く図々しいからなア、横山君は」

と、梶井君が眉をひそめている。

「どうしたんだい？」

と、私が誘い水をかけると、

「横山君がね、タマコさんにね、モデルになつてくれたっていうんです」

「いいじゃないか。タマコさん喜んだろ」

「それが先輩、ヌードですよ、オールヌード」

「ふーん、それで？」

「ところがタマコさん、怒らないんですよ。」

「ニヤニヤ笑つてね、まだハタチになると寒いから、もう少しあたたかくなったら、ですって」

「ふーん、おもしろいな」

「おもしろくないですよ。あんないい加減な奴にそんな侮蔑を受けて笑っているなんて、タマコさんどうかしてますよ。ピシッと云ってやりアいいんですよ、ピシッとね」

私は梶井君の口ぶりから、横山君と梶井君が、一病棟のクインを張り合っているんじゃないかと察した。

梶井君が自分のベッドに居ない時は、必ずタマコ嬢の部屋に居るとみて、間違いはないそうさ。月に一回位不定期に回診する院長診察の時も、私はあわてて探しに行ったのが、タマコ嬢の部屋。ピンクのカーテンのかかっているなまめかしい窓。ドアをノックすると、女性の声で、

「ハイ」

「部屋の外から、

「梶井君来ていますか、院長回診ですよ」

と呼ぶと、今度は梶井君の声で、

「はいすみません」

頬を紅潮させて梶井君、出てきた。プンと女性の移り香がする。

私は嫉妬めいたなやましい気持ちになって、梶井君の火照った顔をソッとみ

た。

院長の診察が終ると、

「ねえ君、医者っていいなア」

「どうしてですか？」

「あのタマコ嬢のだよ、胸をだ

よ、ひらいて堂々と触れることができるんだからね」

「そうですね……」

と、梶井君、眉をひそめてちよつと溜息をついた。

或る日、れいによって梶井君はタマコ嬢の部屋に行き、画学生の横山君が私の所へ来て無駄話をしている。

「ねえ、真木さん、この頃梶井君大分タマコさんにイカれていますね」

「そうかねえ」

「梶井君は純情なお坊ちゃんだから、あんなズベ公とつき合っていたら、しまいにはどんな目にあうか判らないですよ」

「タマコさんはズベ公かね」

「ズベ公もいいところです。たいへんなしるものなんだから」

私は横山君がタマコ嬢の悪口をいうのは、彼女と梶井君の仲を嫉妬しているのだろうとは感じたが、梶井君のことも心配なので黙ってきいていた。

タマコ嬢の父は大分前に亡くなって居な

い、母と二人の弟妹が居て、一家の生計は、染物工場で働いている母親と、小さな商事会社で働いているタマコ嬢の給料でたてている、そんなことまで、横山君は私に語った。

「今までに男との問題は一つや二つではないんですよ。男にありたけの金を使わせるとサヨナラしちゃうんです。実をいうとほとくの家と彼女の家とは近所ですね、彼女のスキヤンダルなら大抵しつてますよ」

「なかなか近代的なスタイルしてるからね、男どもがワイワイ騒ぐんだよ。男がちゃややるから女もその気になるんじゃないかな」

「真木さん、梶井君に注意してあげなさいよ。金持ちのドラ息子とみたら彼女は骨までしやぶりますよ」

「まさか」

と、私はわらったが、思い当るフシもないではない。今後梶井君の様子を気をつけてみることにした

○

「タマコさん、熱発しちやったんですよ」

と、梶井君が心配そうな顔でいった。

「熱発？ どの位？」

「七度五分」

「せいぜい看病してあげるんだね。その熱発は案外君のせいかもしれないからな」

と、私は冗談でいったのだ



が、梶井君は、真剣な顔でうなずくのである。

それからというもの、梶井君は彼女の病室に入り浸って安静時間はおろか、消燈時間ギリギリまで、彼女につきそっているらしかった。

「オドロキましたねえ、真木さん」

と、横山君が這入ってきた。

もちろん梶井君は居ない。

「ねえ真木さん、ぼく今タマコの部屋へうっかり這入ってたいへんな所見ちゃった」

「ノックしないでかい？」

「どうもぼくはノックというやつが嫌いでした」

「近代人らしくないね、それで？」

「梶井君のやつね、タマコの足を洗ってやっているんです」

「……………」

「いや、それだけならたいした事じゃないんですけどね。そのポーズがですね、タマコはベッドに腰をかけて威張りくさって、足をこう、ヌーッと伸ばしてね、梶井君はまた、床にひざ



をついて洗面器のお湯の中に突っ込んだ足を、さも大切そうに洗っていやがるんですよ」

「なる程ねえ、クインだからねえ」

「さすがのぼくも、それ見てあわてて退散です」

「それだけかい？」

「いや、実はね、白く伸びた女の素足と、それを洗っている哀れな男の対照が妙に刺激的でね、悪いと思ったけど、タマコの部屋の隣室が空いているのを幸いに、そっと忍び込んで……」

「盗み聞きかい、どうも君の趣味もあまり上等でないな」

「オドロキました、梶井君、完全にイカれてます。もうタマコの思うがままですね。……カシ足きれいになったかい？ とこんな調子です。すると梶井君がね、ハイすっかり綺麗になりました。カシ、拭いておくれ、はい……」

「君は絵だけかと思ったら、声帯模写もやるんだね」

「タマコさん、このおみあしにペーゼしてもいいですか？ あ

あ、かまわないよ。なめてもよろしう御座いますか？ ああ、いいよ。ありがとうございます。どんな味がするかい？ ハイ大変おいしいございます。どの辺が一番うまいかい？ ハイ指と指との間が一番よい味でございます……」

「おいおい、ホントかい」

「嘘だと思おうでしょうが、これが本当なんです。何しろぼくは壁に耳をあてて一生けんめい聞いていたんですから。あの貧乏人の小娘が、それこそ女王のように威張りくさりやがつて……」

と、私は溜息をついたが、横山君も嫉妬があるから誇張もあるのだろうと、半分程しか受取らなかった。

○

梶井君がどこからか大ヤカンを持ってきてそれに水を入れ、病室の電熱器にかけてお湯を沸かしはじめた。私は驚いて、

「なに始めるんだい、そんなに湯を沸かして？」

「洗濯するんです」

「洗濯？ だって君は毎週必ず家から女中さんが来て取り替えてくれるじゃないか」

「ぼくのじゃないんです。タマコさんのです」

「……………」

「彼女まだ工合が悪いんです。彼女は家庭の事情で、家の人に洗濯をやってももらえないか

ら、今迄自分でやっていたんです。けれども少し熱があるから……」

「然し、君だっていくら退院が近いからといって、ここに居るうちは病人なんだから……」

「いいえ、いいんです。自分が好きでやっているんですから」

と、云われると、私にもそれ以上は発言できない。

彼女の部屋から、こっそり汚れた衣類を運ぶと、梶井君は病室の洗面台でジャブジャブやりはじめた。

「真木さん、すみません。洗濯場でやると、他の患者の噂になってうるさいものですから」

と、云い訳しながら、馴れない手つきで石鹼をゴシゴシやっている。私はなんとも妙な気持ちで、馬鹿らしいやら哀れになってくるやらで、そんな梶井君の様子を眺めていた。ちよつと注意してみると、どうも女性の下ばかりしいものもある。

「ねえ、君、梶井君、それ、今すすいでいるの、女性のパンティじゃないの？」

と、きくと、恥かしげに頬を染めて、

「ええ……」

「ふーん」

と、私は感心した、梶井君のタマコさんに対する愛情が、なんだがバカに純粹で、尊いような錯覚に襲われたのである。……

その後、私は横山君から、タマコ嬢の熱は平常に戻ったと知らされたが、梶井君の洗濯はなおも続いた。私もなれてなんにも云わなくなつたが、梶井君は時折、タマコさんの汚れ物を顔に押しあてて、じつと何かを考えているふうであつた。私は最初、彼が彼女と喧嘩でもして泣いているのかと思つたが、そうでもないらしく、しばらく汚れたパンティを顔に押しあてて居たかと思うと、急に我にかえて、忙しそうに洗いはじめるといった調子であつた。呼吸器病の患者は服用薬の関係で、分泌物が黄色くなり、したがって直接肌につける下着の汚れがひどいのである。とりわけパンツ等は黄色い汚れがなかなか落ちないで患者は弱るのである。私は梶井君のそんな行為を、汚ないな、と思つたが、それも愛情の深さのような気がして、冗談も云えなかつた。一つには、近頃の梶井君の様子に、一途なひたむきなものがあつて、下手な忠告は彼に反感を覚えさせるだけであつたからだ。

彼が内緒にしていたその洗濯も、ひまな他の患者たちに知れないわけではない。噂はひろまつたが、よくある病院内の患者同志の艶聞の一つ位に考えて、梶井君が女の体臭や垢にまみれた下着の匂いをかぐなどという好奇心なことまでは、誰も知らなかつたらしい。

○

「ねえ真木さん、ぼく、タマコさんと結婚し

ようと思うんですが……」

と、或る夜、消燈後のまっくらな中で、私は隣のベッドの梶井君から相談を受けた。

「さあ……」

と、私は返事に困った。私は実際に彼女を知らないし、まさか横山君の蔭口だけで彼女を判断することもできない。

「残念ながら、ぼくには彼女が君に適しているかどうか、はっきり判らないけど、君も最高教育を受けている人間だから、恋愛するにしても理性的に、たとえばタマコさんを観察するにしても、アバタもエクボ式でなく、なるべく客観的な眼を働かせて、冷静に彼女の人格を知るようにして、立派な恋愛をしてもいいな。結婚という問題は、まず二人が病院を出て、君も学校を卒業してから実際的な問題になるんじゃないかしら」

と、常識的な答をするより他に無かった。そして私は、日頃気にかゝっていた事を、このチャンスに云ってみた。

「金持の伴の君から、金や物をまきあげようという女性も無きにしもあらずだからね、いやタマコさんがそうだというのではないが、女というものは、大体ゼイタクに心を惹かれる傾向があるから、自分では愛情本位だと思っただけでも、よく考えてみると人間よりも金品に魅力を感じる女も案外多いという事さ」
私は梶井君がタマコ嬢にかなりの金品を贈

っているのを察していた。最近ことに父や母に金のせびり方がはげしくなっている。家の者たちも、病気で可哀想だということで作をあまやかして、彼の望み通りの金額を与えるのである。金品あわせて一万円近くのものである。毎月彼女に贈られている様子であった。

「いや、真木さん、そういいですけど、ぼくはタマコさんからそういうふうな請求されたことは一度もありません。みんな、ぼくのほうから……」

と、さすがに梶井君は照れて黙った。私は苦笑した。そして、やはり、純情な梶井君はあぶないな、と思った。

それから二三日たった或る夜、消燈時刻近く静まりかえった病棟の便所で、私は尿器をさげた梶井君をみた。尿器には当然のことながら、黄色い液体が半分程入っていた。その尿を便所に捨てにきたのである。ひと眼みて私は、それがタマコ嬢のものだと察した。梶井君はちよつとバツの悪そうな顔をしたが、悪びれずに尿を捨て、また廊下を戻ってタマコ嬢の部屋に消えた。

部屋に帰ってきた梶井君に私は、
「彼女のおしっこまで世話するのかい、たいへんだな」

と、少し皮肉をまぜて云った。

「いやア、便所に行くのが面倒だと云うもんですから」

「然し、彼女のあれはなかなか澄んでいて綺麗だね。美人という奴はおしっこまで澄んでいるもんかね」

「それに、あんまりくさくないですね、むしろいい匂いがしますよ」

「まさか」

と、私はわらった。

「いや、ほんとですよ、汚ないという感じが全然しないんです、捨てるのがもったいないくらい……」

と、彼は意気込んでいった。

「それはそうと、あの尿器の口の所についていた妙なものは何かね？」

と、私は聞いた。尿器の口に黒っぽいヘンにプヨプヨしたリングがはまっていたのを思い出したのだ。

「ああ、あれですか。真木さんも、ヘンな所に眼をつけるんですねえ」

「男のシピンとは大分違うからさ」

「女性には男と身体が違うでしょ。スポンジ・ゴムで出来ていますからね。あのリングを使うと、身体にぴったりして工合がすこぶるいいんですよ。おおむけでも、横になっただけでも、坐っただけでも、ゴム製でぴったりしているから、外へ洩れないんです」

「ふーん、なる程ねえ。それで、彼女がそれをやっている時、君はどこに居るんだい？」

「うしろを向いているんです。でなければ、

手拭で眼かくしして、尿器を支えて持っている所へしてもらうんです」

「ふーん……」

そんな話をしているうちに、私も妙な気分になり、その時の姿態を想像していると、眠れなくなった。悪いことを聞いてしまった。転々として私も又、初夏の夜がなやましかった。

その次の夜である。

窓から月が青白い光を投げて、室内は螢光燈のような明るさだった。私はふと何か小さな物音をきいて眼をさました。真夜中である。そつと隣のベッドをみた。ギョツとした。眠っていると思った梶井君が半身を起している。手にコップを持ち、それを捧げるようにして月光にすかしてじつと見つめている。コップの中には透明な、しかし少し色のついていいるらしい液体が七分目程はいつている。それをすかして眺めている梶井君の手は思いなしか少しふるえ、眼は異様な輝きを帯びて、吸い込まれるように液体に注がれている。と、みる間に、梶井君の上半身が、すつと動いて唇がコップの端に触れた。と、また、そのまま少し動かない。ためらうような気配がみえたが、ぐいとコップは傾けられ、液体は静かに梶井君の口へ流れた。彼の喉がゴクリと動く。眼を軽く閉じて、いかにも味わうといった表情で、少しずつ、少しずつ、梶井君は

その液体を飲んでいく。コップを逆さまにして、最後の一滴を飲み尽した時、彼は眼をつぶったまま、ホッと溜息をついた。そして、舌をだして上下の唇をなめ、残り惜し気にカラのコップをまたすかし見た。

私は何故か声をかけることができず、身体を固くさせて、その異様なありさまを、じつと見ていた。梶井君のその動作は、私に声をかけさせるスキを与えない程、尊厳な雰囲気

○

松林の中の桜は、眼にしみるような青葉を縦横に拡げて、季節はもう夏であった。私は散歩の途次、その桜の下で、またタマコ嬢に逢った。もうお互いに顔だけは知り合っていたので、私たちはどちらからともなく会釈をかわした。

「真木さん……」

と、彼女は何かいいたげな表情で私の顔をみた。

「なんですか？」

「あたし、もうじき退院するんです」

「それは、それは、おめでとう。然し、残念ですな、あなたのような美人の姿が、もう見られないのかと思うと」

と、私はお世辞をいった。

「それで……」

と、タマコ嬢は口ごもって云った。

「梶井さんのことなんですど……」

「……………」

私は、ちよつと緊張して次の言葉を待った。

「私と梶井さんの仲、真木さんも或る程度は御存知だと思えますけど……。ちよつと親しくしていたんです。私は病院ぐらしの退屈まぎれの遊びのつもりだったんですけど、それが、この頃になつてあの人、結婚してくれなんて云い出して、私実は困ってるの、そりやつき合っていることはいけるけど、まさか結婚なんて、ねえ、あんな大学生なんか、私、たよりなくて困りますわ」

「……………」

私はどうも返事に困った。

「真木さんはあの人、先輩ということなんですから、あなたからよく教えて、私をあきらめるようにいつてくれませんか？」

「はあ……」

「私だつてもう何度も云つたんですよ。だけど、あの人、頭に血がのぼっているから判らないの。いくら親が金持だつて三男坊じやたかが知れているでしょ？ 結婚生活なんてドラ息子の子の大学生が考えているようなものじゃありませんものね」

「そりや、そうだがね……」

と、私はどうも圧倒されがちである。

「……君の召使いにでも何でもなる、君が別

の人と結婚したら、ぼくは召使になるから一生、君の側に置いてくれ、だって。そんな現実離れた話ってある？」

「わかった。ぼくからも梶井君によく話してみよう」

「お願いするわ、うまくね。あと腐れのないようにね」

と、彼女はシヤアシヤアと云うと、

「あらッ、毛虫ッ！」

○

〔読者通信〕

先日店頭にて復活した貴誌五月号を見つけました。一年ぶりに本当に嬉しく心よりお喜び申し上げます。と共に関後にも真面目な研究誌として御発展される事を切に切に祈ります。一年間、もうK誌もノーマアかとがっかりしていましたが、先日拝見してなつかしくすみからすみまで読みました。生きるよろこびを感じた次第です。表紙はピリツとくるあるものが、ありK誌らしく思います。どうか今後はますますよりよい、そしていろ／＼な方面のものを公平に発表して下さい。誰かが云っていた

様にK誌をはじめからアブノーマルと考え罪悪視するのはまちがっています。これらのグループの人々は皆善良な真面目な人々です。かえって他の人の方が心のきたない、いずる人の方が多いと思います。ではよろしく、
(兵庫FT生)

○

遂に実現した——四馬面伯の艶麗口絵「美貌の屈辱」開巻第一頁を飾った鼻責め！復刊後は口絵挿絵が少く、いさゝか物足りなさを感じていましたが、六月号には挿絵も多くなり元の活気を取り戻した感じで嬉しく存じます。特に鼻のフェチシズム記事等もなく淋し

それから四五日すると、タマコ嬢は退院した。若い男の患者たちはみんなゾロゾロ病院の玄関まで見送りに行った。大柄な身体を派手なワンピースに包んで、一病棟のクインらしい、にぎやかな退院風景であった。こうして梶井君は完全に失恋してしまったのである。

梶井君に見送りにも行かず、ベッドの中にもぐりこんで泣いていた。四五日の間、飯もろくに食べずに泣いてばかり居た。私の慰さめもさっぱり効果なく、痛々しい彼の姿を、手をこまねいているばかりであった。

「そんなにガツカリするなよ、タマコさんは

打算的なチャッカリ屋のつまらない女だよ」と私が慰めのつもりで云うと、
「その、打算的な、わがまゝな所がいいんです」

と、梶井君はムキになって怒るのである。然し、私は彼自身のためにも、これいいんだと思った。二十二才の青年の失恋の痛みなど、すぐ忘れることができる筈だ。そして、やがて梶井君も退院した。画学生横山君も退院した。私はまた、静かな読書三昧の日を送るのである。

(了)

い思いでしたが、四馬面伯の口絵で快哉を叫びました。美貌の女の鼻孔の描写は「深夜のホール」の女の小さく画かれた鼻孔にさえハイトをつけて心憎き描き方。その鼻孔がクリツプで虐待される「美貌の屈辱」は身ぶるいする程昂奮を覚えます。涙ぐんだ悲しい女の表情です。から、クリツプではさまれたら、恐らく涙水がしぼり出される筈です。そこまでリアルに描かれていたら尙喜ばしいのですが、それでは余りに醜悪になるでしょう？ 毎号、こうした口絵、写真、記事を必ず御挿入下さる様お願いします。(江藤恵夢)

○

画帖「時代物責絵巻」昨日確実に到着致しました。原色版が非常に美しく奇麗で、且つ非常に安価なのでおどろきました。保存版として実に貴重なものだと思います。最初申込みときには、どんなものやら半信半疑でためらっていたのですが、送って来られた実物を見て御社の良心的なのに感じいりました。これから、いろ／＼と変った趣向の分譲品を出来るだけ安価に頒布出来るよう企画して下さい。よろしく御願います。

(東京 安川稔)

『少年 禪 記』

山口 幸一

限り無い魅力を与える禪。締めている姿を見ても、自分で締めて見てもたまらない魅力を与えて呉れる禪。

一体私は何故禪に魅力を感じるのだろうか。先天的な宿命だろうか。後天的に培われたものだろうか。その是非は心理学者や医学家にまかせるとして、私は再び少年時代の禪日記を回想して見たい。

私が最初に禪に魅力を感じたのは八才の頃であった。

暖い九州の南の町に慈愛深い両親の間に長男として何不自由なく育まれ、尋常二年生として生長して居た頃である。

近所に同じ学校の五年生の少年が居た。夏の夕方は子供達は道路で鬼ごっこや何かやって暗くなる迄遊ぶのが常である。

その頃は洋服を着ている子はごく少く、皆飛白の単衣の着物のすそを蹴して飛び廻っていた。

その五年生の少年は小麦色の膚をして、健康そうな可愛らしい子であった。

ある日私達四、五人の少年達は小川に沿った路傍にしゃがんで川の中に浮かんでいる蛙に石を投げて遊んでいた。その時、その少年も皆と一緒に白い単衣の着物のすそをひろげてしゃがんでいたが、小麦色のもの間に真紅な六尺禪をしめているのを発見した。どうしてそんな小さな少年が禪をしていたのかは分らないが確かに赤い禪をきりつと股間に喰い込ませて、しかも何も気持悪そうな顔もせず平気で皆と遊んでいた。

私は少年の後に廻って何気なく手を触れて

見た。禪の後の結び目が単衣の薄い布の下に玉になって盛り上っているのが、手にはつきりとわかった。

その時、私はなんとなくその少年の様に禪をして見たいと思った。禪をする事が非常に気持良い様に思われた。或日、その少年はやはり飛白の着物をきてその頃流行していた「本艦、駆逐」という遊戯をしていた。

私はその子がまだ赤禪をしているかどうかを確かめたいと思ったが、着物の後からは結び目ははっきり分らなかった。

まさか前のすそをまくって見る事も出来ず何かの機会に見えないものかと注意していたその時、敵に追われたその少年は逃げながら石の上に立上った。少年は敵の方に氣をとられていた。突然、私の頭の中に実行の勇氣が出た。私はすかさず少年の足もとに倒れるようにして少年の着物のすその間をのぞき込んだ。

すらっとした太ももの間にはやはり先日と同じ赤禪を締めているのは、ほんの数秒の間だが確かに見る事が出来た。

私は着物の砂を払って立上ったが、それからと云うものは私はその少年がいとしくて仕方なかった。

私は毎日真紅の六尺禪一本の裸体になったその少年とやはり赤禪を締められた私と二人

で思う存分組み付いたり投げられたりしている事を想像した。

美少年の股間をきりりと被う真赤な禪は今でもありありと記憶に残っているが、私とあの少年とのつながりは、それ以後記憶にない所を見ると、そのまま少年はどこかへ去って

しまったのだらうと思う。

私は十一才になった。

私は既にその頃、帯を禪にして締める事に興味を持つ様になっていた。二本の帯を持っていて、一本は茶色の絹であり、一本は空色の絞りであった。絹の帯は薄くて重量感がな

く、締めて見てもあまり気持良くなかった。絞りの方は生地もやや厚くざら／＼していて締めて見ると腰や股間の感触はるかに刺戟的だったので私は好んで絞りの帯を簞司から取り出しては便所の中で禪をして締めてみた。

母が居ない時には、禪姿のまま座敷に出てきて、鏡に自分の禪姿を写し逆立したり転ったりしたりして様々な肢体を眺めて楽しむのが常だった。

しかし、時には危く母に発見されそうになった事もあった。

或時、何時も玄関から入ってくる母が、急に庭先から廻って帰ってきたのである。

大あわてにあわてた私は禪姿のまま着物を抱えと、あわてて便所に逃げ込んだ。

そして素早く禪を解いて着物を着て出て来たが、どうも後姿を母に見られた様な気がしてしばらく気になって仕方なかった。

又その頃、私は夜寝る時に猿股一つになって寝床に入るのが習慣だったが時々予め絞りの帯を床の中にこっそり隠して置いて、床に入ると、手さぐりで帯を探り当てると静かに猿股の紐を解いて帯を禪にして締めたこともあつ



た。そして翌朝猿股にはき替えて起き出るのであった。

しかし度重なるこの様な遊びが母に分らないで済む訳はなかった。

ある晩、何時もの様に帯を床の中に隠して置いて、床に入ってからそと手探りしてみたら帯が見付からない。両足で更に探したが無いので、とうとう布団をはがして畳の上迄探したが無かった。

帯は何時の間には母によって私の知らない間に元の簞笥の中に返されていた。その時、初めて私はこの秘密の遊びが母に見付かっていると云う事を感じ、耳が熱くなって恥かしさに悶えた。

それ以来、布団の中で禪をする事は勿論の事、帯を持出す事も気がとがめて出来なくなってしまうた。

私が一番望んだのは、黒の無地の帯であった。絞りや模様ものの帯は子供らしくて嫌だった。黒の無地のモスリンの帯が本当に少年にふさわしく凛々しく感ぜられた。

禪をするのなら、やはり無地でなければいけないと思った。

白禪は何だか大人みたいで、はずかしい。其の頃の十三、四才の少年の中には、時々黒い六尺禪をしている子が居た。夏水泳の時に使ったものを、そのまま年中しているのである。

私は町の風呂屋で、金ボタンの服と一緒に黒い長い布がくるくると丸められて脱衣籠に入っているのを時々見た。

そして浴場の中へ入ると、その黒い布の持ち主らしい少年を見廻したが、その少年が美少年の場合には自分の身体を洗うのも忘れて少年の動作に注目していた。

少年が上り湯を浴び外へ出ると、私も直ぐ後を追って出た。

湯気が上気して桜色になった美しい少年の伸びくとした肢体に黒い六尺禪が上手に締められて行くのを、余所を見ている振りをし、胸をわくわくさせてしつかりと網膜に焼き付ける様に見つめるのである。

夏の内は水泳をやるので町の銭湯の少年達も六尺禪姿が十人の内二、三人は必ずあった。だが、冬になると大抵はメリヤスの暖い猿股をはく様になるので禪姿の少年は殆んど見当らなくなる。冬も六尺禪をしている子は水泳の為ではなく年中禪を常用し、猿股やパソツをはく事がない少年である。

だから非常に珍しく恐らく数十人に一人位しか居らないのである。しかも美しい顔をした少年は数百人に一人も居らない。

私の住んでいた町は、人口五万程の町で小学校は五つ中学校が三つあった。

町のあらゆる銭湯で少年達の大勢集りそうな時刻に行くのであるが、一年の間で理想的

な少年、即ち美しい十四、五才の少年で、冬の間も六尺禪を締めている、つまり年中パンツの代りに六尺をしている美少年を四人だけ見る事が出来た。美少年でない普通の少年なら十数人は居た。

その内三人は黒い禪で一人が白の晒であった。

何れも風呂を出てくると直ぐ土間の籠の中から禪をとり出すと前に当てて足を広げ鏡に向って自分の姿を写しながら素早く締めるのであった。

私はこの四人の少年達の行く風呂と大体の時刻を知っていたので、その頃をねらって浴場に行くのであるが、浴室の中で目指す少年を見付け出した時は胸がドキ／＼する位嬉しかった。

やがて湯から上った少年は私の目の前で、禪を締める。

これらの少年は誰でも禪をする時は、少しはずかし相な表情をするのが常であった。殊に冬の間は他の少年達は皆猿股ばかりなので何か一瞬ためらう様な仕草をするが、やがて思い切って長い巾着に通すとくる／＼とお尻にはさんで締めて仕舞う。その様な少年の少しの表情の動きも私は見逃さなかった。

三人の少年は中学生でその黒禪は確かに夏に水泳の時に使用したものをそのまま使っている様だった。漁師町の中学生らしい少年は

昆布の様に固そうな何度も洗いざらしの黒禪をしめていた。雪の降った冬の日である。一人の白い晒の禪を使っている少年は特に印象が深かった。この少年は下地の浴場に来る少年で、その服装から見て職人の弟子らしかった。

十四、五才の丸顔の子供／＼した美少年であつた。この子は十四、五尺の長い晒を腹に四回位巻いてきりつと禪にして締めていた。

その禪はもう何日か締めたらしくシワが寄つていて薄くよごれている様だったので少年はそれを気にしているらしく外した禪を着物の下に隠す様に入れると、浴室に入つて行つた。

その当時でも白禪を常用している少年は非常に少かつたので、その少年の禪姿は今でも忘れずにはつきり覚えてゐる。いつも黒禪をしている少年の一人は特に十三才位の年少の中学生で美少年だった。正月にも銭湯でモスリンの黒い六尺禪を器用にしていた。

私は十二才になった。中学校の一年生として元気に毎日学校へ通つていた。

その頃、少年世界の小説でこのようなのがあつた。戦国時代の武将の亀井新十郎が幼年時代、城が落城して、忠臣に背負われて脱出する。家臣は漁師となり幼君が生長する迄扶育するのである。

或日家臣は新十郎を舟に乗せて沖に出る。

嫌がる新十郎の帯を解いて太い赤禪をきりりと締めさせると、抱き上げて舟からざんぶとばかり海中に投げ込む。泳ぎを知らない少年は水中で苦しんでもがく。すると舟へ引き上げ一息つかせて又、海中に投げ込む。何回もこうして荒修行させると何時の間にか巧みに泳ぐ事を覚えるのである。

禪一つの美少年が両足を前後に大きく広げて頭から先に海中に投げ込まれている口絵は美しい彩色で限り無い夢の世界の陶醉を私に与えてくれた。

其後私は町の銭湯に行く時、一番終りの頃を見計つて行つた。浴室には誰も居ない。番台の爺さんも引上げてしまつてゐる。

黒いモスリンの禪を手拭に隠して浴室に入ると、きりきりと出来るだけ固く締め込んで。私は湯の中に入ると仰向けに水中にひっくり返つて水中でとんぼ返りをやつた。

両脚を大きく広げ一回転すると鼻孔から髪の毛の臭のする汚水がのどをつたつて胃の中に入り込む。今度は水中に頭を突込んで逆立ちして後向きに水中に沈む。又思はず汚水を飲み込んでしまふ。とう／＼胸が悪くなつてしまつた。私は誰か逞ましい大人に禪をしつかり握られて逆立に湯の中に沈められたいと思つた。そして汚水を飲み込んで苦しみ最後には脱糞して禪を汚して溺れ死んでしまふ。と云う様な事を想像した。

様々な妄想と実演とでヘト／＼に疲れてしまつてから、やがて湯の中で禪を外し、しつかりしぼると手拭に包んで湯を出た。

私はその頃、黒い六尺禪を三本持っていた。家に置かれないので、之等は町外れの、廃屋になつたセメント倉庫の裏に隠して置いた。

私は禪がしたくなると一人で倉庫の裏へ行き取り出しては家の蔭で素早く締めるのであつた。時には禪がまだしめつてゐる事もあつて気持ち悪かつたが、一寸我慢して締め込むと体温で自然に乾いてくるのであつた。

時には禪をしたまま家へ帰り寝る時も外さずに締めてゐる事がある。昼の疲れでぐっすり寝込んだ私は夜中に自分で布団を蹴飛ばした事に少しも気がつかないで父母に禪をしてゐることを見つけられたこともあつた。

或る晩、布団の中で私は隣の室で話している両親の会話をきいて心臓がどき／＼する程驚いた。父母は私の癖をちゃんと前から知つていて疑問に思つていたのである。

「幸一は変な子で時々一人でまわしを締めてゐるのですけれど、どうしたのですしょう」それに對する父の声は低くて聞きとれない。只十銭のまわしと云う言葉がきこえた。私は息を殺して耳をすますと母の声がきこえてきた。

「それを幸一にもさせたら、どんなものでし

「うん」

その儘、親達の話は別の話題になってしまった。その頃、クロネコマワシと云う十銭の黒い三角型の水泳禪が少年間に流行し、夏などは簡単なもので平常でもはいている少年が多かった。私も勿論ひそかに買って持っていた。

しかし母にも妹にも禪姿は見せていないので、もし母から公然とクロネコマワシをする様にと云われて禪を出されそれを皆の前で締める云う事は、最大のはずかしさを伴うことなのでとても出来ない事である。

私は何時母に黒い紐つきの水泳禪を出されるかと毎日胸をどき／＼させて待っていた。猿股を毎日の様に洗濯に出して母がそれに困惑して洗濯の簡単な水泳禪をすすめる様に仕向けたが、とう／＼母はマワシを出して呉れなかった。只或時寝る前に寝冷えしない様に白い晒の腹巻を締めさせられたことがあった。

寝床の上に立った私は父が長い晒の布を腹に巻いてくれるのをじっとしていた。腹巻については私は別にはずかしさも快感も感じないので平気であった。

ところが突然、父はその布の一端を私の股から尻に廻して禪に締めようとした。あわてた私は「いやだ。それいやだ」

と叫んで逃げた。

父はそれっきり止めて、又腹巻にして巻いてくれたが、その時の私の表情の動きをためして見たのであろう。

私の禪に対する愛着と願望は益々強くなつて行ったが、それに比例して、それに反発する羞恥心は同じ量で増加して行くのであった。だから、理性が正常である限りは、求心と逃避心は何時も同じ強さで平衡を保っている。その願望する行為を自分から進んで行う事は出来なかった。

他人の強い力がはずかしさの逃避心をふみ破つて無理矢理に実行させない限り、その行為は永遠に陰の行為となつたであらう。

私は自分でその様な客観状況を作り上げる事を試みた。

つまり、どうしてもそうしなければならな

いと云う場面を人為的に設ける事である。第一の試みとして、風呂に入る時、何時も湯殿で着物を着るのであるが、わざと自分の部屋に着物をぬいで裸で湯殿に行った。私は猿股をぬぎ下の黒禪をとり、猿股は洗濯タライに浸けてしまった。もう湯上りの着衣は黒の六尺禪一つしかない。嫌でも私は六尺禪一本の姿で茶の間を通つて自分の部屋迄帰らなければならぬ事になった。茶の間には母がいる。いやでも禪姿を母に見られなければならぬ。

湯から上つた私は胸をときめかせて禪を出るだけ恰好よく締めるとそのまゝ、勇をこして茶の間に入つて行つた。戸をあける時、顔はすっかり紅潮して動悸は高鳴っていた。だが茶の間には母は居なく妹だけだった。尋常五年の妹は、初めてみた兄の禪に一寸びっくりしたらしかったが別にそんな事にあまり関心はない様だった。

「お兄ちゃんはまだで南洋の土人みたいだ」と軽く云つただけで読みかけていた本の上に顔を移した。妹の態度に軽い興奮と物足りなさを感じて私は自分の部屋に入った。何としても母が居なかったのは残念であった。

もし母が居たら何と云うだろう。

もし母が何も云わなければ、それで母に、自分が禪を常用している事を公認させる事が出来たのだ。私の知っている他の幸福な何人かの少年と同様に。

しかし、次からはもうその様な勇氣は引つ込んでしまつて母に禪姿を見せる事は止めた。

私の本当の偽らない気持は、「禪姿を他人に、殊に女の人に、特に母親に見られたい」というのであったが、然しその反面、「見られる事ははずかしい」だから「否応無しに無理に禪を締めさせられて、満座の中へ引き出される」という設定が私にとって最も好ましい望みであった。

(以下次号)

【新聞・雑誌】通信

奇妙な倒錯の恋、やがて女性べつ視へ移行

△日本の恋愛、第十三、南北朝—室町時代▽

(産業経済新聞四月二十七日朝刊)

室町時代の結婚観とは、およそ殺風景なものである。結婚とはただ相続人を生むための手段にすぎない。こういう思想が普遍化されてはじめてこの期にあつては、愛情は時には不義密通、無用有害とすらみられていたからまともな恋愛なんぞ、開花すべくもなかった。しかし、異例はあつた。ところもあるうに、南北朝北嶺をはじめ全国の有力な山門の奥で繰展げられた、妖しい倒錯愛欲の世界がそうである。山門に発祥した同性愛の風習は、山門だけでなく、女性から切り離されて戦野に生きる戦士の間にも移入され、戦国の世に至るまで、わが国愛情史上最大のソドム時代を現出し男女間にはみられぬすさまじい恋の執念をくりひろげたのである。

「秋の夜の長物語」という古書からその傾向をさぐってみよう。

後堀河院の世、西山に出た西上人という名僧があつた。天台学の奥義をきわめ、また武道の達人でもあつた。この人がまだ叡山の本塔の衆徒で桂海といった壮年のころの話であ

る。ある日、ひそかに考えた。自分は沙門の身でなお名利を求め、生死のつとめを怠る。浅ましき限りない。石山に参籠して一七日の祈願をこらす。

満願の日、まどろむ夢に眉目うるわしい稚児(ちご)があらわれた。それ以来、桂海は日夜夢の稚児に恋いこがれる。ある日三井寺の辺で雨やどりをしていると、房の庭に、夢そのまゝの稚児が実在しているではないか、しらべてみると花園の左大臣の息、梅若君という。桂海前後も忘れて梅若にラブレターを書き送った。梅若が色よい返事をくれる。かくて奇型の恋は成立した。ついに一夜、三井寺の房で恋の逢瀬をとげる。その後、桂海は山に帰ったが、想いに沈み病と称して引きこもってしまった。これをきいた梅若はさっそく見舞にかけつける。ところが途中、魔性の老山伏にさそわれて、釈迦嶽の石牢におしこめられるのである。三井寺では、若君失ソウに驚いて、さては桂海がかどわかしだと思ひこに叡山対三井寺の間に戦端が開かれ、戦の

すえ、三井寺三千六百坊のことごとくが灰と化してしまふ。一方、この変事をきいた梅若は悲嘆の涙にくれ、同じ牢にとじこめられた老人の助けで脱出に成功したが、父左大臣の家も、三井寺も昨日にかわる焼野原。梅若ついに世の無常を感じ、文を桂海につかわしてびわ湖に入水する。自殺ときいてかけつけた桂海の目には、ただ勢田の橋詰に残され彼女オツと彼のジユズと守袋が映ずるばかりであつた。桂海も続いて後追い心中しようとするが、人にとめられて思い直し、さびしく西山にひきこもつて、梅若のボディをとむらう。

のち、この物語の系統をひいて「鳥部山物語」「幻夢物語」などの稚児物語がうまれ、さらに実話の世界では信長と森蘭丸、家光、綱吉のソドムにまで系譜をたどることができ

る。この道の古典としては、平安時代の作の推察される天台の秘蔵本「弘児聖教伝(ぐじし)ようきようひでん」が稚児を持つための恋の手引書として今に遺っているが、ソドムの文学が白昼堂々と横行したのは、室町時代の特色といえる。おそらく鎌倉末期からうちつづく戦闘生活が、性を抑圧して倒錯へ追い込んで行つたものであろうし、やがてそれが女性蔑視へ移行する原因と関連が全くなかったとはいえない。

創作

女 拘 摸

十九世紀もあと三、四年でフィナーレの緞帳を降そうという頃。

ニューヨークの盛場マンハッタンを反り返る様にして歩いて一人の英国紳士があった。紳士はボウファット公。イギリスではかくれもない名流の当主だった。が、勿論こゝアメリカでは一介のエトランジエ。大勢の召使いも、四頭立ての馬車も、胸一杯にぶら下げる大量の勲章も必要なく、身軽な一人歩き、の気儘さを楽んでいる最中なのだ。

公のポケットにはイギリスでは持ったことのない大金が唸っていた。伝統で鑄固めた窮屈な社会的地位の拘束を逃れ、新大陸の「自由」を満喫出来て公は衷心から満足だった。けれども公は間もなく、その「自由」にも

誠に厄介な尾骸骨が附いているのだという事を思い知らされねばならなかった。

とある横丁で何気なくポケットへ手を突込んだ公は、忽ち顔色を変えて近くの警察へ飛び込んだ。

一瞬、ニューヨーク中の警察が色めき立った。訪米中のイギリスの上流貴族のポケットから大枚をそっくり掘り取った犯人が居るのだ。こいつを挙げなければ、まさか国際問題にまではならないまでも、アメリカ警察の威信にかゝわる事は確かだった。

中央警察署の拘摸係の古参刑事、ジエームス・マッコリンも此の情報を受取った。彼は陽灼けた顔で、ニヤリとほくそ笑んだ。

雪^{ゆき}俊^{とし}遙^{はるか}

「おいジミイ。バカに忙がしそうにしてどこへ行くんだ。何かあったのか」

玄関の所ですれ違いざま同僚のフレッド・パーヴユキンが訊いた。

「素晴らしいお客様を一人連れて来るからな。楽しみに待ってるよ」

マッコリンは第六街を真直に傍目もふらず歩いて行って、五十一丁目の角にあるジュリアの酒場へ入った。

ジュリア・バーリントンとは名高い女賊で、彼女の酒場はニューヨーク中の悪党の穴だった。二階には大きな賭場があり、拘摸。万引き。横払い。家尻切り。美人局……。凡ゆる職業の無法者が集まって情報を交換する仕組みになっていた。

マッコリンは酒場の隅の方に陣取って、まずそうにウイスキー・ソーダをなめながら、「お客様」を待った。

やがて一人の素晴らしい美人が現われた。

彼女は酒場中をゆっくり見廻し、マッコリンの存在に気がつくのとハッと顔になったが、直ぐ気を取直して嫣然と笑った。

「刑事さん御苦勞様。何かあったの」

「うん。アリス、一寸聞き度い事があるんだが、こんな店じや話も出来ん。その辺まで附合って呉れ」

何しろ悪者揃いの店だから、やろうと思えば刑事一人を叩き出す位わけはない。併しそんな事をやれば忽ち手が入って、折角のアジトも使い物にならない程やられてしまう。

そうと解っているのでマッコリンは大きな顔をしていた。又、そうと解っているのでアリスもおとなしく連立って外へ出た。

外へ出るや否やマッコリンのポケットから手錠が光って真白な細い手首に冷たい手錠が固く喰い込んだ。

「何をやるのよ。私が何をしたというの。」

「黙れアリス。貴様、偉い鴨を引掛けて呉れたな。今日の昼、お前が拘った大金の主はイギリスの公爵様だぞ。」

「変な言掛りをつけないでよ。私がそんなこと知るものか」

「ハハハハハ。まあよし。警察へ行ったら知

っていたということを思い出させてやろう」マッコリンは委細構わず手錠に附いた革紐をぐいぐい引張って歩き出した。

「ア、痛い。畜生。これを緩めて。緩めてつたら」

両手を揃えて前へ引かれた姿のアリスは、小さな声で悪態をつきながら中央警察署へ引立てられた。

マッコリンは昼間、前から狙っていたアリスが一人の英国人を踵け廻している所へ通り合わせた。

「もしもし失礼ですがポケットの中の物に御用心下さい。貴方は拘摸に狙われてますよ」仲々上品な紳士だとは思ったものの、まさか公爵とは知らず、マッコリンは親切に注意してやった。

反り返って歩いていた公爵は、威厳を傷つけられた不愉快さをはっきりと表情に出して刑事を振返った。

「余計なお世話だよ」

職業柄英国紳士の尊大さを多少は知っていたマッコリンも、これにはすっかり腹を立てて、そのまゝさっさと行き過ぎてしまった。

アリスは手錠を掛けられたまゝ刑事部屋の椅子に坐らされ、四、五人の刑事にぐるっと周りを取囲まれて責められた。

如何にしたたかな女拘摸でも、犯行直前の予備行動を見られている上に、こう大勢の腕

っこき刑事に責められては支えきれない。その夜も遅く遂に確かに自分が拘ったことを認めさせられてしまった。併し、金をどうしたかは言わなかった。アリスは一先ず牢へ下げられた。

翌日。

アリスは又手錠のまゝ刑事達の前に引据えられた。

「アリス。共謀者は誰だ。え、オイ」

下を向けば顎を擱んで上を向かされ、横を向けば髪を擱んで正面を向かされる。さうして刑事達は共謀者にこだわった。

カクトハリス バツジャイ
拘摸でも穴態(売春をタネに男を脅迫すること)でも板の間稼ぎでも、二人か三人が組んで仕事をするのが通り相場なので、アリスも拘った獲物を素早く共犯者に渡してどこかへかくさせたのだらうと刑事達は見当をつけていた。併しアリスは強情に口をつぐんでいた。

「畜生太え阿魔だ。よし、どうしても言わせてやるぞ」

パーヴユキンがいきなりアリスの上着を引っ剥した。次にスカートのインサイドベルトが緩められた。

「何をやるんだよう。私は女だよ」

アリスは大声を揚げたが、忽ち口を抑えられ、転がされて抑えつけられ、次々と着衣を脱がされた。ペティ・コートの裾をベリベリ

破いて猿轡をされ、黒いブラジャアに黒い薄手の小さなパンティ一つの半裸体にされてしまった。
民主々義の国アメリカでも此の頃は拷問がかなり公然と行われていた。尤もそこはレデ



イ・ファーストの国らしく、女の容疑者はよくよくの場合でなければ拷問にかけられなかったのだが。
被害者が被害者だからどうしても盗まれた札束は取戻せ。犯人が口を割らなければ身体

呻き声が洩れた。もう一声。今度は前よりも強く。三声目の呻き声と一緒にアリスの爪先は床を離れ、全身が完全に宙に吊り下げられた。
「ウーン。ウーン」

に訊いても差支えない。という命令をマッコリンは今朝受取っていたのだ。
アリスの方は、そんなこととは知らないから、その内仲間が保釈金を積んで出して呉れる。喰い込んだとしても多寡は知れている。あれだけの大金の有場所を白状しちや元も子もない、と思つて頑張つていた。

細い鉄の輪が二つ手首に通された。それを鎖でつなぎ合せて天井の大きな鉄の鉤に通すと、二人掛りでぐいぐいと引張つたアリスの身体は忽ち一杯に背伸びし、真白な足の裏を見せて爪先で辛うじて立った。両手は手首を縛り合わされた儘ぴいんと頭上に伸び、白い柔かそうな脇腹の張切った肉が激しくうごめく。猿轡の下から苦しげな

女の身体が、キシキシと軌る鎖の先に付けられて、高々と天井に届く程十分に吊り上げられる。一瞬の後、ガラガラと激しい音がしてアリスの身体は床をめぐらされてまっしぐらに落ちる。アワヤ床に叩きつけられて脚の骨が砕けるかと思う瞬間。二人の刑事が鎖をしつかと握り、アリスは床の上すれすれの所にぶら下っていた。

細い、輪廓のはっきりしたアリスの顔が蒼ざめて、苦しげに眉根を寄せ、目は細く斜めに釣上っている。

口を縛った薄い白布をほどいてパーヴユキンが訊問した。

「アリス。まだ白を切るつもりか」

「ウウウッ。誰が言うものか」

「強情な奴だ。よし、もう一責め行こう」

パーヴユキンの声に応じてマッコリンが再び鎖を引張った。

髪を乱し、ぐったりと首うなだれたまゝ、アリスの小肥りの身体は手首を上にならず吊り上って行く。

見守る刑事達の頬は紅潮し、目は異様にギラギラと光っていた。

二週間程後。

料理屋荒しの王と言われたロンドンのティム・オークスの所へ、蒼ざめやつれた華車な身体つきの背の高い娘が一人訪ねて来た。娘はティムに一通の書状を手渡した。

「親愛なるティム。

可愛らしい小鳥を一羽高飛びさせますから安全な籠の中にかくまってやって下さい。

此の小鳥はアリスと言ってさるイギリスの大官の私物を掏った為ニューヨークに居られなくなりました。

海の外へ飛ばすにはやはり貴方の所へ飛ばせてやるのが一番確かですから。お願いします。

ニューヨーク、ジュリア」

オークスを頼って来た者はたとえどこの国の誰であろうと、いつまでも高枕で寝て居られると、世界中の悪党の間で厚い信望を受けている。

彼は温厚篤実な紳士で、敏活という意味に於ても、端正という意味に於ても極めてスマートだった。

併しそれは悪の社会に於ける彼のジェキール博士だった。もう一人の彼。ハイド氏としての彼を知っている少数の女達は、彼を獅子の様に恐れ、毛虫の様に嫌い、豚の様に軽蔑していた。

彼は強烈なサディストだった。

彼のポケットにはいつも鋭利な剃刀が秘めてあった。それは時として商売道具にもなったが、多くは催淫剤に使われていた。

ロンドンの暗黒街に咲いた美しい女達を片

端から素っ裸にしてみれば、その何人かの丸いふくよかな臀部や大腿部や下腹部、時には脇腹や乳房にまで鋭い切傷の跡が、細い白い線になって残っているのを発見することが出来たろう。

それを知っていたジュリアは紹介状の中にも、わざとアリスが四日間、警察で残酷な処刑を受けたことはオミットしておいた。

アリスは、その日からティムにかくまわれた。その間にニューヨークでは、相棒のハリイに頼まれて彼女の保釈金を積んでやった、興行師でテキヤの一寸した親分でもあるトレイシイが破産してしまった。

保釈で出たアリスが裁判の日にも姿を見せないで、裁判長が彼にアリスの身代金を一仙も残さず払う様に命じたからだ。

身体はやがてすっかり回復した。夜半ふと目覚めた仮寝の床で、アリスは相棒だったハリイの逞ましい筋骨や飄爽としたティムの姿や、その他、ニューヨーク、ロンドンの暗黒街でふと知合った有名、無名の幾人かの魅力に富んだ男達の容貌を次々と思浮べて、切ない気持になった。

或夜アリスは夢を見た。中央警察署の長い薄暗い廊下を手押車に乗せられた一人の女囚が運ばれて行く。あゝ、ジュリア姉さんが今晩も拷問にかけられに運ばれて行くのだ。夢の中でアリスはそう思っていた。

車を押して行くフレッド・パーヴユキンが醜く歯を剥き出して猙獰な顔で笑っている。血の気の失せた顔に薄い赤毛の後れ毛を少し垂らし、後手に縛り上げられ、車の中に正座させられて目を伏せた姿勢の儘運ばれて行くジュリアンは、大年増とは言えいじらしい位可憐な姿だった。

車が停った。いつのまにかそこはもう拷問部屋だった。フレッドの手が伸びてくる。ジュリアンの衣類を剥き上げて行く。ジュリアはおとなしくされる儘になっている。ふと氣附くと車の上は鉄の梯子になっていて裸のジュリアンはそこへ俯伏せに寝かされた。白い腕。肩。背は厭という程脂肪が乗って、ムリムリと濃艶に盛上っている。

向うの暗闇の中から長い革紐の鞭を持ったマッコリンが影の様に現われた。拷問台の横に立ち美事なジュリアのお尻を、ビュッ、ビュッ、と鞭打ち始めた。

ジュリアは一言も声を立てなかった。

全身を苦しげに蠕動させ、打たれた個所の柔肌を激しく波打たせて拷問台の上でのたうち、くねるだけだった。不思議な事に幾ら革鞭で叩かれても彼女の豊かな臀は真白で、髪の毛ほどの鞭傷さえ出来ない。

責苦に悶えるジュリアはいつかアリス自身に変わっていった。声が出ない筈だった。彼女の口は固い革の枷をくわえさせられ、革紐で

後頭部をしつかり縛られている。両手両足はまるで木馬の様に梯子を跨いで下に伸され、麻縄で足許の杭にくくりつけられている。

ピシッ、ピシッ、ピシッ、ピシッ。

背中が痛い。彼女は呻いた。

拷問者はいつかハリーに変わっていた。懐かしいハリーが優しく笑い乍らアリスの背中で鞭をふるっている。

痛くはあったがそれは快かった。

彼女はじっと下を向いておとなしく背肉に食込んで来る鞭の痛みを耐えていた。

そのまゝアリスは覚醒した。

目覚めてもまだハリーに鞭打たれる快い気分が、彼女の心一杯に漲っていた。

暫くして、漸く彼女のマゾ的な気分は消えた。すると先刻迄の自分が酷く異様に思われた。どうしてあんな氣持に落込んでしまったのかしら。でもあんな氣持を味った事が前にもあったわ……。

そうだ。あの時……。トレイシーが身柄引取に来て呉れた時、彼女は留置場の暗い小さな独房に手錠を後手にかけられて寝かされていた。

前の日。柱につながれ、太腹や太股をびしびしと所嫌わず笞で乱打されて責められた。みづ腫れに腫れ上った二、三十本の鞭跡がズキズキ疼き、その痛さに転がされた儘、半分夢中で唸り続けた。そんな地獄の様な状態の下で不思議な喜びを感じたのだ。

その時の気分が今の夢の中の氣持とそっくり同じだった。それどころか、惨めな身体を柱を背にして立たされ、両手は背後へ廻されて、胸乳の下。下腹。太腿。膝の下。足首。

と太い縄でギリギリ縛られている時に感じた身を切られる様な強い羞恥とは別の、自分が自分がおしくして仕様がなない様な感じもどこかこれと通じている所がある様な気がする。アリスがこんな夢を見たのは此の時一度きりではなかった。二、三日経つと又同じ様な夢を見た。今度も始の拷問者は紐育の刑事だったが目覚める頃はティムに変わっていた。

紐育での拷問の体験とハリーとティムへの思慕とが夢の世界で四度、五度結び附いて、僅かの間に彼女はマゾ的な気分を身を灼き焦がされた。

アリスは乱暴に洋服を脱ぎ、パンティ一枚になった。その儘床の上に跪き、両手を後手にしてみた。白い太腿の肉はムッチリと固く締って丸く盛上り、自分でもうっとりする程美しかった。此の儘の姿で男の足許に跪いてみたいと思った。こんな姿でハリーにベルトでぶたれてみたいと思った。

いきなりドアが開いてティムが入って来た。「ア、ティム。いけない。いけません。こんな所へ入って来たりしては駄目」さっと頸まで赫くしてアリスは慌てて飛起きようとした。その手を掴んでティムは手許

へ引寄せた。

「アリス。僕は君が好きだ。前から僕は君を狙ってたんだ。今日はこんな素晴らしい所へ来合せたんだものおとなしく帰れるものか。」
「いけません、ティム。貴方にはベラ・フリー……。」

途中でアリスの口は白いクロスでキウウツと縛り上げられて了った。その日アリスはティムのハイド氏に始めて引合わされた。男の折檻に飢えていた彼女がティムの嗜虐の下で、息も絶え絶えになり乍ら喜びに身を震わせていた事は言う迄もない。

「ハリー。貴方は私にとってとても良い人だったわ。掏摸としての腕もいゝし、男らしくて女に親切で、とても義理固くて。紐育で私達が仕事の上の相棒であると同時に、恋人同志だった頃の楽しかった日々の事は私一生忘れないわ。そして貴方みたいな人が私の為に此の世に存在して呉れたという事をとても感謝してるわ。でもね、もう駄目なの。私はあのマッコリンの奴に四日間虐め抜かれて不具な女にされて了ったの、マッコリンの奴と、それからあの何とかいう公爵の奴なら、みつけ次第決して只じやおかない積りよ。でもハリー。健康な貴方と不具の私がもう一度一緒にいる訳にはいかないわ。貴方は自分の道を行きなさい。私は私に相応わしい様にこれから先を生きて行くから心配しないで頂戴。」

「アリス。お前の言ってる事はちっとも解らないよ。不具だ不具だって一体どこがどうなつたんだか。見た所前と何の変りもありやしないじやないか。一体どうしたんだい。」

「だから先刻から言えないと言ってるじやないのハリー。人には言えないことなのよ。」

「やっぱりそうだ、僕の疑った通りだ。お前はティムが好きになって別れられないものだから僕を邪魔にするんだ。それならそうとはつきり言えばいいじやないか。卑怯な奴だ」「えゝ？……。そうね。ハリー。貴方はいつも正しいわ。」

「何だい図星を指されたら急に殊勝らしく伏目になったりして。売女、そりや駆出しの僕なんかよりティムの方がずっと頼りにも金にもなるだろうよ。だけどお前がパクられた時僕がトレイシーさんを動かして出獄させるのにどんなに苦心したことか。詮議が厳しい中をあの金を田舎へかくすのにどんな苦勞をしたことか……。」

「ハリー、そんな事はお互様よ。私だって警察で吊るされたり、ぶたれたり、裸の儘高い棒の上を歩かされたり。それから……、あゝ恥かしいけど言うわ。お尻の下へ飛出しナイフを当てられたまゝ三十分も爪先で立たされたりさえたのよ。それでも貴方の名をとうとう出さなかつたじやないの。あの時、若し私がシヤベっていたらあんだって今頃

こんな所で人を捕まえて売女だなんて大きな顔で罵ってはられないのよ。」

「そんなこと。獲物を取返されたくないから頑張ったんだろう。」

「ハリー。貴方らしくもない事言って、私に厭な思い出を残させないで。」

「そうかい。解ったよアリス。さいなら。」靴音も荒くハリーはハイド公園を出て行った。あの人が行ってさう。もう会えないだろう。会わない方がいゝんだ。呆然としてアリスはハリーの後姿を見送った。緑の芝生を美しく彩った蕃紅花の薄紫色の花から発する強い香りがあたりに漂っていた。

秋も更けた頃ティム・オークスは実は警察の密偵なんだという噂がロンドンの暗黒街に流れた。アメリカから来た若い腕の良い掏摸がバスの中で警視庁の刑事の紙入を掏ったところ、中に、「シテイ・ロード古物商ティム・オークスへ報告すべし」と書いた紙片が入っていたと言うのだった。

ハリーの仕業だわ。あんなに怒って行つて了つたのにやはり私が忘れられなくて、よりを戻そうとしてそんな小細工をしているのかしら。それともティムが憎くて耐らないからかしら。何れにしろこんな詰らぬデマで、あの悪癖を別にすれば申し分のない立派な紳盗が、仲間の手で殺られる様な事にでもなつたらどうしよう。原因は皆私にあるのに。

アリスは一人で胸を痛めた。

ティムに言っても笑って取合わない。

「ハハハ。そんな根もない噂で此の俺の身に少しでも傷がつくと思ってるのか。俺よりお前こそ気を附けるよ。此の頃ベラの奴が感附きやがってお前をどこかにかくしてるとうるさく訊いて仕様がねえ。」

ベラ・クリイマンはホワイト・チャペルに店を持つ有名な盗品故売屋で、大分前からティムの愛人だった。

アリスの危惧に反してロンドンの悪者達の中にはデマに躍らされてティムをバラそうなどと考える者は一人も居なかった。ティムの方も噂の源を突止めて復讐しようなどとは毛程も思っていないらしい。アリスは安堵の胸を撫で下した。

ティムの「遊び」は益々執拗になって、此の頃では彼女を縛り上げたまま、途中で不意にふいと仕事に行つて了つたりする位だった縛られて転がされたまま、いつ帰るかはずきり解らないティムを待つのは不思議に快かつた。

紐育時代の鉄火娘もティムの鎖と鞭に教育されて、すっかり温和おとなしい淑かな女に変わった段々ハリイの記憶も遠くなった。

クリスマス近い頃、アリスは近所の商店街で買物をして帰った。買物袋の中から買った物を取り出していると、不意にはち切れそうな

男物の革財布がとび出した。一寸眉をひそめたが直ぐ思い当る様につこり笑うと中を改めて大切に藏つておいた。

二、三日後に一通の手紙が来た。

「アリス。

未練がましい真似をすると思うかもしれないが決してそうではない。

あの日はデカに追われたので突嗟に見掛けたお前の買物袋を貸して貰った。

今日。お前の後を蹤けて家は突止めたが、ティムが居たので黙って帰った。

獲物は返して欲しい。時日を指定して呉ればお前を訪ねる。併し若しお前が許して呉れるならイヴの十時にシヤンティ・ボブスのクラヴへ来て欲しい。話たいことがある。

あの日は結局パクられたが証拠がないのですぐ釈放された。英国の警察は紳士的だから僕等は仕事がい易くて有難い。ハリイ」

ボブスのクラヴは、悪党仲間と遊び好きな上流階級の人々しか知らない秘密クラヴだった。アリスがホールへ入って行くと待ち受けていたハリイが手を上げて合図した。

「よく来て呉れたねアリス。」

「話たい事があるというから、それにあんな別れ方じゃ嫌だったの。」

「いきなり財布が出て来た時には、驚いたる

う。」

「拘摸時代の事直ぐ思出したから驚きはしなかったわ。それに貴方じやないかって予感がしたのよ。予感というよりは希望ね。」

「じゃ僕と遇いたいと思つていて呉れたの？」

アリスは笑つて胡麻化した。

「ねえ。話たい事つてなあに。」

「もう一度口説いてみようと思つたのさ。」

冗談めかして笑い乍らもハリイの目付は真剣だった。すうつとその視線を外らせてアリスも冗談めかして言った。

「アラ、駄目よ、もうその話は」

その途端今度はアリスの目が光った。忘れもしないボウファット公が踊っているのだ。

「僕はね。お前がどうしてもティムと別れないなら一人でアメリカへ帰るよ。お前がよりを戻して呉れそうだったら、此の儘ロンドンへ落着く積りだ。お前の気持が訊きたいんだ」

「ハリイ、勘忍して頂戴」

アリスは思わず両手を乳の前で組んで哀願の眼差しになり、ハッと気付いてその手を下した。これはティムの前に跪いて彼の嗜虐心を一層強くする為にやるテクニクだったのだ。併し、アリスの哀しげな、いじらしい表情はハリイに思わぬ誤解をさせた。

「さようならアリス、幸福に暮し給え。」

ハリイは感動して立上り、一瞬上を見上げ

たアリスの顔を優しく見降すと、大股にホールを横切って出て行った。

その夜、アリスは久しぶりに酔った。もう一つ久しぶり半裸の踊子と踊り狂っていたボウファット公の懷中物を紙切一枚残さず掘り取ってやった。

「一寸お待ち。お前だろ？ 紐育から来たアリスというのは。」

ホールを出て来たアリスは、後から急ぎ足に追って来た背の高い女に強く手首を掴まれて引戻された。

ギョッとして心臓が激しく轟いた。「あ、貴女は？」

女はゆっくりアリスの目前に立塞った。四つの胸の隆起が殆ど触合いそうな近さだ。

「ペラ。ペラ・フリーマンよ」

「まあ。ペラお姉様ですの。」

言終らぬか否かの瞬間。アリスの頬は焼ける様に痛んだ。ペラの華車な右手で思いきり叩かれたのだ。

ライムの大きな掌で撲られるとは違った痛さだった。その一撃でアリスの心は完全に崩れた。

「お姉様？ フン。甘ったれるない。他人の男を横取りした女は、どんな目に遇うか位は心得てるだろうね。さ、私の所へお出で。」



ペラはアリスの片手を固く抑えたまま歩き出した。夢見心地でアリスはついて行った。手首と頬が酷く痛い。

ペラは店の中に密室を持っていた。それは

ティムの剃刀同様商売用であると同時にそれ以外の用にも役立っていた。密室は独房の様な感じの石造りの小部屋で窓一つなく、僅かに粗末な椅子が二脚とテーブルが一脚あった

扉に鍵を掛け、椅子、テーブルを片隅に寄せると、ペラは無抵抗のアリスを傍へ引寄せ、渠しげに薄笑いさえ浮べ乍ら恋仇の下着をゆつくりとはいでいった。アリスは壁の前に立たされ後向きにされた。

ペラの頬から微笑が消えた。目は陰しく光った。アリスのお尻には、算えきれない程沢山の細い剃刀傷が横に走って、古い物は白く光り、新しい物はまだ生々しい血の色を見て傷口の周囲の肉が盛り上っている。

テーブルの抽出しから細引きを出してペラは犠牲者をキリキリと後手に縛り上げた。両足も縛って芋虫の様にごろりと冷く固い床の上に転がし。白い布で猿轡も嚙ませた。

指の腹で尻の肉を撫でてみた。手触りは異状ないが、近くで見る傷跡は丁度剃刀で切られた部分が表皮よりやゝ窪み、その両側の肉

がはみ出した様にたかまって隠微ながらデコボコになっている。

ペラは両手で新しい切れ口の両側の肉を押え、ぐつと傷口を割った。癒着しかけていた傷口がパツクリと大きく開いて、血が滲み出て来るのを気持良さそうに眺め、又別の切れ口に指を当てる。

「ウーム。ウーム。ウーム。ウーム。」

痛そうに呻いて、白い大きな芋虫はピクリピクリ、ピクリと足を動かした。

ペラの頬は次第に紅潮し、それと対照する様にアリスの丸いお尻も血に染んで来る。

やがてペラは部屋を出て行き、棒の様に巾広く厚い革鞭を持って戻って来た。

「剃刀の数だけぶって上げる。いゝかい。」

ビューッ、ビューッ、と凄い音をさせて大きな鞭がアリスの膚を襲った。

アリスは口の中で悲鳴を挙げた。

もがきようにも細引で息も詰る程ギリギリと縛られているのでどうしようもない。

太い鞭は同じ大きさの太いみづ腫れをみるみる浮上らせて行く。

十も撲たれると、もう気が遠くなりそうだった。

お尻の剃刀傷が一体幾つあるのか知らないが、随分沢山あった事は確かだ。混濁したアリスの意識の中に、ふとハリイの笑顔が浮んだ。それから子供の頃のことや、ニューヨークの警察でのこと。オークスとの逢引のことなどがきれぎれに次々と浮んで来る。

ピシピシと鞭打ちはまだ続いている。

此のまゝ打ち殺されるかもしれない。そう思い乍らアリスは意識を失った……。

(おわり)

山

一 嶺 葉

ここは広東の郊外、
茫漠たる稲田と野菜畑のうちつづく風景を
東西に断ちきって
とある野道の
芒の穂かげに
野糞はおれの姿をそのまま
凝然と脚下に蹲っている。
朝まだき野草の青々潑潑たるを　ぐいと抑えて

ガッシリと大地に跨り
かすかに白く煙を吐き。
その堂々たる逞しさ！
愛すべき己れの分身！
ふと　おれは
その熔岩いろの凝然たるものの中に
われわれを哺くんで来た日本の底を流れる
火山脈の

告白

火 活

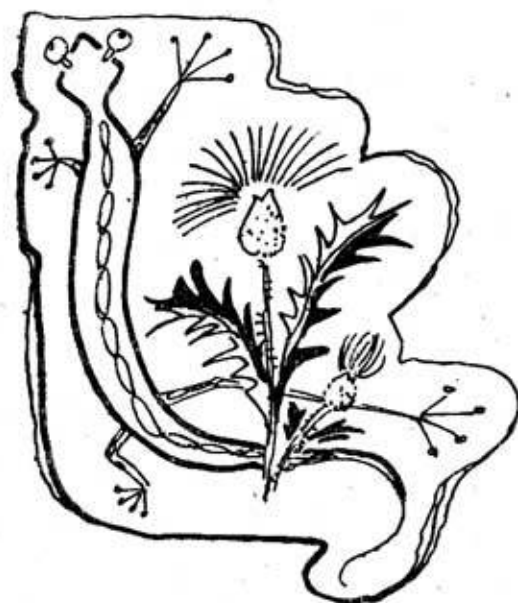
青

剣の尖をみた。

これは、「野糞」を主題にした、西村皎三の詩、「活火山」の中の一節です。この作者の持つ太いタッチが、悠々とした、不敵にさえ見える、兵隊の排泄を、実に生々しく描いています。軍服の下から遠慮なく露した、臀部の皮膚の鮮かな色や、いっぱいにあけっぴろげた括約筋から、メチメチと押出されて来る、逞しい糞。朝の空気に立つ、湯気や臭ま

でが、ありありとして来るようです。私が、野糞と兵隊を、結びつけて考えるようになったのも、この詩を発見したことからです。

私は幼時から、同性（年長の）の排便に、



異常な興味を持っていました。五ツ頃、友達の家へ遊びにいき、丁度その時、大便を済ました友達少年が、ズボン脱いだままで便所から出て来たのを見て、胸をドキドキさせたのを覚えていますし、うちに下宿していた学生が便所へはいると、ソツと外から様子うかがって（勿論見えはしませんが、かすかに聞える物音で中の有様を想像して）いたものです。

小学生の時、私は全く偶然の機会から、初めて大人の男の排便するところを、見ることが出来たのです。夏の終り頃、私は一人で近所の空地へ行って虫取りをしていました。すると突然、誰かがガサガサと草を分けてやって来ます。見ると、近くで道路工事をしてい

る土方です。草が深いので、彼は私に気付かぬらしく、立止ると、いきなりズボンと申又をずり下げて、しやがみ込みました。何をす

るのかは直ぐ判ります。私は息が急にはずみ出して、苦しい程です。四、五米は離れていたのでしようか。土方が去って、暫くしてから私はおそるおそる、大便の処迄近寄ってみました。草を踏敷いて、悠然とぐるを巻いている糞は、みるからに太く逞しく、あらくれ男の体から排泄されるに相応しい代物です。くさい臭も、私には決して不快なものではありませんでした。その事が忘れられず、私は毎日のように、夢い期待にひかれては、空地へ行きました。そして、ガツカリして帰る――そんな日が続いて、何時か秋も深まり、道路工事も終わりました。芒の穂の中にボンヤリ佇んでいた私は、先程からもようしかけている便意に、フト或ることを思付きました。私は俄に高くなつて来た動悸を抑えながら、四辺を見回し、人影の無いのを確かめると、手早くお尻を出してしやがみました。晩秋の風がヒヤリと肌にしみます。それがまた何とも云えない快さで、誰かに見付かりはしないかとヒヤヒヤしながらも、私は次第に恍惚となっていくのでした。

二度目に私が排便する男を見たのは、六年生のときだったと思います。一番下の弟を連れて、公園へ遊びに行った折でした。「ウン

「コ……」と弟が云い出したので、周章でて公衆便所へ駆け込み戸を開けると、丁度その中で、制服制帽の巡査が用便中だったのです。ハッとして急いで非礼を詫び、戸を元通り閉めました。その一瞬の間に、私の網膜には厳めしい警官の制服と対象した、巡査の肌と便が、クッキリと焼付いたのです。弟の面倒をみてやりながらも、私は隣の便所が気になつてなりません。胸は未だ早鐘を打つようだし、昂奮はたかまるばかりです。まもなく、バンドをがちやつかせながら、巡査が出て来たので、私は顔を赤らめ、

「本当に只今は失礼しました。急いでたもので、つい……」

と二再謝りました。

「いや、なに——此の戸は錠が毀れているんだ……」

肩巾の広い巡査は、気にもかけないようにそう云うと、大股に去っていききました。

昭和十五年に西村皎三の詩集「遺書」が発行され、その中からはからずも、「活火山」と題した一篇の詩を見付け出し、冒頭にも触れたように、それ以来は、将校を見ても、兵隊を見ても、遺瀨ない「排便」の連想に悩まされて来ました。

中学へ入ると、毎年秋には、「文展」を観る為に上京し、その時の宿は、何時も××寮ときめていました。そこは地方から上京する

教育関係者の為の宿泊所で、利用者の大部分は教職員、まれにその家族、学生といった具合でした。その中でも女の客はごく少なく、男が殆んどなので、朝の男子用便所は大した盛況ぶりです。大便所の扉は、入替り立替り開いたり閉ったり——私は、真中頃の便所の中に、用便を済した後も、錠を下したまま凝と蹲って、身体中を耳にししながら、息をひそめているのです。反響の強い手洗所の中ではほんの僅かな音でも、手に取るように聞えます。私は音だけの世界でも、充分に感得しうるのでした。その時分、私の大きな念願だった軍人の排便を、心ゆく迄堪能する機会に恵まれましたが、その事は「秘虐」に詳しく書きましたので、ここでは省略します。

戦後の小説で、「腐敗」（作者不詳）というのの中に、兵隊の排便の面白い描写があります。鮎詰の列車で輸送される兵隊が、連結器のところでは用便をする話で、文中、「——大便をしようと思うと小便が先走りやがるんで、此奴に弱りました。で小便は立上って継目でやり、大便は蹲んで紙の上に——」云々という箇所は、特に私の気持を捉えました。最近私の知合った男に、元軍人のGというのがあります。私は彼に白羽の矢を立て、角礫一本で、とうとう承知させたのです。Gはもともと羞恥心など持っていないような男です。私は飛立つ思いで、古びた将校ズボンの

彼と共に便所へいきました。そうして便所内の雰囲気はたつぷりと味えましたが、私には未だ何か物足りません。そこで思付き、今度は部屋へ便器を据えることにしました。

併し欲にはキリのないもので、私は何うしても、Gに野糞をさせないではいられなくなりました。約束の日、彼は背広に替ズボンという恰好でやって来たので、私は少しガッカリしました。軍服に長靴で来るように云えばよかったと思いましたが、まあそれはいい事にして、カメラを用意すると、彼を伴って、松林のある近くの丘へ出掛けました。未だ蟬の声こそしませんが、歩くと汗ばむ程の陽気です。通りかかる人があっても、一寸気のつかないような窪地を見付けると、早速Gはベルトをはずします。やがてゆっくりと野糞をしおわったGは、立上ると煙草を啜えました。

「君は変ってるナ——」

屈託のない顔でそう云う彼には、私の気持など理解出来ないのです。そして私がGに好意以上のものを抱いていることも、彼には永久に解りはしないのです

(おわり)

×

×

×



玉稿落穂集

——誌上にのらなかつた

原稿のことども——

編 集 部

菌に衣をきせず、思うまゝに自由奔放に書きまくった原稿、これは編集者にとっては、削るにも書き足そうにも、箸にも棒にもかゝらない厄介なものです。倉庫の薄暗い片隅に堆高く積まれたそれらを繕っていますと、一日や半日は瞬く間に過ぎてしまいます。湿っぽく埃くさい売残りの雑誌の上に腰を下して、今日も又、春の一日をそれら、きわどいがために没となったかず／＼の原稿の中から、これは、と思うものを御紹介旁々書抜きしてみましよう。

先ず、悦楽青楼夜話百態と題した、その一『娼婦と浣腸』（平田勝彦作）です。

これは題名が示す通り、菊水楼という色街に坊く恵美と呼ばれる女の夜毎迎える源平藤

橘、顔も心も違つたさまざまな客の生態を描いたものです。第一は若いサラリーマン。

『青楼の春は早かつた。昨日までの霜は陽に溶け消え去つていた。ふっと、そんな朝、恵美はうつろな瞳を舗装の路上に投げていた。

二階の窓の框、唯この一点だけが宇宙に認められた、幸福の招待を待った指定席のようでもあった。朝の陽は白く恵美の素顔を照らしている。何処からか九時の報を知らすラジオの時報が聴えてくる。このあたりの朝の九時といえば、白々しい空虚さが霧のように包んでいる一刻でもあった。うつろな瞳はそれを否定するだけの力はなかった。』

というふうな書き出しですが、このすぐあとに一匹の牝犬をめぐる数匹の野犬の一団が

二階の窓から見下される道端で、くりひろげる痴態を露骨に描き出しています。

『——時間の客を送り出してから、暫くして、廊下で同輩の千代から貞雄の手紙を受取った。「明日の朝、九時頃に、あの事に就いて、話し度し、貞雄」とあった。恵美は貞雄から「あの事に就いて」と曖昧な極く莫然とした意味だけのことを知らされていて、結論は得ていなかった。それは、悦楽的な意味のアルバイトの応援という、殆ど謎のようなことであつた。資産家の息子ということで、恵美も多少とも好奇心があつたのか、その時、

「あの事に就いて」の深い意味を貞雄から聞き出そうと思つたが、彼は頑なに口を閉じて巧みに話題をそらしてしまつた。貞雄がこの楼で恵美を知つたのは、大学を卒業してから三カ月目だつた。それからもう一年半というものは、絶え間なく通いつつていた。今では電気器具のメーカーに勤めていると云うことで、この菊水楼にとっては誰一人知らないものはなかった。』

『そんな恵美でさえ、貞雄が妻帯者なのか、独身者なのか、余り深くは考えてなかつた。でも、愛人というへだたりを客という身分に替えるのは年令だと思つたのは最近の事で、なるほど恵美は貞雄よりも四ツ年下の一白水星であつた。兄と思ひ、愛人と思う感情が急に客という位置に変わつてゆくのが恐ろしかつた。』

た。時折、貞雄が出張だと云って一週間も顔を見せない時があった。誓ってはいなかったが恵美は淋しかった。愛人を求める心が客を迎える肉体を知った時、貞雄に対する操に就いて苦しまなければならなかった。でも、生きる人間の女として、矛盾だらけの抵抗を心に試みても最後には自由な笑いと、自由な悲しみに身を張らなければならなかった。それが娼婦の生きる悦びでもあった。――

次には染料を商う旅商人。

『恵美が答えて、その紙を丸めて玄関の框から捨てると、丁度その時入ってきた昨夜の客の靴先に転っていった。その客は細面の太い眉に頬骨が張って眼の窩みは商人らしい力を持っているようであった。紙が奇縁となったのかどうか知らないが恵美はハッとして、『すみません』と一言軽く詫びただけで、客はにんまり笑って彼女を選んでくれた。』

――星の明るい夜であった。客は部屋へ入ると、という書き出しの次の文章は、この作者は余程、こういった場面を描き出すのが好きなのか、上手なのか、例のような閨房の描写になっっています。その部分だけを省いて、彼女の耳もとへ優しく囁やく男の言葉を続けてみましょう。

『――俺は染料を使う旅商人なんだが、まだ妻帯して居らず、四十二のこの年まで独身で押し通してきた。しかし妻のない淋しさはい

つもこうして花街で慰められてきた。幸い今夜もこうして、美しい君と語れるのも唯の縁とは思えない。ついては、俺はこう見えても、とても忙しい身体で、明日の朝、一番の電車で京都へ行かねばならない。だから君にはすまないが、出来るだけのことは俺の自由にしてくれ』

その客の男が、恵美に要求したものは、普通のものではなく、言わばアブノーマルと云われても仕方のないものでしたが、客商売でそれなりの経験を持つ彼女が、悲しい勤めのあきらめで客の言葉に言いなりになってしまふのです。そして、その行為が終ったあとで、次の文章が続きます。

『今、客の男がこの部屋に入ってきて三度目の喫煙だった。恵美は夜着の紐で海老縛りに強くいましめられて畳の上に転っていた。蒲団の上に坐っていた男は、細いが締った肉付の身体を肘で支えて紫煙に曇らせていた。にんまりと笑ったようだったが恵美には判らなかった。頭の髪を持って、ずる／＼と引き寄せられると、あぐらを組んだ脚は器用に伸びて彼女の頬を蹴った。恵美は客の男の誇らし気な表情に満足から陶酔へ移行してゆく悦びを見逃さなかった。有利な自己の立場が男の人為的な所作であつても、ともすれば空虚に悩む一個の物体が空白の埋りで救われていると考える悦びと同じことであつた。』

『ひどいわ、厭、厭よ……』

彼女は男の本心を見て取ったように睨んで見せた。可愛い／＼眼であつた。縛られて自由の利かない手と足が、常に男に接近しようとあせるもがきが感ぜられた。多角的な女の幸せの一つが、こゝにも転っていると思えた。『失敬、失敬、君の思いを遂げさせてあげるには、もっと、優しい手頃な方法があるのだよ、でも僕はまだ新米でネ』

『新米でもよくてよ、私も新米なんだから。貴方、お一人で喫つてらっしゃらないで、私にも一服お願いするワ』

『うん、待ちなよ、今に喫わしてやるからナウッフッフ、』

暫くして、恵美は日本タオルを口に噛まされると鼻腔から莢の煙を送られた。彼女はむせた。涙は眼尻を流れ耳元に達するのが感じられた。二度目に煙が送り込まれた時には『煙草責めというのか、煙責めというのか、そんな責め方はありふれた方法のようで一寸珍しいやり方です。旧号では本誌の昭和二十八年二月号の久留木栄氏の「憐光」という小説でも、テグスやコケシを用いた変った責め方をしていました、あの文と一脈相似かよつたところがあるのが、この文章です。本文では、更に附随した各種の事柄が、只今引用した文章に引続いて出てきますが、これは全くオフリミットです。』

「『こうすれば、ミス・ユニバース第三位の鼻と同じだね……』と、男のように悪戯っぽく恵美の耳へ囁いた。彼女は笑った。男に笑っている自分の顔が見せたかった。男は知ったかも知れないと心に思い、その眼を追った。でも淋しかった。思い出したように、忘れていたかのように涙が眼に溢れた。』

というような文章から、更に原稿用紙二枚程に亘って露骨な描写が続き、そして、愈々題名に挙げたところの『流腸』ということになるのですが、その方法が又、普通の所謂常識的に云うところの流腸とは違ったものなのです。で、その個所を紹介しなければ、本文の真意義は全く失われるわけですが、大体この原稿が没になったという原因が、そこにあったわけですから、諒として頂きたいと思えます。

『一番の電車で客の男は京都へ向って発って行った。それからの何時間かは空虚な思いで過して来た。今朝、九時に貞雄との約束を思い出した。窓の框から腰を上げたのは、それから暫くしてからであった。――』

部屋に座に戻ると、昨夜の客が懐しく思えた。別れ際、握手をした時に男は恵美に、
「今度来る時には道具を持って来るからね、手頃な鞭を持ってくるよ、短い革の鞭があるんだ。」

「今度、何時頃、来て下さる？」

「さア、仕事の都合でネ、でも早く話がつけば九州へも行かなければならないんだから、途中で此処へも寄るよ」

「本当——？」

「本当だとも」

「きつとよ——」

「うん。」

指切りげんまをしたつい先程のことが夢の彼女の昔の出来事のように濡れた臉の内に浮かんでいた。九時は、もう二十分も廻っていた。貞雄がそろそろやってくる時刻である。

恵美はその座から立つと、化粧台の前に坐った。朝の遅い自分の顔が、今朝はなんだか特に澄みきって鏡に見えた。彼女は自分の鼻にパフを叩いた。

「こうすれば、ミス・ユニバース第三位の鼻と同じだね」昨夜、客の男の云った科白が恵美の顔に浮んだ。密かに一人クスリと微笑んだ。貞雄の云った『悦楽的アルバイト』がどんなものか、その謎が解けたような気にもなった。』

こゝで小見出しの(一)は終って、場面は変わって(二)に移ります。

『その日の夕方、貞雄と恵美は枚岡の梅園荘に招かれていた。応接間の一室から見える大阪平野は夕焼に金色の観を呈して、淡いコバルトも、その紅に同化されて、重り合った市街の家並みを夕もやに包んでいるようにも見た。

えた。部屋は接客用三点セットに長椅子が置かれてあり、そのいずれかに坐っても、壁から天井に和洋折衷の構造が超近代化された趣に見え、壁画なども、ちよつと、その一例を挙げると、夢を物語る王朝時代の檳榔毛の御所車が燃えており、軒の中の美しい上臈が三人互に桜の唐衣も片肌脱ぎの妖しさで、焰に苦しんでいる図が、何如にもリアルに描かれていた。その壁と併行に直ぐ煖炉があり、実用上よりもむしろ裝飾に役立っているようであった。その部屋の奥行三分の一程の処に座敷に上る框が仕切つてあつて、純日本風の異彩を放っており、襖からまだ奥へ通ずる廊下があるようだった。

恵美達は先程からテーブルを間に坐っていた。奥の襖が開いて貞雄の恩師と云う人が現れた。学者肌なのか、眼鏡の奥には冷徹な感じがうすい唇と合せて理智的に感じとれた。
「やア、お待たせしました。用意をするのに暇どりましたナ、貞雄君、奥へ行つてやつて頂けませんかな」

「そうですか、じゃア、お邪魔致しましょうか、恵美さん、先生を宜しくネ」

こうして貞雄は、恵美を残して勝手知った奥へ消えてゆきます。さて、彼の言う『悦楽的なアルバイト』というのは、どんなことでしょうか。

『今朝、貞雄が恵美を訪ねて来たのは、十時

少し前であった。時間に遅れて来たことを詫
びると、直ぐに用件を切り出してきた。例の
「悦楽的なアルバイト」に関するものであつ
た。それによると、早く妻に死別した貞雄の
恩師、村上為吉は後妻をと、人伝てに探がし
ていたが、思う程の女性にも巡り合わずに弱
っていた。が、ある日、所員（為吉は理科学
研究所の所長をしていた。）と大阪駅で待合
す為に休憩室に居ると、初恋の女、田代絹子
に声をかけられた。そして昔のように親しく
交際するようになったのは、それ以後のこと
で為吉の話を聴けば。」

サディストである村上為吉、その昔の恋人
である田代絹子は、今或る待合の女将をして
いる。そしてその一人娘マリ子は、今年十七
才になる高校二年生。この三人の劇的な出会
いや、サド、マゾの妖しい雰囲気のかずく
は、恵美を主人公とするこの文章に於ては、
むしろ不必要と思うくらい、筆を費していま
すが、或は筆者が殊更そういったアブノーマ
ルな興味を強調したかったのかもしれない
が、全体の構成からは、いさゝか不自然の感
をまぬがれません。そして、貞雄とマリ子と
のマゾヒスチックな場面も出てくるのです。
だから、マリ子の貞雄に対する責め、恵美に
対する為吉の責め、等は一切省略することに
します。

『翌日の夜、菊水楼の二階、恵美の部屋。窓

から夜空に輝く無数の星が見える。寝室とな
り居間ともなるこの部屋に先程から、貞雄と
恵美は灰皿を間に静かに坐って向き合ってい
た。階下の通りからは、客引きの声が喚めく
ように聴えてくる。静かに紫煙がもつれた糸
のようにゆっくりと頭上に漂っていた。

「貴方はマリ子さんが好きだったのネ、私よ
りもあの方が良かったのヨ」

暫くして、恵美が沈んだ空気を破るように
真剣な面持で貞雄に云った。すると彼は、

「馬鹿！ 君は馬鹿だナ、マリ子はまだ小便
臭い子供じやないか、君はまたなんという：

…？」

「でも、マリ子さんは気持の上ではもう大人
よ。でなきやア、あれだけの責めは行なえな
いわヨ。」

「君は見たのか？……君は、」

「全部よ、先生と。」

「じゃア、何も云うまい。」

「私はこんな女でも嗤われるなんて、厭よ、
大嫌いよ、夢にも思わなかったわ。いいえ私
はこんなことさえ云い度くなかったのよ。む
しろ貴方の前で嗤者になるのが怖しいのよ。
私、なんて意気地がないのでしょうか。唯生き
る悦びだけが私の宝なの、唯、生きる悦びだ
けが……」

「恵美さん、判ったよ。僕が悪かったんだ。
もう僕は君から離れやしないよ。これだけは

誓ってもいいよ。許しておくれ、僕の可愛い
い、恵美ちゃん、私は貴女の奴隷になって、
生きる悦びの為に、新しいものの為に捧げた
い。」

「ふん、聴いてあきれれるわネ、貴方は新しい
ものの為に、私の奴隷になるのなら、私は一
体貴方の何んなのよ、私はどうなってもいい
というのネ。」

「いや、そ、そんな、そんな気持は。僕が君
に言いたいことは……」

「もう、遅いわ、貴方の気持は判ったわ。私
はマリ子さんを貴方が愛していられしやるこ
とが癪なのよ、嫉んでいるのね。でも、いい
の。別に貴方があの娘の奴隷になんかった
って、私、平気よ。」

「恵美さん、それは誤解だ。それは貴女の偏
見なんだよ。私は決してマリ子なんて、子供
を相手にしていないよ。唯、恩師の昔の恋人
の娘だということ、君にとっても、僕にと
っても、有利なわけなんだ。ただ、私は貴女
を貴女なりに守って行きたかったのです。た
ったそれだけの念願がどうしても、貴女に迷惑
を及ぼす結果になったのでしょうか。」

「じゃア、貴方は私に対する愛情は変わらない
とおっしゃるのネ。私のような商売女にでも
未練があるというのネ、本当？ 本当に私が
好きなの？」

「じゃ、マリ子さんの前で、私が好きだと言

える？ 本当にマリ子さんの前で私が好きだと言えて？」

「？」

「マリ子さんを貴女は子供だと言ったでしよう。でも、そんなことはどうでも良いの、私は貴方に私が好きだと云う証拠を見せてほしいのよ。男らしい、私を虐めてくれるような、そして素敵な夢を見るような、眼の覚めるような、ネ、いいでしょ。」

「許して下さい。」

殆ど声のないマゾ男性、貞雄の気力は弱いようであった。覇気に満ちた女王のように口を歪めると恵美は立ち上った。」

貞雄のマゾ性に直面した恵美は、俄然、サディストぶりを發揮して男を虐めることになりました。その方法は別に変ったものではありませんが、公開を憚りますので省略して、悦楽青楼夜話百態の第一話の紹介を終ることにしましょう。

次は、作者名は脱落して一寸不明なのですが、女悦六法地獄責、というのを御紹介しましょう。「この哀れな圭子は淫魔法王の女悦奥伝秘法、六法地獄責で夜毎戦慄すべき私刑に呻きのたうつのである。」という謳い文句が最後に記されていますが、その女悦六法地獄責とは、左の六つだそうです。

一、青葉之蛇責

一、弘法之筆供養

一、蜜甘水之三段飛

一、牡丹皿之蠟燭責

一、三井寺之鐘供養

一、滝之白糸穴責供養

と、中風流な名前がついています。この作中の主人公、周一という九人兄弟の尻から二番目に生れた男の生い立ちから、この文章は初まっています。

「僕の生家は父母を併せて総勢十一人という優秀なる多産系である。僕は九人兄弟の中、よく俗にいう三ツ目のボタンならまだしも、尻から二番目という情ない星の下に、周一という名前を頂戴した。製造元なる両親も流石にあきれたものか、僕で最後の生み終いにしたく「終一」となるよう、僕の名前を周一とつけたそうだが、そうは問屋が卸さないで、又又二年置いて末ッ子の良助が芽出度く飛び出したのだから、結構な事ながら、ままたらぬ浮世である。」

というわけで、それからの周一の生長が詳細に述べられています。子供のない叔父の家へ里子にやられ、六才のとき、その叔父が社命で九州へ転勤になったことから、再び実家へ帰えされることになります。隣家にミサエ小母さんと呼ぶ、上品で若く美しい子供のないう未亡人があって可愛って貰います。中学校三年のとき、事情があって、住居が京王線の桜上水駅際のB町に引越すことになるのです

が、この時、周一は、かねてから懇願されていたミサエ小母さんのところへ養子に行くことになるのです。中学三年の周一が養母であるミサエ小母さんとの生活は、二十枚ばかりに亘って書かれています。これは省略することにして、冒頭で紹介した「圭子」のことについて書いてある個所まで一足飛びしましょう。

「霧雨のそぼ降る日曜日でした。僕は小母さんのお供をして久し振りに上野のMデパートへ買物に出掛けました。留守中、勤勉なるオケイ婆さんは、風呂場の掃除をしていましたが、そのすきにチンピラ空巢に入られ、小母さんの着物三枚、主人の形見のカメラ等を盗られてしまった。物わりのいい小母さんは別にオケイ婆さんに強い小言も云わない。むしろしよげ返っているオケイ婆さんを慰めていた。」

このオケイ婆さんというのは、ミサエ小母さんが、御主人である山田家へ嫁いでくるとき実家から連れてきた耳の遠い女中だったのです。圭子というのは、このオケイ婆さんの娘なのですが、そのいきさつについては、又次号に御紹介することにしましょう。

☆

☆

☆

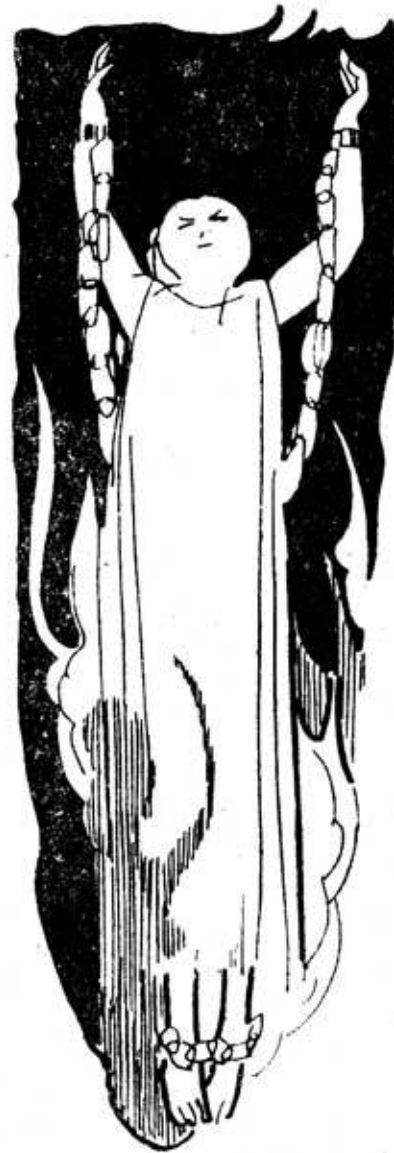
☆

☆

☆

被縛症

高 村 民 子



神戸元町の裏通りに、派手なネオンの看板もなく、入口の上にあるたった一つの白灯の光で『モナミ』と木彫りをした地味な看板がやっと読める古風な店が私の最近迄つとめていた酒場でございます。この店は二三度おいでになったお客様でも二次会、三次会の後で千鳥足で訪ねておいでになっても『モナミ』

のある筋で近所のバーや飲食店のケバ／＼しいネオンに眩惑されて、目立たぬ『モナミ』の看板が目に入らず通り越して次の筋へまぎれ込んでしまう事がよくありました。そんなお客様がマダムに「もっと気のきいた照明のある看板を出せよ」とよく云うのですが、マダムの云うには目立つ看板は税務署にも目立って、又とかく貸売りの多くなるこの商売はフリの客を呼ぶよりも、良いところの常客に

最良してもらおうのが無難だということです。

マダムに私を入れて、女給さん五人が総勢で、商売上手の割にお人好しで、お客様にも女給さんにも好かれるマダムは他所の店の様に悪い稼ぎや露骨なサービスを私達に要求せず、昼間は女給さん一人が店当番、もう一人が会社筋への集金に廻り、あとの者は夕方五時迄自由で、夜は十二時になると店を閉めて休みますので、女給さんの中には昼間洋裁に通う人もあり、家の手伝いをしている人もありました。私はもと友達と、山手にあるアパートから通って居りましたが其後マダムの希望もあって『モナミ』の二階に住み込んでマダムと寝起きを共にする様になりました。宵の内はおとなしく、軽い冗談をとばしながら、一口一口お酒を味う様に飲んでいるお客様達も夜がふけるにしたがって少々猥雑になり、厚顔になり、何かと口実をつけては私達の誰かに謎をかける様な遠廻しなくどき方をする方もありますが、こちらもいい様に芝居をして、お帰りになる時は腕にブラ下る様に寄りそって表通り迄お見送りして体よく帰って来る様にして居りました。

お店を閉めてから二階に上り、マダムの部屋と廊下一つおいた三畳の間に床をのべて寝むのですが、時たま心淋しく寝つかれぬ時などはきまって昔の事が走馬灯の様に脳裏をめぐり、忘れようと思えば思う程、小きれいだ

った二階建の芦屋の家、頼もしかった弁護士
の父、教養のあるやさしかった母、肩広く胸
をピンと張った兵学校姿の兄、「お嬢様」

「お嬢様」とよく面倒をみてくれた二人の女
中さん。そしてあの気狂いじみた戦争。兄の
戦死——頭上のB29、燃えさかる芦屋の我が
家、母を救けに飛び込んで行ったまゝいくら
呼んでも再び焰の中から戻って来なかった
父。マダムに気付かれぬ様子を殺してよく泣
きました。

泣きたいだけ泣いて気がすむとそのまゝ寝
入ってしまう時もあり、どうしても目が冴え
て、遠くに聞える電車や自動車の警笛が気にな
って眠れぬときは、そっと押入れから犬
の鎖や細引きを取り出して、私だけの「独り
戯び」を始めるのです。

私が女学校に入った頃、母は『本を出来る
だけ読む習慣をつくりなさい』と云ってギリ
シヤ神話、イソップ物語等を何十巻も全集物
で買ってくれました。そして一巻読み終る毎
に御褒美をくれる事にして私の読書力を養う
事につとめてくれました。其のギリシヤ神話
の中に題名も人名も今は忘れてしまいました
が、悪神の怒りと呪詛を受けた両親の身代り
になって孤島の海岸の大岩に丸裸で鎖で後手
に繋がれた処女が房々とした長い髪で出来る
だけ肌をかくしながら海獣の「いけにえ」に
なる日を泣いて待つ絵、それから、神罰を受

けた三人の女が大木の幹に全裸で珠数つなぎ
に縛り廻されたまゝ多くの男神達の晒し者に
なっている絵に私は胸がドキ／＼する程怖し
く恥しく、そして悩ましく、若しも私がこん
な目に会ったらどんなだろうかと、夜、床の
中で顫えました。

そんな日が続いたある夜、皆の一番後でお
風呂に入る時、そっと犬小屋から鎖を外して
来て、脱衣室の大鏡の前で鎖を一廻り首に巻
いてから背中にとらし、後手にした両手首に
巻きつけて壁に寄りかゝったまゝ何分もうな
だれて、あの神話の乙女達の恥しい姿をし
びますと肩から乳房、胸から太股が小刻みに
顫えて気の遠くなる様な胸のうづきを覚えま
した。それから宿題にかこつけては夜十時
十一時迄起きていて、家の者が寝静まるのを
待ってからお風呂で神話の女達の受難に吾身
をなぞらえて自虐のたのしみにふけりまし
た。

其後、弁護士である父の書齋に、法律の本
にまぎって全集物の立派な本で『異常犯罪』
『性的犯罪』『変態心理』『刑罰の歴史』等
が何十冊もあるのを見付けて両親にかくれて
顔を紅潮させて怖ろしい口絵や写真を見、記
事を読んで益々被縛と露出による自虐じみた
妄想と独り戯びをたのしむ様になりました。
又、ある日家によく出入りしていた日本画
の絵描きが父と酒をくみかわしたがり仲間の

噂話しの最中に『……そんなにひどく縛られ
たり吊されたり、時には青竹で背中や尻を叩
かれてヒイヒイ泣きながらも女はそれを喜ん
でいるんですからね——、全くあの男も変つ
た絵を描くが女の方も異常ですよ……』と云
う話をお酒の肴を運びながら聞いてしまい、
肴をテーブルにならべながら顔が吾が事の様
に真赤になり、手が顫えてしまい、大急ぎで
自分の部屋に戻ってベッドに顔を伏せて何時
迄も息をはずませて居た事もありました。最
近になって、あれは伊藤晴雨先生の若い時の
話に違いなかったと気がつきました。

そんな思春期にもだえている内に戦争。そ
して数々の想い出を秘めた本も父母と共に焰
の中に焼けてしまい、敗戦、そして気狂いの
様なインフレの中を無我夢中で生き抜いて来
ました。そしてあらゆる誘惑や暴力から私に
残された、たった一つの宝である純潔を守つ
て来ました。縄の独り戯びを唯一の心の慰め
として。

二

早い人は一ヶ月か二ヶ月、長い人でも半年
か一年でお店を止めたり、結婚したり、他の
お店に移ったり、又中には男の人になまされ
て墮落したりして入れ変ってゆく女給さんの
中で、私だけ終戦の翌々年からずっと『モナ
ミ』に居付いてマダムの養女の様可愛がら

れ、重宝がられて来ました。数多いお客様の
中には、この人はと想う人もありました、
バー勤めも長くなり、多少とも男をみる目
が出来ますと、一寸やそつとくどかれても男
方の酒の上での気紛れや浮気が信用出来ず、

それでもお客はお客として気を悪くさせぬ程、
度の際どいところで何とか理由をつけて身を
かわして来ました。それがかえって人気がな
り「タミチヤン、タミチヤン」とお客様に可
愛がられて、或る時には他の女給さんたちの

妬みを苦にしながらもたのしく毎日を送って
来ました。

そんな時に海岸通りにある貿易会社に勤め
ている高村と云う青年がお店に寄る様になり
他の客同様私をテーブルに呼んで呉れ、彼は



ウイスキー、私はお付
合にビールを飲みなが
ら彼の酔う程にテムポ
の早くなる人生論を静
かに合槌を打ちながら
聞き、其の中に二人と
も酔いが廻って来ると
きまってブルースをか
けて畳四畳分位しか無
い、しかも細長いフロ
アーで抱き合う様にし
て踊る、こんなお附合
が一年ばかり続きまし
た。そうした内に或る
初秋の夜、会社の招待
の帰りとかで、もう相
当にいゝ機嫌の高村が
ぶらりと入って来て、
お店の誰彼に手を上げ
たりウイंकしたりし
て大袈裟に愛想を振り
撒いて奥のテーブルに
どつかと腰を下し『い

「らっしやいませ」と向いの椅子に腰を下した私に、急に真面目になって思いつめた様な表情をした彼は息をひそめて、

「今夜は君に打明けたい事があるんだ」

と口を開きますので、其の真剣さにつられて「何あに」と膝をあらためてかしこまりますと、暫く無言で店のマークの入ったマツチ箱をいじっていた彼は、

「恥かしくて酒でも飲まないと云えないよ」

と、しおらしくつぶやいたかと思うと急にワハハと笑って

「……と云った昔がなつかしい」

と陽気に喋り始めました。この様に何処迄本気で何処迄冗談か分らず決して本性が見すいてしまわず、とらえ所のないのが彼の魅力でした。其の内にウイスキーを投げ込む様にして飲み、寸目をつぶり大きく息をした彼はブツキラ棒に

「僕はタミチヤンのオットリした上品さが好きだ、が其の上品さを一度脱がしてみたい」と意味有り氣に薄笑いして

「其の上品さの裏にある君の女、女の魔性と云うものを手にとって見たいよ」

と、云いだしましたので

「どうぞ御自由に」

と笑って答えますと、

「いゝかい」

と一寸真面目になり私の顔を見て黙ってし

まいりましたので

「私ちつとも上品ぶってなんか居ないわよ、どうして脱がせるの」

と誘いますと、彼はウイスキーを一口なめてタバコに火をつけてから壁にかけたヌードを横目で睨む様にしながら

「それはね、先ず君を裸にして縛り上げ本音をはく迄ギューと押さえつけ、それで未だ上品ぶっていたらムチで叩くさ」

と事もなげに云いました。とたんにどうした事でしよう、私の胸の中がキューツと締って、みる／＼内にドレスを剥ぎ取られ、肌をあらわにされ、背中にねじ上げられた両腕は首縄を通して縛られてゆく様な幻覚に襲われて、顔は真赤になり、息はずんで、よそのテーブルで声高に笑う同僚やお客様の声もまるで晒し者になり引き据えられた私を嘲る声の様に聞え、私はもう首を下に垂れて両膝をそろえて、身を固くして目をつぶってしまいました。私の秘密な縄遊びをこの人は気付いたのかしら？ だが、どうして？ と思ひながらこわ／＼顔を上げますと高村は天井をみつめた儘タバコをふかし続け居ましたのでホッとしてビールを一口含んでから氣を落付け「高村さんになら、そうされてもいいわよ」と笑いかけますと、キッと私の顔を睨む様に

にして

「本当だな」

と駄目を押してから、安心したように話題を又得意の人生論に転じました。

「女は弱い男にかしずかれるよりも強い男に支配されたがるものだ。男の愛情は女を束縛し、独占しようとする、愛情はエゴイズムに通ずる」などと尽きる事なく格言めいた事を云って看板近く迄飲んで帰り際に

「明日は日曜だが昼前に下宿に来ないか、何処かで昼飯でもたべて映画に行こう」

と云いましたので

「うれしいわ、きつとよ」

と、握手をして見送りました。

其の夜、床の中で、高村の云った「君を裸にして縛り上げ……」と云う事が私に覆いかぶさり、体中の血が高鳴りました。そして幻覚の中で私は、誰も居ない大きな屋敷の中にいました。私は高村の前に泣きながらいざり寄りますとスル／＼と着物も下着も目に見えぬ何物かの手でズリ落され、必死になって乳房を押さえようとする手は、いくらさからつても無慈悲に後手にねじられ、うつむいていた顔は引き絞る首縄で高村を見上げる様にされ、とうとう高手小手に何時の間にか縛り上げられていました。ムチを手にして身動きもせず、私が裸にされ、縛り上げられてゆくのを見下していた高村は口をゆがめて嘲る様に「なあんだ、やっぱり君は、そうしてもらいたかったんだな、あきれたけだものだ。さあ

来い」と私を見詰めた儘、静かに次の間に向って後ズサリを始めますと、私の体は見えない力で引き起こされ、高村の方にズル／＼と引き寄せられてゆきます。首縄でうつむく事も出来ない、縛られた無恰好な姿のまゝそして高村の開けた次の間の奥には、あの父の本で見た怖ろしいギロチンと木馬、そして手前の畳の上には粗末な寝具に枕二つ。私は必死になつて高村に哀願しました。

「許して下さい。なんでも貴方の云われる事をきゝます。どんな事でもします。お願いです。許して下さい。」

こんな吾身を頭に描いてホロ／＼と泣きもだえました。

其の翌朝はすっかり朝寝をしてしまい。枕元にさす日光にびっくりして起きました。澄んだ初秋の空気を胸一杯に吸って、昨夜の悪夢も、うその様にスガ／＼しい気持ちになり、牛乳にトーストで軽い食事をしてお店を出てブラ／＼と歩きながら高村の下宿に向いました。彼の下宿は三宮駅から電車通りに沿つて二十分程山手の方に歩いた所にある素人屋で「今日は」と声をかけると、下のおばさんが顔を出して

「高村さんは床屋さんに行くと言つて、いまさつき出掛けました。三十分位で帰るでしょう、お二階でお待ちになつたら。」
と云つて呉れましたので、遠慮なく上つて

窓から外を眺めたり、部屋の中を物色して、独り身にしては割合整頓が良いなど一寸感心している内に、押入れの中ものぞいて見たくなり、多少後ろめたさを覚えながらも、独身男の何か秘密でもありはせぬかと思う好奇心が手伝つて、思い切つて開けてしまいました。上下に別れている押入れは上が寝具、下にはトランク、野球道具、写真機具に何十冊もの雑誌は皆同じ名前だ。奇譚クラブ」と書いてありますので、見つけない雑誌だと思ひながら手をのばして真中辺の一冊を抜き取つてパラ／＼と頁をめくつてみて「アッ」と思わず息をのんでしまいました。裸の女の人

が縛られた写真や責められている絵が幾べー

半ば頭を押入れにつっこむようにしてページをめくりますと、「淫火」——気が急ぐまゝに拾い読みして次の本を出すと「悲恋のムチ」私の求めた男「蜘蛛と蝶々」罪ある女「裕子のお仕置」——何という事でしょう、神話や昔語りならともかく、縛つたり縛られたりする事がこんな身辺にあり、然もそれが或る種の趣味や遊びになつてこんなに普及した事であろうとは。余りの驚きと強烈な刺激にクラ／＼と目まいを覚え、五六冊の本を隣のまわりに取り落したまゝ「急襲」と題して女が手をねじ上げられて次々と縄をかけられサルグツワをされて自由を奪われてゆ

く連続写真の生々しいシーンを見詰めた儘茫然とした数分間を過してしまいました。

禁断の木の実を味つた時の様なおののきと欲び。今迄の自分の後ろめたい「縄の戯び」が他愛の無いママゴトの様なものであつたと云う安堵、高村が「私の求めた男」になつてくれるかも知れないと云う怖い様な期待。

ふと彼が帰つたら大変と気がつき、力が抜けた様にけだるくなつた体を起して大急ぎで元通りに本をおさめ、押入れから離れて窓際にもたれて大きく息をついて気を静めようとなりました。その内に高村は下のおばさんと大声で二言三言話し合つてからミシ／＼階段を鳴らして上つて来て「やあ、待たせてすまんさあ行こう」と云つて気もそぞろになつてい

る私に頓着なく、さっさと外出着に着換え、階段を下りようとしていますので「小説にあつた様に高村が私にいきなりむかつて来て、両腕をねじ上げて組敷き、かくしていた細引で縛り上げようとしたらどうしよう」などと独り勝手な事を考えていた私は、びっくりして彼の後を追いました。

其の日は紳士然として、レディファーストにこまごまと気をくばつてくれる彼に甘える様にして食事をしたり、映画を観たり、一日を楽しく過しました。そしてその夜は心身共に疲れて夢らしい夢も見ずにぐっすり寝てしまいました。

然し、其の翌日の月曜から週末迄の毎晩はあの高村の押入れにあった本の責絵や被縛写真が次々とまぶたに浮び、小説や告白文の中の場面やセリフが脳裏に浮んで、物狂おしい程自虐の血が騒ぎました。マダムが外泊した夜などは、両足首に鎖の両端を巻きつけて「足枷」の様にして上半身は色々と工夫して何回もやり直しながら、がんにがらめに自縛して二階の私の部屋から廊下、そしてマダムの部屋へとゾロ／＼と足の間の鎖を引きずりながら歩き廻りました。そしてとう／＼急な階段をソロ／＼と壁に身をすり付けるようにして下り始め、一段下りる毎に「ザラザラ」と鳴りひびく鎖の音に消え入りたい様な気持に身を顫わせ、息をつめながら、ガランとして表通りからさし込む光で薄暗く見えるテーブルの間をお客様や女給さん達によってたかたか罵られる、死ぬ程恥かしい吾身を頭に描いて目をつぶった儘、うなだれて椅子につまづきながら引き廻されたりフロアーに跪いて哀願したりして、まるで夢遊病者の様にさまよいました。

そしてしまいは時たま酔客の足音が立ち止まる事もある入口の扉の手前に仰向けに倒れて、ひんやりする敷石とザラ／＼する砂ぼこりを後頭や後手に縛った両肘、そして臀部にすりつけ、とり肌立った全身を

くねらせながら気の遠くなる様な自虐の陶醉に耽るのですた。
こんな愛想の尽きるような自虐の妄想にどうにもならなくなり、今はただ高村に助けを

求めるより外はない、高村に此の気持を鎮めてもらうより手はないと一途に思い込む様になりました。

だが、問題は高村の「愛情」と「理解」で



この一年以上のつき合いで、「好意」は身に泌みる程感じて来ましたが、こんな大それた恥かしい秘密を打明ける程には未だ彼の心は擱んでいませんでした。しかし兎に角彼にあたり救いはないと心に決めました。

三

高村は、其の土曜の夕方三人の同僚と一緒に七時頃お店にやってきて何か労働組合の事を真剣に打合せを始めました。私は高村のテーブルを他の女給さんにまかせ、レコード掛りになって次々と電蓄のレコードを換えながら、リーダー格になって同僚の顔をみつめながら何かしきりと意見を述べている高村の男らしい横顔を、複雑な気持で眺めて居りました。そして心の中では「今夜こそ高村に私の気持を打明けよう」「いやあの人はあんな本を読んでいるからといって、私の求めている人とは限らない、うっかり打明けて『なんだ、ひどい悪趣味だな』などと云われたらどうしよう」「いや、彼は前の土曜『君を裸にして縛り上げ云々』ともらしたではないか、彼こそ私の求めた男だ」等々、あれこれと迷いました。其の内にお客様もだん／＼混んできて忙しくなり、私はレコード専門と云うわけにはゆかなくなり、手のすいた女給さんと電蓄を交替で受持ちながらテーブルからテ-

ブルへとサービスして廻りました。

そして、夜も次第に更けて、お客様の声も大きくなり、唄い声もはずんで席がみだれた頃。折をみてブルースをかけて高村達の方をうかがって居ますと、曲が流れ出すと高村は直ぐ私の方を振り向きましましたので、目と手で「さあ」と合図をしますと大きく頷いて私の方にやってきました。踊りながら

「高村さん、後でお話があるから一寸残って」

「何だい」

「其の時云うわ」

「良い話かい、悪い話かい」

「良い話とは云えないでしょう」

「ふーむ、悪い話となると気になるね、僕は飲代の借りは無い筈だが」と大袈裟に頭をかしげるのがおかしくて思わずフキだしてしまいました、

「いゝのよ、私未だ何を云おうか考えてないのよ」とやっと云って踊りを終りました。

それから一時間程して、友達を先に帰した高村と私はマダムに「一寸行つて来ます」と断つて表に出て近くの喫茶店に入り、二人ともアイスクリームを注文して奥のテーブルに向い合いました。

「何の話だい？」と彼に切り出されて

「一寸待って」と、いたずらっぽく笑ってみせましたが、段々心が動揺して来て、何から

云い出していいか分らない程頭が混乱してしまいました。「私は貴方に縛ってもらいたいのです」などと女の口からとても云い出せるものではありません——。又若し云ってしまった時の高松の態度と返事がいよ／＼不安になり、とう／＼涙の出そうになった顔を両手で覆ってしまいました。高村は又「何うしたんだね」とききますし、愈々情けなくなつてしまいました。やゝしばらくして煙草に火をつけた高村は

「タミチャン、僕が好きなのかい」とやさしく声を掛けてくれました。ところが混乱した私は夢中で頭を振ってしまいました。高村は「オーミステイク、吾早まてり」と苦笑いしてテレながら

「じやあ何か困った事が出来たの」と又きいてくれましたが、それにも私は頭を振ってしまいました。

彼も

「一体どうしたんだい」とすっかり手を焼いて黙ってしまいました。私はやっと蚊の鳴く様な声で「外に出ましょう」と云って、彼が会計に立ったあとと急いで涙をふいて外に出ました。後から出て来た高村は、

「なんなら明日の午前中下宿に来ないかね」と云ってくれましたので、こっくり頷いて逃げる様にしてお店に帰りました。

其の夜はまんじりともせず考えましたが、

とても口では彼に云えるものではないと知り手紙に書く事に決め、明方近く迄かかって手紙を書きました。

高村様

さんざ思い悩んだ挙句、思い切ってお手紙でお話する事にしました。此の手紙に対する貴方の反応が不安で心配の余り死ぬ程の想いです。恥をしのんで申し上げます、私は前日の日曜、貴方の下宿に参りました時、貴方が床屋からお帰りになる迄の間に、甚だ不躰な事でございますが、何の気なしに押入れを開けてしまい、中になる本を見てしまいました。そして、はつきり申し上げますとあの中にあつた「淫火」の奥様の様に「悲恋のムチ」の女学生の様に、又「古川裕子」とか云う女の人の様に「蜘蛛と蝶々」のニューフェイスの様に、貴方にされてみたいのです。

こう思い切つて書きながら、顔を覆いたくなる様な恥かしさと貴方のお氣持が不安で泣けて来ます。どうかこれをお読みになり次第お電話で御返事を下さい。本当に生きた心地もなく不安な氣持で御返事を待っています。それから次の事をくれぐれもお願いしておきます。

一、貴方の御返事が Yes の場合も No の場合もどうぞこの手紙の事は貴方お一人の胸にたたんでおいて下さい。

特にお店の人達に知れましたら私はもうお店に出られません。

二、御返事が Yes の場合、どうか民子の貞操には No touch でいて下さい、虫の良いお願いかも知れませんが貴方の紳士と理性を信じます。

三、御返事が No の場合、私の体にキズが残る様な事はしないで下さい。又、ムチ打ちには未だ自信がありませんからしないで下さい。

『女性切腹幻想』

想定

(一) 母校の名誉を一身に担つて専門学校薙刀試合に出場した選手が惜しくも決勝に敗れて第二位となつたのを悔み其の場を去らず護身用の短刀を持って自分の腹を切り果てる。

(二) 亡き父や兄の遺志を継いでテキサス娘は(邦人二世娘でも良く)金鉱を探しつつ山中に馬を飛ばす中、暑さに耐えず胸元を寛げブラジヤも取り汗を拭ぐうちに不逞のインデアン群に包圍され襲撃される。彼女もはだけの乳房は其の儘拳銃にて応射すれどインディアンの数は次第に増し遂に敵の射つた矢は彼女の乳房の下に突き刺さり、今はこれ迄と腰に帯さむ短剣を抜き白くふくよかなる自分の腹に

さい。

私は未だ完全なマゾではありませんし、なりたいとも思いません、遊戯の域に止りたいと願っています。以上でございます。

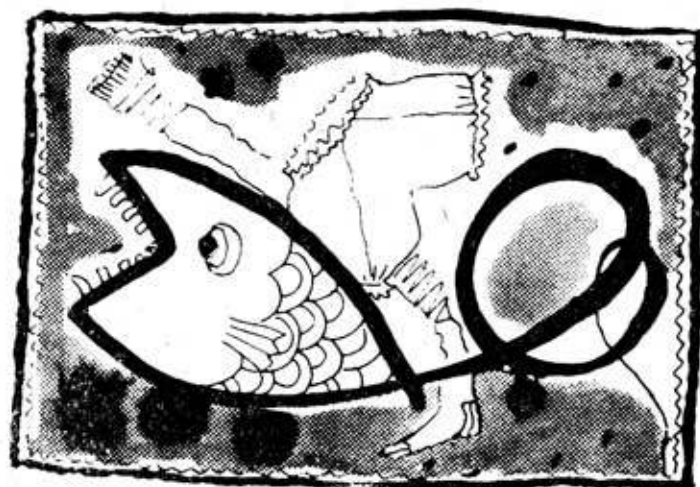
御返事を御待ちします。 民子

書き終つて高村様と表書きした封筒に入れて封をし終ると、一ぺんに疲れが出て這う様にして床に入ると其の儘死んだ様に寝込んでしまいました。(以下次号)

鳴竹成太郎

突き立て一文字に切り山中の露と消える
(三) お定りの両親から嫌な縁談を執こく迫られ修道院に遁げた若い尼僧が不図した事から信仰心に対し強い懷疑を持つ様に成り結局煩悶は解決せず一日教会の見える丘に登り抜き放つた短刀にて腹を掻き切り死す。

(四) 教師より預つたクラス全員の修学旅行費を学校の帰路、不良少年等に奪われた級長は如何に解決するか迷う其の住居は早くから両親に死なれ厳格なる軍人上りの伯父に引取られて居るからである。彼女は死を以つてクラス全員に詫びんと伯父の愛用の短刀を秘かに持ち出し校庭の一隅にて静かにスカートを捲り氷の白刃を其の幼ない腹に突き立てて一文字に切り切腹を遂ぐ。



或る下着マニア

の告白

古井眞一哉

晩春の夕暮、私は源ヶ橋の市場通りを歩いていて、ふと洋品店の店先にメリヤス製の黒いズロースとパンティがあるのを見つけて、思わず胸が高鳴るのを覚えました。

女学生が運動会等ではいているブルマーは黒い色をしています。あれは大抵綿製でガサ／＼しています。しかし、この店先にある黒色をしたズロースのふつくらとしたやわらかさ、それにつや／＼と底びかりするように染め上げられた黒い色は、私の胸を異常なま

でにかき立てました。それに、今迄見たことのない黒い色のパンティまでも売られているのです。

私は五六軒行きすぎてから、わざとゆっくりその店の前を通りすぎました。店にいたのは、一寸小奇麗な娘です。その二品を咽喉から手が出るほど欲しいと思いつつも、店へ入ってゆく決心がつかずにやりすごしてしまいました。もう一度何気ないふうをして、その店の前を通りましたが、店番の娘とばった

り視線が合って思わず足早やになり、とうとう、あれほど欲しいと思う衝動も、恥かしさには勝てず、そのまゝ後髪をひかれる思いで家へ帰ったのです。

その夜は、あの店先に飾られていたズロースとパンティのことを思つて眠れませんでした。翌朝、やっと浅い眠りからさめた私は、「今日こそはあれを買うんだ」と決心しました。百貨店にはいろ／＼な女の下着がかざられてあります。柔かでふわ／＼して、すきとおるように薄い、肌になつわりついてすべるような下着類のいろ／＼。美しい刺繍やなやましいピンクの色、それには、むせかえるような女の体臭がそるように立ちのぼっています。それは女しか買うことが出来ず、女しか身につけることができないのです。

店頭にかざられた無生物の布のはじが、女の匂いをつゝんでいると感ずるのは、そのせいでしよう。見つめているだけで、ひざが、がく／＼します。男がどうしてそれらの女物を買うことができれば。どのように自分を意識づけても、たとえばスタンダードのようにそれを買うことが自分の義務だと自尊心に命じたとしても、やはり自分にはその決心がつかないのです。女しか買えないもの、女が身につけることができないもの、こういう意識は私の心をますます抑圧してゆくのです。私にはデパートやOSSに飾ってある女の

下着は高嶺の花でした。せめて下町の軒先に並べてあるズロースでも……、と常に思っています。いざとなると、この有様なのです。

私はレースのついたブラジャーをつけてシュミーズをその上にすべらせ、下には真黒いパンティをはくことを想像しました。いやナイロンの何もかもすいてみえるパンティも一度は身につけてみたいものです。そうするとコルセットを下につけた方がよいでしょう。あゝ、ウエストニッパをしめることを忘れていました。ウエストニッパで胴中を息も出来ない位に締め上げたら何センチ位になるでしょう。か、ありあわせの紐で思いきり締めあげてみたら、五十五センチになりました。蜂の胴四十五センチには、及びもつきませんがだん／＼そうなるでしょう。体中にじっとり汗がにじみ呼吸は胸の上でしかできません。

私の想像はとめどもなくつゞきます。けれども、はっと夢からさめると、現実の私は一枚のズロースも持っていないのです。いやありのまゝ告白しますと、偶然の機会に手に入れた月経帯とナイロンのストッキングの二品を持っています。そして、これを偶然手にいれたことが、私の女性の下着に対する異常な執着を育てることになったのです。

それは昨年の十一月の三日、近くの学校の運動会の日のことでした。私は写真狂なのでその日もカメラを肩に、女学生のシヨートシ

ヤツやブルマー姿の跳躍や百米疾走にシャッターを切っていました。その日、朝から下痢気味だった私は、下腹の痛みを覚えて便所へ走りしました。はからずもそこでみつけたのです。便器の前に大きなセトモノの容器が置いてありました。そんなものを見たことのなかった私はなんだろうと思って蓋をあけてみたのです。茶色のナイロンのストッキングは二カ所ほど電線が入っていました。――こうして私が手にいれたのです。私はひそかにそれを洗って乾しました。そして高鳴る胸を押えてそれを身につけたのです。あゝ、それを身につけたときの感触……。それが、私の女性の下着に対する嗜好をつくりあげたのです。

ナイロンのストッキングをはいたときの感じは忘れられないものです。女の人はこうしてナイロンの感触をたのしんでいるのだと思うと嫉ましくさえなってくるのです。私はナイロンのストッキングをはいて外出したことがありますが、ナイロンの布が脚にまとわりつき、股とすれあう、なせるような、さするようなくすぐったい感触は、何度立ち止まったかもしれません。

先ず第一に、足のうらです。ナイロンはすべりがよいので足にくっつきませんから、靴の中で足のうらがナイロンの上をすべるのです。第二に足を曲げたり伸したりするときの太股をナイロンがすべるのです。このすべる

感じは足先から太股に至るまでやわらかく股をくすぐるのです。

私に女性の下着に対する憧憬をかきたてたのは、この月経帯とストッキングです。

私が発見した黒いズロースとパンティは、色が普通のものゝ白とちがうという点で、女が特別な目的にしか使用しないという連想が殊に私を執着させたのでしよう。

朝、私は女の意識でその店先に立ちました。が、声がかすれ、男の外形が身をすくませます。娘はすぐ出てきました。「これとこれを下さい。」私の指先はふるえていました。娘はチラと視線を私の方へ向けましたが、だまって二枚の黒い布を包み、私の前にさし出しました。「二百十円いただきます。」私の手のひらが汗でびっしりになっていっているのに気がつきました。人通りがある道なので、通る人が女の下着を買う私を、のぞきこむようにかんじられました。

私はこのときほど女の世界に男が入りこんだ冒瀆を、かんじないわけにはゆきませんでした。あゝ、けれども、娘から手渡された黒いズロースとパンティが私の手の中にあるのです。私は二三丁歩いてから、はじめて息をつき、これを身につける喜びと期待に胸をふるわせるのでした。

☆

☆

☆

☆

幻想小説

「潰滅の前夜」

(私は悪いことをしません)

土路草一



不安な街

一九五×年九月。――

東京は今年も夏の放射能を含んだ梅雨が、異常に冷たい夏を招来していたが、八月に入ると嘘のようにピタッとやみ、今度はすさまじい暑熱が寒暖計をぐんぐん上昇させた。三八・五度。明治九年気象台開設以来の最高気温を記録した酷暑は、九月に入っても容易に下ろうとはしなかった。

連日、灼けつくような太陽が次々と電波をキヤッチして居る新聞社の鉄塔に照り映え、

慌たゞしく駆け入って来る記者の足下のアスファルトを融かす。増強された自衛隊兵士の銃を焼き、誘導弾ナイキの発射口を焦す。乱闘の議事堂にも、正面に砲列のように並べられた高級車にも、間断なく強烈な光りを反射させる。脳炎と狂人が増加の一途を辿り、日射病で斃れる者が続出した。

不安と焦慮……。じっとしていても、じりじり滲み出て来る汗、誰もが気が変になりそうだった。

不審なビル

国電原宿駅で降りて、神宮とは逆に都電の通りの方へだらりと下って行くと、左側に小高く、白塗りの風変わりな三階建のビルを見ることが出来る。何と云う建築方法か知らないが小さな窓のついた球状の本屋を八本の足で支えている。まるで蛸入道が足を踏まえている恰好だ。敷地は五千坪以上あるだろう。周囲も高いコンクリートの塀で嚴重に囲って寸見も許さない。門柱には「Y国資源幹旋会日本支部」とゴシック書体で彫られてある。入口からわずかに覗かれる庭にはプール、テニスコートが緑の芝生の彼方に続き、建物の

脇にはコンクリートで固められた頑丈なガレージがあつてビュイック五五年型の黒いボディが散見される。

この建物は今春完成した。着工してから一年有半。崖を切り崩し、樹を倒し、夥しい土砂が搬出された。近所の人々は崖を崩したのであれ位な土が出るのだと、それ程不思議にも思わなかったが、注意している人があつたとしたら、連日数十台のトラックが土砂を運び出しているのに不審を抱いたことだろう。さもなければ余程深い地下工事をしていて思つたに違いない。だが出来上つて見れば風変わりではあるが、ありふれた小さなビルに過ぎず、反つて敷地は高く盛上つて居り、土砂の出処がわからなかった。

工事中、気になる事件があつた。それは冬の或夜、突然銃声が静寂を破つて近所の人々の眠りを覚したことだった。銃声は工事現場の内部から聴えた。翌日の新聞は社会面の隅でそれを報じた。Y国側の言い分によれば、一夜のねぐらを求めて、こっそり工事場にもぐりこんだ浮浪児を泥棒と間違えて射つたところ云うのだ。警視庁は過剰防衛と認めて捜査を開始したが、何時の間にかうやむやになつて了つた。相手は日本と講和を結んでいず、当らず触らずにしている新興の強国であり、国際問題を惹起することを好まない当局は、体よく手を引いてしまったのである。それに殺

されたのが身寄りのない浮浪児であつて見れば、どこからも苦情も出て来ないので、深くも追求もせず捜査を打切つて了つたのだつた。その際、Y国側は日本側の係官を殺人現場にだけは案内したものゝ、その他の工事に就いては説明もせず、又見せもしなかった。だから、その内部には如何なる設備が設けられ、如何なる仕掛が施されてあるのか、一切わからない。ラジオ、無線は申すに及ばず、新種の兵器器械が据付けられているかもしれない。或は――。或は発火にして、東京を潰滅させることのできる水爆を装置してあるかも知れない。

太陽はこの建物も直射する。めら／＼と陽炎が白い外壁から昇るようだ。

あつ！ 誰か出て来る。男は門の処で立止り手を翳して振返る。続いて一人、ドアを跳ねとばすようにして若い男が出て来た。二人は連立つて電車通りに入る。一人が手をあげて流しの車を停めた。

此処でこの二人を紹介して置こう。二人はそれ／＼Y国人だ。Y国名と云うか本名はあるのだろうが彼等はそれを使わない。もっぱら日本名の名刺を持って交際している。だから私も日本名しか知らない。

伶子登場

年配者は高木健造、若い方は逢坂辰一と云

う。二人共畳の住宅に住み、米の配給を買っている。近所では彼等をY国人とは思つて居る者は一人もない。いや、そんな生活を見ていなくとも、日本人は彼等を他国人とは思わないだろう。何故ならば、その容貌はそこいらで見掛ける浅黒い日焼けした顔であり、口から出される言葉は紳士的な東京弁だったから。車は乾ききつた舗道の塵埃を巻きあげて、三宅坂から壕端を通り、丸之内へ入つて停つた。二人は前のビルへ入つて行く、エレベータに乗る。五階で降りる。

日天産業株式会社資材課と金文字で書かれたドアを押す。事務室が醸し出す一種のざわめいた騒音が二人を包む。電話の声、タイプライターの不協和音、机の間を泳いで廻る給仕の靴音。それ等は混濁して、わあんと耳を刺激する。

日天産業株式会社。これは兵器を製造する会社だ。世界の何処かで血が流れると活気づく会社だ。タイプライターは機関銃の音を表現し、給仕の破れ靴は、軍靴の響きを代理する。タイプピストの白い指先は、汚れた靴は、戦争を無意識にメカニックに推進している。口口に平和を唱えながら……。

受付のカウンターは留守だ。二人は無遠慮に見廻す、近くに立つて居た女事務員が振向いた。はっとする程美貌である。丸顔で吸い

こまれるような円らな瞳だ。肢体もすっきりと際立った美しさである。ブラウスの肩から露出している腕が肌の白さを教えていた。

高木の眼がきらりと光った。

「ちよつと済みませんが……」

女事務員が寄つて来る。豊かな頬と唇をわずかに綻ばせて、それは人の氣を捉えて離さない。洗練された社交か、持つて生れた天性か、女は意識しないようだが、人々に強く印象を焼きつける。

「いらつしやいませ」

課長の向田さんにお目に掛りたいのです」

「どちら様でしょうか？」

「タケダ産業の高木とおしやつて下さい」

「少々お待ち下さい」

女が取次に去ると高木は逢坂に意味ありげな眼くぼせを送る。

「どうぞ」

女は戻つて来て課長の処へ通して呉れた。

「やあ」

向田課長は高木の顔を見ると快活に声を掛

けたが、去ろうとする女を

「御法川さん」と呼びとめて

「専務、おいでですか？」

「お出掛けになりました」

「トレーニングかな」

とゴルフ棒を振る真似をする。

「ノウ・ビジネスですわ」

女は奇麗なアクセントで微笑む

女の姿がなくなると向田は高木に向う。

「どう？ 今の娘、奇麗だろう」

「日天産業には珍しいですね」

「はゝゝゝ、ミス日天産業さ、専務の秘書なんだ。育ちはいゝし、あの通り愛嬌はあるしね専務が掴んで離さないんだよ、今日みたいなのは珍しいんでね、仕事って云うと必ず連れて行くんだよ。君知って居るだろう。イギリス大使だった御法川平三、あの人の令嬢だよ」

「道理で」

「何が？」

「立居振舞ですよ、日天産業にしては御仕込が良過ぎと思ひましたよ」

「はゝゝゝ、馬鹿に日天産業を腐すね」

「そりや仕方がありませんよ、今度の発注は全部、私の処へ下さるなんて云つて置きながら、蓋を開ければ入札なんですからね」

「形式的にはそうしないと他の業者が煩さいからね」

声は傍の事務員に聴える程度だ。が、高木の手は机上のメモに走り書している。

「原子誘導機の受註数、納入部隊名」

話は十五分位で終った。

「じゃ、よろしく願ひしますよ」

高木は頭を下げて部屋を出る。その時給仕の大野六太が何気ない風で出て来た。廊下に人氣が無いのを見済まして小声で何やら高木

が囁やく。六太も小声で返事する。どうやら知合、否、もっと深い関係らしい。

狙われた肢体

スチールボックスの上に掛っている時計が五時を示すと、タイプや電話の交響樂が止んで、戦争への時間を売っている人々の机上を片付ける響が始まる。

「六ちゃん、おめかしね、待ち合せ？」

ポマードで髪を整えている大野六太に、御法川伶子は声をかける。

「えへゝゝ、冷やかしかちやいやだよ」

六太は照れ臭さそうに笑つて頭を掻く。伶子は間の抜けたようなこの少年が好きだった仕事ものろく、云いつけられたことにも氣が利かない。社員達には始終がみ／＼と怒鳴られているのだが、とぼけた顔付で一向に感じている風もない。女事務員達迄小馬鹿にして六太と呼び捨てにすることがある。だが伶子にはそれが純情朴訥に見える。小才のきかない生真面目な少年だと庇つてやりたくなる。時々客用の菓子をやったり、出先の貰い物を頒け与えたりしていた。六太は伶子に馴ついて、毎朝、専務室に顔を出すようになった。だが六太は伶子の思ふような少年だつたらうか……。

五時三十分。——ブラインドは下され、タプライターに覆いがかけられ、薄暗い室内

で主なき机が静まりかえる。御法川伶子は残務を終えて事務室を出た。

蟻の列を思わせる人波が、東京駅に吸いこまれて行く。永い人生を擦りへらした顔、ぐったりと一日の疲労を見せた肩、ビールの一杯に期待を弾ませている若い足、少女歌劇にはしゃいでいるアルト、青春を風に靡かせているヘップバーンススタイル。

これ等は戦列である。踏み下して行く一駒一駒に戦いは近づいて来るのだ。戦神が見えぬ手で招ねいて居るのだ。彼等は知らず知らず戦の庭へ足を運んで居るのだ。心には平和を描きながら。

電車は、それ等の人たちを呑みこんでは、黒いレールの彼方に消えて行く。

御法川伶子の白いパンプスを履いた、すらりとした足は、中央線の階段を昇る。彼女の家はA駅なのである。御法川平三は終戦後間もなく脳溢血で斃れ、引続いて母も混乱の中で死んだ。今は妹の多穂子と二人でアパート住いの身だった。父の知人関係が助けとなり、日天産業では比較的高給を貰っていた。彼女は二十二才。高木を感嘆させた美貌と肢体を電車へ乗入れる。

汗と脂。それが一体となって、すえた匂いを車内に漂わす。詰めこまれた人間達が額に胸に背に、汗の粒を湧出させながら懸命に、車体の動揺から、身を支えている。伶子の胸

にも汗の玉が浮く。だが伸したまゝの手は周りの人々に押えられて、ハンドバッグを握りしめた儘動かせないのだ。頬は前の人のワイシャツに、ぴったり当たった儘、口紅をつけまといと顔を背けるのが精一杯だった。

その伶子の有様を、じっと見ている眼が四つあった。瞳の底に輝く嗜虐的な光り、唇に潜む残忍な意志、日本人の顔ではない。そう、Y国人だ。高木にあった、あの型だ。伶子の紅らんだ耳朶から顎へと舐めるように、その視線は食いこんでゆく。

此処から伶子の受難は始まる。これは彼女個人の戦いであり、国際紛争に捲きこまれた或る人間の悲劇なのだ。隠れた歴史のページなのだ。だが彼女に振りかゝった災害は、只それだけで片付けて了うには余りにも悲惨であり、余りにも残酷であった。

誘拐された美貌

伶子は妹の多穂子の結婚問題について考えて居た。明日、会社の帰りに逢って欲しいと云うのだ。相手はアルプス貿易の社員で、多穂子の云うには、ハンサムで話題も豊富だし人を逸らせない話術は若いのに珍しい。姉さんだって一度逢えば絶対、好感を持つからと力んで居たが、伶子には不安があった。そんな社交的な人だったら多穂子のような子供を誑かすのは赤児の手をねじるようなものだ

思う、反って朴念人で無口なら、真面目さも買われるのだけれど、それに知人から別の縁談を持ちこまれているし、兎に角、明日行つて見ようと思った時、電車はA駅にすべりこんでいた。

九月の陽は既に落ちて、商店街はあか／＼と照明していた。駅から吐き出された人波は蛾のように灯の中へ流れゆく。

白いブラウスに紺のスカート、質素な色の配合である。だがリファインされたデザインと知性を潜める白い額が理智的なスタイルを表現している。人々は引入られて振返つて行く。伶子は銀行の角から左へ曲る。急に灯が少なくなつて、涼を求めている人達の浴衣姿が白く浮んだ。伶子の足は自然速くなる。

「もし／＼」

呼びとめられて、顔を向ける。男が二人寄つて来た。

「御法川伶子さんでしょう」

見知らぬ顔である。

「えゝ、そうですけど」

「私はこう云うものですが」

出されたのは黒表紙の小さな手帳である。男はめくつて見せた。

この者は情報犯処罰令に基く情報警察員であることを証明する。

これを呈示された者は、情報警察員の質問

に速かに正しく答えなければならぬ。

同行を求められたる場合は、直ちに従わなければならぬ。

右に違反したものは処罰令第XX条に依つて罰せられます。

情報局防諜課 ㊦

議会は国際関係の緊迫化に刺激されて、嘗ての戦時中の情報局を復活させ、防諜に関する相当嚴重な法律を可決していた。情報犯処罰令とは戦前の治安維持法に匹敵する法律で、容疑者は令状なしでうむを云わさず拘引出来るようになっていた。これが上提された時は驚々たる非難が捲き起ったが、政府与党は絶対多数の威力で強引に押切った曰くつき法律だった。

「あの、私に何か？」

「お訊ねしたいことがあるので、御同行願いたいのです。これは呼出状です」

逮捕状に似た形式で、伶子の名前と住所が記され、情報参考人としてと理由欄に説明してあった。

「どんなことでしょうか？」

「それは来て戴いてから説明しましょう」

官に対して文句なしに服する日本人の通性を、伶子も又持っていた。冷静に相手を観察し、問い糺し、行動していたら伶子の運命は変って居たろうに……。

「家が其処なのですが、寄って着替えてからではいけません？」

「手間はとらせません。直ぐ同行して下さい」低い強い命令口調だった。伶子は、しゅんとなってうな垂れた。

「さあ、行きましょう。なかに簡単に済みますよ」

男達は伶子を中心に挟んで来た道を戻った。駅前には自家用の白ナンバーのついたビュイックが待っていた。

疑惑する心

車は暮れなずんだ灯の中を新宿へ出た。伶子は両側に坐って居る男達に、いつも見ている男達と違った、圧迫的なものを感じた。恐しさと不安が入り交って、バックミラーに映る男達の顔を直視出来なかった。何を私に訊こうとするのだろうか？ 会社の事か、父の事か？……男達は石のように黙っている。

新宿から御苑の脇を抜けて、外苑に出る。

一人が小さい声で差図した。差図された男は、手前のハンドルを廻す。する／＼と硝子が上るように、周囲の窓が黒い日除によって覆われた。ルームランプがついたが、伶子の眼は車外の景色と遮断されて了った。

「少しの辛抱です。防諜上、処在を知られ度くないのです」

「はい」

伶子は何でもない氣に返事をしたけれど、黒雲が拡がるように胸の内に疑惑が湧いた。神経は磨ぎすまされて、耳に集中し、ハンドルのきり方にも方角を知ろうと氣を配った。

車は同じ処をぐる／＼廻っているように感じたが、二十分程走ってとまった。男達は降りようとしなない。ウーとモーターの音がしたかと思うと伶子たちを乗せた車はエレベーターで降りる感じを受けた。又、車は走り出したが今度は直ぐとまった。

其処は灰色の壁が四囲に続いている地下ポーチだった。地下ポーチと云ったけれど、それは伶子の肌が、ひんやりとした地下特有の感触を嗅ぎとって居たし、螢光灯の他に採光する窓が見当らなかったからだ。

入口にいる黒い制服の守衛に、男はバツジを見せて入る。灰色の廊下を幾曲りもして、伶子は調問室と札が出ている鉄格子の硝子戸も頑丈な部屋に連れこまれた。

「御法川伶子を連行致しました」

男は中央のソファに凭っている背広の男に報告した。

「御苦労だった」

伶子は何処かで、その顔を見たように思った。男は高木だった。昼に日産業を訪ねた男だ。だが伶子は思い出せない。

「御法川伶子だね」

念を押す事務的な重い声は、冷酷な響きを

持つ。伶子は氣押されて、その均齊のとれた上体を前にかゞませて肯いた。

「年は？」

「二十二才です」

「日天産業に勤めているね」

「はい」

「これに書きこみなさい」

高木は机の引出しから印刷した一枚の紙片を出した。

「あの、私、一体何の為に呼ばれたんでしようか？」

「後でわかる」

氷のように冷い返事だ。伶子は取りつく島もない儘、紙片を拡げる。

身上調書なのだ。氏名、生年月日、住所、学歴、職歴、家族等を書入れるようになって居る。

「正直に書くんだよ。その調書で再調査するからね、嘘を書けば刑罰があるよ」

「はい」

伶子は手入れの行き届いて居る白い指に、ペンを搦ませて、奇麗な字を並べていった。

高木はソファで紫煙をくゆらす。ちらつ、ちらつと伶子の紙に動いている手に、舐めるような視線を走らせる。

「これでよろしいでしょうか」

書き終って高木の前に脚線を揃える。

「うん、いゝだろう」

さあっと眼を通すと、ナンバーリングをうった。

「これが君の番号だ。後で呼ぶ迄、控え室へ行って貰おう」

小さな木の礼である。お守りのように紐がついている。F三八七号

苦悶する色彩

高木が卓上電話で命ずると男が二人入って来た。その男を見て、伶子は思わず悲鳴を挙げた。二人共六尺はある。いが栗頭で顔には生々しい傷痕があるのだ。ランニングシャツとは少し違う黒いシャツを着て、びったり締まったズボンを履いている。黒々とした針金のような胸毛が露出し、幹を思わせる太い腕が無言で伶子を捕える。わめきとも絶叫ともつかぬ声を進らせて伶子はその手を振りほどこうとした。だが大樹のように微動だもしない。両側から抱え上げられて部屋から連れ出されて了った。

「大人しくするから、その手を離して」

伶子は腕の痛さにたまりかねて懇願した。

男達は沈黙の儘、又廊下を幾曲りもして、更に下への階段を下りた。

その部屋を開けるなり女の匂いがむつと鼻についた。白粉や口紅や香水の香りなのだ。伶子の鼻は同性の匂いを嗅ぎわけられなかったかも知れないが、眼は其処に展開されてい

る同性のいたましい恰好に凝然と目を瞪らない訳にはいかなかった。

内部はコンクリート生地剥き出しのまゝ、何の装飾もない殺風景な部屋だった。否、装飾はある。幾つかに仕切られた鉄格子の檻が設けられてあり、中に様々な色彩のブラウスやスカートを纏った美しい動物達が、口枷、手枷、足枷を嵌められて陳列されているのだ。

伶子は暫し放心していたが、自分の運命を覚るとはかない抵抗を始めた。だが、無駄だった。男の手は食いこんだ儘びくともしない。いたずらに足をばたつかせるに過ぎないのだ。

檻に運び入れられる。男達は無表情に伶子の腕を上げさせて、コンクリートに打ちこんである手錠に別々に嵌めた。足も同じように嵌めて胴を鎖で一巻きする。終りに口を強引に押し開けると鉄の轡を噛ませた。それは中央が括れて舌の上で交叉するようになっているのである。伶子は声は出せるが言葉にはならなかった。それも後の壁に固定されて了った。手錠の位置が低い為、伶子は膝を半ば折って中腰にならなければいけなかった。立上ろうとすれば、胴の鎖と轡が邪魔をした。坐ろうとすれば、延びて居る手がそれを許さなかった。おまけに固定された轡の為、横を向くことすら出来なかった。隣には十八、九才のギヤザスカートの娘が、チェックのブラウ

スにぐっしより脂汗を滲ませて喘えいでいるのだ。男は、F三八七の木札を伶子の首に掛けると鉄格子の内側を指示して出て行った。何か書いた板が下っている。横を向けない伶子は、厭でもそれが眼に入った。

「此処はY国の特殊機関である。お前達をY国に対する犯罪容疑者として逮捕した。此処は日本ではなくY国であることを認識して、審査審問に答えて貰いたい。素直に正直に応じY国の利益を計ろうとするならば希望と自由を与えるが、反抗若しくは従わざる時は、心身共に嚴重な罰を加える。尚お前達の身体を自由を奪つてあるのは、その苦痛に依り自己を反省し、Y国に協力を誓う心構えを作る為である」

伶子の背に戦慄が走った。Y国。嘗ての日本軍が草を刈るように虐殺をほしきまゝにした国。Y国。知能程度が低く、女が家畜のように売買される国。伶子の心は恐怖に煮えくりかえり、沸りたった。頭は不安と焦慮で痺れる。伶子の口は呻き、鎖がかち／＼と鳴った。

向い側の檻でも、美しい幾匹かの動物達が悶えている。ネックレスが汗に光り、イヤリングが小刻みに震える。髪が額に垂れ、胸は大きく波打っている。鎖の音と絶え間ない苦

痛の呻き。時々、喚きが高く響く。動物達は一秒の安らぎを得んと、動かぬ足を踏み、手を伸ばし、身をくねらせ、空しい努力を傾ける。それが精一杯、彼女達に許された自由なのだ。

伶子は中腰になっている腰が、切れるように痛んで来た。腕に力を籠めて少し伸びる。今度は手が痺れる。足が抜けるようだ。伶子は何も考えられなくなった。ただ、この痛みこの苦しみから逃れたい。額に汗が浮いて来る。鼻腔は荒い息に膨らみ、口は空気を貪っている。吸いこまれるような魅力的な瞳は曇り、知らぬ間に、ぽとぽとと涙が頬をつたつて床に落ちて居た。

素足のペタル踏み

デスクの上の置時計が十二時を示す。高木は吸っていた煙草を灰皿に突込むと電話で逢坂を呼んだ。

「審問だ、準備してくれ」

「はい。今日は何匹ですか？」

「八匹。それから、逢坂君、今日捕獲した御法川伶子を君に頼みたいのだが……」

「審問ですか？」

「いや、調教だよ。血統もいいし、面だつて踏めるしね、それに身体が素晴らしいよ、あんなのは、ちよつと見当らないぜ」
「ベタ惚れですね」

「馬鹿云うな、目的があるんだ。どうだい、君の腕の良いところで、みっちり仕込んで貰えないか」

「腕の振いどこつて訳ですね、やってみましょう」

「有難う。君なら、僕も安心して任せられるよ。それじゃ早速始めようじゃないか」

高木の部屋の裏手に階段がある。それを左に回ると審査室がある。小さな部屋である。奥に机が一つにあって、その前に金属製の台がある。歯科医の椅子を複雑にしたような台で、電線やらロープやらが矢鱈に附いている。傍にメーターがあつて、調理器のボタンが羅列している。

壁際には身長計や体重計が並んでいて、傍に妙なスタイルの機械が据付けてある。上から鎖が二本、折れて垂れ、先には手錠がぶら下っている。下には、サンダル様の履物が載った、円筒型のピストンが設置されている。正面にゲージが前後から見えるように取付けである。

「医者か？」

「今来ます。…最初は？」

「うん」

高木は手にした身上調書をめくつて、

「多摩圭子、F三八三」

逢坂は電話を取上げる。

大男に連れられて多摩圭子が入って来る。

伶子の隣に居た十八、九才の娘だ。ぐったりと力なく両側から抱きかかえられている。まだ、あどけない頬が蒼白にひきつっている。

「多摩圭子」

「はい」

娘は身を支えて高木の声に畏怖する。

「どうだ？ 苦しかったか？」

「はい」

「自分のしたことが悪いと気がついたか？」

「……」

「どうだ？」

「私、悪いことなんてしません」

娘は昂然と眉をあげて、否定した。

高木と逢坂が、にやりと笑う。

「そうか、じゃ認めさせてやるかな」

大男は暴れる圭子を、円筒型の機械の上に乗せた。そして両手を差上げさせて一本宛、垂れ下っている手錠に嵌めた。足は靴と靴下をもぎとり、素足にしてサンダルの上に固定した。

「お前は自転車に乗れるかな」

圭子は黙って、他処を向いていた。

「お前の足が載って居るサンダル、即ちペタルの下には電熱器が入っているんだ」

圭子は驚いて足を見る。靴を履く要領で皮紐が締まっているサンダルは、自分で脱ごうとしても、勝手に脱げなかった。

「お前の眼の前にあるゲージは、ペタルを踏

む速度を記録するものなんだ」

誘いこまれるようにゲージを見る。

「お前が或一定の速度を出して踏んでいないと、電熱器が点いてお前の足の裏を焼く。では先ず、十五の目盛の処と決めよう。これより速度が落ちると足の裏が火傷するぞ。逢坂、スイッチを入れる」

黒いエボナイトの疣がOFFからONに切り替えられる。

「あつ、あつい」

圭子は甲高い声で喚いて、追いたてられるようにペタルを踏み出した。眼をゲージに凝しながら、ピストンの軋む音が部屋の空気を震動する。二分、三分、四分、膝が上り、スカートが翻える。相当な速度である。六分、七分……呼吸は高まり、荒く弾む。額から汗の玉が、したたり落ちる。眼に流れこむ、涙と一緒に顔中を濡らす。

「止めて……止めて下さい。……」

苦悩が塊りとなって訴えた。

女体開頭

「暑そうだな、逢坂、脱がせてやれ」

ほくそ笑んで見守っていた逢坂が、立上ってフレンチ・スリーブのブラウスに手をかける。

「いや、いやです」

鎖を弦に張って身悶える。と、ペタル踏み

がお留守になる。

「熱い！」

「はゝゝ、大人しくするんだ」

逢坂は舌舐めずりしながら、無動作にボタンを外し、剥き上げて鎖に掛ける。ペンベルグデシンのスカートが、ぼらりと足下のピストンの罫りにこり落ちる。滑らかな腿が露出する。シユミーズが、するっと外れる。肩から胸の膨らみに、男達の眼が吸いつく。男を知らない固い乳房が、ぷりぷりと躍動している。一刻も足を休められないのだ。

「ああっ！、許して……許して下さい」

羞恥と苦痛に頬を真赤に上気させて、哀訴を魂切らせる。喘ぎつつ鎖を引き、腰を反らせる。が、機械は正確に停滞を責めることを忘れない。足裏を襲って来る熱痛に、圭子は悲鳴を挙げ苦渋と哀願の表情を漲らせる。

だが機械は寸時の呵責もなく、屈辱を更に高め続ける。顔も肩も、胸も背も、いっぱい汗の玉である。

高木の眼は冷い。品物の値踏みする眼である。無我夢中で動いている女体の隅々迄、じつと注いでいる。

「ちよつと色が黒いな。それに乳も、もう少し大きい方がいい」

「乳がですか？」

逢坂は猫か犬をいびる目つきである。

「ちえっ、ひでえ汗だ。こいつ、随分汗っか

きだな」

汚れた手をブラウスで拭う。

「課長、まだ汗が出ますね、もう少し絞って見ましようか？」

高木の諒解を得て、ゲージは十八に上げられる。圭子は心臓が破れるように喘いだ。足は感覚を飛ばし、反射的に上げてはいるが、時々、ふっと気持が浮いてくるのだ。

高木はそれを丹念に見ていたが、逢坂に顎をしやくった。逢坂は傍の鞭をとる。大きく振りかぶって、圭子の背に打下した。

びしり。汗に塗れた肩から背に、くるくるとまわりつく。

「ああっ！」

圭子は弓なりになってくねる。

びしり。続いて革鞭は空気を切る。

「どうだ。お前は自分が悪いと思わないか」

高木は感情のかけらもない声で苦斗を続けている女体に問う。圭子は眼前が幕を張ったように男達の顔が霞んだ。只、足を止めたかった。苦しみから逃れたかった。

「はい。私が悪かったです」

「心からそう思うんだな」

「はい」

「Y国の刑罰を受ける覚悟はあるな」

高木はたゞみこんで訊いた。

「はい。受けます」

空気を軋る響きは消え、心臓の喘えぎだけ

が残った。

家畜への門

圭子は生命のない人形のように、引っくり返され、転がされて、医者の審査を受けた。

そして又、中央の台に括られた。膝立に足首を後に縛られ、前の輪に手を結ばれた。肩も頭も固く枷が食いこみ、一寸たりと動くことが出来なかった。

高木はその無抵抗な肢体を見下して、徐ろに口を開いた。

「その台は審問台と云うんだ。お前達の振じ曲った心を真直ぐにする為のものだ。調整器のボタンを押すとその体をいろいろな姿勢にすることが出来る。海老にも蟹にもな、又このボタンは指の胡桃割や総ての個所の鞭打、水責め火責めが、出来るようになっていんだ。お前が、これから質問することに素直でなかった場合、嘘と認められた場合、可動させる。」

圭子は虚空に聴いていた。精も魂も尽き果て、力なく臉を伏せ、思考は完全に磨滅しきっていた。

「お前はY国人を罵ったろう？」

「はい」

「チンペロと云ったろう」

「はい」

「お前の親父は内務省の官吏だったな」

「はい」

「お前は親父から聴いたY国の状態や兵器のことを米国系に喋ったろう？」

「えっ？」

「ミッシヨンスクールの教師に話したろう」

「はい」

圭子は放心したように答えていった。答えればいい、認めればいい、そうすればこの場は逃れられる。憩まれる。それだけだった。でも、それが良かったか、どうか。尤も、どちらにしてもY国人達の目的は別だったから結局はその目的通りには、させられて了ったろうけれど……。

お蔭で圭子は審問台で責められなかった。だが幾人かの女達は、この台で呻き、悶え、血を流し、氣を失った。その手錠や足枷は、女達の脂で黒光りし、鞭は柔軟さを増し、鉄棒には数本の髪の毛がへばりついている。

圭子は高木に依って其の場で刑を宣告された。

「Y国の機密漏洩並びにY国人誹謗の罪に依って家畜役三年に処す。但し服役中、従順ならざるときは更に刑期を追加する」

高木達には、女達の家畜化が目的だったのだ、罪名は形式的につければいい。

御法川伶子も機密漏洩だった。ボロきれのように投げ捨てられた、紺サテンのスカートやナイロンシユミーズの傍で、自由を奪われ

て、コンクリートの床に打伏し、素肌を空気に晒しながら、怯える耳で二年半の刑期を聴いた。女達は呆然自失から覚めると慟哭し、身を擦り合せて、わなないた。高木達は傷ぶる眼で楽しみ、呵責なく牛馬を繋ぐように立上らせて、鎖で連繫した。

後手錠にされた八匹の家畜達は、鞭に追われて足鎖を引きずりながら、鉄格子の門を潜った。特殊家畜調教所と書いてある門を……。

Y国人達は大胆に、数多くの美しい女達を家畜にしていた。頻々と起る婦女失踪に、日本警視庁が騒いでも、巧みに彼等は痕跡を残さなかった。彼等は何の為に危険を冒し、美女を家畜化して行くのだろうか？

それは後で語るとして、先ず御法川伶子の受難の道を辿ろう。

人間剝奪

鉄鎖を触れ合せて、よろめきながら、八匹の家畜達が最初に連れこまれたのは登録室だった。台帳には只、番号と年令だけが記入される、それと入荷日附。

F三八七号。それが御法川伶子に与えられた家畜番号であり、新しい名前だった。鉄格子を入った途端に女達は、人間の一切を剝奪されると共に、過去の総てと遮断された。代議士の娘も、ウェトレスも、女子大出も、小

学校卒業も、すべて家畜である。名前を捨て、衣服も捨てた女達の評価の尺度は、後手に縛られてうなだれている肉体だけである。財産も教養も、此処では一片の反古にすら価値なかった。

白い肉体の群は、装具室に追い捲られる。

親鳥から餌を貰う小雀のように仰向いて、一列に杭に緊縛された。家畜達は紅く花瓣を散らせている乳首を、吹き撫でて行く空気の感触に、絶え入りそうに凌辱感を亢進させながら、許された範囲で身を縮める。併し、それが何になる。女達は、改めて無意味に見過ぎして来た嘗ての自由を渴望した。

F三八四号は奥歯の根もとが削られる響きを耐えた。左の奥歯から右の永久歯へ一本の針金が差渡されて固定された。中央部が太く、穴が開いている。その穴に金網の袋が、舌を包んで嵌められる。パネになっていて舌は動かせない。

「お前の年は？」

唇は二十一才と云ったつもりだが、咽喉はアクセントを震動しただけだった。

「はつきり云え」

彼等にしてみれば、無理を承知の器具検査なのだ。が愛くるしい容貌は眉根を寄せ、口を懸命にぱくつかせる。小柄に成熟した肢体は統のような柔かい皮膚に覆われている。この餅肌に紅みが昇る。その紅味を持った肩は

ぎゅうと爪をたてて握まれる。

「あ、あッ」

思わず声帯が鳴る。瞬間、麻痺した知覚の片隅で、この女は愛しい面影を浮べる。

「仲々いい肌だ。鞭の振り甲斐があると云うもんだ」

ぐいっと髪を引かれる。ごきん、首筋が鳴って、毛が四、五本肌に落ちた。透き通るような光沢を放つ絞肌に、いきなり針が刺し通る。真黒な墨が鮮かに散って、きりきりと疼痛が肩を走った。刺青だ。知覚が戻って来て小柄な家畜は歯を食い縛る。啄木鳥に似て、間断なく突つき、ささる。雪白の肌はひくっひくっとう蠢めき、唇からは、乾いた荒い息が吐き出される。F三八四の記号は一気に彫まれて行った。

「調教師様の話がある」

八匹全部に轡嵌めと記号彫が終わると達しがあつた。胴に鋼線の入った細い革ベルトを締められ、新たな後手錠でベルトに止められた家畜達は正坐を命ぜられた。

調教師とは逢坂辰一である。別に助手として、やくざタイプの十六、七才の少年、田川である。逢坂は疎んでいる新米家畜の前に立つと例の視線で、一匹一匹の震えている肩や息づいている胸やびったり合わさっている両腿をなめ廻すように眺めてから口を切った。

家畜の心構え

「お前達を何故そうしてあるか？ その答は簡単だ。お前達は家畜だからだ。牛や馬が洋服や着物を着ていたら可笑しいだろう、それと同じことだ。それに衣裳は美しさに自信のない者が纏うものだ。美は、あるが儘に観賞するもので、様々に飾りつけた姿は虚飾と云うべきだろう。更に重要なことは、体が無であることに依って心も無にすることだ、これから教え鍛えてゆくことを、白紙で受取って行かなければいけない。お前達に轡を嚙ませて、何故喋べるのを禁じたか？それも犬や猫と同じ動物が、人間の言葉を喋べる必要が無いからだ。それに言葉が云えれば、直ぐ不満を訴え、不平を吐き、胡麻かしたり、嘘をついたりする。肉体と云うものは、動けば汗をかく呼吸が速くなる。喘ぐ。限度迄来れば気を失うだろう。この方が正しい意思表示だと私は思う。お前達の手の自由を何故奪ってあるか？ これも同じだ、犬や馬は手を使わない。それに手が使えるとつまらないことをする。引掻いたり、殴ったりな。要するに環境、動作を他の獣達と同じにする。お前達の心を、私は家畜なんだ、人間とは別種な獣類なんだと、はっきり認識させる為だ。お前達は鉄の門を潜った時から人間ではなくなつた。と云うより新種の家畜として誕生したんだ。

過去は此処では必要ない。此処では二十才になつた、十三貫の柔軟な肢体と云つたものだけが価値を生ずるのだ。お前達は、身体は成育していても家畜としては赤ん坊だ、新しい道を開拓する心構えを持たなければならぬ。今迄人間の生活をして来たのだから、辛く苦しいとは思ふ。併し生れ変わる為には苦しみは当り前だ。我々が振う一本の鞭にも、良い家畜に育てようとする責任とパッションがあることを心に刻んで置いて貰わなければならない。お前達は罪を犯し、この運命に落ちた。贖罪の気持があるなら従順に忠実になることだ。さもなければ刑期を延ばすことを私は申請する。次に調教に當つての指示をする。お前達の考え方から、行動動作から、生活環境から総ての人間的なものを叩き出すことを第一とする。少しでも人間的なものが顔を出したら容赦なく罰する。第二に命令に服従すること。我々はお前達の飼主である。我々の利益のためならお前達に火の中へ飛びこめと命ずるかも知れない。それにお前達は躊躇なく従わなければいけない。それが我々の所有品としてのお前達の義務であり、我々の絶対的権利だ。第三は奉仕することだ。命令があつても無くても主人の為に、すすんで奉仕しなければいけない。又お前達は我々の愛玩物だ、主人の気嫌をとり、じやれることも奉仕

の一つだ。この三つを先ず云い渡して置く。最後にお前達の心構えの為に、調教師心得の中の言葉を二、三披露する。〃十四の不完全な家畜を責め殺しても、一匹の完全な家畜を育てた方が良い〃家畜達の罪は些細であつても、罰は些細であつてはいけない〃洗濯物は叩けば叩く程汚れがとれる。家畜も叩けば叩く程汚れがとれて純粋になる。〃等とある。私も鞭程お前達には良薬がないと思つてゐるが、素直な奴には振えない。その点、お前達も私の気持を汲んで素直なよい。〃家畜になるように努めて貰いたい」

演説は終つた。想像だにしまつた自分達の苛酷な運命に、肌粟を生じて女達は跼つた。

家畜の機能点検

「F三八七号」

呼ばれて伶子は、調教師の前へ引据えられ。崩れるように坐りこんで、半ば恐怖と半ば憎悪の眼をあげる。逢坂はいきなり足で頭を踏みつけた。ブラシのかかつていた黒い髪は無惨にスリッパに絡んで乱れる。熟れた腰部の上で、白い手首が黒い金具で、きっちり交叉されている。桃色の爪を持つ指先が、手の掌の中に握りしめられて疼撃した。

「俺はお前の主人だ。所有者だ。それに向つて何だ、その眼付きは。」

踏みつけた儘、剥き出しになった綿のような背に、鞭を勢よく打ち下す。びしっ！ 伶子は海老の様に押しつけられて、ふくよかな頬が膝で、ひしやげて、身悶える。うなりをたてて、五、六回、革と皮との響きが続く。彼一流の相手を先制するやり方なのだ。鮮やかに、ゆく赤い傷痕を、眼を細めて見下しながら、足に伝ってくる女体の悶えを楽しんでいた。

それは、効果的な打撃だった。新入荷家畜の心隅に巢食っていた反抗や憎悪を一瞬にして消し散らせて、調教師の威圧を植付けた。鞭が止むと伶子は踵を揃えて立たせられた。若痛を耐えた胸が荒い息に弾む。

弱々しく、項を垂れて、眼を床へ落す。すらっと伸びている脚。外向けて俯いている。広い額に後れ毛が垂れて、長い睫毛が濡れたようにうるんでいる。後手、足鎖で観念しているその姿が殊更に印象的だった。逢坂は昼間見た時とは違った美しさを見た。調教師はこの意の儘に出来る美しい所有品を、もっと苦しませてみたい欲望に駆られた。性格を持つ女秘書から玩弄物としての商品に転落させた。肢体の苦悶美を観賞したかった。手を顎にかけて、口を開くように命ずる。白い歯並の奥に嚙がしっかり嵌めこまれ、咽喉の肉が喘ぐように呼吸している。ふと手に伝ってくる震えを感じると逢坂は嬉しそうに眼を細

めた。この美貌を、やたらにいたぶってやつたらという思い付きに興味を覚えて、指に力を籠める。唇をめくり、鼻をつまみあげ、臉をいじり、耳朶を引張る。それは雛の検査に例えようか、馬喰の馬調べに比べようか、そんな感じだった。伶子は溢れそうになる涙腺を押さえて耐えた。

調教師は伶子を脇に、片膝立に跼ませる。主人の命令を待つ犬のように、主人は犬のウエーヴした髪を撫でて云う。

「お前はシェーバードを知ってるだろう」

「あうう」

言葉ならぬ顔きが唇を鳴らす。

「お前はその、シェーバードだ。ほら、取ってこい」

足が動いて履いていた、スリッパが飛ぶ。家畜F三八七号は不自由な足で駆け出す。はちきれそうな胴体が、交叉された手首の下でぶるんぶるんと揺れる。辿りつくと跼んで、歯と云われた並びのよい歯で、薄汚れた、芥の附着しているスリッパを啜える。よちよちと戻って来る。形よく伸びた足は、動きを制限されて、膝と膝とをぶっつけながら、漸く戻り着いて正面から主人に渡そうとする。

「馬鹿！ 犬の真似も出来ないのか」

鞭が仮借なく、必死の努力を打砕く。

「そら、もう一回だ」

よちよちが続く、今度は主人の後を廻り、

脇に跼まる。

「ふん」

調教師は足を出す、履かせると云うのだ。家畜は啜えたスリッパを、おずおずと足先に運ぶ。屈辱に紅く上気した頬が、脂切った足に擦りつけられる。

「何をまたもたしているんだ。踵の方を啜えろ！」

家畜は恐怖して、反射的に泥のついた底皮を啜え直す。唾が底皮の泥と脂を融かして、舌の上へ流がす。吐く動作の出来ない舌は、べっとりした味を脳髓へ送った。異性の唇どころか他人の皮膚にさえ、触れたことのない可愛い唇が、悪臭を放つ無頼の男の足裏を舐める。でも伶子は懸命だ。香氣を含む荒い息が調教師の足を心地よく擦った。

二十才のシェーバードは数回、スリッパ運びを繰返す。汗は顔に流れ、背に滴る。

「どうも遅い。よし、後で調教してやる」

調教師はF三八七号に鉄のついた首輪を嵌め、壁際に吊して立たせた。

(以下次号)

「伝言板」休刊以前の本誌の寄稿家の方で編集部と連絡のとれていない方々は御手数ながら御一報下さるようお願い致します。



女性自害実見談

或る従軍婦人の死

佐 茂 半 治

先日、友人の伊藤君の処へ遊びに行つたとき、丁度彼の兄が居合せて、ビールを飲みながら次のような話を聞かせてくれました。

『太平洋戦争が南方の各地でたけなわの頃、支那大陸では、北支事変以来の長い戦争なので、兵隊の間では大分倦怠感が強かつたようです。私自身も、毎日毎日同じ町を奪つたり奪いかえされたりでは、まったく、うんざりしてしまいます。その頃、私は中支の湖南省の端にあるHから北へ三里ばかり行った小さな村に駐屯していました。そこは湖広平野の流れで西の方には、施峰とかいう山が聳えています。空気が澄んでいて朝晩、青い山々がくつきりと見える大変景色のよい処でしたがその当時の私達にとっては、単なる血腥い戦場でありませんでした。』

そう、あれは、昭和十八年の四月頃でしたか、H町に駐屯する私達の部隊本部へ二十人ばかりの特志看護婦が配属されてきました。

看護婦といっても名ばかりで、ほとんどがていのよい慰安婦だったので、実質はそうであっても、やはり彼女たちには、看護婦という名の方が魅力があつたようです。その中の七人が私達のいる第一線である村へも慰問に来ました。

長い者では数年、短い者でも二三年の軍隊生活で私達の気持も相当すすんでいました。彼女たちも又、私たちが想像していた以上に又ひどくすすんでいました。あゝいった第一線では戦場心理とでもいうのでしょうか。普通の常識では理解しえないような事でも、日常茶飯事のように行われるものです。

彼女たち慰問団の中に、秋子という、色はやゝ黒ずんでいるが、目鼻立ちのやゝ整った女が居りました。健康美というのでしょうか或は陽灼けしていたのかもしれませんが。私も七人の中では、彼女に一番に目をつけていました。私達の隊長である栗本大尉は、すっかり秋子に惚れてしまったのです。この栗本という隊長には、私は第一補充兵で召集されて以来、大陸戦線へもずっと一緒に行動をしてきましたので、その性質もよく知って居りますが、どちらかというと、心からの軍人タ イプといえます。冷酷なところがありました。そういう人々を人とも思わぬ強引なところが氣にいったのか、彼と秋子とは大分アツアツだと、私たち兵隊仲間では、現場を見てきたような噂が立ったものです。

五月の初め頃、日夕点呼も終つて、これからゆっくりしようと思つた途端、突然機銃の音が激しく鳴つて同時に、ボーン、ボーンという迫撃砲の炸裂音がしました。まったく不意打の敵襲だったので。私達は中隊といつても、やっと二ヶ小隊にすぎない兵力でした。今までも有力な敵部隊の攻撃には、一度敵を村へ侵入させておいて、包囲攻撃によつて殲滅させるという戦法を度々とつていましたので、事前に打合せしておいた通り、抵抗すると見せて、巧みに部隊本部のHまで引き揚げたのです。

ところが、Hで点呼してみると、慰安婦が一人足りないのです。調べると、それは秋子でした。彼女と仲の良い京子という女の話では、夕食後、秋子が入浴しているのを見たというのです。風呂といっても、ドラム缶にドラム缶の囲いといった野天風呂なのです。きつと、入浴中なので逃げおくれたのでしよう。とうとう翌日になっても帰ってきませんでした。きつと、可哀そうにも、さんざんなくさみものになった挙句、なぶり殺しにされたものだろうと、思っていました。

その又翌日、累次の斥候の調査によりまずと、その村を襲撃占領した敵の部隊は大した兵力でもないことが判りましたので、夜襲をかけて敵の遺棄死体八、こちらは損害なしといった戦果で難なく取り返しました。

私達は、余り広くない朽ち果てたまゝ静かに眠っているような村の隅から隅まで、手分けして搜索しましたが、秋子の姿は勿論、その死体さえ見つかりませんでした。この時、私は一人、村はずれの半ば壊れかけた民家の土塀のそば迄行っていましたが、きつと敵に連れて行かれたのだらうとあきらめて、帰りかけようとしたが、ふと、その土塀の向うで人の気配がするのを感じました。はつきり物音がしたというのではありませんが、長く戦場生活をしている者の鋭い感受性が然らしめたのでしよう。

銃の引鉄に指を掛けて中腰で破れた土塀からのぞき込んだのです。

「誰？」という女の声がありました。私は思わず、「秋子じゃないか？」と問い返して銃口を下げました。クモの巣が張っていて真暗で中は何も見えません。「伊藤さんね」と声が返ってきました。彼女は倒れた土塀の間にかくれていたのです。

「よく生きていたなア」と私はいたわった気持ちでそういったのですが、彼女には、それが皮肉に聞えたのでしよう。「私、生きていられない」と、独り言のようにそう呟やくと

「栗本さんだけ呼んできて、お願い」と必死に頼むのです。一緒に部隊へ帰ろうという私のすゝめをどうしても聞かないので、仕方なく、私はその足ですぐ報告に帰りました。

栗本隊長はおっとり刀で私を案内に現場へ到着しました。秋子の顔を見るなり

「秋子、よくおめおめと生きておれたな」と隊長の太い声が、土塀に反射してびんぴんと響きました。

私は以前慰問品として内地から送って貰ったライターをポケットから出して火をつけました。秋子は民家の土間の隅に壁を背にして踞っていました。支那兵の服とズボンをはき、髪はぼうぼうと乱れるにまかせ、顔は汗に泥がついたものでしよう。真黒に煤けていましたが、私には汚らしさというものが不思議に感じられませんでした。いやそ

れよりも、何となく神々しいような美しさに打たれたのです。私の手前、隊長は強いことを云っても、彼女を助けてやるだろうと思っ

ていましたが、栗本は重々しい口調で、

「死ね！」

と只一言、冷淡に言っただけでした。

一度は褥を共にしたことのある男に対する最後の媚びであつたのでしよう。然し、栗本の返事は冷酷そのものでした。

「お前にはこれで十分だ」

そういつて、私のゴボウ剣をぬくと、ポンと彼女の膝の前へほうり投げました。暫くそれを見つめていた秋子は、隊長が何も云わないので、首に巻いていた手拭いをとると、銃剣の刃のところを巻いて右膝の横へ置き、上衣のボタンをはずして脱いで、それを尻の下へ敷き、シャツを乳房の上までたくし上げました。今度はズボンの紐をゆるめて、左足をお尻の下になるように中腰になって右足の膝を立てるような姿勢になりました。

女の小麦色の肌が、ライターのほのかな光に照されて、妙になまめかしいなあ、と私が思ったとき、秋子は銃剣をとって刃を右にむけ、左手はツバの所を、右手は手拭を巻いた刃を持って左下腹にあてがい、ほっと一息して。肌から五寸位離してから弱々しく、

「さようなら」

と云った途端、満身の力をこめて、左腹のおへそから一寸位下のところへ、グッと突き立てました。深さは七分位だったでしょう。「あゝッ」

という泣声に似た悲鳴を挙げました。それから両手で刃のところをぎゅッと握って右の方へ切り開こうとするのですが、何にしる兵

隊の持っている銃剣ですから、刃はボロボロだし、それに私のは、何度も土の中へ突込んだことのある切味の悪いやつでしたから、思うように切りさばけず、二寸位切ってから、ふうーと大きく肩で喘いで壁に倒れるようにもたれかゝりました。左下腹の切口はパクリと口を開いて、血が四条程、つうーと流れ出

ました。
私はこの女の切腹にすっかり仰天してしまい言葉も出ません。隊長の顔をのぞいてみますと、栗本は額に汗を浮かべたまゝじっと眺めています。

彼女は血汐で濡れた左手で右の乳房をにぎり、大きく息をしたかと思うと、今迄尻に敷くように屈めていた左足を後へ廻して、立膝に両膝を揃え、両手をツバの所へあてがい、「クッ」

と呻めきながら力一ぱい押し込みました。刃は全部で二寸五分位も腹の中へ入ったでしょうが、急に血が、ずゝゝと飛び出すように出てきました。顔も物凄いほど苦痛の表情となり、脂汗で額はぎらぎら光り歯を喰いしばっています。喘ぐ大きな右の乳房には血の手型がついて、ライターのかすかな光りにもはつきりと見えます。

彼女は、くわッと白眼をむくと、下唇をかんで肩中を壁に反りかえるようにもたせかけ左脚をうんとふんばり、最後の力をしぼってグッグッグッ

と一気に右腹まで切りひらきました。そこで銃剣を半分抜き出したまゝ、ぐったりと横坐りに手をつきました。髪は乱れて脂汗のういた額にかゝり、眼は虚空をにらんで下唇は破れて血が一すじ、つうと流れています。下腹は、ぱっくり口を開けて血に染った皮下脂

「マゾヒズム断想」

天 泥 盛 英

最近、本誌に現われる告白や創作、研究等の中で特に注目すべきは、切腹愛好、猿轡愛好、汚物愛好の三つであろう。曾って、現在の吾国と殆ど同様の社会状態に置かれ、性風俗に於ても、相似した状態にあった西欧諸国、特に前大戦後の独乙の諸文献について調べてみても、同性愛、鞭打愛好、裸体愛好及露出症に関しては夥しい資料と報告とに恵まれているが、切腹の如き自虐と想像被虐の混合したもののや、空想的サディズムとマゾヒズムを

端的に表わす猿轡(のみの)愛好だとか、沼氏の所謂「神酒」としてのネクタアルによつて象徴されるメタトロピズムの最高である処の無生物化、などは余り見当りもしないし詳説してある例を多くは知らない。第一の切腹愛好は、観念的フエティシズムを含んでおり、自虐傾向のマゾヒズムの珍しい形式である。又、或る意味では、是は流血愛好の好例でもある。外国の探究者にとつて、切腹が若し性的に愛好されるとす

れば、未開国に於ける割礼や中性製造と同じく、エキゾティズムを加えた甚だ魅力のある題材であろう。第三の汚物愛好はトイレット覗きの甚だしく進行し、反転したものと、マゾヒズムの極致との合併傾向である事は確かである。ヒルシュフェルト博士は其の著「性的心理分析」のメタトロピズムの項に於て、多くの紙面を費してマゾヒズムの一つの展開であるメタトロピズムについて書いている。私は若し、必要であるならば「フェティシズム」と「メタトロピズム」の二項だけを、同氏の著から抄訳してもよいと思つて居るが、氏は其れ程、マゾヒズムと「他の物への変化を望む性的心理」即ちメタトロピズムとの關係を重視して居る。第二の猿轡については後述するが、先ず汚物愛好の心理的な分解は興味あるものと考えるので、其れについて述べようと思う。

ヒルシュフェルト博士の説のみならず、一般的に考へて右のメタトロピズムは三つの進行上の過程に分ける事が出来る。即ち、(一)人間である他の形のものに變化を希む場合(例えは奴隷願望(セルヴィズム)) (二)人間以外の生物に變りたがる場合(例えは犬や馬になりたがる男等、) (三)無生物に化したがるもの(例えは便器になりたがり、又石になつて踏みたいと希む等である)。

(一)の場合、本誌の多くの女性マゾヒストは

奴隷化を希む様である。松井賴子さんの作はすべて、奴隷化願望に基いたマゾヒズムである。鬼山絢策氏の作にも亦同じ事が云えるであろう。此の場合は最も正常に近いだけに、一方実現性を多分に含んでいる。酷使され、異性の仕事を分担させられ忍従し、更に鞭で懲戒される事を希み、遂に囚人となる事を想像するだけでなく、実行する事は、決心さえすれば何時でも実行出来る事である。それだけに此の場合性慾は比較的純粋な形で表現されて来る。

(二)の場合、所謂犬となり、豚となり、馬となる事は全く実現性がない。そこで沼氏の如く首輪をはめられる事によって、又馬化の場合は鞍や轡や、女性の乗馬用の服装等によって、半分位は用意をし、不足の部分を空想によって補う事が不可欠になつてくる。犬の場合の例の一つによく引用されるシュテューケル博士の引例があるが、犬になりたがる主人公は勿論、半分以上を逞しい空想の世界で創造して居るわけである。馬化の場合はそれよりも、割合馬に対してしか用いない道具や衣服があるので樂である。想像力は其れ故に犬や昆虫に或る事を希む場合よりも少く済むのである。併し一般的に云つて(二)の場合は(一)の場合に比して遙かに多くの精神的要素が性愛遂行上に現われて来る。

肪が上下にめぐれ、右下腹の方からは、間歇的に血がどくどくと溢れでています。

あゝ、なんという凄愴な情景でしょうか、こんな情景を目のあたりに見たのは、あとにも先にもありません。私は、はっと気がつくと、血に染った銃剣を秋子の手からとり上げますと、彼女の身体は、どっと左の方に倒れてしまいました。

それまで黙つて見ていた栗本は、私から銃剣をひたたくように取ると、秋子の左乳下へ止めの一突きをくれました。秋子は二、三回手足を痙攣させたのち、屈めていた右足をぐっと伸ばしたまゝ動かなくなりました。』

この話を聞いて、私はぞつとすると同時になんとなくゾクゾクするような嗜虐感を憶えずにはいられません。彼女にしても、死を選ぶにしても、まだまだ自殺の方法は他にもあったでしょうに、わざわざ二人の男の前で、上半身もあらわに切腹するとは、余程のことであつたに違ひありません。又、栗本隊長にしても、一度は情をかけた女のことですから、自分の一存で、どうにでも出来た事でしように、自分の前で如何に戦場とはいへ若い女一人を自刃させて平然としているとは變つていると思ひました。(おわり)

(三)の場合はここに述べようと思うのだが、生物が無生物に転化したいと希望するという事から考えても決して実現出来るものではない事は判っている。にも拘らずこの慾求を絶えず持ち続ける為に、当然想像の分野は元来非精神的であるべき性愛の分野に侵入して行くわけである。其の為に、沼氏の如く神酒の觀念が形成されるに至る。私は氏の神の酒のくだりを読んだ時に、何気なくリヒアルト・ワグネルの「聖杯」の思想について連想した。聖杯(グレェル)の存在は(基督の十字架にかゝった時にその血をうけたという杯)独乙の伝説)ワグネルの全領土を支配する統一と綜合の思想の根底である。同様に沼氏が構成し、又今後建築的に形成しようとしているマゾヒズムの殿堂に、神酒の觀念は所謂ベルリオーズの固定觀念と同様の働きをなすのではないかと思うのである。いや、事実沼氏でなくとも(筆者は全くコプロラゲニイの傾向はないのであるが)神酒が一つの固定觀念に仿いて、次々と新しいモチーフを作り上げ、感傷とロマンティズムを織りまぜて、予想もしなかった様な巨大な展開をするだろうという事は期待してよいであろう。

マゾヒステイックな心理方式によって考えるのは人間であるが、必要であると同時に、神酒の思想は当然被虐者自体の無生物化を指向する。にも拘らず、無生物と異つてこの便

器は神酒を嚥下するのである。飲むのではなくて、飲ませられる事がマゾヒストにとって必須の条件であると同様、無生物化によって加虐者が被虐者の立場から考えて、一切の関心を持たない状態の下に行爲するという事が類推される。この複雑な混合が神酒愛好の精神ではないだろうか。勿論無生物化については、馬車の踏板や、階段になりたくなるもの靴になりたくなるもの、石や埃になりたいたいの等々の(FUBETISCHSMAUS) フッスフエティシスム(脚部崇拜)的なジャンルから努めて全ての形に変生せんとする傾向が見られるのであるが、何れにせよ、此等がすべて精神作用の極度の昇華が、奇妙に性愛と融合している点について注目されよう。従つて高度のイテリジエンス(教育程度に非ず)に富む人、或は富む可能性を豊富に持つ人でなくては、之等無生物への変生願望は考え得られないのである。

(三)について沼氏の場合等その作物が甚だ理論的且つ細い神経質的なさが伺われる事は、右の仮説を立証するに足らないだろうか。(別表参照)

若しその深刻さによつて計るならば、マゾヒズムの中で最も極端な展開を遂げているのは、無生物としてのコプロラゲニイであると云えるわけである。

後先が逆になってしまうが、第三を前提に

する方が第二の微温的マゾヒズムの説明がしやすいので御許し願いたい。

第二の他種生物への変生について、最も有名であり、且屢々引用される例は、ゲエテの「董」であろう。愛する女性の脚で踏みつぶされてもよい、只管に女性の愛情を求め、かなわぬ後は身体の接触を求め、それすらもできないときは、仮令その接触が即座に自己の死を意味しても、其れに突きすすむという凄まじくも美しい愛の表現であるが、更に注目すべきは天才中の天才として、地上のものでない財宝を豊かに人類の世界に移植したいというヴォルフガンク・モーツアルトが、此のゲエテの詩に麗渾珠を転がす様な佳調を付した事である。モーツアルトは死に近くなつて共済組合の爲の音楽とか、「魔笛」の中の僧正サラストロの詠唱だとか、種々とマゾヒストの喜びそうな(聴く者に圧倒感を与える傾向のあるという意味)音楽を書いているが、其の事については別の機会に述べよう。何れにせよ、このゲエテ・モーツアルトの協同になる「董」(Veilchen)はマゾヒズムの最も清浄にして高踏的な発現であろう。併し乍ら私が此處に略述しようとするマゾヒステイックなメタトロピズムとは、ゲエテやモーツアルトと同様の精神的基底の上に立つとはいへ、その現われ方はもっと現実的なものである。いや、むしろそれは其の場だけを第三者

が公然と見たとしたらむしろ「法悦」の場を見るときと同じく、狂気としか思えないかも知れない。

マグヌス・ヒルシュフェルト博士の蒐集に係る驚異的な種類の諸資料を見た事のある読者には、むしろ私の挙げた「董」の例などはピンと来ないかも知れない程なのである。此の種のメタトロピズムに於ての心理的な方式が極めてロマンティックであつて、文学的要素に富んでいる事と考え合せて、如何にも、その心理と實際との対比が烈しいかは、到底第一の項の如きものではない。簡単に云うならば、此の種の傾向に於て、肝要なのは性行為に於ける複雑な演出と、その演出に必要とされる数多くの舞台装置と雰囲気とである。

此の点が精神的なというより、むしろ空想的な要素の多い第三の場合と根本的に異ってくるのである。例えば石や埃は何等特定の場所、特定の衣裳を必要としないので、空想と純粹な行為とによって完璧となるが、此の場合を例を「犬」と取るならば、場所は被虐者の好みに応じて部屋の撰択を必要とするし、又、シュテエケルの例の様に（沼氏の「手帖」三十年十二月号参照）特殊な犬小屋を必要とする。そして出来るならば犬の頭部を冠り（同じく沼氏の手帖『犬頭の男』参照）犬用の鎖や、革紐と首輪とを必要とする。鞭も馬鞭などではいけないので、特別に犬用に作られ

たものを望むのであるから、その装置と衣裳とについて、細かな考慮が相互の当事者間で払われねばならない。其の上、勿論加虐者の用いる言語、行動等もすべて真正の犬に対する時以上に「犬を扱うこと」に徹していなければならぬ。こうした舞台と衣裳等によつて、始めて被虐者はその自己の好む特有の雰囲気に移り得るのであつて、何んでもかんでも「犬」と思われさえすればよい、というわけのものでは決してないと思う。

馬についても然り。此の場合は更に面倒である。馬と人間との實際的な体格の相違は覆うべくもない。そこでこの傾向を持つ者は、全ゆる果敢な努力を續けて、人間に載せる事のできる大きさと、構造の鞍を案出する。更に轡に於ても然りである。これでも、乗馬者に實際と同じ行為をさせる為には未だ足りないのである。つまり、四つん這いになったのでは、乗る方の者は足が地についてしまう。そこで、三輪車とか、乗馬でなくて挽馬であるとか、又も全ゆる種類の特殊な用具が作成される。其の上更に走る時の聴覚上の問題からして特殊の蹄に相当するものを足につける場合、静止した位置で走る事の出来る様にと考えた機械装置がある。（之はつい先達って同様の装置が米國で砂漠行軍の場合の兵士の疲労状況についての調査に用いられたニュース映画があつた。）こうした想像の産物が数多く必要であり、更に如何に舞台装置や用具がととのつても、其処に逞しい想像力、自身自身を失わせる程の錯覚へ導くだけの力が必

要との協同が要求されるのである。こゝにロマンティズムとレアリズムとが異様に合体して、特有の雰囲気を作り上げるわけであるが、単なる鞭打愛好と異り、其の複雑多様な事正に此種の倒錯趣味中の雄ではないかと思う。

近時マゾヒズム（男性）の流行は苦々しい限りである。倒錯などというものは流行したりすべきものでないからである。けれ共一方「流行」は真に先天的、後天的にこれ程マゾヒズムに喰付かれてゐる人々にとつて甚だ有利な状態を齎したといふべきであらう。大抵の雑誌が男性マゾヒズムの記事を掲げざるはなく、ひいては女性サディズムをも表面化させる。だが有名な軟雑誌「リベラ」の正月号をみてみ給え、明かにサディズムとマゾヒズムを全く取り違えて逆の意味に使つてあるから、こうした時流便乗の記事は徒らに性的未経験者達に不必要な困惑を与えるものである。そこで私は変態性慾者としての苦難と嘲笑とに充ちた道程を経た一人として此の筆をとり、如何にマゾヒズムが人生全体に強い関連を持つか、そして其の欲望の根元は如何に深く、如何に美しいものであるか等について私見の一端をのべ、勢の余り仕方論にまで走つてしまつたが、私の経験から推しても、こうした方法を明らかにしてくれ書物が一冊やそこら有つてもよいと思うのであるが、如何なものだろうか、大方の読者の批判を仰ぐ次第である。

H^{エツチ}氏の^しの

奇^き妙^{みよう}な告^{こく}白^{はく}

北^{きた}谷^{たに}英^{えい}二^じ



前書の前書の前書——(即ち筆者前記)

こんな風変りな前書が許されてよいものかどうか、私にはわかりません。私より前に、こんな前書を書いた人があったか、なかったのかさえ、私は知りません。多分、私と同じようなこんな前書は、今までに多くの人達がつくった昔にしまったことでしょう。

が、私が信念をもって云えることは、何も奇をてらって、こんな奇妙な前書を書いてい

るのではないということです。告白とは「心の中を人にうちあけること」と辞書にあります。自己の心中を正直に、ありのまゝにうちあけるためには、生来臆病な私は、直接に第一人称で「私は……」と書いていくことがどうしても出来ませんでした。

「つまらん奴だ!」と皆様方はおさげすみになることでしょう。そうです。そう云われても仕方がないのですが、くだくだしくお思いになることでしょうか、今暫く私が良心的になるがためにこんな方法をとらねばならなかった事情をお聞き下さいませ。

私としましても、皆様方だけに対してなら以下のように「H氏」なる卑怯な仮面をかぶらずにすませたことでしょう。人間心理の纏奥を探究し、充分な御理解を持っていられる皆様方だけならば「私」という一つの言葉の中にも、社会生活を営む公的な面の個人とか、紅閨内の個人とか、空想家や感傷家としての個人とかのいろいろな意味のあること位は、単なる一の常識だからなのです。

けれども世間の人々のすべてがこうではありませぬ。島国根性という極めて狹隘な度量

の持主たるわが日本人は、それに加えて、東洋的な卑劣な事大主義のために、自分より目上の人々に阿諛^{アテン}迎向して、同階級の者とか目下の者とかの弱みにつけこんで個人攻撃をするという権謀術策に秀でています。

もし私が、H氏なる仮面をかぶらずに、私は……と書いてしまつて、そんなことはありうべからざることですが、こんな術策の名人の知るところとなつたらどうなることでしょう。――

と、それはとも角、人はお面をつけた時には、素面の時よりも余計に本当の事をうちあけられますが、私の用いたH氏なる仮面は主として此の為のものなんです。私としましては、以下のものこそ最も人間的な私の真実極まる告白と考えています。

私のお話が、全くの荒唐無稽だとして、失笑されることがありましても、それは私が、あまりに心の中をありのまゝに告白したゆえと思つて下さい。あの演劇で人々を失笑される道化役こそ、最も真面目に人生を演じ、役を演じたからでなかつたでしようか。

前書の前書

今書きあげたばかりの新作の告白文を読み直したH氏は、それに前書をつけることに決心した。

「世の中というものは滑稽である。」

と一息に書下してしばらく思案していたが「就中、それが真面目になされた結果であるほど――」

と書き足したH氏は、一寸首をひねつて考えた。

（であるほど――なんて文句はあつたかしら？――僕は、真面目になされた結果であればあるほど――）という意味のつもりなんだがそれでは語呂が悪いし――）

しかし、外によい言葉が思出せなかつたH氏は、そのまゝで突張ることにした。

H氏は前書を二度ばかり読み返して、自作のこの前書にますます感心した。

H氏は原稿を袋に入れ、雑誌社へ送つた。

そして、H氏の奇妙な告白は以下のように始まる――

絶対に真実であれど少々奇妙なる

告白 「鼻」

前書

世の中というものは滑稽である。就中、それが真面目になされた結果であるほど――

鼻、鼻、そして又、鼻！

我々人間という全体について考える場合も誰それと各個人についてじっくりと見直すときにも、僕にとってこの鼻ほど不思議なもの

はありません。

何という本だったか失念致しましたが、曾って或る本で「人間って奴は何て妙な顔をしてるんだらう！ あのスベスベした鼻――毛が一本も生えていない鼻を見ると、俺はおかしくって仕方がない……」とか何とかと、その小説の中の主人公の動物が独白しているのを読んで、感心したことがあります。これは多分、夏目漱石の有名な「我輩は猫である」の中にあつたとは思うのですが、不学な僕は強く言い切ることが出来ないのです。

又、それ以上に世界的に有名なあのロスタンの名作「シラノ・ド・ベルジュラック」にしても、紫式部作るところの源氏物語中の「未摘花」にしても、何れも人間の鼻の不思議性を主題としたものであるのは申すまでもありません。

鼻といえば、同名の表題小説の、ゴーグリオと芥川竜之介の二つの小説をおもい出さざるを得ませんが、この大正期の天才的作家であつた芥川が、彼の自殺寸前の作の「河童」の中で言つた言葉を想出して頂きたいのです。

「――しかし目や口は兎も角も、この鼻というものは妙に恐ろしい気を起させるものです……」

と彼は、文中の主人公をして河童の国から帰つて来た時、我々人間の鼻について語らしめていたのです。芥川が、例の「鼻」を書い

たのは、彼の最も初期だったのですから、彼芥川でさえ、一度とりつかれるとそこから抜けなかったのですから、僕のような愚かものが、これから以下に述べますように段々と「鼻」という泥沼の深みにおちこんでいつて現在のように完全な女性の鼻の亡者となりきったのも無理はないと思うのです。

さて、話は少々かわりますが、例の天狗のお面ですね、あれ、全く傑作だと皆様は思ひになりませんか。

古のギリシャの寺院のプライエープスという像——鶏の頭部をそっくりそのまゝ真似た頭、そしてその顔の真中に長く突出た鼻は、これまた人間の男性の象徴そっくりの模写——や、シラノ・ド・ベルジュラックの鼻は、グロテスクで幼稚な感じがするにひきかえ、この東洋人の作品である天狗の鼻はユーモラスな現代感覚にみちた何と芸術感のある鼻ではありませんか。(H氏註。このプライエープスの紹介写真は、小池創之介著「性具と性風俗」五光社昭和廿七年四月三十日刊にあります。猶、この本の同じ頁に「猿田彦と天のうずめ」河鍋曉斎画が出ています。この猿田彦が天狗の元祖かどうか僕は知りませんが、もしそうだとすれば、我々日本人の祖先の優秀性を誇りとしたいものです。)

又、天狗に限らず、ひよつとこにしろ、お、かめにしろ夫々象徴的な表現は、僕の常に畏

敬するところです。皆様、どうか、今一度こんな僕達の祖先の苦心の結晶である作品を、ゆっくりと見直して、その優れた点を認めて下さい。……

と、H氏は先ず人間の鼻という一つの現実について、読者の注意を喚起し、その後ひきつづいて彼自身の性質や趣味や性癖をあらましのべている。

それによると、H氏は現在丁度満二十五才になったばかりの未婚で童貞の青年だというのだ。私としては、満二十五といえは昔流に数えると二十七才にもなるうから、甚だまゆつばものと思うし、又、事実、私は童貞ですという奴等は丁度、私は酒も煙草ものんだことがありませんというのと同じ位だと考えるのだが、H氏は云う——

——僕は処女稀有論を信奉致しています。この処女稀有論こそは、僕が童貞であるし、又あらねばならなかったことを明確に論証した唯一の論説なのですから。

処女稀有論と申しましたが、皆様方は御存知ないのは当り前なのです。実は、これは僕自身が創唱したものなんです。世には、ドン・フアン的な処女乱獲者が三十人に一人位いますが、彼等の為に世間の処女という処女はことごとく抹殺されるのです。たとえ三十人に

一人の割合であつても、その一人のドン・フアンが処女の三十人をものにすれば、他の二十九人の男性はそのお古を頂戴していなければならぬからなのです……。

と、説き起してから、男性の方は本性的に感傷的性質や理想主義的傾向を持つために、女性に比べて、そんなつまらぬ相手に童貞をムザムザと失う愚行はしないと論及している。

そして、結局、待てど暮せど処女に行きあたらず男性は、結婚適令期になる頃には仕方なしに、その「お古を頂戴」して、哀れな人生の現実幻滅を感じつつ一生を暮らすことになる論を結んでいる。

私はこのH氏の詭弁に多々云うべきものを持合せるけれども、いまはH氏の告白文の解説者たる役柄から、それを発表するのを見合せねばならぬことが非常に残念だ。

H氏は次に、彼一流の異国趣味を發揮してこの日のことをボロクソにクサしているが、こんな箇所は現在盛んになりつつある国粹主義の傾倒者達が知ったら、さぞかしカンカンになって憤慨することだろうと思う。尤も、H氏の言うところは世で言う外国一辺倒でなく、少々認むべき点もなきにしもあらずと考へるが。

H氏は先ず、浪花節を最初の槍玉にあげ、

僕は浪曲というものが非音楽的だというだけで、又、古くさい義理人情ゆえにこんなに毛嫌いするのではないのです。非音楽的だといつても、そこには僕達日本人の凡てをひきつける何物かがあつて興奮させてくれます。

そこには美しい姫君を折檻する場面もあるますし、未だいたいけな紅顔の少年が荒くれ武士とともに美事に切腹してはてる光景も出て来て、これらは現代の文明社会に生きる僕達に多大の妖しい夢を与えてくれています。あの明烏や金閣寺が浦里や雪姫の折檻ゆえに今なお皆に愛されているのと同じなのです。

でも、人々の云うようにあの浪曲で讃美している義理人情がこの世に実際に行われて来たでしょうか。否、それ以上に、あの義理人情に生きる人々を世間は可愛がつて来たでしょうか。僕は、この点に至つて、義理だとか、人情だとかいう浪曲が、実は、平常権勢に必要以上にオベツカするためにあるんじゃないかとさえ思わざるを得ません。忠臣蔵、忠臣蔵というけれど、それを聞いて涙を流している人々こそ、曾てはその忠臣蔵を玉碎させた瓦礫の祖先そのまゝの血をうけついでいるのではないか、悲憤したくなるのです……。

H氏の浪曲批判やそれに続く種々な反駁論は、非常に多くのデータを引例して、激しい口調で述べられている。それは非常に興味

ある種々な問題を提供して、読んでも面白いものだが、氏の本題の「鼻」からは、少々それだと思われるので割愛した。

此處で一つだけ述べておかねばならぬことは「涙」に関するH氏の考えであらうと思う（解説者註）。そしてこの涙の問題は、このH氏の最後に至つて極めて重要な事実を提供することになるからだ。）

浪曲の義理人情に泣かされる人々を軽蔑するH氏は、それから前進して、母もの映画とかいう代物を観て、涙を流すのを好む人々をば「安ッポイ感傷主義だ」といつてコキオロしている。H氏によれば、そんなセンチな映画や小説は、何十年も前に出たステラダラスというものの一つで結構という——

で、H氏は次々いよいよ氏独自の奇妙な告白の本領を発揮してゆく。

僕が以上、長々しくも直接本文と無関係のような事柄を述べましたようですが、無関係どころか本当は大いにあるのです。僕の鼻責めは、以上のような僕の外国崇拜、異国主義万能の性向から由来しているのです。

一寸、皆さん考えてもみて下さい。あの有色人種を蔑視する欧米の高慢な女性を、思うまま僕達が苛めつけるは勿論、自由に願使して見たら。

古の高貴な流れをうけた欧米の上流階級の

貴婦人や令嬢共を半裸にし、そのおごれる自尊心を挫くために高くしなやかで美しい鼻に牛のように鉄鎖の鼻輪をつけ——無論、手と同様に鼻の障子に穴を穿つのです——町中をピンピン引つ立てたら——

いや、我々東洋人の考案である鼻そぎの刑にかけて、彼女等の美貌を台無しにしてその浅ましい容貌を嘲笑したら——

又は、折角の美貌を失うのは何ですから、鼻そぎの代りに、僕の考案になる隆鼻機や鼻もみ機にかけて、美しい鼻を天狗のように引きのばしたり、豚のようにふくれ上がらせておいて鞭で酷使する——

ああ、僕は、僕こそ真の愛国者なんです……。

いやはや、何をかいわんやである。

H氏の云うにまかせていると、とんでもないことになりそうだ。さしづめ、列国の大使公使から嚴重な抗議文が外務省あたりに持ちこまれること必定。君子危きに近寄らず。須らく、避ける危険は回避しなければならぬ。すまい。H氏の「ホワイ・スレーヴ使用案」なるものとはばして、次のH氏自身のこの奇妙な鼻フェチズムの生い立ちを御紹介する方が、皆様方にも喜ばれることと思う。

——よく世間で、体験談とか実話とか申し

ますが、実際に起ったそのままを記述しただけでは、読む方にとってこれほど面白くないものはありません。

又、現実には小説よりも偶然性に満ちていまして、他人には容易に信じてもらえないものです。

例えばというのも何ですが、皆様方が会社でのお勤めが終って、さあ帰ろうと立ち上って歩き出しかけた途端、椅子の背にズボンが引かかって股の処のボタンが全部とれたからそれで帰宅が何時間も後れた、と奥様に云訳をなさっても、奥様はそれを信じにはならないと思います。事實はその通りなのですが、場所が場所であるだけに、他人には変な事態をさえ連想させることにもなるのです。実話はこのように、真実のまゝの話であると反って作り噺と思われることも多いのです。しかし、僕は、やはり敢て真実をのべていきたいと思っています。

僕の告白は、小学校一年の時の或る日の出来事からお話し始めるべきであったのです。

その日のこと、独りで何やらして遊びに余念のなかった僕の耳に、聞くともしに入っていた言葉がありました。僕の傍で、他所の小母さんと話をしていた母が言った言葉だったのです。

「——あんな、木で鼻を括ったような人が……」

その時、別段何ともなく、気にも止めなかったのですが、その夜の夢の中で、僕は母によく似て少々怖い顔をした美しい女の人に細い紐のような木で鼻を括られたのです。それは、その当時の僕にとっては非常に恐ろしい夢でした。翌朝、起きた時には、グツシヨリと全身に寝汗をかいていたことでもわかります。

しかし、恐い乍らもそれは何と妖しい心地のする夢だった事でしよう。母はその時は数え年廿八才であつたし、娘時代から美貌といけずで広く近隣にきこえていたと今でも多くの人々が云う程ですから、相当な美しさだったことに間違いなく、夢の中の女はその母を少々怖くした様な顔をしていて、その美しい女性に鼻を遠慮会釈なくグルグルと木で括られたのです。今から考えても、その時の気持が容易く想像できますから、起きて見て始めて夢だと知った僕が、その夢の快よい妖しげな心地よさが忘れられず、鏡の前で実験したものも無理ないことでしよう。（木が曲げられるものか！）と子供心に考え乍らも、多数の割箸を用いていろいろ工夫しての鏡の前の実験は、残念乍ら水泡に帰す以外になかったのです。

僕は、その実験はそれきり止めました。しかし、それから毎晩床に入るときには（もう一度あの小母さんの夢を見ますように

——）と心に祈り乍ら寝たものです。申すまでもなく、夢ももう一度、という僕の望は叶えられませんでした。（解説者註。以前、H氏は鼻は花なりという文の中で「木で鼻を括る」という項目を入れたが、あれはこのように凡そ廿年もの間、H氏の熱望して来た哀れな願だったのです）

小学校三年の時の学級担任はDという男の教員でしたが、彼は容貌を体格もイカツイので丸でギャンゲの親分のようでした。大体に於て、小学校三、四年の担任は一番のんきなものです。彼Dもこの例にもれず人一倍サボりで、よく生徒に自習をさせて、自分は教壇の横の教員机に坐って退屈しのぎに鼻毛をぬいたものでした。

僕は始めは、彼が何をしてるのかわからなかったのですが、隣席の級長の有木という女の子がそれを教えてくれたのです。

彼は先ず最初の十五分間位は、ボンヤリ坐って窓の外の景色を眺めています。その中に引出しから、鏡をとり出して机上に立て、手指で鼻毛を抜き始めます。二、三度するうちにきまって、ハンケチで眼鏡の玉を拭きまします。そして、それから鏡の中の自分の鼻毛を切ったものでした。

大の男——彼は全く大の男でした——が鼻毛の数本をぬいただけで、涙を流さねばならぬこと。これは後になって「鼻毛抜き」とい

う責めを案出させることになったのです。この鼻毛抜きでは、女性の鼻毛を次から次へと抜いてしまつて遂に穴の中に毛を一本も残さぬようにするのですが、皆様も一度お試し下さい。

不断は、他人から少しも見えないと思われ、ていすが、この鼻毛抜きをされた女性が、人中出现するとき、相当な屈辱感に身を震わせるのです。そして面白いことには、女の鼻先を少しばかり上向けるだけで、女にくしやみをさせうるといふ楽しみもあるのです。

六年生の学年始めの身体検査の時、もう上級生なので男女別の級編成だったのですが、記録係をした男女各級の幹事は検査が一番最後になりました。

この時、前に出てきました有木も、僕等男子の数人の役員たち環視のなかで身体検査をうけたのですが、例の鼻の診察の時

「まあ、うちはずかしいわ」

と彼女は云つて言葉通りに如何にも恥入った様子で検査をうけたのです。大げさな彼女のそぶりに僕は内心（何がそんなにはずかしいんだい！）と思つたものです。

人一倍勝気で、容貌も十人並以上の彼女が心持上向いて、医師の手にした器具で大きく鼻孔を開けられ、鼻の孔の奥深くを異性の友達等にさらし出さねばならなかったのです。それを、僕は彼女の不思議な心理状態にわけ

がわからずに、他の者たちが「わあっ！」とはやし立てるのに和して、彼女を嘲笑したのです。

何故、彼女が恥しがるとはわからぬけれど、それ以後も僕は、よく彼女をからかつて顔を赤らめさせたものでした。それも、僕自らが先頭になつて

「わあい！ 有木の鼻の孔おもしろいぞ。道具で開けたら、ごっついごっつい（解説者注。大きい大きい、というところでしょうか）あきかたをするぞ！」

「ハナ、ハナ、有木の鼻。」

有木あが付く、あん十郎

あん十郎の、アングロサクソン

アングロサクソン、鼻高い

有木鼻たか、アングロサクソン」

など、極めてたわいのない文句で彼女を怒らせました。

でも、僕は、このように無邪気に何の顧慮も遠慮もなく、自由に振舞えたあの頃は大変幸福だったと思います。（H氏註。このアングロサクソンという言葉は、その頃歴史の間に受持の教師から聞きこんでいて、それを使つただけで、何ら他意はなかったと思います。）

そして、中学一年の時——ああ、この時の出来事こそ、僕をして現在ののように、異常ななかでも異常と思われるような鼻偏執狂者た

らしめた最大のものだったのです。

咽喉をいためていた僕は、その頃、吸入をしに医者へ通っていました。豌豆の獲れる時季なので、晩春の筈だろうのに、その日は真夏のように暑苦しい日でした。

「——何でも、この子の友達が三四人、寄つてたかつて、えんどう豆をつめこんで……」

と、受持の教師らしい女の人が医者に説明しているのを背後に開いていた僕が、吸入を終つて、見ると、泣きはらした顔をした一人の女学生を連れた、女の先生が医者に話していたのでした。この女学生の美しさに嫉妬したのではないか、と女教師の云つたのも本当らしく、泣腫らしてはいても、その女学生は美貌でした——

大分長くH氏の文を述べたが、それからH氏は、あつかましくも傍近くへ寄つて、その娘が医者の手当をうけるのを極めて忠実に刻明に記述している。

例の耳鼻科の医者が何時も用いる、白光りのしたヤットコ状の鼻の孔を縦に拡げる器具——これをH氏は鼻孔拡大器なぞと勝手な名称をつけているが——を使用すると、あの小ッポケな鼻の孔が驚くばかりに大きく拡大し開張されたこと。片方の穴を不自然に強くひろげられた鼻は、必然の結果として、他方の穴もそれにつれて奇想天外な延び歪みをして

素晴しかった美貌がまのあたり浅ましい滑稽な顔容に変貌したこと。医者額の額につけた集光鏡は、拡大された鼻の穴の内部を白昼のようには照らしだして、その娘の鼻の穴の中を、手にとって見る以上にはありありと隅々までのぞかせたこと。

そして、二つの鼻の孔からは、次から次へと、六つも丸々とよく肥えた豌豆まめが、ピソセットで挟み出された様子。最後に、その娘が、浣腸用のイルリガートルに似た鼻腔洗滌器で鼻の孔を洗滌されるとき、非常に苦しまねばならなかった情景——に至るまで、一々詳細に、H氏は書いています。

中学三年から四年の夏の敗戦に至る学徒動員の期間に、幹事から小隊長に名称の変わったH氏は、同じクラスの今一人のTという小隊長と共に、相当はでに遊び廻って、女子挺身隊の作業場へ遠征に行ったり、某高女の女隊長等との愉快な探検など面白い数々のエピソードを持っているが、今回は割愛の部に廻した。

又、このTが品行方正、学業優秀の紅顔の美少年で、その上、無邪気ではずかしがり屋だったので、ソドムとか切腹とかいうものにもTの場合なら、全然理解出来ぬこともないとH氏はつけ加えているのは注目に値する。

H氏の「鼻」は、かくして二年程前に行くわした光景を以って、完全に仕上げられたと

いう。即ち

——この時こそ、僕にとって全く偶然というもの、有難さがあつたことはなかったと思えます。皆様方は、以上に述べました数多の出来事や、以下に続きます他の多くの場合のいずれもが「偶然」と思われるかも知れませんが、実はそうではないのです。

二十何年もの長い年月の間には、僕の出合った出来事は寧ろ少なすぎる位です。僕の実験のモルモットの道子（解説者註。道子とは、最近両親を次々と失った遠い親類に当る一人娘で、ゆくゆくはH氏と結婚させるとかで、一年余り前にH氏宅に引きとられた娘）を得たいきさつだつて、僕は偶然的僥倖を感じる必要はなく、僕は道子がえられなかったら、道子より以上のモデルを獲得していたかも知れないのです。

お話を急ぎましょう。

あのえんどう豆事件からは、僕は機会ある毎に方々の耳鼻科の診療室で、ねばることにしています。

この時も、僕は例によってねばりました。表面上は医者と世間話をしたり、看護婦にチヨツカイを出してふざけ合ったり、助手を相手にして知りたくもないのに、室内の種々な医療器具を指してその説明を聞いたりしていたのは勿論です。僕の目的は、女性の鼻の治療——それも美しい女性の——を傍観するの

にあつたのです。

入って来たのは素晴らしい美人でした。

姿体がスラッとして、高価そうなドレスのよく似合っていて、大人しい感じのネックレスとイヤリングをつけていました。今時ならイヤリングはありふれていますが、二年前頃にそれをつけていたのは、外国兵士の辻君が相当な上流社会の女性たちだけだったことを御存じの方なら、僕の喜んだのも無理ないと仰云ることでしょう。

多年の経験から、美人に鼻の悪いことの少いのを知っていた僕は、

（多分、咽喉だろう）

と、殆んどあきらめてしまわねばなりませんでした。

が、失望は杞憂におわつたのです。

現代感覚十分の知的な容貌の、その高貴な感じの彼女が、治療椅子に腰を下ろすや否や両背後にいた二人の看護婦の手がのびるとみる間に、夫々の手にした例の鼻孔拡大器で、彼女の美しい鼻をグイと掴まえてしまったのです。

皆様方に、この光景を是非お見せしたいものです。又、僕の下手なペンでは、この世にも珍らしい情景を皆様にお伝え出来ぬのがつらいです。全く、残念です。

見るからに上流階級美貌の令嬢で、自尊心や誇りの人一倍強そうな彼女が、椅子に腰

彼女も結局は、あのように外観上は気の強い、マゾヒズムなんてその中に微塵も感じとることは出来なかったけれども、そんな金持連中と同じマゾヒズムの持主だったのかも知れません。しかし、これは現在になって、時々そう考えることがあるだけで、その時の様子や態度には、輝く美貌が浅ましく変形されていくのを傍でジロジロ眺める僕なんか、全然無視した風であって、僕が常に理想とする「誇り高い自尊心の強い高貴な女性」として最後まで、その立派な態度を続けたのです。

医者が「どうです、痛みますか？」とか何とか尋ねるたびに、鼻孔をひろげられた儘の哀れな彼女は、無理につくったような歪んだ笑顔をして、変な陰にふくんだ鼻声で返事をせねばならず……又、そんな情ない声はなるべく他人に聞かれぬように小声にすると、音声の不足を首の振動で補うため、鼻を固定された彼女の顔が言うに言われぬ滑稽な変動をしたとか……等々。

H氏は、更に彼自身の考案になる氏独特の“鼻責め鼻いじめ”を新らしく十数項挙げてゐるが、時間の余裕がそれらの紹介を不可能にしていて読者には申訳ない。

私は次に、ではH氏の最も理想とする鼻は

僕の場合、明白に断定的に言う、「弁天の
智性、観音の忍従性と温情の大悲大慈、それ
に吉祥天の端麗美をかねそなえた女性」であ
ってこそ理想の女性となるので、単なる容貌
が如何にしとやかで優しく出来上っていよう
と、實際生活では、見る人をして舌を巻かせ
るような彼女、リズ・テラーでは、甚だ感
心しません。

で、他の点は、僕の希望通りだとして、容貌だけが彼女のような素晴らしい鼻をしているという風に、お考え下さいませ。

それは、白眉な広い額、大きくて澄みわたった知的な両眼の間をスーッと真一文字に通っている肉づきのよい鼻筋が、先端に至ってこじんまりと摘んだように美しく整って、得難い程の高貴感に幾分の肉感——官能感——をも加えて、全く稀有な美しい鼻を形成している——といった鼻なんです。

唯、鼻先が隆いだけでは、いやらしい貪慾

な肉感だけで、こんな上品さがありません。又、鼻筋の通っていることだけでも、堅いツンとした感しだけで、人をひきつけるものがあります。以上を二つを合せて、鼻筋通り鼻先が隆いだけでも駄目なんです。

これらの上に、鼻根部——両眼の間の部分——が隆く肉づきのよい鼻柱をしていなければならぬんです。幾分隆起した尖端部全体が、丁度つまみ上げられたようにチンマリ整って、二つ並んだ鼻孔が美しい不正楕円形をなしていなければならず、又、その穴が真正面から見てもよく見える程度に、鼻の下面が適度に上向いていなければなりません……

ざっとまあ、こんな具合にH氏の理想型の「つまみ上げられ型」の鼻はおそろしくややこしい制限がついている。私なんぞは、解説者の立場にありながら、H氏の言うこのリス・テラー型の鼻というものが、どんなものかさっぱりのみ込めないのである。

H氏は女性の鼻の中で、美しい型として四つ挙げているが、その第一はギリシヤ古典的な鼻、即ち俗に云うギリシヤ鼻で、ミロのヴィーナスをその適例としている。

尤も、彼H氏は「でも、僕が先立って読んだフックスの本の中に、何でもかでもミロのヴィーナスを真似たがる日本人……とあるのを読んで、少々ばかり反撥を感じました。」何

を抜かしやがるんだい！ そんな鼻先の欠け落ちたケツタイな怪物より、僕はブラクシテレスのヘルメス像のあの高貴な神々しい鼻の方が、何ぼかマシだ！」と、言いかえしてやりたいです。……と云っているが。

第二の型は、真鍋氏、竹岡氏その他の諸氏の言われた肉感的な「鼻孔型」で、この型の鼻は主として鼻先や鼻の下面や鼻孔の美に特長をもつとしている。

第三は、前二者の折衷融合的なH氏の最も好む「つまみ上げられ型」で、最後の型にはバージニア・メーヨー的な、動きの素晴らしい鼻になっている。この第四の型は言葉を発する度に不思議な小鼻の運動をしたり、興奮した場合に鼻孔が絶妙なふくらみをするものという。

読者諸氏の既に御存知であるところの、H氏の鼻責め各種の方法も、これらの鼻型に従って適当に使われるべきで、例として乱刺法という鼻先を針で突く方法などは、第四型に最適だと説明しているから、諸氏は他の責めについても夫々うまく使分けて、実施されたいと考える。

H氏の奇妙な告白の最後の部分は次の如くである。

——でも僕は、理想は理想として、実際には女性の鼻であればどんな奇妙な恰好の鼻で

あろうと、差しつかえはないのです。

僕の方法によれば、一寸のしぐさで、それぞれ素晴らしい鼻につくりかえることが出来るし、その上で例の色々な鼻責めを行えるからです。

あのチツボケな女の鼻が、変につまみごたえのある事、ひんやりとするくせして、その実、妖しい火照りを指先に感じるし、単なる指先の動作だけで、女性の美しい容貌を無限に変化させることの楽しさ。

人差指で女の鼻先を一寸ばかり上向けてごらんさい。真鍋四十六さんが何故あのように女性の鼻に魅惑されているか、よくおわかりになると思うのですが——

更に、そうして鼻先を突上げたまま、今度は指を右に左にと、動かして下さい。縦に細長く正面向いている二つの鼻の穴が、指の動きにつれて、右に、左に——と面白い運動をする筈です。どうぞ、女のお方も、鏡に向ってこの僕の方法を試みて下さいまし。え？

少しも面白くないって？ いやあ、どうかその動作を今少しお続け下さい。そうです——もっと強く——右、左、右、左——。貴女はその動作を、半時間、いや一時間づづけるのです。僕の至上命令だから、お嫌でもそれを

続けなければならぬんです。お手がお疲れになったら手をかえてするのです。両手がだるくなったら、ガラス板か透明なセルロイド

の板でこすりつけて下さい。

どうです。素晴らしいお顔におなりなすったじやありませんか。そうです、豚、白豚なんですよ貴女は——

そんな浅ましいお顔になるのが、貴女のお望みではなかったのですか。女の顔にとって美しい顔面を醜くされる程、自尊心を傷つけマゾヒズムを満足させることはないんですから——

え、何ですって、貴女はマゾではなかったのですか？これは大変悪いこと致しました。でも、僕は、本当は貴女のような気の強いサジスチンをお苛めしたくってたまらなかつたんですよ。強烈で激しい自尊心こそ、責めの窮極の対象だからなのですよ……

先ずは、僕の「鼻つまみ」の解説なのですが、鼻つまみに止らず、興味を持たれた方々は他の方法をおためし下さい。

御参考までに終りにのぞみ、文字通りに生れて始めて作った創作小説「鼻」の第二部の一部分をお知らせして、僕のこの告白の締括りにしたいと思います。

……………◎……………

——くつわをはめられた夫人は、唇が僅かに開き気味になって、美しい皓歯が、そのピンクの両唇の間隙からのぞき見られ、顎から頬、頭へと連絡している皮紐の密着した夫人の顔は、醜く歪曲されるところか、それまで

は見ることの出来なかった官能的な妖美感さえ加えて、私の男性を媚惑するのです。

そして又、嵌口具をつけられた夫人の顔——それは唯々、夫人の美しい鼻を引立て強調するため、くつわをはめられたといった顔ではありませんか。

私は、鼻を弄んでくれといった夫人の先程の頼みのわけが、その時になって始めて理解出来たのです。(H氏註。この次のところはこの小説のヒロインたる夫人の鼻の描写になつていますが、それは僕が右に述べた「つまみ上げられ型」の鼻の説明を殆んど変りがないので省略しました)

しかしながら、如何に夫人自らの望みとはいえ、鼻をつまんでもみくちやにするなんてことが、どうして私に出来ましょう。私は眼前まじかの夫人の美しい鼻をみつめるばかりでした。

しきりに目で合図をして、それを促す夫人は、遂に怒ってしまいました。ものが言えぬ夫人は「おおお、ううう」と変な声ならぬ声を出して、じきりにその輝ける身体をくねらせて怒ったのです。

意を決した私は、右手をのぼして、夫人の鼻を軽くつまみました。軟かく直ぐ千切れそうदैて、そのくせ妙に弾力的な反撥力のある夫人の鼻。肉体の一部分というよりも、それ自身ひとつの生ける物体のような夫人の鼻。

私はだんだんと強くつまんでいきました。

軽く目を閉じて、心持上向き加減に顔を突き出した夫人の鼻が、私の指でつままれて巾を狭めて行く時の妖しさ。形のよかった鼻の穴が、縦に細長く変形していくとみるまに、それは一直線となってピツタリ閉じられます。その面白さ。心地よさ。

上唇が尖つたように上へ引上げられ、いや応なしに、白い歯並が三角形にあらわれる——そんな容貌は夫人の美しさが絶大であつただけ、よりみじめな浅ましさを呈示するのです。

夫人は、化粧台の方へ向きをかえ、その三面鏡にそんな自身の有様をうつして見ました。それは丁度、地獄の悪魔に責められる天使が、自らの哀れな運命を悲しく呪うように私には思えました。

私はつづけました。二本の指先に力をこめて、右に左に、上へ下へと夫人のしなやかな鼻をもみつづけたのです。指先がだるくなれば、ガラス板でこすってくれと夫人は云ったのですが、どうして左様な乱暴ができました。私は両手がぐたくたになるのを、我慢して行なつたのです。

心して、なるべくゆるく丁寧にしたのに拘らず、夫人の鼻は赤く脹れ上りました。それは、もむ手を止めてからも、どんどんと進行して腫れ上ってゆくように見えました。

そして、豚、夫人の先程いった「白い豚」そっくりの浅ましくも滑稽な顔になってしまったのです。

夫人はそうした自身の顔を鏡の中にみつめていました。

私は、その夫人の姿を見て泣き出さんばかりになるのを、グッとこらえなければならなかったのです。

すると、夫人は心配そうな私の顔を見て、ニーツと笑って元気をつけようとしてました——が、くつわをはめられて顔面の皮膚の動きを束縛された夫人の笑顔は、鼻のはれあがった浅ましい顔を自嘲するような、苦しみをこらえた泣顔にしか見えませんでした。

私は遂に声を出して、夫人に泣きつきました。

夫人も、手ばなしに泣いてくれました。そして、夫人の肩に顔をふせた私の頬に優しく接吻してくれました。

夫人の鼻先の触れたところも、流す涙の流れおちたところも、どちらも火をおしつけられたように熱かったのです。……

ああ、私としたことが、柄にもなく感傷的になってしまいました。お話がどうも陰気になってしまったて、御免下さいまし。——一寸燐寸をお貸し下さいませんか。——え、私の目の前に？ やあ、こりやどうも、私は——ハハハハ。全くの処、大醜態を演じたことに

なってしまうて、まことに——
でも、この煙草って奴は、よく涙を流させるものですねえ……

此処で、H氏の告白は終わっている。途中、私はH氏のよき協力者たる道子嬢についての箇処を省略してしまったが、これはいづれ又時期があつたら、お知らせする事にしよう。

さて、以上のH氏の告白の中で、一番気になるのは、最後のところに、とてつづけに挿入されたH氏作るところの実説の節だ。

私はこれがわからないのである。

一体全体、何のためにこんなつまらん駄文を、絶対に真実であるべき告白の最後にくつつけたのであるか。

全く、無茶とも暴挙ともいいようのない代物である。殊にその最終部の十行ばかりは、これこそ全く完全極まる不要部である。諸君よ、須らくH氏の無能低能を、声高らかに笑おうではないか。

後書

しかし——しかしである、諸君。

H氏の愚昧さをば、私と一緒に笑われた諸君、諸君は既に読まれた以上のH氏の奇妙なる告白のなかで、私が御注意申上げたことがあったのを忘れあるまいと思う。

それはH氏の涙の問題であつた。
賢明なる諸君は次の件に疑問を抱かれるに違いない。

——安ッポイ感傷をコキオロしたH氏自身が、最後に至つて馬脚を表わした矛盾性。

——強固なサジストのH氏が一面くだらぬマゾヒストでもある馬鹿さ加減。

——外国崇拜のH氏は同時に、白人奴隷女妄想者であり、而してその白人女性虐待志望のH氏が又、白人ならぬ日本女性加虐症である妙竹林心理。

——など、など。

で、私は皆様方諸兄姉のためにこれらの数多の疑惑の解決の鍵を提出しようと思う。

それは、このH氏の告白の前にある「前書の前書」にあると私は考えるんだが——

H氏は何故に、あの奇妙な前書をつけることにしたのであらう。又、その前書を読んで何故感心したのであらう。

もう一度、あそここのところを読み返そうではないか。

後書の後書（即ち筆者後記）

皆様、何卒今一度この文の始めのところをお読み下さいませ、衷心より私のお願ひするところでございます。そして、これこそ、私が、このような文章を書きました最大の理由だったのでございます。

（完）

サディズム小説

いで湯

泉 義 明



「あれっ、嫌っ、そ、そんな、おお」

良江は微かに呻めいて曲げていた足をぐうっと突っ張る様に伸して軀を反らした。

姑はも早や教育の域を完全に脱してしまい、自分の性情に溺れこんでゆくのを制しきれなくなった。元来、此の女は一生石女で通しただけあって、どちらかと云うと中性以上に男に近い位のMがかった傾向の持主で、自分の女としての不満足感から、若

く美しい女を見ると苛めたいというように歪められていたのだった。

「あっ、いゝ痛ッ、嫌ッ、そんな事」

と呻めく。姑はふっと荒く息を吐いて

「ふふ、お前は可愛いいわねえ」

と、とう／＼本音に近い乾いた嘆声を洩らしてしまった。それを聞いた良江は、幽鬼から囁やかれた様な寒気を感じ、ぞうつと全身に鳥肌が立ってくるのだった。

「ふゝうふふ、ふふ、良江や、お前さんはあ

んな蛸みたいな奴にやれないよ。安心して」突然姑は崩れる様に良江の軀の上に倒れかゝって、べったりと粘りつく様な唇を彼女の頸筋に押し付けた。

「あっ、嫌っ、嫌っ、止めてッ、あーっ」

思わず良江は不自由な身体をくねらせ、悲鳴を挙げてしまった。姑は、弾みを喰ってことんとタイルの床に振り落され着ていた浴衣はべっとり水に濡れた。

「何だい、畜生、人が優しくすりあつけ上

がりやがって、」

と棒立ちになった姑は口荒く罵った。それは自分の度を越した普通でない仕草を良江から拒否された屈辱感が、その怒りに油を注いだのだ。併し良江はもう無我夢中でこの場から逃れようと、もがいてのたうち廻った。姑はそれをさも満足そうに眺めていたが其の時、浴室の外で膿患の炎を燃えたぎらせて其処を窺っている目があった。徳は以前から此の姑に可愛がられた被虐者の一人で、彼女がその夫を此の支配者に捧げて悔いないのも、一つにはその被虐的恍惚感も手伝っていたのである。つまり自分の夫を奪れた哀れな妻の立場に酔っていたのだ。併しそれも此の女主人だからこそ許せるのだが、今其の女主人の手に新しい玩弄の対象として良江の姿が彼女の目の前にクローズ・アップされてみると、それは異常な位激しい嫉妬の炎であった。

ところが今、その女主人の足許でのたうち廻っていた良江のはかない努力も遂に成功したかに見えた。水に濡れた絹の腰紐が足をばた／＼している間に、つるりと亡くなって、彼女の両足は自由を取戻した。ぱっと足を跳らせて立上ろうとしたが、哀しい事にまだ両手の自由が失われていた。忽ち平均を失って再びタイルの床に横倒しに転ってしまった。姑の頬に残忍な笑いが泛んだ。

「おや、味な事をおしだね」

と彼女が良江の躰を足蹴にかけた時、

「母さんこれ」

と忍びやかな声がして徳が丈夫な麻縄を持って顔を出した。二人は頷き合って、

「あゝ、徳かえ。生意氣だよ。此の娘は」

「そうですか、でも余りひどいことをすると……」

「余計な事お云いでない。早く彼方へお行きよ。私が睨んでいるんだから」

徳が匆々に立去ると、姑はにやっと片頬に笑みを泛べ麻縄を纏んでまだ起き上ろうともがいている良江に近付いた。良江は姑の手の麻縄を見ると絶望して急に声を挙げて泣き出した。

「さあ、手向った罰だよ。本当に後悔する迄縛っておくから覚悟をおし」

押し殺した男の様な強い口調に、もう良江は再び観念しからからに乾いた喉に、ごくりと生唾を飲み込み弱々しく頷いた。赤い絹の腰紐が姑の手で一旦解かれると、その紅絹の紅が水に滲んで恰かも血が滲んだ様な跡を白い肌にくっきりと浸みつけて、妖しくも無残な美しさだった。

「さあ、此方へおいで」

と姑は浴室と脱衣場の境の太い磨き丸太を左手で叩き乍ら云うと、良江は恰らあやつり人形のようによめきつとおずおずと立上って小鳥の様に震えている。姑はきりきりと瘡

癩筋を立てて、

「早くしないかえ」

柱には境の手摺があった。良江は眼も昏くなる思いでそれにまたがると、背を柱に当て両手を其後へ廻した。両足は床より五寸程上の処にぶら下った。姑は麻縄で丹念に乳房の上下を二廻りして手首は柱の後に固着し余った縄でぶらぶらしている足の膝と足首を柱にぐいぐいと喰込む程強く締めつけたので、良江の全身はその縄につられて痺れる位だった。

二

姑は疲れ果てて茶間に戻ると、死んだ様に軀をかいて眠りこけてしまった。徳はそれを見定めるとそろそろと浴室へ忍んで行った。仄暗い電灯の下で、良江はぐったり頭をたれていた。徳がそっと近寄ると

「あ、ああ、徳さん、お願い、助けてね」

からからに乾いた口を震わせて云った。

「おお、おお、お可哀そうに、喉が乾いて苦しいでしょう。今水を上げますよ」

徳は、縄はほどこうともしないでそう云った。それでも良江には地獄に仏だった。徳の呉れる水をむさぼる様にコップ二杯もたてつづけに飲み、ほっと一息すると、苦し気に腰をゆすり、

「お尻が痛い、早く降して」

「そう、これじゃ痛いでしょう。私が染に上げてますからね、あら、こんなにきつく締めつけて……。」

徳は良江の宙に浮いた恰好のよい足を握って、足の裏をゆるく撫でさすり初めた。

「あつ、徳さん、嫌、そんな事良いから、早く降して、ね、お願い」

「ええ、今母さんに伺ってから」

良江は恨めし気に徳をにらんで

「ああ、意地悪。お前も同じ気狂いなものね。」

あつ嫌つ、おお、おお、意地悪。人でなし」

と呪う様に云ったが、良江はもっと切実な訴えが躰の裡から苦しみを加えた。それは夕方以来ずっと御不浄に行けなかったのに、加えて今徳に与えられるまゝむさぼり飲んだ水が顔面に崇ってきたのだ。

「ああ、あつ、お徳さん、お願い、お不浄に行き間だけでも、むう、おお、おお、嫌、そんなに擦っては、駄目だったら」

殆んど悲鳴に近く息も切れ切れに云った。

「でも、私が母さんに叱られるもの」

徳はふてぶてしくそう云った。

「くっ、くっ、むうーっ、くっ、くっ」

良江は屈辱に噎び乍ら、きりきり歯を噛みしめた。

三

空は白々と明けて来た。徳は茶の間の女主

人を起して、何かひそひそ話して居たが、再び浴場に戻ってきて良江を解き放した。良江はほっと一息して、自由な身体を取戻したものの、未だ凡ての世界が乳の様なヴェールに包まれている感じだった。

徳は良江を離れの一室へ連れて行った。其処は崖端の眼下に海を控え、人の気を完全に絶っている閑静な、こゝでも特別高級なお客にだけ使用を許している八帖の間だった。

未だぐったりしてのびたようになって良江を厚い絹表の夜具に横たえた後、手首と足首を再び固く結んで、軽い夏夜具で其の上をふわりと被った。

時計が八時を報せる頃、良江は漸く自分を取戻したが、新しく手首が背で自由を奪われているのを知った。

「お目がさめて？　ほほ、随分うなされていらった様よ。お気分如何」

徳は図々しく白ばっくれてそう云った。

「ええ、どうやら、お腹が空いたわ。でも何故私こう結かれていますの？」

良江も不逞腐れてそうやり返した。徳は此の大人しそうな女の意外な心の強さに愕いた。

「ほほ、いいえ、ね、うなされなすって暴れたものですか」

「そう、嫌ね、嫌な夢見ましたもの。じゃ余程手古ずったのでしょね。」

と強がり云い乍らも、良江はふいにつき上げてくる涙は抑えられなかった。

「いえもう大丈夫でしょう、ほほ」

徳はたじたとした心持だった。

「何か召上りますか、何でも欲しいものを」

「ええ、御飯、お腹ペコペコ、果物と飲物」

「飲物はお酒？」

「お酒は嫌、徳、坊やは？」

「ええ、お気嫌よく又お寝ってますよ。朝オートミルとミルクを沢山召上って。お連れしますか？」

「いいえ、後で良いわ。宜敷く頼むわね。私もう少しぐっすり眠り度いから」

「ええ、ええ、ゆっくりお寝みなさいませ」

「徳、じゃ食べさせて、いいわよ。このまゝで、又発作が起きて暴れると嫌だから」

「ほほ、そうですわね」

良江は強いてそう云って徳に口へ食物を入れて貰い、吃驚する位食べて又飲んだ。そして徳に香水を充分に床にまかせた上、顔に薄化粧さえさせたのである。

そんな有様を徳から、聞き取った姑は案ずる依り生むは易しとほっと一息して、今日の夕刻、頃合を見計って来る様にと、フーさんに電話した。

満顔に笑みをこぼれん許りに泛べて、フーさんがやって来たのは、表の行燈に灯の入る頃だった。

「先ず一杯、そう納得してくれましたか、いや結構結構、こうなりあ、私として大奮発しますよ。大丈夫資本の方は私に委せなさい」

彼は上機嫌でビールを一息にあふった。

「でもね。父さんには未だ内緒なのよ。だから大っぱらは困るわよ。良くって」

「承知、承知、私だってそれで良いんだ。唯あの女の純情に感激してね、ぜひお力ぞえしたい、唯それだけです。ははは」

「ふふ、まあね。」

「じゃあ、これは手附じやないが、今日のまあ、ほんのお心づけ……」

「あらまあ、早速で悪いわねえ。」

「じゃ、これから前祝に良江さんも呼んで」

「あら、それは駄目よ。先刻も云った通り私でさえ知らない事として運ばなきあね。」

「あ　成程、さやか、それもそやなあ」

「大丈夫、向うの離れでちやんと待ってますからね。お飲物要るならベルを押してね」

「へへへ、成程なあ、矢張り大家の嫁さんやで恥しいとか照れるというわけか、」

「ね、父さん、今晩は大丈夫帰らないと思うけど、明朝は早く帰って頂戴よ。好くって、今晩の後はさ、何処か遠くでしっぽり逢引するのよ。余り人眼に立たない様にねえ」

ぽんと背中を叩いて、フーさんはぐにやぐにやと腑抜けの様にやに下り、

「どうも、どうも何から何迄お心使いを」

姑は男の耳に口をよせ素早く囁いた。

「納得させるに一寸荒療治したの。苦勞したわよ。大丈夫一度烙印を押せば、素人女ってもうそれっきりよ。気にしないでね。それに息子だって永くはないしさ。結局彼女も幸福になれ、百方目出度しって訳なのよ。こぶ付が一寸玉に疵だけどさ」

「ふふ、いや、それだから尚良いのさ。俺は子種がないんでね。いや可愛い子だよ」

「あら。そうだったわね。道楽の祟りね」

四

男は一人でその離れへ行った。彼は何か年甲斐もなく膝頭がぐくぐくするのが自分でも照れ臭いのだ。俺も成功した。二号を持てる様になったからな。はは、併しあんな婆に良く永年辛抱したもんさ。

彼がそろりと離れの障子を開けると、艶めかしい行燈型のスタンドに、仄かな灯がともり、鮮やかな花模様の夜具が眼に飛び込んで反って度肝を抜かれた形だった。冗談じやない、もうすっかり用意が出来ている……。

男はごくつと喉をならし、そろりと部屋に入った。さっきからぱらぱらと竹藪を鳴らしていた雨は再び激しさを加えていた。

「良江さん、入って良いですか？」

男は柄になく気兼ねそうな声を掛けた。

「はあ、どうぞ。」

流石に良江の声は震えを帯びていた。夜具から眼の上だけ覗かせていたが、男は其の深い湖の様に澄んだ人一倍大きな瞳にたじろいだ。

「もう、お寝みでつか？」

「ええ、一寸今日は気分が悪くて」

男はわくわくし乍ら

「あの電気を消しましょうか」

と単刀直入にそう云った。

「いいえ、此のまゝで結構ですわ。どうぞ」

「あのう、良いんですか」

男はワイシャツのボタンをはずし始めた。

「あの、お召物はどうぞ、そのまゝ、それより一寸夜具を取って頂き度いわ」

徴かに震えを帯びていたものの、良江はしっかりと調子で云った。男は事の意外には

つとなりながらも、吃り吃り云った。

「え？　え？　あゝあの、取っていゝんでっ

か。ええ、あ、あの暑いでっか」

「ええ、何だか蒸し暑くて、息苦しいわ」

良江はぐるりと俯伏せになって、きつと唇を噛みしめた。男はどぎまぎし乍ら

「本当に宜敷うまっか。じゃ失礼、」

と多少躊躇いつゝ、夜具の襟に手を掛けた。

「あッ」

流石に男は仰天して思わず声を挙げた。

「どゝど、どないしやはって。これあ！」

仄暗い灯の下に、俯伏せの背中が見えたも

の、両手は惨たらしく後手に縛られていたのだ。

「そ、そ、そうでつか。母さんはまあ……」

と男は嘆息したが、もう此の美しい獲物は自分の物になったと同様である。

「あの　手首だけでもよろしいから解いて下さらない？」

良江は布団に顔を押しつけたまゝ、殊更媚びるような口調で訴えた。小柄乍らすんなりとした白い手足が、身体の美しさを思わせて又格別である。もうそれだけで男の心はうわの空だった。

「そ、そりあ、そうや。こりあ酷い。何もこげな事せんでもなあ、いや私の為とんだ災難でしたな。許しておくれやす。その代りこの埋め合せは何程でもしまっさかいな」

と男は良江の手首の縄に手を掛け、不図万一逃げられたら？　と考えて躊躇った。その氣配を察した彼女は少し身体を起して、

「ほゝ、もし疑うのでしたら足はそのまゝで結構です。もっときつく縛り直したって構いませんわ。でも、手の方はもう我慢出来ないの、痺れちゃって。」

と男の躊躇いを見抜いてそう云った。

「そ、そりあ、そうでっしやる。いや何、足の方だって、早よう自由になつて楽にな」

と口では云うものの、男は先ず手首だけではどいて其の背に寄り添おうとすると、

「ちよつと、待って」

良江はくるりと軀を仰向けにして、しなを作り、にっこり笑つて見せた。

「電気、消して下さらない」

「あ、そや、氣がつかんこつてす」

男は女の従順さにすっかり満足して、電灯に手を伸した。

五

男が出かけて、二、三分位して、首尾は如何にと姑と徳の二人は、離れに通じる廊下をそうと近寄つた時、

「ぎやあーっ」

と突然魂切るような叫び声に二人は仰天してしまった。と、離れの障子を押倒す様に、人影が転び出て、よろよろと二、三步よろめいたが、ぐったりとうずくまった。

「まっ、如何しました？」

姑が男の傍へ走り寄ると、徳は夢中で部屋に駆け込み、電気を点けた。

「ど、どうしましたっ、あつ、大変、貴方、しっかりしてよ」

流石に海山千の女も狼狽なす処を知らぬ。

男は、ふっふつと荒い息を肩でし乍ら

「つつ、痛つ、痛つ、」

とだらしない悲鳴を挙げて両手で脇腹を抑えて呻く。姑は突嗟に刃傷？　と考へ、

「大変、人殺しよ。徳っ彼奴を押えて」

良江は夜具を頭からひつ被っていた。徳は矢庭にそれを引きはいた。

良江はまだ足首を結えられたまゝ軀をくの字に曲げ、手首を結えてあつた紐を自分の首に巻きつけ様とかがいていた。

「あつ、良江さん、待って。」

徳は良江の身体に飛び付いた。激しい泣声とその徳の手の下から洩れた。

「早よ、早よお巡りさんを——」

うろたえた姑が叫ぶ。併し激しい雨音と潮騒にそれすらかき消された。

「あ、待ってくれ、大丈夫だ、大した事は無い。」

男は呻き乍らも、それでも分別があつた。事が公になると、當々と築いた自分の社会的信用も一朝にして崩れ去ってしまうのだ。

「徳っ、離して、早くお巡さんを——」

今度は徳の軀に押し潰されている良江が悲鳴を挙げた。漸く落着を取り戻した姑はきつとした面持で、

「フーさん。今晚は失敗ね。ふふ、仕方ないわ。又出直すのよ。蝶々は蜘蛛の巣にしっかりと懸っているんだから」

今度は徳へ向つて、

「徳や、今度こそしっかりと縛つといとくれ。畜生、覚えてやがれ。目に物見せてやるから！　後悔するな」

と恰ら男の様な言葉をはいた。

「まあ待ってくれ。良江さんの故じやないんだ。結局は横しまな考えに溺れた俺が悪い」
「ふふ、何を意気地のないことを。まあ、委しときなさい」

フーさんが匆々に帰っていった後、姑のヒステリイはもう抑えきれなくなっていた。彼女としては自分の計画が画餅に帰した上、折角の金蔓を逃してしまったのだ。

良江は今度こそ雁字搦目と云った無残な有様だった。

「助けて、助けて、早くお巡りさんを」

とうなされる様に彼女は呻めいた。

「ふん、お巡りさんをつて、如何するのさ、フーさんに傷をつけて、訴えれれば縛られるのは貴女なんだよ。私達は取りおさえただけなんだ」

「え？、だって私、あの人は何か病気が……」

「病気？ 白ばっくれるな。兎も角今晚はみっちり折檻してやるよ。もう何でも素直に訊くって証拠を見せる迄はね、なあ徳や」

「え、本当にフーさん大変な事でした。」

徳は白々しい合槌を打った。

「ああ、ああ、何卒勘忍して、もう何でも」

「うるさい、お黙りっ、徳や、恰度表は嵐だし、邪魔が這入らないで良いよ。お前さんも手伝っておくれ。お前の亭主が駈落したんだって原因は結局良江だよ。恨みを果すのさ」
「ええ、まあ、それはそれとして、兎も角今

晩の様な事又、ありますとねえ、」

「さあ、如何してやろう」

「ねえ、若奥さん早くお母さんに詫びたら」

「おお、おお、こんなに詫びてるのに……」

「何にも詫びる事はないさ。今晚の罰に折檻して良いね」

良江はぼろぼろ大粒の涙をこぼし、

「どうぞ、宜敷いように、私後悔してます」

「そうかい。じや素直に罰を受けようって言うんだね、徳や、その皮バンドをお取り」

「まあ、これフーさんのですわ」

「あわてて忘れてったのさ。恰度良い、フーさんの代りに、これで折檻してやろう」

姑は荒々しく立上ると徳に顎で合図した。

徳は良江を俯伏せにして腰の辺りに、枕を差入れ恰度臀が高くなって鞭を受け易いようにした。良江はひいひいとかぼそい悲鳴を洩した。姑はびゅっ、びゅっと革帯を空鳴りさせ先ず第一撃を臀に加えた。

「あっ、おお、おお、助けてえっ」

と良江は身を悶えさせる。続いて二つ三つ苦しみの余り彼女は枕から転げ落ちて喘いだ。

「徳、お前さん、抑えておくれ」

情容赦なく姑はそう命ずる。流石に徳は躊躇ったが、結局再び良江の姿勢を直して背に腰を降した。再び革鞭の音楽が呻きの伴奏で始まる。

「つつ、おお、もう、もう、あっ、おお」

「こら、余り大声で喚くんじやないよ」

「ああ、ああ、何卒お願い口を縛って……」

「徳や、御注文よ。猿ぐつわをしておやり」

徳はありあわせのハンカチを、良江の口に押し込んでタオルでぐっと締めつけた。

六

翌日は流石に飽きたのか、姑は終日茶の間でぼんやりしていた。良江は良江で完全に伸びきって終日俯伏せになって眠っていた。一人忙しいのは徳で、彼女は何故か活々と楽しそうなのだ。赤子の世話から、その母親の介抱食事の仕度とこまねずみの様に仿いた。夕方になっても老主人は戻って来ない。となると姑の加虐癖が再び頭を擡げて来るのであった。

「徳や、もう一晩ね、ふふ、今度はあんな乱暴でなく、じわじわやって見よう。疲れるからね、如何だい、良江、一寸は元気かい」

何か楽しい計画の様に語り出した。

「ええ、大体、脹れも引きましたし……」

「そうかい。じや夕食は離れへ運んで……」

良江は漸く人心地を取戻した夕方、再び二人が入って来たので、ぎよっとした。彼女はまた縛られたまま臥していたのだ。

「如何だえ、気分は？」

「はい、もう、もう許して下さい。お願い」

「そう許しても上げるよ。素直になるなら、解いても上げるから。」

「お願い、もう我儘しませんから。」

「そうかい。じゃ許して上げるよ」

案外優しい姑の言葉に良江はほっとした。

そして漸く解放された腕を撫で乍ら、

「あのう、徳さん。何か浴衣でも……」

湯文字一枚の良江は恐る恐る云った。姑はにやにやして

「まあ、そのままだつて好いよ、今晚は蒸し暑いもの。そして仲直りに一杯やろうよ」

「私、お酒は、それよりお腹が空いて」

「うんうん、恰度土用で鰻があるよ。」

「あの何卒、お酒は、それに浴衣」

と良江が哀願する様に云うと、姑は急に顔色を変えて、睨み付け、

「良いんだよ。黙つて云う事を訊くんだよ」

「え？　済みません。じゃほんの少し、」

良江は脅迫されて、仕方なく盃を持つ。

「そんなのじゃなく、これ一杯はどうしても飲むんだよ。」

姑は容赦なく盃洗になみなみと冷酒を注いで良江の眼の前に押し付けた。

「まあ、こんなに、私如何しましょう」

「嫌かい、嫌なら……」

「あつ、頂きます。頂きます。でも御生ですからその前に浴衣と御飯を。」

「くどいね。御飯は良いが、浴衣は駄目」

「まあ、まだ許して頂けませんの」

良江の頬にするすると泪が流れた。遂に彼女は観念して勿々に鰻丼を喰べ、それこそ死ぬ心算で眼をつぶり盃洗の酒を、一息、二息

とうとう死ぬ思いでそれを飲んでしまった。

「おや、仲々見事見事、いけるじゃないか。」

もう一つ踏張つて御覧よ」

姑は悦に入つて再び盃洗に酒を注いだ。

「ひいっ」と悲鳴を挙げて良江はぐらりとそのまま畳の上に引っくり返ってしまった。その

うだろ一杯で五合はある。まるで天地がひっくり返つた様だった。もう何も判らない。

彼女はだらしなく両足を投げ出した。ガチャ

ンと卓に片足が当つて二杯目の酒が彼女の湯文字に大きくシミをつけた。色白の肌が程良く桜色に染つた。

「おやおや、大した恰好なこと。ほほ……」

姑と徳は面白くてたまらないという風に、軀を折り曲げて笑い出した。

「ふん、仕様のない、お姫様だよ」

「水……水を頂戴」

良江は喉をかきむしつてそう呻めいた。そして徳の差出すコップの水を貪り飲み、ふう、と大きく吐息して云った。

「さあ、如何でも好きにして頂戴」

「ふん、一人前に悪たれ云えるわね。そうさ好きにさせて貰いましようよ」

意識がない相手と見て、徳も段々其の本性を露わにして来た。昨日はとうとう彼女は手を下せないで口惜しくて仕方なかったのだ。

「お母さん、今晚は休んで見物してよ」

「うん、私あ、疲れているよ。それが好い」と姑は楽しそうに床に横臥して、

「でも軀に傷をつけたりしちや駄目だよ」

「大丈夫よ、うまい事やつて見せるから」

と徳は云い乍ら、ぐにやぐにやと正体もない良江を引きづつて、鴨居に両手を拡げて縛りつけた。

「ほら、あの映画『燃える上海』そっくりよでも、こっちの方がずっと素晴らしいわ。本当に綺麗なこと」

彼女はすっかり満足して嘆息を洩らした。良江はぐたりと伸びつてゐるものの、時々手首が痛そうに身もがいた。

「ううむ、つつー、おお、お願い、口をおお、苦しい、おお、ううむ、むう」

「そう、でも今日は猿ぐつわの代りに眼隠して上げる。」

徳は実際、良江の大きな瞳が恐しかったのだ。紅絹の中できゅつと眼隠しする。

「あつー、むうん、痛い、おお、おお」

万力の様な強い力で徳は水で濡らした指で

振り続け、桜色の肌に容赦なく青痣を次々と描いて行つた。良江は激しく軀を前後に振つて悶えた。手首は全身の重みで感覚を失い、

肩の骨は今にも抜けそうになる。

「むうっ、嫌っ、それだけは勘忍して、助け
てえ、ああ、おお、一寸降して——お願い、
ねえ、後生だから……」

徳の残忍性は益々昂進して、相手が苦しめ
ば苦しむ程、一層意地悪く両手を挙げて伸び
きった脇腹を擦ぐるように揉み始める。ぎり

【通信】

私はおしめマニア

——赤井茂さんへ——

多磨 宏

赤井さん。誌上での呼びかけがありが
うございます。早速にも御手紙を差上げ直
接に文通を致したいと思っておりますが、
家の方の事情もあり思うままにゆかぬこと
を残念に思っております。

私が奇クの愛読者の一人になりましたの
も、貴兄の「おむつへの幻想」にある日ふ
と書店にて手にした奇クの中に見出してか
らなのです。その後機会ある毎に奇クのバ
ック・ナンバーを揃えおしめに関する記事
を探し出しましたところ意外にも多くの方
々がおしめに対して私と同じ様に愛着を持
っているのを知り、非常に驚き又嬉しく思
いました。それまではあまりにも奇妙な性
癖である丈に人知れず悩み続けて参りまし
たが、奇クを知ってから私の心はどんなに
か慰められたか分かりません。

っ、ぎりっ、と良江は歯嚙して必死にこらえ
る。もう全身汗びつよりになる。

「ああ 暑い。母さん。一服しましょうか」

「うん、中々面白い踊りだったよ」

姑も満足そうだった。二人が紙巻にライタ
ーで火をつけた時、不図姑は思いついて

私がおしめに対して異常なまでに愛着を
感じるようになった直接の動機は、三年前
のまだ高校在学中に肋膜炎になり入院した時
のことです。一時大分病状が悪くなりベッ
ドについたきりの状態になった時に、附添
についてくれた看護婦さんが若い美しい人
でしたので、度々尿の世話等をして貰うの
が恥しくこらえている中にある夜眠ったま
ま子供の様にお寝小をしてしまいました。
翌朝それに気付き泣きたい程に恥しい思い
をしている私にその人は「御病気の時です
もの仕方がございませぬわ、今夜からちや
んと処置をして差上げますわね。」と、少
しも嫌な顔もせず後始末をしてくれました
た。そして夜ねる時になると、「またお寝
小をするといけないうし、心配でねむれない
と体に悪いでしょう。安心してお休みな
れるようにおむつをして差上げましょう」
とおしめを当ててくれたのでした。
そして朝になり「あら、あら、大きな赤
ちゃんおむつがびつしよりね。取り換えて
上げましょうね」と軽くからかいながらお

「ふふ、当分消えない烙印をしようか」

とにやにやした。徳もぎらぎら眸を光らせ
て頷いた。二人はもう気が狂ったも同然だっ
た。徳は躊躇いなく立上って、鴨居に下ってい
る良江の背後に廻った。眼隠しされているの
で何の事やらわからずに喘いでいる。僅に爪
先が床に立って手首や肩の重荷をゆるめてい
たのだが、突然背後に人の気配を感じて

「あ、な、何をするのよ。嫌っ、嫌っ」

良江は重大な加害の予感に脅え上って、全
身で悶え逃れ様とした。肩の骨がごきつと惨
らしい音を立て頭も痺れる程痛い。

姑はごくりと喉を鳴らして、ゆっくり近寄
ってくる。とシュツとライターを点けた。

「ひいーっ、あつあつあつ、熱うっ、ひひー
っ、おお、おお、ちちっ、熱う、むう」

良江は全身の力を振りしぼって、逃れよう
とものがいたが、徳は胸と腕でがっちり掴えて
離さない。

「ひひっ、おお、おお、ふっ、ふっ、ふ……」

「何さ、そんな熱いもんか、肌にはふれてな
いもの、ほら、動くと火傷するよ、莫迦」

「や、止めて、後生だから……」

七

翌日の午後、老主人が帰って来た。

「何処か分らんが手配だけして来た。良江は
どうした。具合でも悪いのか」

しめを取り換えて貰う時に感じる羞恥にも又奇妙な心よさを感じたのでした。

私はきつとマゾ的な傾向が強いのでしよう。病院を出てから当然のことですが他の女性におしめを当てて貰うような機会には全然恵れませんが、おしめに対する執着は日毎に烈しくなつてゆくようです。

病院に入院中に見聞したことを一寸お話し致しましょう。肺に空洞が出来た患者がしばしば行う整形手術の際に、いざ執刀となる烈しい恐怖感の為に尿意や便意を催し、くることが、男女共に若い人に多く、その時は消毒をしてしまい総べての処置をし終つた後なので軀を動かすことも出来ずいつもおしめを使って始末をするそうです。

又、整形手術の際に行う麻酔がどうかした調子でしばらく脊椎神経をおかし、下半身不随になることがあるそうです。病棟の看護婦さんに聞いた話ですが、私のいた病院にも若い女の患者で不幸にもそんな状態になられた方があり、二ヶ月以上もおしめを使つていたそうです。

私のいた病院は呼吸器専門の一寸大きい病院でしたが、別に赤ん坊が入院しているわけではありませんでした、物干し場には大抵おしめが干してありました。

これも看護婦さんに聞いた話ですが、別に便秘をしているわけでもないのに浣腸をよく要求する患者があるそうですが、これと同じ様に沢山の患者にはおしめを当てて

貰うのを好んでいる人もいたのかもしれない。

私はその中の一人でしたが……。

次に私の手許にあるコレクションを紹介致します。機会ある毎におしめに関する記事やおしめのコレクションに努めていますが、思つた程手に入り難いのは日本の浴衣地で作つたおしめです。

アメリカ製のものは二ダース程持っています。これはガーゼを二枚合わせて作つた長方形の純白のもので肌につけた感覚はやわらかなものです。これ等は銀座にあるアメリカの薬局で容易に入手出来ますが、やはりフェチ的感覚から云えばはるかに日本の浴衣地のおしめの方が勝れています。私は特に若い女性向の大柄の模様のおしめに烈しい魅力を感じます。

又外国の通信販売のカタログを見ますと御婦人用おしめカバーとして月経帯を売り出してはいますが、これも是非手に入れたいと思つています。貴兄がいつか書いておられた様におしめと浣腸を結びつけてみるのも非常に興味があるとかねがね思つていますが、まだ実行してみる機会を残念ながら持ちません。

とにかく私は年上の美しい女性に浣腸をされたり、おしめの世話をしたいと渴望しております。

貴兄もどうぞ誌上にて私達おしめファンのために御活躍下さい。

姑は呆然と赤い眼をして物憂気だった。

「何？ 下痢したと……」

主は不機嫌そうに酒をあふった。

その頃、良江は赤子を背負うと、着のみ着のまゝで勝手口から裏の通りへ出ていた。徳は恰度夕食の仕度の為買物に行つて留守だった。つゝかけた下駄の鼻緒のゆるみが気になったが、今はそんなことをいつている暇はなかった。小走りに表通りを避けながらも、足はいつしか、駅前に出ていた。

こんな処でうろ／＼していたら、今にも姑が捕まえに来るかもしれない。然し今の良江には東京までの汽車賃はおろか、満身に夕食を食べる金すら持ち合せていなかった。と、眼の前に伊東行のバスが止まった。彼女は咄嗟に追われるようにステップに足を掛けながら、以前家にいた女中が、伊東の旅館で働いていることを思い出した。

そうだ、そこで汽車賃を借りて東京へ行こう。夫のもとへ行こう。そう思い立つと、急に身体中の節々が痛んできて、昨夜までの悪夢のような数日が今更のように思い出されるのだった。

(完)

〔註〕この文の最後の個所から、六月号の八四頁「いで湯」の冒頭へ読み続けて下さい。

小説

スーダン

川野京輔

(1)

スーダン

メリー・アップーフィールドが、アフリカ東部のスーダンにやって来たのは、一八九九年の晩秋であった。

霧深いロンドンから、単身、アフリカ航路の客となった彼女にとつては、未開と伝えられ蛮地と噂されたスーダンも限らない希望の地であった。

と言うのは、昨年の春、スーダン守備隊の大尉に任ぜられ、一足先に赴任していた婚約者のジョン・スミスの許に行くのだからである。

航海の途中、彼女は色々とスーダンの様子を他の船客から聞かされた。

未だメリーが生まれぬ頃、スーダンにモハメットと呼ばれる僧がいた。

時の圧政者、エジプトに対して彼は、果敢な抵抗を続け、その国

粹的な神秘主義は、やがてスーダン地方の住民の間に滲透していった。

「マーチー」と言われる最高の尊号を持つモハメットは狂信的な住民を率いて、スーダン解放の狼煙をあげた。

エジプトの守備兵はもろくも敗れ去った。イギリスも此処に至って始めて、「マーチスト」達の容易ならざる事を悟り慌て、スーダンの守備兵を強化した。此の軍隊は、スーダンに住むイギリス人を保護する任に当たっていた。

一八八五年、マーチーは病を得て死に、イギリスは、これで暴徒も静まるだろうと樂觀したが、彼の後継者となった回教王アブドラヒはマーチーに輪をかけた強固な独立精神と、勇敢な兵を持っていた。

彼はスーダンをエジプトに代り掌中に治め様とするイギリスの野望をよく知っていた。

増強したイギリスの軍隊も亦、独立軍の敵ではなかった。

以来七年間、アブドラヒはスーダンの実権を握っていた。

だが、その間、イギリスは有名なキツチナー將軍を司令官としてエジプトでマーヂスト鎮壓の軍隊を訓練させていた。

一八九八年、即ちメリーが愛するジョンと別かれなければならなかった昨年の春、キツチナー將軍の率いる討伐隊は、オムドルマン附近で回教王の軍に遭遇した。

そして今度こそ精巧な武装をほどこした英軍は圧倒的な勝利を得、二万七千人のマーヂストが屠殺された。

婚約者ジョン・スミス大尉は、スーダンの鎮壓が一まず成ると、直ちにメリーに便りをして、此地にやって来る様と言う提案を遠慮深く申入れたのであった。

うら若い上流の淑女が、暗黒の地、殺掠の町として名高い此地へ、よもや来てくれるとは思わなかったからである。

だがメリーは喜んで行く気になった。恋をした女にとっては、如何なる辺境の地であろうと唯、愛する男がいるだけで充分なのである。

知らせを受けた大尉は、夢かとはばかりに喜び、ロンドンで別れたメリーの面影を、懐にした彼女の小さな写真から呼び起そうとして、寝る間も放さず肌に着けていた。

文字通り一日千秋の思いで待った愛しい人が、こうして現実に彼の宿舎に着いた時、ジョンはその余りの美しさに、暫くは物も云えずに立すくんでいた。

殺伐な戦闘に明け暮れた此の一年余の間、彼は、黒い肌を持つ異郷の女を見馴れていたもので、メリーの抜ける様に白い皮膚が大きな驚きであった。彼は震える両手でメリーを抱くと、むさぼる様に真赤な唇を吸った。

メリーは婚約者が、暫く見ぬ内に、熱帯の太陽で浅黒く焼け、見るからに逞しくなっているのに、すっかり魅了されてしまった。鼻

下には新らしく蓄えた髭があり、接吻している間、その剛い毛が彼女の頬を快よく、くすぐった。

「よくやって来たね。僕は、こんな処に君が来てくれるとは夢にも思っていなかったよ」

やっと唇を放すとジョンは一寸はにかんで言った。

「だって、貴方がいるのですもの……」

二人は、そこで亦、更に強く抱き合うのだった。

(2)

とうとう、こんな辺地にやって来た。

メリーは旅の疲労にもかゝらず妙に頭が冴えて仲々寝附かれなかった。ジョンは健やかな寝息を立てゝ眠っていた。彼女は、そつとドアを開けて表へ出て見た。

大きな月が高い樹々の上から昼間とさして変らぬ明るさを投げかけていた。

町はずれの森では何だか分らぬ野獣が吠えていた。

突如、意外に近い処で、人の争っている気配がした。ナイトガウンの襟を立てゝ、彼女がそつと近づいて見ると、二、三人の土民が黒い物体を担いでおり、彼等の前には一人の武装した白人の守備兵が立ちふさがっていた。

兵士は彼等の担いでいる物を指さしながら文句を言っているらしい。土民達は、それに反対している様子であった。

兵士は銃を構えて鋭く命令した。無力な彼等は結局、その物を肩から降すと、そろそろと立去って行った。傍の樹蔭に身をひそめて月明りに透して見ていた彼女は危く叫び声を上げそうになって、口を両手で覆った。

土民達が担いでいたのは、彼等と同じ肌の色を持った女の死体であった。

絞殺されたものであろうか。

末だ首には荒縄が二重になって巻きついていていた。

土人の男達が仲間の女を殺した——彼女にはそう思えた。

スーダンに着いたばかりの彼女だったから無理もない。だが、二

三日も滞在すれば、こうした考えは一変するに相違ない。

ともあれ、彼女は生まれて始めて、殺された人間を見た事でもあ

り、恐ろしさの余り、樹蔭から一步も出られなくなつて、ぶるぶる

震えていた。兵士は女の死体から形ばかりかけられた衣をひきむく

と、ごろりと仰向けにした。

若い女であつた。黒人特有の、はりのある下肢が、土の上にまだ

生きてゐるものゝように投げ出されていた。

兵士はそつとあたりを見廻した。

短い剣を抜くと、女の豊かな胸にぶすりと突刺した。此の殺伐な

遊戯に兵士は低い叫びを上げながら目茶苦茶に剣で死体を突刺すの

であつた。

メリーは、そこまで見た。それから後は目の前が霞んで、はつき

り見届ける勇氣がなかった。

(3)

「二人の楽しい朝」を迎える筈だったその朝。

メリーの話を聞いたジョンが途中で意外にも笑い出した。

「まあ、何をお笑いになるの。人が殺されたのよ。私は此の目で見

たんだわ」

「いや失礼。始めての君が驚くのは無理もない。だが、そんな事は、

此のスーダンじゃ珍らしくないのだよ」

「何んですって？」

メリーが余り真剣になつて聞くので、ばつが悪くなり、ジョンも

強いて真顔を作つて答えた。

「野蛮な土民達が相手だ。マーヂストの連中と来たら全く蠅見たい

な奴等で、殺しても殺しても後を絶たないのだよ。君が見た死体の

女も大方、マーヂストの一味で、昼間、英軍によつて処刑されたん

だよ。その死骸を親、兄弟の奴等が奪いに来たと言う訳さ。こうし

た事件は、しよつちゆうあるんだよ。今に君も馴れるさ」

ジョンは事もなげに言い放つて、朝の食卓に向つた。メリーは食

事どころではない。

外では人々が集まつて、口々に何か言いながら死骸を取り片付け

てゐるらしい。

「おゝそうだ。今日は非番だ」

ジョンは食事を済ますと思ひ出した様に言った。

「どう。処刑を見に行かないかい。今朝は、二十人ばかりの土人女

が答刑を受ける事になつてゐるのだ。こりや見物だぜ」

言つてしまつてからジョンはメリーの嶮しい表情に氣がついた。

慌てゝナプキンで、ぎこちなく口の辺りを拭いたりした。

「まあ、野蛮な人」

メリーはジョンに聞こえない様に小さく呟いた。彼女の知つてい

るジョンは、こんな殺伐な男ではなかつた筈だ。

うだる暑さと、血なまぐさい戦争が、此の男を、こうも変らせた

のであろうか。

第一、考へて見れば言葉使いもひどく乱暴になつてゐるようだ。

「貴方はごらんになるのですか。今日は私達二人切りの筈でしたわ」

「勿論そうさ。だがスーダンじゃ、ろくに見物する処もないし。何

しろ、ひどく退屈な田舎町だからね。こんな処じゃ、一寸した刺戟

でもなけりや、へばつてしまふよ。君は僕が処刑を見に行くと云つ

て非難したが、こゝでは、白人の女も平気で、と云ふよりは、寧ろ

面白がつて見に行くのだよ」

「まあ、本当ですの。そんな事、私には到底考えられませんわ」

「その内、君だって答刑を見て亢奮するようになるさ。そんなものさ」

ジョンは一人合点をしてうなづいた。

「私、気分が悪いので家に居りますわ。貴方よろしかったら見物に行らっしゃいな」

ジョンは何んだかと言訳めいた事を喋った後で、結局、答刑の誘惑に負けて、一人で出かけてしまった。

メリーは泣いた。

何もかも、倫理観すら、すっかり違う勝手の分らぬ異郷で愛する男に裏切られたと考える程、寂しいものはない。無論、ジョンにしていれば、今でも心から彼女を愛しているのに違いなかった。だが、メリーは処刑を面白がって見に行くような男を愛する訳にはいかなかった。

長い間、泣き明かした後、メリーは召使の黒人女エステラを呼んだ。

エステラは肌こそ黒かったが整った顔と、均勢のとれた水々しい肢体を持つ若い女であったが、ひどく不愛相な表情で、そこには、敵意すらうかゞえる様な気がした。

ジョンの仕込みだろう。片言の英語を喋った。メリーは刑場への道順を尋ねた。

白人の女達までマーチストの処刑を見に行くと云うのが本当かどうか、そんな疑問のせいもあったが、何より一人で居るのが妙に切なくなったからでもあった。

(4)

涙を拭くと、メリーは馬に跨った。

ロンドンの社交界でもまれた優雅な身のこなしが馬に乗っても一きわ美しく目立った。

それに彼女の乗馬は、所謂、お嬢さん芸の域をはるかに凌いだ本格的なものであったから、その自信が一層、彼女の乗馬姿を引き立たせていた。

市場の近くにある刑場に着くとジョンは一早くメリーを認めた。両手を上げて嬉しそうに近づいて来た。

「よく来たね」

手を出して馬から降ろすと、誇らし気に美しいフィアンセを人々に紹介して歩いた。

成程、ジョンの云う通り刑場には多くの白人の女達が来ていた。守備隊兵士の家族がその大部分であったがスーダソンの鎮圧と共に流れ込んで来た、いかがわしい種類の女達も居た。彼女等は、口々にメリーの美しさを讃えながら、ひそひそと囁き合ったりしていた。中の広場では今しも十名前後の土民の女が留置場から引き出された処であった。

既にこの前に、二、三回、同じ様に答刑が行われたとジョンが説明した。

「ワーツ」と見物人が囁し立てる。制服をつけた守備隊の下士官が指揮をとって、数珠繋ぎにされた有色の女達は、首をうなだれて、刑場を一周した。何の罪かは知らぬが、殆んど少女かそれに近い若い女であった。見物の男達は口々に堪えぬ卑猥な言葉を投げつけた。

どっと上る歓声に答えて下士官が手を振った。縛られた女達は、一人一人、杭に繋がれた。腰から下の衣が無残に剥ぎ取られる。刑の執行をするのは兵士である。

堅く編んだ長いゴムの鞭で、素肌の尻を打つのだと言う。

「よし始め」

下士官の命令で兵士達は、鞭を宙に躍らせる。

「ヒーッ」

十数人の悲鳴が赤道直下の空に高く響くと、見物人は熱狂して「ワーン、ツー」と数え始める。

哀れな犠牲者達は、苦痛に身悶えして自由のきかぬ体をくねらせる。

「スリー」。「フォー」見物の上づつたコーラスが魂切る女の悲鳴をすっかり消してしまう。

ふくよかな太腿が、蚯蚓腹に腫上り、血が滲み出すと、見物は益々亢奮して、腕を振り廻しながら、大声で、兵士の鞭を催促するのであった。

メリーは、ジョンの胸にしがみついて真青な顔をしていた。何という恐ろしい惨虐なシヨウだろう。彼女は、のこのこ刑場に出て来た軽卒さを深く後悔した。

だが、こんなメリーの心痛を外に、血なまぐさい見物は、まだ続いていた。度重る鞭打で、女達の尻の皮が裂けて、血潮が両の脚をつたって流れていた。所定の百回の答刑が終った時、既に、三人の女が死亡し、残りはいずれも失神していた。

水を掛けたり足で蹴ったりして意識を取り戻させると、見物の言うまゝに、兵士達は、ありとあらゆる方法で、女達の息の根を停めてしまう。

ある者は絞殺され、ある者は銃殺され、そしてある者は刺殺された。

これを見たメリーは激しい怒りで頬を紅潮させながら声をふるわせて、ジョンに喰ってかゝった。

「どうせ後で殺してしまうのなら、なぜ鞭で打ったりするのです。いいえ、私は答刑が悪いと云うものではありません。勿論、良い事ではありませんが、答刑にはそれ相当の理由があるのでしよう。ですが、何故、その後で殺してしまう必要があるのです」

「君には解らないだろう。奴等が我々白人に仿いた暴虐を君は知ら

ないからね」

「そんな事は屁理窟です。みんなは、そして貴方だって、あの女達の処刑されるのを見て、打ち興じていたではないの。唯、面白がるために人殺しをするなんて、神に対する冒瀆ですわ」

「さあ、そんな大きな声を出さないで。みんなが笑っているじゃないか。あんな退化した野蛮人に対して、どうして良心的になれるものかね。奴等は充分、たゞきのめされる必要があるんだよ」

ジョンの、当り前だと言わんばかりの、余りな言葉にメリーは美しい眉を、きつと逆立てた。物をも云わず、そのまゝ一人、メリーは馬を駆って気狂の様に鞭を入れた。

(5)

ジョンは見る見る小さくなって行くメリーの姿を、ぼんやり目で追っていた。

彼女が怒るのを無理ない事とは思ふ。だが、マーヂストの奴等が、どんなに恥知らずな連中で、英人が如何に惨めに虐殺されたかを知れば、今日の処刑を見ても、寧ろ当り前だと思ってくれるだろう。

特に連中の女ときたら、最もいけない奴等で、その手引きで多くの白人が殺されているのだ。ジョンは、こんな事を考えながら暑い日射しを避けながら徒歩で帰り始めた。

暫く歩いていて、ふと彼は市場の片隅で女の悲鳴を耳にした。

人垣を分けて覗くと、さすがのジョンもハット息をのんだ。

一人の黒人女が地面に大の字になって仰向けになっていた。両手、両脚を白人の男達が、しっかりと押えていた。つややかな肌の色。よく伸びた四肢。

「おい、よさないか」

ジョンは激しく叫んだ。男達は、険しい目でふりかえったが彼の陸軍大尉の制服を認めると、しぶしぶと女から手を引いた。だが女

は失神したのか。両脚をだらりと揺るがたまゝでいた。

「どうしたんだね？」

一人の男がニヤニヤしながら答えた。

「へえ。此奴は金を隠していたんでさあ」

土人は英国の貨幣を所持するのを禁じられていた。

「何だ、それだけの理由か」

「それだけかって。冗談じゃない。充分過ぎる理由で、大尉さん」

「黙れ。無断で私刑をしてはいけない」

「ふん。自分達は、散々、ひでえ事をしておいて、あつし達が、しちゃあ、いけねえてんですかい」

「馬鹿。我々が処刑するのは理由あつての事だ」

「理由なら、あつし達にもありますぜ」

スーダンには戦争を当て込む。たちの悪い人間が、どさくさに紛れて、どつと流れ込んでいた。これら人相の良くない奴等も大方、そうした種類の民間人だったろう。

余り、かかり合いにならない方がよい——ジョンはそう思ったので、

「とにかく、女を放してやりなさい。」そう言い捨てて、急いで立去った。

(6)

ジョンが家に着いた時、未だメリーは帰っていない模様だった。召使のエステラが、美しい笑顔で、いそ／＼と迎えた。部屋に一步入った時、彼は、理由のない、ある種の異常な気配を感じた。

「おい、エステラ」

彼は、じっと召使女の顔を覗き込みながら聞いた。

「何か変った事はなかったかね」

「いゝえ、何んにも、家では何んにも起きませんでした。」

「家ではだと？」

「はい。グレンジャー様のお嬢さんが行方不明になったそうです。」

「何？ グレンジャー中佐殿のお嬢さんが。何時の事だ。」

「つい先刻の事です。御存知ではなかったのですか？」

彼の上官である中佐の娘は此の月十八才になったばかりでキヤサリーンと云った。

「マーヂストの仕業でなければ良いが。」

「さあ……。」

エステラは他人事のような笑い方をした。ジョンは家を飛び出すと、グレンジャー中佐の邸へ駆けつけた。

中佐はジョンを見るなり、たゞきつける様に云った。

「アブドラヒが兵を起したぞ。今日だ。我々の半数が非番なのを狙ったんだ。畜生。今、総督から非常召集がかゝった処だ。」

「お嬢さんは？」

「やられたよ。こうなつて見ると、もう駄目だ。いつもの手さ。明日が恐ろしいよ。」

中佐は悲痛な声で云った。

「まさか。黙つてどこかへ遊びにでも……。」

しかしキヤサリーンはそんな娘ではない。

ジョンは、そう云う自分の言葉が余りにも気休めらしく響いたので、後の言葉につまづいてしまった。マーヂストが蜂起する時は、必ず、前もって白人の婦女子を掠奪して行き、彼等の狂信する神への生贄に供するのであった。

さつと稲妻の様に彼の脳裡にひらめくものがあつた。メリーはどうしたのだ。ジョンは不吉な予感に居たゞまれなくなった。中佐には、すぐ用意をして隊へ直行する旨を伝えると宙を飛んで家へ引き

返した。

メリーは未だ帰っていない。

「エステル。」

うわずった彼の声は震えていた。

「メリーはどうしたのだ。本当に帰って来ないのか。」

先刻、部屋に入った瞬間の不気味な気配がむくくと胸に湧いて来た。

「おい答えてくれ。メリーはマーヂストに掠られたのじゃないのか」「私は知りません。」

平然と答えるとエステラの黒い顔が一寸綻びて微笑んだ。ジョンは馬鹿にされたように感じた。太古に栄えたオリエント文明の血を受継いでいると謂われる彼女の端正な彫の深い顔に新しい支配民族への憎悪が漲っているように見えた。

ジョンは慌てふためいている自分の姿を彼女が冷笑したと思ったのである。従順で、物分かりの良い召使だとばかり信じていただけに、このエステラの態度は、ひどく彼の自尊心を傷つけた。同時に、長い間の疑問が氷解した様な気もした。

そうだ。エステラは憎むべきマーヂストのスパイだったのだ。こゝ数ヶ月の間、頻々として家に置いた筈の軍の書類が紛失した原因をつかんだと思った。ジョンの眼に裏切られた憤怒の炎がめらめらと燃え上った。

エステラはジョンから殺気のようなものを感じてハッと身を引こうとしたが、その時既に、ジョンの逞ましい腕が、彼女の襟首を、むんずとつかんでいた。

「メリーはどうしたのだ?。」

「知りません。」

ジョンは彼女を床に押し倒すと、腰に吊した捕縄を解いて、ぐるぐると縛りつけた。不思議にエステルは少しも抵抗をしなかった。

ジョンは馬の鞭を手にした。

「おい。メリーをどうしたか白状しろ。云わぬなら!。」

ピューンと鞭が空を切って、エステラの目の前を横切って床の上で音を立てた。

「……これだぞ!。」

「知りません。」

エステラは頑くなに首を横に振った。革の鞭が無慈悲に女の背中に巻きついた。

「ヒエーッ。」

女は俯伏せになって身悶える。

「云え。マーヂストめ。」

「マーヂストじやありません。」

「嘘を云え。」

ジョンは、うずくまったエステラの肩に足をかけると力まかせに踏みにじった。肉付きの良い尻を見せて、女体が一転すると、ジョンは得体の知れない胸の高ぶりが身を震わした。

窓には既にアフリカの深い黄昏が訪れていた。そして、薄暗い此の一室では、ジョンのエステラに対する常規を逸した拷問が続けられていた。

縛られた女の上に跨ってジョンは、その柔かな頬に平手打ちを加えた。

「云わぬか。スパイめ。」

エステラは泣いていた。泪にうるんだ瞳が何か云いたげにジョンを見上げていた。

ジョンの胸にはのぼのとした温い血が上ってきた。彼は女から放れると、静かに縄を解いた。

「さあ、云って見ろ」言葉は乱暴だがどこか優しい響きがあった。「申します。メリート様は、マーヂストに掠られました。だが私はマ

「マーヂストの一味でもなく、スパイでもありません。私は無関係なんです。」

途切れ途切れにエステラは片言の英語で、一生懸命なのである。「やっぱりマーヂストが拐ったのか。」

恐ろしい予感の的中に、ジョンはふらふらと椅子に倒れかゝった。

「なぜ早く云わぬのだ。」

女は黙って顔を伏せた。

「どうして云ってくれなかったのだ。」

ジョンは、エステラの肩に手をやって、ゆすぶった。しかし、それには、先刻の様な荒々しさはなく寧ろ哀願する様な切実さがあつた。

「メリー様が、いらっしやってから旦那様は私に見向きもなさいません。今迄は何かと、優しく、あつかって頂いたのに。私はメリー様の美しさが憎らしかったんです。それで、それでマーヂストの奴等が来た時も、黙って見ていたのです。私はメリー様が拐れてゆくのが嬉しかったのかも知れません。私は悪い女です。」

「どうしてだ。どうしてなんだ。」

エステラは、きつと面を上げると真正面からジョンを見た。

「私は、旦那様を一人占めにしたかったのです。」

意外な愛の告白にジョンは愕然とした。暫らくは、混乱した頭の整理がつかかへた。心配そうにエステラが愛する主人の顔を見つめていた。

「エステラ……。」

ジョンが椅子から立上って、エステラを抱き上げた時、外から兵士の声がした。

「大尉殿。早く隊へおいで下さい。皆さんお待ちかねです。」

とりすがるエステラを優しくとどめて、ジョンは外へ出た。昨夜と同じ様に明るい月夜であつた。

(7)

一八九九年十一月二十四日と記録されている。

アブドラヒが再度の挙兵をしたのは。彼が挙兵を決意するに至った重大な原因の一つは、長官キッチナー卿の冷酷な仕打にあつた。オムドルマンの戦以来、殆んど一片の証拠もなく、マーヂストと目される土民達が、拷問にかけられ、虐殺されて行くのを彼は我慢がならなかった。彼から見ればイギリス人は男も女も野蛮極まる殺人狂であつた。

豚のように太った長官の夫人が夫の留守中、マーヂストの笞刑を勝手に変更して所定以上の回数を与え、のみならず笞刑だけで済む者も片端から死刑にしてしまった時には、アブドラヒの血は煮え騰つた。

更にこんな事件もあつた。

キッチナー卿は軍隊を率いて、マーヂスト達からスーダンの親と尊敬されているモハメットの墓を爆破したのである。

アブドラヒの激怒は頂点に達した。そしてマーヂストは一齊に蹴起したのであつた。手始めに彼等は、町に忍び込み、五人の白人女を掠って来た。翌朝。スーダンの刑場に、掠られた女の死体が四つ抛り出されてあつた。キヤサリンの情純な肉体も、あさましい恰好で横たえられていた。衣服を剥がれた全裸の蒼白い肉体には一滴の血も残されていなかった。

マーヂストは生贄の女から生血を搾り取り神に捧げて勝利を祈るならわしであつた。イギリス人達は激怒した。まるで彼等がマーヂストに敢えてした暴虐の数々を奇麗に忘却し去ったかの如くに。

その日の朝、守備隊が出発した後、町中は蜂の巣を衝いた様いきり立った。人々は、行方不明になったメリーについて色々と臆測した。そしてそれらの意見のいずれもが彼女の悲惨な最期と云う点

で一致した。

同胞が殺されて、猛り狂った白人達は、軍隊の不在をいゝ事にし、土人を見つけ次第、無理尽な復讐をした。その日、一日だけで三十人と云う罪のない土民が撲殺された。スミス大尉の出発を見送りに行ったエステラも待ち構えた暴徒の団に見つかった。

「メリーを売ったスパイに違いない。」

一人の男が叫ぶと、男達はエステラに躍りかゝり、手にした棍棒で頭を潰した。

「見せしめだ。磔にしる。」

彼等はエステラの死屍から衣服を剥ぐと、手近にあった丸太を十文字にくゝりつけ、彼女の体を縛りつけた。脳味噌のはみだした無残なエステラの死体は頭を下にした恰好に磔られ、町中を担ぎ廻られた。そして最後には、丸太の十字架を背負わされたまゝ、黄色く濁った川に投げ込まれた。そんな事とは知らぬジョンはメリーの安否を気使いながらも、ウム・デムブライカートで、回教王の軍と対峙していた。

焼ける様なアフリカの太陽が両軍を焦げ附かせていた。

(8)

メリーは回教王の前に引き出された。昨日、刑場から家に帰るなり、四、五人の覆面したマーヂストに襲われて拉致されたのであった。同じ様に連行された四人の女は、その夜、血を搾り取られて絶命した。

思い出しても、ぞっとする様な光景であった。恐ろしい顔をした占師が裸にされて縛られている女達に近づいて行く。手にした奇妙な形のメスを、心臓に突刺すと、溢れ出る血は、メスに附属している管を通して大きなビンに流れ込むのである。肺腑をえぐる悲鳴が次第に細くなるにつれて、女の皮膚から血の気が失せて行く。

がくりと頭を垂れて息絶えると、流れてくる血潮の勢が弱まってポタリ、ポタリと、ビンに落ちてくる。一人が終ったのである。こうして占師は無表情に次から次へと仕事をして行った。

だがメリーだけは、最初から殺す積りがなかったようだ。彼女はなぜ自分だけが助かったのか不思議に思ったが、恐怖と不安は依然として去らずその夜を明かした。翌日。彼女は衣服を改めさせられて、アブドラヒのいるテントに出頭を命じられたのである。遠くで殷々たる砲声が聞えていた。

回教王は黒い髯を一面に生じた風采の立派な男で、年は一寸見当が附かなかった。

メリーの美しさは、こゝでも、アブドラヒを少なからず驚嘆させたりしい。彼はにこやかに笑うと、どこで覚えたのかかなり流暢な英語で喋った。

「神の生贄には余りにも美し過ぎる様だ。それに貴女はスーダンに來たばかりだ。いや驚かれるのは無理もない。我々にはスーダン一円の出来事は何んでも筒抜けなのだ。貴女の刑場での行動もよく知っている。人間なら、そう考えるのが至極当り前だ。」

「いゝえ。そうではありません。昨夜、四人の婦人に対して行った残虐行為は何んです。私の考えも変わりました。悪いのは貴方がただって同じ事でした。両方がよくないのです。」

メリーの澄んだ眼がアブドラヒをじっと見ていた。

「成程。大いにそうかも知れん。だが、やはり良くないのは君達の方だ。我々の土地を奪ったのは一体どんな理由からなのだ。左様、エジプト援助の為だ。だが、そのエジプトも、且つての侵略者であり、依然としてイギリスの傀儡じやないのかね。自分達さえよければ我々はどうなってもいゝとでも云うのか。我々は総ての圧政を排除して独立がほしいのだ。いや、大人気もなく、つい亢奮してしまつたが、貴女を呼んだのもその為なのだ。少々、手荒い招待だった、

がね。我々も徒らに争を好む訳ではない。貴女の父上が、イギリス内閣に及ぼす影響は今でも極めて大きいと思われる。その娘である貴女に我々の真意を判ってもらい、父上を動かしてもらいたいのだ」

メリーは、案に相違したアブドラヒの真面目な申出に驚くと共に、ひどく心を動かされた。今でこそ、政界から隠退しているが、父のハリーは清廉を以て鳴る進歩的な政客であった。

「一度敗れながら、再び、兵を挙げなければならなかった我々の胸中を察してもらいたい。スーダンに來ている連中と來たら、総督、長官を始めとして、どいつもこいつも氣の狂った人殺しばかりなのだ。」

(9)

それからアブドラヒはメリーを相手に、長広舌を振り、イギリス守備隊や民間人の残虐行為を色々な実例を挙げて説明した。いずれも耳を覆わしめる、非人間的な行為であった。テントの外では、イギリス軍の砲声が、段々近くなっていた。

メリーは彼等の力になる事を心に誓った。マーヂストにとって戦局は、思わしくない様であった。独立の意欲と復讐の忿怒をもって死を恐れず闘う勇敢な戦士も、相手が近代的な殺人兵器を備えたイギリス軍では所詮勝味がなかったとも云える。日々に、マーヂストの軍は敗色が濃くなっていた。

メリーは、こゝ二、三日の間に、アブドラヒの頬が、げっそりとこけたのを見た。殆んど睡眠をとらず指揮をしているせいであった。だが彼の期待を裏切って回教王の軍は惨敗した。血に染った死屍が累々とスーダンの砂に転がり、イギリス軍は、怒濤の如くアブドラヒの本陣めがけて殺到した。

冷静な回教王は、自らの敗戦を認めた。最早、彼の前途には輝かしい勝利の希望も、独立の夢も、何もかも失われていた。彼は側に

いたメリーを振り返ると、静かに云った。
「御苦労だったが、もうこれまでだ。さあ早く、貴女は、こゝより脱出してくれ。そして我々の名譽ある戦いを、いつまでも忘れないでくれ。」

彼は、集った部下の各隊長と共に片隅の祈禱絨氈の上に跪いて遙かなる天の神へ、敬虔な最後の祈りを捧げるのであった。

一瞬、あたりが真暗になると轟然たる爆発が起った。英軍の砲弾が、彼等の居るテントを吹き飛ばしたのであった。続いて、雪崩のように、スミス大尉の卒いる尖兵の一隊が、躍り込んで來た。破壊されたテントの中には十数人の死体があつた。その中で、一きわ目立つ大きな体の立派な男がアブドラヒであつた。

その体に、取りすがる様にして一人の女が死んでいた。俯伏になった女の形の良い肢体を見て、兵士達は、歓声を上げた。ジョンは女の回教風の衣服の端から白い素足がのぞいているのを見た。

「待て。」淫乱な野獸のように早やる兵士達を制しながら、女の顔を引き起した。

「メリーだ。メリー、どうして君は。」

(10)

ジョンは未だ温みのある愛しい婚約者の死体をひしと抱きしめた

マーヂストの反乱は終焉した。
キッチナー長官は、彼の植民地行政についての手腕を本国政府から高く評価され、彼の部下達も、それぞれに進級した。

一番乗りの武勲に輝くジョン・スミスも少佐に昇進した。

マーヂストの残党狩りは、以前にも増して組織的に且つ残忍な方法で行われた。活気に溢れたスーダンの町々から黒人が次第に姿を消して行き、新しい白人達が、続々と入り込んで來た。

こうしてアフリカの辺地にも二十世紀が訪れた。ある秋の日。

若い男が、しょんぼりとスーダンを去って行った。
愛する女二人を奪われた心の痛手と、日増しに冷酷さを加えて行くスーダンのあくなき植民地政策に嫌氣のさした退役少佐ジョン・スミスの寂しい後姿であつた。

第一話 夜散る梅

二月も半ば梅の花の香る夜であった。此処は江戸麹町八千石の直参本多伊予之介の屋敷内である。春も間近の鈍い月光が庭の梅の木の影を宿した縁先に投げかけて居る。すると縁側添いの部屋障子が開けられて一人の腰元風の女が、脇差を手に出て来て縁先に腰を下し暫し庭前の梅の花を眺めて居た。此の女こそ誰あろう、藏前界限で遠州屋小町と人々から噂された礼差稼業を営む遠州屋五郎次の一人娘乃武江であった。今彼女の顔に少なかなぬ憂悶の表情が動いて居るのは、これから手に持つ脇差で自らの腹を割き、若い生命を今宵限り絶とうと決心して居るからである。



乙女の腹切抄

鳴竹

成太郎

思えば本多伊予之介が権力を笠に乃武江を腰元にと所望して来た時、出入商人である父の命令にたてつけず無理矢理気の進まぬ奉公に上ったのであったが、果して本多伊予之介は稀代のサディストであったのだ。美人と見れば、どんな策略を廻らしても腰元として召抱え、そして間もなくそれ等の女に些細の難癖をつけあらぬ罪名を被せ拒む女を手取り足取り奥まった一室の梁にくくり上げ、氣の失う迄弓弦の折れで打って打って打ち捲くるのだ。そして喪心の女を寢室に運び込むのだった。

その飽くなき欲情の犠牲は今迄何人ともなく居た事であろうか。そして愈々彼の毒牙は新規召抱えの乃武江の上に襲いかかろうとして

いるのだ。危険な事に敏感な処女の心はすぐと察し逃れ様と努力したが、所詮叶わず此の上は自ら命を絶つ外、操を守る道がない事に気づき、こうして死場所を求めて縁先に出て来たのである。そして死ぬ以上身は例え町人の娘であつても一たん武家屋敷に奉公した身の上であるから武士の娘達に劣らない潔い死に方をしたいと願ひ父から贈られた一口の脇差で切腹を選んだ。乃武江は今、梅の花に思ひを託し、やがて胸高に結んだ帯を解き腰紐を弛め、内側に手を差入れするりと双肌ぬいだ。月の光に照らされた此の乙女の肌は輝き冴え、まことに美しい。

円い女らしい豊かな乳房の上に乗っている乳首は南天の実の如く紅い。そして形の良い可愛い臍は若い女のそれらしく、かすかに息づいて居た。乃武江はすらりと刀を抜くと、それから懷紙にくるんだ刃先を上向きに握り左手を添えてびたりと腹に当てがった。目を閉じ称名一語「南無阿弥陀仏」と言い終るや否や満身の力をこめてグサツと許り臍下深く突き立てた。ぱつと飛び散る血汐が畳を濡らせば氣丈の様でも流石に繊弱い女。口から「うむ」との悲痛な呻き声が洩れる。苦痛に悶える上体を立て直しつつ柄も通れよと更に突っ込む一寸、又一寸段々傷手に堪える顔が蒼白さを越えて行く。亦も一寸一寸弱って行く力を振り絞り乍ら突き込んで行く。流血は

淋漓としてほとばしり更に三度、二寸程突き通し四度目に突込もうとしたが遂に力は失せ黒耀石に似た眸は閉じ、死の痙攣の内に彼女は、がっくり息絶えた。そして静かに前のめりに倒れて行った。

奥座敷の方では、主人の伊予之介の命令が厳しいためか、誰一人此の場所を通らない。此処に身を護る為、自ら命を絶った乙女の死を此の家の人達は未だに誰も知らない。

第二話 嘆きの空港

登場人物

矢代恵子 二十二歳 スチュワーデス

場所

H飛行場附近

時

一九四×年

第一景 飛行場附近の田ん圃道

△矢代恵子（ほっそりとした色白の容姿の美しい娘）が和服で上手より登場、空ではしきりに飛行機の爆音、恵子、道を見つめ乍ら考えに耽る。その目は泪が溢れそうである。▽

恵子「あゝ今日で亡くなられた、時田幸子さんの初七日だ。それなのに私は時田さんの家に行かない。そして亡くなられてからの

御葬式の時にも行かなかった。いえ行かなかったのではない。行けなかったのだ。どの顔下げて、時田さんの家族の方に会えよう。抑々時田さんが亡くなられたのは私の為だ。もし私が死んで居れば、時田さんは相変らず御元気で飛行場の花形だったに違いない。その方が、どれ程私に取って倅せか判らない。今の私は健康でピチピチとして居る。それも時田さんの御蔭かと思うと

（我慢出来ず声を殺して泣く）

あゝ、真実に時田さんを失った現在、何の為に生きる甲斐があるのか。

あの日は午前塔乗して大阪へ赴く任務があったのに何故、高夫さんの東北出張を見送りに行ったのだろう。例え高夫さんが許婚者であろうが、何故きっぱり断らなかったのだろう。何時もの私なら仕事は絶対神聖で冒す事が出来ないと高夫さんを叱る筈なのに。そしてその日、四十度の高熱と仮病を使い塔乗を時田さんと交替してしまったのだ。快活で親切で明朗な時田さんとは女学校時代からの仲だった。私が一年以上の上級生四人に苛められて居た所を救ってくれたのが二年上級の時田さんだった。それから私の仲は全校を通じて評判になり、文字通りの義姉妹振りは大いに生徒達を悩ませたわけ。（吐息）そして此のスチュワーデスの試験を二人一緒に受け、目

出度く合格した時は大喜びだった。それがあの夕暮れ高夫さんと肩を並べて銀座を歩いて居た時、私の代りに塔乗した時田さんの飛行機は、あのS山脈の山中に墜落して居たのだ。時田さんも乗員の人達と共に若い華やかな生涯を散らしてしまった。もう永久にあの人は帰って来ないのね」（すゝり泣き止まず）

（暗転）

第二景 H 飛行場

（朝まだき薄暗い飛行場に矢代恵子がスチュワーデスの服装で今着いた許りの飛行機の直ぐ側に立って居る。乗員は恵子一人を残して去ったので人影は見えない）

恵子「私はどうしても、これ以上生きて行く気になれない。死ぬのだ。時田さんが亡くなられた姿は山腹の尖った岩角に打っかりお腹が裂けて居られたとか。私は時田さんへ罪ほろぼしの意味から自分で自分のお腹を切って死にたい。その為先日買い求めた短刀を旅行中も持って居るのだ」

（やがて彼女は上着を脱ぎスカートのホックをはずし、シユミーズを乳房の上迄たくし上げ上着を手に通さず引かける）

恵子「芝居や本で見た様に、こうやって（と右手に短刀を持ち左手で臍を境に上下に撫

で揉み柔げる。丁度お臍の下に突き刺して真一文字に切れれば死ぬるのね。(静かに冥目し矢庭に臍下深く刃を突き立てる) あーっ(悲痛なる呻き声と共に苦しみもがくさま……そして短刀で刺した箇所を拳を廻して一抉りする。血汐はどくどくと流れ白い腹は真赤に染まり、タイトスカートを朱にする。顔は蒼ざめ、ゆがめ乍ら右へぐーっとは掻き切り廻らす。此の際の彼女は立腹を切ったのである。) うーむ苦しい、苦しいもう駄目、目の前が真暗になって来たわ。(力の無い声) あゝ矢張り時田さんなのね。貴女、私を迎えに来て下さったのね。(ばったり倒れこたえられる)

△幕▽

第三話 娘長兵衛

文政年間の頃のお話です。本郷湯島から上野にかけて一円、人入稼業の元締は柏屋と言ふ男が成って居りましたが、夏の日盛りを歩いたのが体に触ったのか、ポックリと卒中で此の世に去って終いました。それからと言うもの、一人娘のおせいと柏屋二代目と成り男も及ばぬ指揮振りで親父時代の威勢を崩さずにやって参りました。然し好事魔多しとやらの当年十九の女元締にも人並に恋心があったのです。相手は所も名も知らぬ道の往きずりにあつた頗るつきの眉目秀麗の若侍だったのです。だがおせいは此の事を誰にも話さ

ず胸中の賊と闘つて居たのです。そう言った或る日子分の一人が泡くつて飛んで来て「今うちの助九郎兄哥と旗本の神保組らしい侍数人と喧嘩を始めた。」との注進です。「おせい」は急いで現場にかけつけました。子分の助九郎は今や髪はザンバラになって居ります白刃の林の中を恐れ気もなく割って入り仲裁しましたが首領と名乗る神保久太夫なる男、女と侮つて反つて「おせい」の手を握らんとしましたので、その手を執つて一本背負投、久太夫は浅間しく醜態をさらします。「おせい」が、さっさと引き揚げてしまったので一応此の事件は収まりましたが、収まらないのは此の「おせい」の評判にひきかえ、面目丸潰れの神保組です。而し翌日、神保久太夫からおせいにお詫びがしたいからと迎への駕籠が来ましたので柏屋の一家は大騒ぎ。一人泰然たる「おせい」は子分を集め「騒いではないけない、今日は妾一人で行つて、もっと円満に片づけるから」と言い渡し、迎いの駕籠に用意の脇差を持って乗り込み神保邸へ——。久太夫は昨日と打つて変り非常に鄭重に「おせい」を遇し「今暫くの間は膳部の支度が出来るから風呂にでも入つて汗を流しては」と、しきりに進めるので「おせい」は風呂桶に浸りましたが、用心のため脇差を流し場に置いてあります。突然湯殿の扉が開き案の定、神保久太夫を始め神保組の領袖達数名行々しい

姿で抜刀し「おせい」に斬りつけて来ました。その時、駆けつけて来た神保組の味方が居りました。短柄の槍を手に「神保氏何を女一人に手間取つて居られるか拙者一人で討ち取らん」とさつと「おせい」目がけて突いて来ました。おせいは余裕綽々、ひらりと体をかわし、その侍の顔を見て「あつ」と驚きの声を上げました。その侍こそ彼女の秘めた恋人だったからです。「朝倉氏が態々添けない。討ち取つた暁には拙者も貴殿と桔梗の祝言を許そう」と久太夫の言葉です。夢は無残にも破られました。「おせい」はきつと覚悟の色を見せ我れと我腹を矢庭に朝倉という若侍の槍にぶつけました。飛び散る血汐は湯殿を染め「おせい」は呻き声をかみしめ、刺した槍を抜き、第二の槍を突いて来た朝倉の顔を見乍ら「貴方はお伴せね」と言い様、苦しい息の下から総身の力を振り絞り、その槍先を切り落し、返す刀で先刻朝倉の刺した臍下の傷口に突き刺したのです。「年のいかない女でも、私は元締と言われた俠客、さあ神保組、私の死に際を見るが良いや」と更に奥深く刃を突き込み右へ右へと引き廻して行きます。うーむと流石気丈な彼女も苦痛に呻きました。が、添えてあつた左手を充分掻き切つた臍下の創口にズブと差入れ真赤に成つた手で腹中より青黒い腸をつかみ出しました。「うーむ」あまりの痛手に苦しみつゝ精一杯の力で敵久

太夫の面上めがけて投げつけました。そして腹切刀を抜き取り、左の乳房の下に突き立て朝倉の顔を見乍ら満足そうに息絶えて行ったと言うお話であります。

第四話 血染めの花嫁衣裳

筆者云う、これは昨年捕えられ江戸市中引廻の上、獄門の刑に処せられた怪盗「まぼろし」が残せる、その盗賊日記に依ったものである。

(安政二乙卯年七月戯作者花川某)

二月十日 天気悪し

滅法寒い、今日お頭領が来て仕事があるが手伝わないかと言う。そこで俺も此処一ヶ月遊んで暮したから良からうと返事すると仕事の話は相好崩して聞かせてくれた。何でも此の先の陣手町に居る物持の木村長者の伴の処に、これ亦目の寄る所球で馬喰町切つての素封家の二番目娘が俺達の巢喰つて居る此処長須の森を通して興入するんだそうで、後二三日に迫って居るとの事。これを襲えば長者同志の縁組故、軽く見積つても、まあ、二千や三千両の儲けには成るとお頭領は一人有頂天だった。しかし、貧しい身分のため好きな女とも一緒に成れず、こんな泥棒稼業に墜ちた俺は沸き立つ嫉妬を抑える事が出来なかつた。

二月十二日 天気良し

お頭領が留と安を連れて俺の巢に来て、四

人車座に成り、襲撃成功後の利益の配分を決め始めた。めい／＼勝手な熱を吹いて居たが俺はお終いまで黙って居た。お頭領はいぶかつて「まぼろし、お前は」と催促したから俺は一思いに言つてやった。「俺には女をくれ、俺は金持ちの娘に仇を討ちてえんだ。いやさ金持連中への仕返しをしたいんだ」皆は呆れた様な顔をして居たが、結局儲けの少しと女を好きな様にするが良いと言う返事をした。

二月十四日 天気良けれど寒し

花嫁を乗せた駕籠が俺達の目の前過ぎ様として居る。俺は手下二人を引連れて真先に段平を振りかざし行列先きを邪魔し手向いする奴は容赦なく斬り殺した。そして、お頭領や留、安の手下達の仕事のやり良い様に斬つて斬り捲つたんだ。頃合を計つて謀し合わせた場所に來ると、手下の半公と竜が花嫁の乗せた駕籠を、搔つさらつて來て居て両側から刀を駕籠の垂れに当てて居た。「やあ御苦労」「まぼろしの兄哥うるさく泣きやがるんで叶わなかつたよ」と半公が云い乍ら垂れを上げ花嫁姿のお八重と云う娘を引きずり出した。娘は哀願と恨めしさを込めた目をして「帰して」と一言云つた。

俺はそれを聞くと半と竜の居るのまかわず矢庭に女の帯に手を掛けた。と瞬間、娘は猛烈な勢いで俺の手に武者振りつき必死の抵抗を始めやがった。而し、こんな事には慣れ

ている俺に叶う筈がない。やつと俺から離れた時にはもう帯も扱帯も解け、娘は羞恥と恐怖のあまり真ッ蒼に成つて着物の前や裾をかき合はそうとして居る。そう言う所以は、俺の獣じみた心の火に油を注ぐ様なもので、俺は娘の足にまわりついて居る腰巻を剥がそうと近づいたが、その時、娘は俺の腰から刀を引き抜き、いきなり斬りつけて來た。俺も一寸驚いたが半公の脇差を借り、反対にあしらつてやつたら娘は観念の眼を閉じ、俺等三人をじーっと見廻し突然前をだけ手にして居た刀を逆手に自分の腹に突きたてた。はつとして見る俺の顔に娘の血が生あたく飛び散つてきた。そして流れる血は娘の着ている衣裳や、下にずり落ちた腰巻を朱に染めて居る。娘はもう一回臍の下深く突き込んだので腸を切つたらしく「うーむ」と低い美しい呻き声を出した。それから蒼い顔に、たらたらと脂汗を流しつつ下腹深く入った刀を右へ引き廻したので、辺り一面はもう血の海だった。呆然として見つめる俺の目に今度は娘の左手が充分掻き切つた創口に、ぐーつと差入れられたかと思うと。「うーん」と可成り苦しそうな、そして悲しい唸り方をして青黒い自分の腸を引っ張り出し俺目掛けて投げつけた。その時だ、俺の邪惡な心に隙間風の様此の娘に対する恋心が飛んで入ったのは。俺は今迄こんな女を見た事がなかつた。大抵の場合、自分の命惜しさから、俺に身を任したものだ。

(了)

編集だより

○実写写真として送られた日夏高視氏撮影の「生体断」は、実際に鉄路まで出向いて撮影している。この際逆光線気味なのが効果的だ。現在の本誌としては、この写真が真に迫っているだけに口絵として御紹介できないのが残念。

○因にデーターと解説だけを摘記してみると、「生体断」日夏高視撮影、二月中旬、ドリマーレフ絞八、百分の一、ネオパンSS、肌を刺す寒風も、切られるようなレールの冷たさも、もう彼には感じない。生きながら断される歓喜に、彼の五感はずき、断ち割られた腹部からとび出した腸管が脳裡をピヨコンピヨコンと跳り廻っている。附記、風の強い日であったが、モデルはマゾなので、その点の困難はなかったもの、附近には田畑や人家があつて、落着いて撮ることが出来なかった。と、

○同じく実写写真として柳一郎氏の投稿されたもの、第一回は、臀部を狙って背部から撮影されたもの八葉。その説明によると、私は前々より写真が好きだったし、一

度ヌードを撮りたいと思っていたが、奇ク三十年四月特大号所載の狩井麗作氏の「アブ・ホート一年生」を読んで更に拍車をかけられ今迄都内のスタジオに十数回通つて写真のネガの数にして百枚以上撮した中で臀部を写したものが半数以上に上る。その故か、一人のモデルに後ろから撮るのがお好きねと云われてどきりとしたことがある。(私は臀部に対して興味を持つので自分ポーズが臀部中心となる。)こゝに拙作八枚を御紹介しようと思うが、なにせ「アブ・ホート幼稚園」であるばかりか、写すものゝ性質で自分で暗室装作までやる為、不手際なものばかりで見苦しき点は御了諒下さい。

○こゝで八枚の写真の説明、データー等があるのだが、写真と共に省略しなければならぬのは至極残念である。

○柳一郎氏の第二回目に投稿されたものは、「ストッキングとパンティ」と題して三枚。これは第一回の八枚に比較して写真的にいても問題なく卓絶している、二枚は全裸で椅子に腰掛けてストッキングを穿いているポーズ、他の一枚は横坐りになってスカートをめくってパンティを見せているところ。いずれもモデルは美しいしラ

今月の新版写真集

薄手光沢印画紙使用

(九センチ×十三センチ)

女体緊縛フोट

三枚一組 二〇〇円
五枚一組 三〇〇円

今月は新人の新しいフोटの紹介を致します。何れも初々しい恥らいを見せた新鮮なものばかり、皆さまのコレクションのアルバムの上に更に錦上花を添えて下さるようお申込みをお待ちします。

DS1 観念横臥の図

花坂道子嬢 三枚一組

後手、高手小手に首縄と身動きならず嚴重に縛しめられた美貌の道子嬢が眉をひそめて観念したところ。蒲団の上のところがされてポニー・テイルの黒髪が芳紀十九才の頬にかゝったところは、正に落花紛々の風情たっぷり。

DS2 乙女の開陳

花坂道子嬢 五枚一組

DS1と同じく、これも後手、高手小手の首縄、遠路はるばる縛りモデルを志願してきたお嬢さんだけあって、ひし／＼と肌に喰い込む縄目にも、じつと奥歯をかみしめてこらえながら、懸命に前、後、横、とさまざまなポーズをとって、花咲き初むる十九の乙女の緊縛姿態を余すところなく開陳したコレクション向きのフोट。

DS3 失ったバタフライ

須川令子嬢 三枚一組

あれあれ、今まであったバタフライはどこへ行ったやら、一糸まとわぬ裸身に、綿ロープが、がっかりと後手に吊り上げている。今度も、拾うこともつけないことも出来ないバタフライは、令子嬢をあざけるように足下に落ちてくではないか。

DS4 寝乱れ姿

須川令子嬢 五枚一組

定評のある悦唐須川令子嬢が、髪ふり乱してその艶姿をほしきまゝに縄の蹂躪にまかした寢室に於ける緊縛プレイ。息もたえだえの

イテングも貸スタジオを利用されたと云われるだけあって巧妙である。

○解説。私は女体の臀部の次にストッキングに包まれた脚と女の下穿に興味を持っています。ストッキングといってもナイロンのなるべく薄いものでふくらはぎにはつきりと縫目の入っているものでなくては駄目で、ぼて／＼としたような木綿のストッキングは嫌いである。しかし十月号の読者通信で狩井氏が云われている様に膝迄のストッキングでは気分をこわすというようなことはなく、私にとつてはストッキングの長短は問題でない。写真のAは膝迄のストッキングであり、Bは腿迄のものである。Aのモデルは二四、五才で見してモデル馴れのした女で気軽にこの様なポーズをとってくれたのである。この時初めてヌードを写した私はこの大胆なポーズに圧倒されたものである。Bは大分ヌードにも馴れた頃写したもので、これは私が靴の配置から片方の靴下止めの落ちてゐる位置まで考えて写したもので、このモデルは均勢もとれ美人であった。下穿は第一にパンティであり、次にズロースである。私は前からヌードの写

真より下穿が少し見えた写真を撮りたかったのであるが、モデルに向つてパンティを穿いた所を撮るからと云うことが口から中々出ず腕を拱いていたのだが、最近行つたヌード・スタジオで思いきつてモデルにパンティを……と云つたところ、あつてなく承諾されてこの様な写真を撮る事が出来たのである。後で判つた事だが、このスタジオはよくアメリカの兵隊が来るので、あちらさんが好むので用意してあるとの事だった。この時パンティを脱ぐところも一枚とつたのだが、ブレてしまった。これからはこの様な下穿をはかせた写真をとりたいと思うが、この様な事はモデルによつては中々云い出し難いものである。

○実写真、昭和三十年九月二十三日の朝日新聞紙上に四席入選として発表された写真、題して「縛りごっこ」とでもいうべきもの。○この写真は近所の子供が縛り合っているのを写したもので、私もこの子供ぐらゐの時によくこんな遊びをやりました。(但し男の子)という但し書きがあつて、写真には二階の物干台で小学生らしい四人の子供が縛り遊びをしているところをスナップしたもの。

猿ぐつわの下、眼だけが哀願にもだえる。五枚の中、いずれの一枚をとつても間然するところのない力のこもった作品。

DS5 素足まるだし

佐賀美智子嬢 五枚一組

前集、CS5の素足の色気満点に引続き、又、場面、雰囲気を変えて魅力的な佐賀嬢の素足をあらゆる角度から追求した緊縛フォトの魅力版。唇に含んで噛んでみたりのような真白な指先が、縄目の痛さに悶えて反りかえつて媚をふんだんにふりまく表情は、フットマニアでなくとも必ずひかれることでしょう。

DS6 首縄万華

佐賀美智子嬢 三枚一組

首縄を掛けられたときの苦しさは、これをやられた者でなければわからないという。然し、又首縄の醍醐味は、これをやられて初めてわかるという。これは或る典型的なマゾ女性の告白であるが、佐賀嬢のすらりと伸びた八等身の裸身にきびしく掛つた胸の縄、そして首輪を後手の縄から締めつける二本の縄。手首を下げんとすれば首が締まるし、首の縄目をゆるめ

んとすれば、手首はどうしても高々と上げていなければならない。

DS7 浴室股間縛

中塚文子嬢 三枚一組

新人中塚嬢が、AS6(強烈股間緊縛)CS6(排泄の強要)の二集に引続いて第三回目にマニアの方々に問う傑作、彼女の作品はその大胆さと強烈さのために、どの皆さまからも好評を以て迎えられると思いますが、今回の作品も十数枚の中から特に選んだもので必ず御期待にそうものと思ひます。

CS8 素足素顔三態

須川令子嬢 三枚一組

この三枚は縛りではありません。須川さんの平服であるセータイにスカート姿で、郊外ヘドライヴした折、特に頼んでハイヒールとストッキングをとって貰つて素足に狙いをつけて撮影したもので勿論素顔のものです。若し御希望の方があればと思つて集の中へ加えてみました。

◆御注文は符号を書いて下さっただけで結構です。

◆万一品切がありました節の第二の希望品をお書き添え下されば好都合です。

限定版 各種 特集号

〔発行予告〕
〔経過報告〕

読者の皆様の中には、印刷による写真集や画帖の発行、或は口絵挿絵等を豊富にしてほしいという御意向が相当見受けられますので今回はそういった方々の要望を満たすため、従前発行しましたアルバムや画帖とは形を変え、解説や説明等も絵や写真と同じ程度に入れた、写真、絵画、図譜集を企画、目下進行中でありまゝです。こゝにその発行予告と進行状況をお知らせ致します。現在のところ左記の三種目に限っていますが、皆さまの要望によっては、他の種目にも及ぼしたいと考えております。

特集号の性質上、内容は絵画、写真が主になりますので、一切書店販売は致しません故本誌上に完成したとの広告をごらんになった上でお申込み下さるようお願いいたします。申込者数は今迄の経験上多くはないと考えますので発行部数は極く少くして限定版発行といたしますが、コレクションとして保存するに足る体裁のよいものにするつもりです。

一、限定版 サディズム特集号

五百部限定版 頒価 一部 壱千円

形式、A5版、総頁両面特アート紙使用、頁数未定

内容、サディズムに関する外国の写真、絵画、絵物語其の他参考資料の紹介、並に女体責めに関する新作フォト、全モデル嬢の素顔と緊縛写真の対照、分譲フォトの縮刷版。絵物語、本誌悦虐画家の筆になる責画、緊縛デッサン集、女体責アイデア集、読者投稿の緊縛フォト、本誌既載の小説、告白等の絵画化、等々すべて図画を豊富に各頁に配し、解説、説明、物語等を附して出来るだけ豪華絢爛たるサディズム絵巻を完成する。

一、限定版 マゾヒズム特集号

最新版女体緊縛フォト

光沢印画紙焼付
本誌写真部特写

本誌、復刊後、キャビネ版と評して誌上に初めて発表して大好評を得た、縛られた女体の特写真が縦横無尽に活躍しているマルニア垂涎の傑作揃い、絶版にならぬうち、お早くお求め下さるようお待ちいたします。

○高瀬忍嬢

悦虐ポーズ代表選
キャビネ版 三枚一組 三百円

○美少女緊縛

(中富綾子嬢)
キャビネ版 二枚一組 二百円

○藤田節子嬢

「落花狼藉」キャビネ版
第一集 三枚一組 三百円
第二集 三枚一組 三百円

○古川裕子好み縛り

(萩千恵子嬢)
第一集 第二集
キャビネ版 三枚一組 各三百円

○加賀利江子嬢

第一回縛り集
第二回縛り集
キャビネ版 三枚一組 各三百円

○加賀利江子嬢

悦虐ポーズ集
キャビネ版 三枚一組 三百円

○厚狭春江嬢

股間しばり三態
キャビネ版 三枚一組 三百円

○デニムのズボン縛り

(加賀利江子嬢)
キャビネ版 三枚一組 三百円

○須川令子嬢

股間しばり三態
キャビネ版 三枚一組 三百円

○萩千恵子嬢

新版腰巻しばり
キャビネ版 三枚一組 三百円

○灸点地獄

(施術者 春日ルミ嬢)
(被術者 伊吹真佐子嬢)
キャビネ版 三枚一組 三百円

○悦虐モデル

緊縛六人集
キャビネ版 六枚一組 五百円

○ジャジャ馬馴し

(中富綾子、村田那美子)
キャビネ版 三枚一組 三百円

○逆さ吊り

(伊吹真佐子嬢)
キャビネ版 三枚一組 三百円

○萩千恵子嬢

新版股間しばり
キャビネ版 三枚一組 三百円

二百部限定版 頒価 一部 壹千円

形式、A5版、総頁両面特アート紙使用、頁数は未定。
内容、マゾヒズムに関する外国の写真物語絵画、その他外国文献資料の紹介並にサシスチンによる男性責めの新作絵画の紹介、男性緊縛フォト、本誌既載の小説をテーマとした絵画の発表。春日ルミ嬢構成のマゾ・フォトの紹介。

一、限定版 女体切腹特集号

壹百部限定版 頒価 一部 壹千円

形式、A5版、総頁、両面特アート紙使用頁数未定。
内容、中康弘通氏の「女腹切腹図譜構成案」を骨子として作成せる女体切腹図並に若侍切腹図、本誌掲載の文章中よりテーマを選んだ切腹図の紹介、新作女体切腹フォトの紹介、原桐咲代氏の切腹図或は切腹フォト、読者投稿切腹フォトの紹介。

◆企画の進行状況並に申込方法

◎只今、三者併行して進行させておりますが只今のところ、「切腹特集号」が最も早く、次に「サディズム特集号」最後に「マゾヒズム特集号」が完成する順序になっています。何れにしても完成次第詳細を本誌に発表いたしますから誌上にてご覧下さるようお願いいたします
◎「女体切腹特集号」は頒価一千円です。画帖が五百円だったので誤解されていられる方もありますが、五百円ではありません。
◎本誌に発表の予定は、八月号誌上頃からになると思いますが、誌上完成の広告を出してから御申込み下さい。予約を申込みれる方がありますが、予約募集ではありませんから申込みないで下さい。
◎表紙、本文共全部アート紙を使用しますので相当重くなると思いますが、送料は追って完成広告のときに発表します。
◎頁数は未定ですが、限定部数に依りて出来るだけ豊富に資料を収容登載出来るよう工夫致します。
◎最後の頁に限定番号を押捺の上、申込順に御送付申し上げますが売切後は直ち送金料当方負担にし御返金致します。

○坂口利子嬢

悦虐全裸緊縛集

キヤビネ版 三枚一組 三百円

○萩千恵子嬢曲芸縛り

手札 型 三枚一組 二百円

○強烈縛り五人選集

キヤビネ版 五枚一組 五百円

○須川令子嬢

立木縛り野外晒し

キヤビネ版 三枚一組 三百円

○女体いじめ四態

春日、伊吹、二嬢コンビ

キヤビネ版 四枚一組 四百円

○猥らな縛り

(須川令子嬢)

キヤビネ版 四枚一組 四百円

○肉体美緊縛三態

(伊吹真佐子嬢)

キヤビネ版 三枚一組 三百円

○女体品定め

キヤビネ版 三枚一組 三百円

○ローソク責め

(春日、伊吹、二嬢)

キヤビネ版 三枚一組 三百円

○女学生凌辱連続写真

キヤビネ版 六枚一組 五百円

○須川令子嬢

高手小手五態

キヤビネ版 五枚一組 四百円

○川辺砂登子嬢

メンズバンド着用

キヤビネ版 二枚一組 三百円

○衆人環視の緊縛

(萩千恵子嬢)

キヤビネ版 三枚一組 三百円

○修学旅行の出来事

(須川令子嬢)

キヤビネ版 二枚一組 二百円

○お寝み前の五分間

キヤビネ版 三枚一組 三百円

○晒責め三態 (伊吹嬢)

キヤビネ版 三枚一組 三百円

○佐賀美智子嬢

女事務員の縛り

キヤビネ版 三枚一組 三百円

○凌辱魔侵入 (シリーズ)

キヤビネ版 十二枚一組 千円

○旦那の二号責め

キヤビネ版 十枚一組 八百円

○落したスロース

(佐賀美智子嬢)

キヤビネ版 五枚一組 五百円

奇譚クラブ旧号総目次
昭和三十年

〇五月特大号

【百四十円】

白面鬼	竹谷十三
続々、女性切腹断想	田谷敬三
見世物とサディズム	土屋淑人
たのしむべしアブセックス	藤見郁
アブ追求三十年の回顧	山田正実
さいたふう	吾妻新
女サディストの手記	長瀬利昭
悪癖	榎本和子
責の回想	依田精二
奈落の欲望	沢村和雄
緊縛モデルの素顔	辻村隆
「呪い塚」縁起	野村当魔
「死を憶ゆる男」	青葉慎一
我が倒錯の系譜	山本和彦
輝美私感	山本和彦
縛り絵について	鳴海文雄
明治十年の新聞覚え書	吾妻新
幽囚十ヶ月	春田一郎
性への一考察	二俣志津子
おしめカパー	みずしままもる
アブ・ホート談義	狩野麗子
孤独の広場	牧妻啓一
或る少年のモノローク	牧妻啓一
〇三月特大号	【百四十円】
倒錯研究の新展開について	成瀬川合伊都子
SAPPORO日本版	川合伊都子
ボクの責め方	宝塚三三夫
大津事件とその後日譚(一)	須藤三三夫
夜光島(六)	吾妻新
「奇抜写真」寒夜の庭の橋	大庭高視
残酷なる女性達	森本愛造
私のイメージ「手術室」	竹谷十三
「潮来波」	白金紅次
飲義先生医学相談欄 回答者	白金紅次
血染の毛綱	伊藤晴雨

天狗鼻由来記	緑比古
汗について	みずしままもる
「トウキョウの一夜」	R・G・S
マゾへの胎動	三根耕二
絵物語「百合子の冒険」	村崎明
編者への手紙	或る読者
アブ追求三十年の回顧	山田正実
懸賞入選第三席「陰の花」	片矢文雄
あるマゾヒストの手帖から	沼田正三
奇妙な便り	読者通信の囀
腰巻専門の窃盗男捕縛	春木俊野
緊縛モデルの素顔	辻村隆
「マゾヒストの手帖」速報欄	白石正三
最近の映画落穂	鈴木千稔
「我が愛の記」について	津島比呂史
「ヴィナスの重石」	中津四郎
女性願望の青年の手紙	二俣志津子
Mへの手紙「第一信」	菅原春夫
「残酷なる女性達」画集解説	菅原春夫
編者への公開状	喜多島佳月
わが半生の記	依田精二
幽囚十ヶ月	春田一郎
責の回想	依田精二
「倒錯の英雄」織田信長	笠置俊郎
縛り絵を描いて	鳴山能平
流腸マニヤの日記	花村恵美子
巨根崇拜	森田太一
自腹を切る	小田原渡
私の体験記	長瀬利昭
寄宿舎での体験	緑川純子
導尿される令嬢	田村仁一
〇二月特大号	【百四十円】
倒錯趣味は果して背徳か	成瀬川合伊都子
「姑娘来」	白金紅次
炎魔雑記	長谷川幸一
草双紙合巻に現れた女腹切	山口生

血染の毛綱(二)	伊藤晴雨
お灸通信	岩瀬祥一
絵物語「百合子の冒険」	村崎明
狼らな虫	辻村隆
残酷なる女性達	森本愛造
流腸の往復文書	花村恵美子
山田の少年忠告録	二木良雄
裸にされた美人通訳	伊藤晴雨
非小説性液	山本晴
レスボスとソドミアへの福音	伊藤晴雨
幽囚十ヶ月	春田一郎
少年の体臭	森田太一
倒錯の英雄、織田信長	笠置俊郎
「編者への公開状」	笠置俊郎
大津事件とその後日譚(二)	吉次郎
少年の割腹自殺	小竹紀夫
あるマゾヒストの手帖から	津島比呂史
嫉妬する少年たち	三根耕二
自分後手に縛る方法	伏見耕三
A感覚の秘密	羽村京江
サシステイックなシーンに就て	柳一
最近の映画から	白石正三
無毛狂	末森近
弱者劣者にサシズムを感じる	白木近
夜光島(五)	吾妻新
私のイメージ「お臍と乳房」	狩野麗子
「写真」お臍と乳房	狩野麗子
ボクの責め方	宝塚三三夫
映画に現れた切腹シーン	井上雄
強盗に入られた時の事	中野妙子
「乳棒と月経帯」	古田三郎
「露出願望の少女の告白」	花村恵美子
特異マゾの告白	大庭高視
露出願望の少女の告白	柴崎通子
私の見た三人の腰巻女	東明子
〇新年特大号	【百四十円】
破壊本能の文化的理由	林弓志雄
非小説性液	伊藤晴雨
「腹部に依る悦虐」	兵頭庫一

畸型の愛着	津久井
残酷なる女性達	森本愛造
A感覚の秘密	羽村京江
「遺稿」悪の広場	角洋子
お灸通信	岩瀬祥一
人工女性会見記	三根耕二
ソドミアの祭壇	川合伊都子
草双紙に見る女腹切	井上雄
縛られた女優	沼田正三
あるマゾヒストの手帖から	津島比呂史
緊縛に関する十二章	村崎明
絵物語「百合子の冒険」	村崎明
告白文、体験談の書き方	村崎明
幽囚十ヶ月	春田一郎
切腹願望と臍いじめ	笠置俊郎
倒錯の英雄、織田信長	津島比呂史
男性切腹同性愛者より	三根耕二
挿絵と心中し度い	白石正三
春日ルミに関する十二章	白石正三
女蘭美考現	土俣四郎
「あるマゾヒストの手帖」旧号総目次	土俣四郎
絵物語「芸者、春駒」	依田精二
現代マゾヒズム芸術時評	菅原春夫
日本「残酷なる女性達」	菅原春夫
丁稚小僧幻想	森本愛造
夜光島(四)	吾妻新
飲義先生性愛相談欄 回答者	白金紅次
血染の毛綱	伊藤晴雨
「残酷なる女性達」画集解説	菅原春夫
女灸点師	長谷川幸一
細と足の遍歴	幾谷川
縛り絵マニヤの記録	青葉慎一
「色慾のペーシ」	廣保
「男色秘話」集める人々	菅原春夫
「夫婦の倒錯遊戯」	菅原春夫
動物嗜好者の手記	山田正実
号泣(私の腋窩遍歴)	佐次

○十二月特大号
【百四十円】

モデル女のまぞひずむ……………辻村
 長靴愛好癖に就いて……………天泥
 コレクション……………佐次
 女性の腕狂崇について……………森
 愛と憎しみの彷徨……………三根
 体操教師……………青葉
 中国女性のサデイズム……………一丸
 浣腸通信に寄せて……………羽村
 耳かきとガラスの棒……………角
 私のマゾヒズム断片……………河真田子路

〇九月号
 〔MECI〕

私は訴える……………吾妻
 現代文芸に現れた責め……………村田
 デパート人形……………白金
 燃殺願望……………青葉
 赤札囚(続・半公刑)……………篠原
 残虐なる女性達……………森本愛造
 私という女……………春日
 身を灼く女……………松井
 あるマゾヒストの手帳から……………沼井
 自刃(日本軍の切腹)……………大島
 現代マゾヒズム芸術時評……………原
 随筆 奇ク随想……………須藤
 美少年の秘密(三)……………山口
 被虐哀欲……………真金鍛次郎
 感情教育(最終回)……………吾妻
 読者通信から見たアブ種々相……………才
 サジズムの女性……………川合伊都子
 草双紙に見る女腹切……………伊藤
 非小説 性液……………狩井
 女体美と特に臀部に就て……………中康
 切腹研究夜話(六)……………九鬼
 野外縛りの記録(責め撮影行)……………辻村
 車中汚辱(満洲敗戦の体験)……………幹
 雄花の微笑(我れ囲われ記)……………岸本
 女装して責めの実験……………佐次
 ゆみおんな(弓女)……………王子
 アクロバットの憧れる……………柴崎
 露山願望の少女の告白……………岡田
 アブノーマル・ドリーム……………角
 嫉妬の操り責め……………皓子

天星社代理部特選写真集 (実費分譲)

緊縛女体の
フォト

□高級光沢印画紙使用 大きさ

(タテ 九 横 十三)

二枚一組 一五〇円 五枚一組 三〇〇円
三枚一組 二〇〇円 六枚一組 三三〇円
四枚一組 二五〇円 十二枚一組 六〇〇円

AS1 タンス責め

(伊吹嬢) 三枚一組

AS2 浴室の緊縛プレイ

(須川嬢) 二枚一組

AS3 柔肌の弄戯

(村田嬢) 二枚一組

AS4 アクロ緊縛

(萩嬢) 六枚一組

AS5 トイレ五態

(須川嬢) 五枚一組

AS6 強烈股間緊縛

(中塚嬢) 六枚一組

AS7 セーラー服哀歓

(須川嬢) 三枚一組

AS8 奇抜な縛り

(伊吹嬢) 二枚一組

AS9 蒲団責め

(須川嬢) 五枚一組

AS10 新股間縛り

(伊吹嬢) 三枚一組

AS11 女体嗜虐譜

(春日伊吹) 五枚一組

AS12 裸に縛るまで

(菅嬢) 四枚一組

AS13 胴絞めしぼり

(伊吹嬢) 二枚一組

AS14 後手縛三態

(佐賀嬢) 三枚一組

AS15 股間しぼり五態

(須川嬢) 五枚一組

AS16 馬乗り姫シリーズ

六枚一組

AS17 禪美女体

(須川嬢) 二枚一組

AS18 股間緊縛四態

(萩嬢) 四枚一組

AS19 羞恥責め

(中富嬢) 二枚一組

AS20 見ちや嫌

(伊吹嬢) 三枚一組

CS1 美しき惨虐物語

ヤンチャ娘…春日ルミ嬢

内気な娘…伊吹真佐子嬢

(シリーズ) 十二枚一組

CS2 裸身の嬌羞

須川令子嬢 三枚一組

CS3 セーラー服の見世物

雪井久子嬢 六枚一組

CS4 豊満への攻撃

伊吹真佐子嬢 三枚一組

CS5 素足の色気満点

佐賀美智子嬢 三枚一組

CS6 排泄の強要

中塚文子嬢 四枚一組

(この分は特に三百円)

CS7 悪鬼の仕打ち

杉 美美嬢 二枚一組

(この分は特に二百円)

CS8 ガンジガラメ吊り

萩千恵子嬢 二枚一組

CS9 芋虫コロコロ

厚狭春江嬢 二枚一組

CS10 パイプ責め

菅登紀子嬢 四枚一組

CS11 女悪魔の暴力

女悪魔…春日ルミ嬢

いけにえ…伊吹真佐子嬢

シリーズ 五枚一組

CS12 女の禪美

伊吹真佐子嬢 二枚一組

CS13 雨の夜のプレイ

萩千恵子嬢 三枚一組

CS14 ショー出演

萩千恵子嬢 三枚一組

CS15 女体の荷造り

二枚一組

女荷造人…春日ルミ嬢

女体の荷物…伊吹真佐子嬢

CS16 四モデル特選集

萩嬢、高瀬嬢

杉嬢、伊吹嬢 四枚一組

アブフオト集

◎得難い稀少な

二十五集◎

各組 一枚 八〇〇円
 十組 十枚 七五〇円
 二十五組 二十五枚 一八〇〇円
 (以上全部送料共)

B S 1	覗れた下着 (加賀嬢)
B S 2	股間しばり (坂口嬢)
B S 3	クリツプ責め (川辺嬢)
B S 4	擦り責め (中富嬢)
B S 5	狙上の魚 (須川嬢)
B S 6	大の字縛り (浅野嬢)
B S 7	みずすばれ (杉嬢)
B S 8	くさり責め (高瀬嬢)
B S 9	折檻 (雲井嬢)
B S 10	梯子責め (伊吹嬢)
B S 11	ハリツケ (萩嬢)
B S 12	月経帯縛り (村田嬢)
B S 13	手錠くさり (伊吹嬢)
B S 14	人身御供 (高瀬嬢)
B S 15	落した下着 (萩嬢)
B S 16	下半身裸出 (村田嬢)
B S 17	鼻責め縛り (川辺嬢)
B S 18	高手小手 (加賀嬢)

新マゾ風景十態

一組 一枚 一〇〇円
 十組 十枚 九〇〇円

M 1	ワン公水をやろうか
M 2	なぶりもの
M 3	ベッドの上で可愛がる
M 4	押え込み
M 5	足舐め大写し
M 6	お化粧台
M 7	ハイヒールの下にて
M 8	足の裏に屈服する
M 9	頭を殴る
M 10	お小言頂戴
M 11	男性緊縛フオト
M 12	晒し者三態
M 13	男性股間しばり 三枚 三〇〇円 一枚 一〇〇円

女体切腹写真

B S 19	乳房責め (川辺嬢)
B S 20	首 縄 (川端嬢)
B S 21	後手しばり (藤田嬢)
B S 22	竹棒責め (伊吹嬢)
B S 23	蛙潰し責め (雲井嬢)
B S 24	改つた表情 (佐賀嬢)
B S 25	森の中の凌辱 (村田嬢)

女性浣腸写真

かか〇女学生の浣腸
 キヤビネ版 四枚一組 五百円

K 1 エネマシリンジ
 マゾフオト
 四枚一組 三百円

とし〇奴隷使役
 キヤビネ版 三枚一組 三百円

しし〇女王様の尻の下
 キヤビネ版 三枚一組 三百円

しせ〇自害悦虐女体切腹
 キヤビネ版 三枚一組 三百円

かせ〇女学生の切腹姿態
 キヤビネ版 五枚一組 五百円

まん〇切腹曼陀羅図
 キヤビネ版 五枚一組 五百円

たち〇女性切腹「立腹」
 手札型 二枚一組 百五十円

さん〇女学生散華
 キヤビネ版 七枚一組 七百円

H 1 女体割腹譜
 二枚一組 二百円

なむ〇長靴着用の女性か
 ら鞭で仕込まれる

とき〇奴隷教育
 キヤビネ版 三枚一組 三百円

しお〇乗馬靴乗馬服の男
 から責められる男

おこ〇男性縛り禪美縛体
 キヤビネ版 三枚一組 三百円

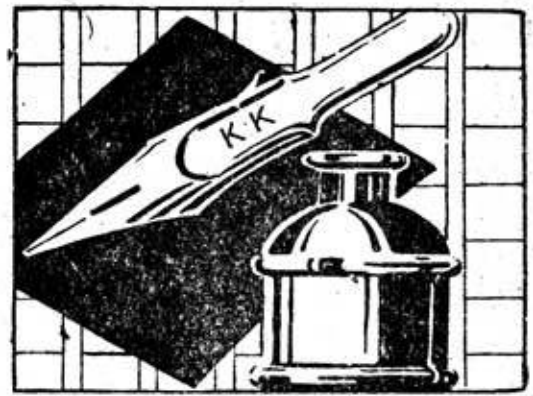
おき〇男性緊縛二態
 キヤビネ版 二枚一組 三百円

なお〇鞭られる男
 キヤビネ版 三枚一組 三百円

へん〇鞭 撻
 キヤビネ版 二枚一組 三百円

◎御注文の栞◎

◎御注文は符号だけで品物を御指定下さって結構です。
 ◎総べて通信にてお申込み下さるようお願いいたします。直接の御訪問はお断りいたします。
 ◎御送金は振込の振替用紙を御利用下されば無料で最も安全に到着します。但し普通郵便に二、三日遅れます。上から受領証を注文書と封のからお送り致します。早送品物をお送り致します。



【読者通信】

小生三年前より貴誌を愛読している者です。昨年より一時休刊されていた貴誌の復刊された事を最近知り数多くの同好者と共に喜んで居ります。小生貴誌宛に自分の体験なり創作なりを投稿致す所存で居りました処、思わぬ休刊となりその機会を遁しましたがこの復刊に接し近々一度投稿致したく思つて居ります。その節はよろしく御願ひ致します。小生凡そアブ的な事であれば何んでもござれ、サドでもマゾでもフェチでも総ての素質をもっている者です。もしこのような小生に関心を持たれる女性性が居られたならば、貴誌を通じて交通並びに御交際願いたくこの段貴誌にも御尽力下されます様ぜひ御願ひします。(東京失念生)

○ 僕は二十七才の惱めるマゾ青年です。積極的なサディズム趣味の御婦人の方、年令を問わず御文通賜りたく存じます。(都内渋谷区上通二ノ六六牧岡方 山口文吾)

○ 私は当年三十三才の会社員で長年奇クの愛読者であるサジストです。同好の方々と文通、写真の交換等をしたいと存じます。御便り下さる様御待ちしております。(小田原市二ノ三九〇山崎啓介)

○ 愛読者諸君、僕は東京の或る会社勤務する青年です。曲線と美と肉体酷使の極致であるアクロバットダンスの賛美者です。アクロバットダンス愛好の諸兄諸嬢御親書を下さい。鶴首して待ちます。(神奈川県川崎市中原郵便局私書函十三号)

○ 六月号の誌上で最も印象に残ったのは、やはり森山美歌女王様の飼犬へ与えるお手紙でございました。その飾り気のない生のままの力強い表現は、さすが我々マゾ男性の血をわかすもので感激の極みでした。今後毎号こんなものを連載して下さい。私も中年のマゾ

で身長五尺三寸、体重十七貫、社会的地位も経済的余裕も若干あるものでございますが、出来ますならば、森山女王様から犬としての御言葉頂けたらと念願致しまして茲にこの通信を致す次第でございます。何卒女王様御多忙でございませうが、特別のお情けをもちまして一匹の牡犬に御慈悲を垂れ給わらんことを足下にひれ伏して恐懼頓首して御願ひ致します。(東京中央郵便局私書函一三九一番)

○ 復刊以来の奇クで一番先に読むのは「責の小説」次に辻村氏の「話の屑籠」「玉稿落穂集」です。今後是非続けて下さい。さて多数の愛読者の

皆様もいつて居られる様に吾妻新先生訳「ジュースチーヌ」伊藤晴雨先生「血染の血綱」出来れば何とかして一日でも早く誌上に発表して下さい。今後共読者の意見を取り入れてますます立派な奇クを発行されるよう祈ります。(大阪、F・A生)

○読者通信をお寄せ下さい

読者通信欄は孤独に悩む方々のこよなき慰めの場として、広く同好の士のため誌面を開放しております。本名其の他の秘密は固く守ります。まずから、御安心の上、御遠慮なく、ドシドシとお寄せ下さい。

○ 所謂エログロ雑誌が一般書店から追放せられ随分時が経ちますが小生愚考するに、その原因は何と云つても口絵や挿絵に於ける残虐図にあると思われれます。(肉体露出等を含めて)、五月号の編集後記に於てKM生氏も申されておる様に一般書店に飾つても指弾されないものの発行には何と云つても此の点が制約されるのではないかと思ふのですが、その点貴誌も表紙、口絵等、右の条件に副う様編集されつつあると思われれます。種々難点もおありでしょうが、一日も早く書店で安心して買える雑誌として育つて参ります様、貴誌の成長を祈ります。小生、地方の三文作家として現在、貴誌の原稿募集に応じたく制作中です。文献研究誌に期待して。(一読者)

○ 永らく再会の機会がなかった二人の中年の女性が、街路の並木の下で偶然ばったりと出逢つた。エプロン姿に買物籠を提げたマダム風の女性が、黒いヒールに洋装の

女性に、最近、女中が国へ帰って困ってしまったわ、今日もこれから市場へ買い物に行くところなのよ。とこぼしている。すると、洋装のよく似合う女性は、軽い笑い唇から、これはちよつと秘密なのだけど、私今男の家政婦を雇っていますのよ。年中無休で、それに給料なしなの。と、誇らしげに話す。マダム風の女性は不可解ながら自分もそんな家政婦なら、今からでも雇ってみたいなアと思つて精しく聞いてみようと考えてる。

妻のない三十男の私は、時々こんなイメージを描いて自分を男の家政婦の立場に置いてみます。世のクイン様、願わくばこの哀れな私に玉音の一語なりともお掛け下さい。(大阪市西淀川区姫島町四九一南部政雄方 横道生)

遅ればせながら復刊お慶び申します。実は全く知らずにおりました所、昨夜はからずも古本屋の店頭で御誌を見つけバックナンバーとばかり求めて求めましたが、これが復刊第三号と知って驚喜した次第です。先ず一見して厳しい制約の下で内容を充実しようとする編集氏の御苦心が見えて心強いかがりです。記事を見ますと多くの

読者から不満が出ているとの事ですが、K・M生氏が編集後記に書いておられる様に続いて発行されるという事が、この際最も重要な事であると思ひますし、又研究誌としての将来を考えてみましても堅実な内容とするのが最もよいと思ひます。勿論企業である以上、読者の意見を全く無視する事は出来ずまいが、過去数年間の御努力は決して無駄になつてはおりません。恐らく暫くすれば大部分の読者は編集氏の御意見に賛成されると思ひます。思はずも生意気な言葉を決して洩してしまいました。さて四月号の記事中では「ドストエフスキ」の嗜虐性「が圧巻でした。又「サジステン」の独自「蜂の胸四十五種にこたえて」それに読者通信欄の「神奈川B子さん」等はそれぞれ立場を明白に、しかも正面きつて表明したものとして非常な興味をひきました。復刊以来店頭売りしないとの事ですので、女性読者が激減するのではないかと心配致しましたが、どうやら杞憂のようでした。次に「鼻のプレリユード」が非常に美しいと思ひました。この種の作品はなにか、美しいというよりは、いかにも夢という感じで、フアンタジックな

美しさに欠けるきらいがあります。この作品はすばらしいと思ひます。「山口式ボディビル」「ジョー責め」等はこの点では一寸読者に訴える力が弱い様に思ひましたが如何でしょうか、奇抜な思ひつきとは思ひましたが、以上感想と称して暴言を吐きましたがお許し下さい。何と云つても、どんな不平があつても復刊の喜びをいささかも弱めはしません。唯もう少し女性の進出を望みたい所です。益々発展されん事を心から祈ります。(浜松、K・I生)

○ 本誌四月号を拝読、遅滞乍ら見たまを卒直に申し上げます。四馬、宮崎両氏の縛り画、萩、加賀両嬢の縛りフォトは、いつものこと乍ら着想といい、構図といい、全く申分ありません。新人佐賀嬢の可憐の縛りは一応結構ですが、サド気分少く今後の一考をお願い申し上げます、畔亭数久氏の「戦国夜盗」小林三郎氏の「あゝこの恍惚境」松井頼子氏の「赤い花は泣いてる」と共に、本号の圧巻といつても過言ではないでしょう。戦国時代を背景に、男装の美少女が囚れの身となり、縛られて裸にされる光景は、縛りあり、猿轡あ

り、禪美あり、その上男装美があるときではもう何も云えませんが、出来ましたら可憐な佐賀嬢あたりがこの男装の美女の扮装をさせて写真にさせて見せて頂きたく存じます。次に小林二郎氏の「あゝこの恍惚境」松井頼子氏の「赤い花は泣いてる」等は全く息もつく暇もなく読了しました。今後の本誌の躍進を心から期待して止みません。(浦和、雪野生)

○ 最近廻れ右旋風は益々烈しく折角復刊の喜びを得たとはいえ、休刊前に比べると、正直の話、内容も窮乏で物足りませんが、一面非常な御苦心の程も察せられ感謝の外ございません。この悪条件の下、二つの特殊号を企画されたとは、その勇氣には敬服させられます。然し「ソドミ」特集号が同時に企画されていなかったのは大いに不満です。制約も多いでしょうが、是れも亦、早期に企画実現させて下さい。今迄幾度か多くの入から強く要望されても実現出来なかつた「美少年ヌード・フォー」ト及び絵画「禪美コンクール画集」「少年モデルを用いた各種禪の締め方連続写真」「中学生相撲訓練画報」それから等は、サド

マゾの領域に入るかも知れませんが、「曲馬団(サーカスという言葉はスマート過ぎます)の少年達の訓練又は生活の記録」「往時の少年刑務所や感化院で使用された「拘束具」や「責具」の図譜」そして今迄発表された体験告白等の絵画化、読者からの各種の投稿資料等が一挙に集成発表されたならば、素晴らしいと思います。此の通信は「没」にしても構いませんがこのプランは是非実現させて下さい。(十一月号通信欄投稿無名生改め、東京、SK生)

△編集部より▽

文献的価値よりいつて、当然のこと「ソドミー特集号」も企画すべきで当初予定を樹ててみたのですが、申込者の少数なるを予想して、一応今回は除外しました。しかし、貴下の云われたような資料は今後に備えて極力蒐集につとめたいと思います。実は、「切腹特集号」も到底採算はとれないのですが、「切腹画帖」を中止しましたため赤字覚悟でやむを得ず進行させている次第です。従って「ソドミー特集号」も申込者数さえ採算線に達するようなら、いつでも着手する準備があります。

○

久しぶりに読者通信を書いてみようと思います。五月号にもふんどしについての二、三の文が出ていましたが、ぼくも大のふんどしマニアです。ぼくの育ての親がとび職でいつも六尺ふんどしをしめていたので、小さいころから、ふんどしをしめさせられたものです。その時代は子供ふんどし(いずれも六尺ふんどし)を締めるのは殆んどいないで、おふろや学生ではいつも友だちから、からかわれ恥しいおもいをしました。併し長ずるに及んで、すっかり六尺ふんどしになれてしまうと、今度はふんどしをしめないと何となく気が持た悪く思うようになり、返って今では、おふろなどでは大いばりで六尺ふんどしをしめられるようになりました。それにぼくは多少の露出症的傾向があり、最近ではいつもふろの歸りは、ふんどし一本で来ます。途中ですれちがう男の連中は十人が十人ふり返って、「ふんどしとはめずらしい」とさやいていきます。そういう時が一番気持がいいと思います。それから、去年の秋祭りにみこしをかついだ時、普通の人はみな、越中ふんどしの上に半も引をはきました。おやじとぼくだけは

〔告知版〕

○アルバム第二集は売切となりました。但し未製本の分が若干残っておりますから御入用の方は今のうちにお申込下さい。説明付き三十二葉で三百円(千八円)です。

○アルバム第一集も残部僅かで売切近いです。売切になつてから探してくれとやかましく云われる方々がよくありますが、一度売切になりますと再版は不可能ですから御承知をお願いします。○被虐の家(クリスチヌ)並びにKK通信は在庫はありませんから御申込み下さらないようにお願いいたします。

○臨時増刊号、アリスの人生学校は此の程売切となりました。○只今、分譲中のフォト類は古

さらしの腹巻に六尺ふんどし一本でかつぎました。その時は殆んどの人がぼくのふんどし姿にみいつていたようでした。奇巧の愛読者のみなさまの中で六尺ふんどしに興味をお持ちの方いませんか、六尺ふんどしはほんとに男らしいスタイルで気持のよいものです。同

い分から漸次分譲打ち切りいたしますから、御入用の方々は早い目に御注文下さい。既に打ち切りになりました分の焼増は、勝手ながら応じかねます。○本誌の第三種郵便物の認可がおりましたので、送料は八円になりました。

○限定版特集号は予約募集ではありませんので御申込みしないで下さい。説明書も只今のところ作成はいたしておりません。○編集部の企画説明書はまだ出来上つておりませんので御承知願います。在庫分譲品につき御照会下さいました方々へは、在庫品の整理がつき次第お知らせします。毎日変動がありますため、お返事の遅れている分もありますが今暫くお待ち下さるようお願いいたします。

好の皆さまとは是非文通したいと思ひます。(六尺ふんどし愛用生)

○

六月号並びにフォト有難く拝受いたしました。例によつて私は私なりの読後感を申し述べさせて頂きます。今後の編集の参考にでもなるようなら幸甚です。巻頭口絵

は、写真といい絵といい全く素晴らしいの一語につきます。大体口絵では、最初これは面白い作品を描く人だなアと思つていても、二回三回となると次第に魅力が失せてきて、毎月続くと、もううんざりするような作に遭遇することがあります。四馬画伯の絵は創刊以

◎売切品について◎

本誌で取扱つておりました分譲品や本誌の旧号の中、売切になりましたものについて、自分だけなんとか探して送つてくれという御注文が多数参ります。売切品は、いくら代金を沢山頂きますしても、どうも都合がつかねます故どうかお許し願います。

◎御照会について◎

回答を求められる御照会には必ず返信料の御封入を雄います。雑誌の中へ返事を入れてくれとの御要求は、郵便法によつて出来かねます故、御承知下さい。

◎文通幹旋について◎

只今本誌では、文通の幹旋はいたしておりません。但し連絡場所を明記の通信は読者交歓室欄へ掲載いたします。

来、一号一号いつも新鮮で我々を楽しませてくれます。四月号の「痛苦の夢」五月号の「素晴らしいシヨ」の傑作に引続いて本月号の「美貌の屈辱」は今迄の緊縛フォトの常道を破つて、そのものズバリの鼻責めは、この婦人の美貌と相俟つて深刻な打撃を見る者に与えてくれます。フォトでは須川令子嬢の「私室でのプレイ」が卓絶しています。小さくした写真を沢山載せてほしいという希望を持つときはあります。このフォトなんかは、一頁を占領して全く一分のスキもない美しいフォトでした。原写真では如何に素晴らしいかと想像されます。やはり我々安サリマンともなれば、そうそう代理部のキャビネ版も購入ばかり出来ませんので、巻頭口絵写真はそれだけでもこの雑誌一冊の定価の価値があるものと思つております。今回一緒に送つて下さった分譲フォトのAS13は二枚一組百五十円の値段でありながら見事な写真でした。肉体美の伊吹嬢の裸が美しくとれているし、それに今迄にない美貌にうっています。印画紙に焼付いたのは、こんなに美しく撮れているのかと、その鮮明さには一驚しました。本文では明治

と昭和の絵くらべ談義の二枚の絵が面白く、虐妻日記は、我々のような未婚の者には、妻を求める際には、こんな方法で選んだならと或る種の夢を与えてくれます。

(福岡 森 太平)

私は自分がサディストである事を嬉しく思っている男性です。と同時によきパートナーがいらないため毎日がつまらなくなつてならないサディストでもあります。どうか女性の方で私の悩みをいやして下さる方はありませんか、私は名誉あるサディストの名にかけて紳士的行動をとる事を誓います。一体にマゾ女性には引込み思案しすぎますね、この読者通信にもさっぱりお顔を出さないじゃありませんか。勇敢に現れたかと思えば男を奴隷にしたいなんていう、ゾーとするような御婦人ばかり。私は奇クの発見がおくれたためまだ三年ごし位の読者ですが、今では奇クは、私の分身のような存在です。それで奇クを愛すれば愛するほど不満を持つようになりました。例えば最近挿絵が少くサド関係の記事が貧弱だったり、しかし記事の点、五月号はまあ及第です。ひさしぶりで楽しくよみました。

した。三十年の三月号の通信に投稿なさった中村加寿江さん、貴女の酒場へ行ってみたいのですが、どこですか、お教え下さいませんか？ それから近頃、岡田咲子さんが御活躍なさいます。岡田さんの作品を最も愛読していた者です。最後に編集部のお諸先生方、いろいろ御苦心の程はお察しいたします。編集部の「労多くして功のなき」なげきは全く偽善的な現在の社会のせいだと、私も貴誌に対する不満はあきらめます。いつまでもこんな日ばかりはつづかぬでしょう。奇クがやがて世界の奇クとなる日まで、私も東京の一隅からその成長を見守りたいと思います。

(東京、奥田生)

六月号早速お送り下さいましてありがとうございます。マゾヒズム芸術時評」の原忠正氏が再び筆をとられたことを喜びます。それと伊藤晴雨老の執筆を感謝致します。こうした文献を残される人が次第に少なくなつていく昨今晴雨老のものを載せているだけでも、奇クの価値があります。地味でもやや専門的な文章ですが、このような作品が今後の奇ク存在

復刊後、漸次軌道に乗りつつある本誌は、更に内容の充実を期して、目下鋭意次号の編集集中であります。予約お申込の方へは出来次第急送申し上げます。

せてくれるのでしたら、もっとくわしく書けばよかったと思いますた。(青山三枝吉)

六月号拝見、五月号は切腹の挿絵がなかったの、がっかりしたところ、六月号では北原純子氏の絵に大体満足致しました。先ず瀨川女史の力作には全く感服させられました。切腹画帳の中止は全く残念ですがやはり公刊にならぬとなかなか集まらないものですね、しかし、私もそうですが、住所を知らせることは、貴社の場合絶対信用していただけます、それでもなんとなくいやなもので、その為申込みたくても我慢している人が大分あるのではないかと思います。又家に送って来られるのが何時になるのか解らないのですから、他の家の人に知られることが絶対に困る場合には、どうしようもないわけです。だからお送り下さる時は返信料をあげても開封でなく嚴重

(神戸S・K生)

○

復刊心からおよろこび申し上げ
ます。私は貴誌をずっと愛読して
おりましたが休刊になりました時
ほんとにがっかりいたしました。
今後ずっと末永く続刊をおねがい
いたします。今日は甚だかつてで
ずが読者通信におねがいして左の
駄文をのせていたきとうござい
ます。『求む、清潔明朗な女性』又
は男性のマゾヒスト、男性はなる
べく年長者、当方今年二十才私大
生容貌「人云ワク二枚目ト」女性
的でやせております。ひたしき仲
にも礼儀は重じます。こちらの条
件を乞う。『右は私はつね々新
聞の三行案内に出したく思ってい
たのですけど社会的に出来ません

ので貴誌におねがいしたわけでも、奇クを拝見しておりますと、女性の奴隷は多く見受けられますが、男性への奴隷の奉仕をしたいと云われる人はまだ見受けません。本当に残念しごくです。おこられるかも知れませんが、今頃ではサドの女性、たとえば春日様、森山様、乗杉様、原様などをいじめて見たいとたいへんな事を思っております。ではこれくらいにして私たちの力で奇クを末永くそだてようではありませんか。

(東京市ヶ谷生)

前略ごめん下さいませ、Kクラブの復刊心よりお喜び申上ます。切腹ファン待望の切腹画集刊行されますとの予告を拝見しまして画家は誰方でしょうと非常に期待し

◎お願い◎

雑誌の購入や譲品の御申込みのため、或はその他の用件で直接発行所を御訪問下さる方がありますが、理由の如何を問わず右は固くお断り申し上げます。必ず郵便にて御申込下さるようお願い致します。

て進行を待っていましたのに画家の決定もないまま中止された残念でなりません。私は予約申込は致しませんでしたけれど、それは画家未定の為でございました。ほしいものは千金も安く、いらぬものは無料でもいりませんもの、この気持は何者でも同じでございます。申し込の少なかつた理由の一つもそれではないでしょうか。私も私製の画帳を持っております。すけれど全部自分で画いたものです。何分にも素人の画いた絵です。ので二十五枚画帳にした中に、良いなと思つて見られるのは七、八枚だけ。それに反して画いても気に入らなかつたり画き損じて捨てたものは何千枚もあります。こゝにもその一部を同封致します。故御笑覧下さいませ、画き損じになるとも知らず、美しく写実的にと思ひながら一心に画いた絵です。のにこんな下手くそに出来上りました。今度特集号(女体切腹)が出来ますとのこと、是非共、実現させて下さいませよう御願ひ致します。尚、特集号にお載せ下さるならば改めて気に入りの絵、フット等一、二枚お送り致したいと思ひますけれど、今までのものは何も全部お載せにならないようお

願ひ致します。乱筆にて勝手な事ばかり書きまして申訳もございません。悪しからず御許し下さいませ。編集部の皆様御苦勞には感謝致して居ります。益々御繁栄の程御祈り致します。(原桐咲代)

△編集部よりV 今回お送り下さった五枚の彩色画は皆中々よく描けています。特に複数の切腹姿態の二葉は、構図、表情等も殊によく哀婉の雰囲気が出ているに於いて、以前お送り下さった写真、絵の特集号に対する掲載は中止いたします。掲載してもよき作品があります。是非お送り下さい。今回お送り下さった分も、二、三、は紹介したいと思ひますが如何ですか。

○

昭和三十年三月特大号の「飲義先生医学相談欄」での質問者木村秀子様、大変お悩みのように拝見致しましたので、ここに敢えてお便り致した次第です。この読者交歓欄をもし御覧になりましたらば御便り下さい。私の実際に体験する処の最も効果的な治療法などをお知らせ致します。(横浜市磯子局止 松原一)

○

奇ク六月号早速お送り頂きありがとうございます。復刊されたことを知らずにいたことが残念でした。昨年休刊以来一年ぶりに拝見、書店売りしない雑誌です。で致し方ないとは思いますが、以前のものにくらべると頁数の乏しいことが淋しい。幾人かは以前からの寄稿家もあるようなのでナツカしく思いました。少い頁数で尙のこと目立つのは代理部通信、旧号内容などの案内が大きく扱れすぎていること。挿画や写真の少いことは物足りない感もありますが、やつ仕事のような挿画は、なまじない方が、雑誌の品格をたかめるとも考えます。それよりこうしたユニークな雑誌のない現在では、少しでも活字を増してもらう方が絵より有難いのですが。その意味でも読者通信欄にもっとスペースをとってほしいものです。文章の巧拙より偽らぬ真実を綴った通信の方がぐっと迫力があるし、読むものに実がある感じを与えます。出来れば本誌の五分の一位は読者通信交歓室で埋めてほしいものです。休刊前のように分類していただければ尙たのしい。

(群馬 Y・S生)

拾万円懸賞原稿募集

賞 金

一 席	貳 万 円	一 篇
二 席	壹 万 円	五 篇
三 席	五 千 円	五 篇
佳作	壹 千 円	五 篇
選外佳作	本誌三月分贈呈	十 篇

規 定

- 一、内容、形式は本誌の掲載に相当すると思われるものでしたら、小説、創作、体験、告白、論稿、其の他知何なるものでも結構です。
- 一、枚数は四百字詰原稿用紙百枚まで。必ず未発表の作品たること。
- 一、締切期日は、昭和三十一年六月三十日まで到達したもの。
- 一、入選作発表は、本誌八月号誌上。
- 一、賞金は入選作発表と同時に送りますが、選外佳作の本誌三ヶ月分贈呈は、本誌九月号より十一月号迄発行の都度贈呈いたします。
- 一、送り先は、天星社編集部宛。
- 一、誌上匿名は御自由です。筆名をお書き添え願います。
- 一、原稿の第一頁上部に「懸賞」と朱書しておいて下さい。

編 集 後 記

○四月二十日付で第三種郵便物が認可になりましたので送料も半額ですむことになりましたが、又それだけ定期的に確実に発行しなければならぬわけですから、

○大体が限られた読者対象でありますので、その中でも好みや選択が大変きびしく、一人一人の方にしてみればいろいろ不満も沢山あることですが、只今のところは、確実なる定期的発行ということとを第一眼目に置いております。

○読者数の増加は依然として頭打ちの状態に相変らずの赤字続きのため、懸案の増頁に至らないのは残念です。切腹、エネマ、揮毫等といった極く限られた特殊な分野を抱えているため、もともと何万といった発行部数を望む方が無理なのですが、文献研究誌という立場からいえば少数読者の傾向を全然排除するというのも考えものでしょう。

○或る継続読者の方から、自分の傾向のものが少いので購読を止めると云つてこられたり、又、休刊前の定価より高くて内容が貧弱なのは面白くないから、創刊以来愛読していたが、従前のような体裁になるまで申込みは止めるというところから来た方もありました。

○現在の寄台世帯で、互いに助け合い、

補い合つていてさえ、経営困難なのに、一部の方が望んでおられるような、各個別々に独立した雑誌にしてしまつたら、一部千円位にはね上るか、或はペラペラのパンフレットみたいなものになるかの何れでしょう。共に読者数激減の悪循環によつて発行不可能となることは火を見るより明らかです。

○自分の読みたくない記事が混つているために買わないという読者の方がありまして、今更には仕方がないと思ひます。本誌の文獻的価値を認めて下さる方々のみを対象として、地味な継続的発行を努力するのが目下の急務と思ひます。

○四月号、五月号、六月号、七月号、と漸次挿絵を増加して参りましたが、読者の喝采されるような絵はとかく一般からは眼鏡で見られ勝ちですので、このジレンマを解決するまでは、いささか中途半端な挿絵の使い方になつていますが、御辛抱願ひたいと思ひます。

○いくら不満の多い雑誌でも廃刊になつてゐるよりは存続してゐる方がまだらうと考えますので、当分の間、不満は不満として或程度煩かぶりしてゆく考えですが、編集や内容のあり方についての御意見は将来の参考のために、どしどしお寄せ下さるようお願いいたします。

(編集部 K・M生)